

RPGのコンスト主人公は
ダンまち世界ではレベ
ル4弱位

アルテイル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

フリゲの主人公キヤラの身体を手に入れた日本人がダンまち世界に転生するだけの話。

中身は一般人である主人公、それでも譲れないものはある。

目次

1～4巻

物語の始まり	1
豆知識の特売	8
恩恵（ファルナ）	15
ステータス	22
ダンジョンへ	31
日常	37
恐ろしくはやい動き、俺でなきゃ見逃 しちゃうね	43
目標をセンターに入れてスイッチ	54
シヤツチヨサーン	68

5巻

・ ・ ・ ハハツト	79
英雄の真実事	88
ヒヤツハア！汚物は消毒だあー！	97
魔王からは逃げられない！	103
永き戦いに終止符が打たれる	110
不穏な気配	119
ロキ・ファミリア1	124
属性・主人公	133
属性・主人公2	141
V Sゴライアス	147
英雄の条件	153

	ステイタスと騒ぎの前触れ	162
6巻		
	宴の前日	174
	キマシタワー	182
	打倒フレイヤ(※アポロン)	190
	始まる英雄譚	198
	それは残像・・・では無い	206
	6巻 後書き	214
	実はプライドなんて無かった	222
7巻		
	そして、7巻	229
	襲撃	240
	やめられないとまらない原作乖離	

	v s イシユタルファミリア	248
	遭遇1	264
	遭遇2	272
	不穏な気配	279
	折れた心	286
	未来への1歩	293
	閑話	302
8巻		
	フルメンバー	310
	裏側	318
	新たな力	327
	模擬戦	337

日常（リリ・カサンドラ・ニナ）

345

9卷

始まる物語

356

説得

365

地上

373

進展

383

19階層

393

勢力・個人好感度図

401

暗躍

407

ギルドからの指令

415

隠れ里1

422

閑話・イシユタル

428

ダンジョンに温泉を求めるのは間違っているだろうか（＋レイニー）

439

日常（ファミリア全員）

452

隠れ里2

467

10巻＋11巻

休息日 レイニーと神秘の薬 ＋ステ

イタス

正義執行

実績解放・回復術師

獣の男

レイニーのレイニーによるレイニーの

為じゃない強化計画

無駄な深謀遠慮（見通せてない）

526

魔法コンプレックス

545

つよいまほう よわいまほう そんな

の ひとつの かつて

552

魔道に触れる

560

新魔法と試し打ち

572

マインドダウン

580

こ、これが、私・・・？

587

更生へと向けて

601

この中に1人、男の娘が居る！

1 ～ 4 卷

物語の始まり

フリーゲームしてたらなんか見知らぬ場所に居た。

アイエエエエ！テンイ!? テンイナンドエ!?

思い返せ、俺の身に何が起こった・・・

『今日もレベル上げるぞー』

2時間後

『・・・ぐう』

ゴゴゴゴゴ・・・

『うえっ！なんだ!?!・・・地震?! あふん』

ゴスツ

—————

・・・寝落ちした後なんか頭に落ちてきたんだな。俺、もしかや死んだのか・・・じゃ

あ転移じゃなくて転生だな、今の状況に何も変化はないけど。

周りを見ると、暗い路地にいるようだ。周りは石造りの建物に囲まれていて、外の景色はわからない。ここであうだうだしていても・・・仕方が無いだろう。取り敢えず人のいるところに出よう。

いやしかし、まさか転生なんて物を経験するとはな。石造りなんてどこから考えるに、外国なことは間違いないだろう。もしくは、異世界なんてこともあるかもしれない・・・

少し、人の声が聞こえてきた。聞く限り日本語だ。あれ？日本？声の出処を探し、足を速める。

路地の先に光が見える。通りが近い。

小走りで駆け抜けたその先に見えたのは、

異世界だった。



猫耳に犬耳、エルフ耳。ドワーフ的な毛むくじやらもいる。

コスプレの聖地なんかでない限り異世界で間違いはない。

加えて言うと、カメラなんかを持っている人も居ないのでみんながコスプレをしているとすれば、日常的にコスプレを嗜む人達の集団という事になる。流石にないだろ。

「つまりは・・・ホントに異世界なのか。って何だこの声!」

俺は、自分の声に違和感を抱いた。聞きなれた、自分の声では無い。少し高く、更に響きのいい俗に言うイケボと言う奴だ。何故こんな声に？

さらに違和感は続く、先程は焦りで気がついて居なかったが、視力が良くなっている。メガネを必要とする程では無かったが長年のゲーム等で落ちてきていた筈の視力、久しく見ていなかった明瞭な世界に少し感動する。

身長、少し高くなったような。

体表、日本人にはありえない、真っ白な肌。

頭髪、・・・ライトブルー!

大通りを走り回り、そこから少し路地に入ったところに水溜まりを見つけた、恐る恐る、そこを覗いてみる・・・。

そこに映るのは、端的に言う青髪碧眼の、大層整った顔立ちのイケメンであった。

間違っても日本人である自分自身ではない。

『誰だコイツウウウ!?』

予想外の事態になんとか均衡を保っていた俺の精神は崩壊し、自分でも恥ずかしい位に取り乱した。

まあそれでも数分で表面上は落ち着きを取り戻し、周りの視線を気にしてもう少し奥に入ることにする。

「・・・はあー、なんなんだろうか・・・」

視界の端にチラつく、青髪を見る。意味が分からない、俺髪染めるようなやんちじゃやないよ。つて、そういう待てよ・・・?

コレ俺が死ぬ前にやってたゲームの自キャラだな、多分。状況的に。つまるところこの世界はゲームの世界?

マジか!あのゲーム難易度鬼畜なんだけど。何十回と死んだし・・・えでも俺が魔王倒さないと世界滅亡つすよね・・・ゲーム知識で無双する系だったか。

俺まずあのゲームクリアして無いし攻略サイトも今やってるとこのクリア方法しか見てなかったから中盤くらいで詰むんですけど・・・そっから初見プレイすか、そうす

か。

はあ、悲観的な気持ちが増え溢れて来た。暫くはそうして項垂れていたのだが、まあ。何かをしなければ野たれ死ぬだけだ。

とりあえずはゲームのあらずじを確認しよう。

その世界には魔王が居た。しかし勇者は居らず、人類は魔王の軍勢に苦戦を強いられていた。

人々は勇者の出現を祈ったがついぞ勇者は現れず、疲弊していく。

そんな中軍隊以外に国を守っている武装組織、冒険者ギルドへ一人の少年が現れる。

(コレが俺)

最初はこんな感じだ。ゲーム自体はレベルシステムのターンバトルの昔ながらの物。魔王軍に追われた難民なんかも居て、人種は様々。仲間になるキャラもかなり多い。

んで、ありがちな感じだここで主人公が勇者だつて分かるんだけど、少しだけ捻って主人公は、英雄という職業になっている。英雄は、勇者の劣化版のようなもので、まあいいか。

勇者のいない世界で、最上とも言える能力を持つ少年は勇者の代わりとしての人生を歩む。

勇者と英雄はあまり違いは無いが、英雄の方が全体的に弱い設定らしい。そしてその

せいか戦闘の難易度はキツつい。

と、そんな感じの事を思い出しつつ。思い返すのはここまでにしといて取り敢えずはギルドに行かなきゃな。

路地を抜け、周りの人に道を尋ねながらギルドを探す、その際少し違和感があったが、何がそう思わせたのかは分からなかった。

—————

「なんだかやたらと豪華な建物だな・・・」

こんなグラフィックだったっけ？ 辿り着いたギルドは、かなり儲かっているようで豪華な見た目をしている。ごついおっさんや、反面華奢な体つきの少女まで出入りしている、やはり視覚的には違和感があった、さっきのも現実味が無いから変な感じに思ったのかね。

中に入ると、受付嬢と呼ばれるような人達が多く、冒険者らしき人達の対応に当たっていた。1つ、かなり人気のあるらしい受付嬢の窓口は行列ができていて、筋肉質な男共が綺麗な列を成す風景は少しおかしかった。

あまり時間もかけたくないで、人数のあまりいない隣の窓口に移動する。ピンク髪

のやる気なさげな受付嬢のところだ。

「すみません、冒険者登録をお願いしたいんですけど」
「ここから、英雄としての物語が始まる」

豆知識の特売

始まりませんでした。

「所属ファミリアを教えてくださいますか？」

・・・ファミリア？

「えっと・・・入ってないです」

「そうなりますと、申し訳ないのですが、冒険者登録をすることは出来ません」

頭に衝撃が走った。俺の脳内に、冒険者ギルドとファミリアという単語を組み合わせた存在は1つしか存在しない・・・。

「ダンまち・・・？」

「？ダンまち？！」

聞き返されるが、俺に答える余裕はない、一言、失礼しますとだけ言い、足早にギルドを去る。

思い出せ！俺が死ぬ前の状況を！部屋の中を！

—————

『あふん』

るのがいいかなあ。まずファミリア探しをしなきゃならないけど。

狙い目はヘスティア・ファミリアみたいな零細ファミリアかな？いやでも、多分潜在能力に溢れているこの体なら強豪ファミリアにも入れてもらえるかも。

・・・零細ファミリアにしておこう、大手のしつかりしたとこだと、低級冒険者は下働き（サポーター）で経験を積むまであまり自由に動けないと聞いたし。それに自分の周りに自分を何百回でも殺せるような人間がたむろしていると考えると恐ろしい。

そして、肝心の探す手段だが・・・

「あ、はい。資料を持ち出しますので少々お待ち下さい」

ギルドだな。多分人を募集しているファミリアの情報なんかもあると思ったけど、思った通りだ。

暫くして薄いバインダーに幾つか紙を挟み先程のピンク髪の受付嬢が帰ってきた。今思えばこの受付嬢もダンまちの住民で、ミィシャさんだっけ、その人だと思う。となりの人気の受付嬢は多分エイナさんだな。

「お待たせいたしました、早速ですが、ファミリアの希望条件はございますか？」

「初心者でも重宝されるような小さなファミリアで、ついでに可愛い女神様のファミリアが良いです」

2つ目の条件は男として当然だね。コラその受付嬢、微妙な目で見るんじゃない。「あー、そうなりますと・・・基本的に女神様のファミリアは人気ですからねえ。未だに人気がない所となると女神様にこだわりがあったり、加入条件が厳しくて恩恵の無いものには到底無理だったたりする所しか、最初の眷属は好みのシヨタが良いなんて神様もいらつしやるんですが、貴方はシヨタって感じでもないのよ」

それはそうだろう、見た目は割とすらつとした長身の青年だ。ゲーム設定の年齢は16だったはずだがキャラメイクで割と弄れたので。

「あー、今まで誰も突破したことは無いけど、恩恵無しでも可能性はあるファミリアがありました。挑戦してみますか?」

「どんな条件なんですか?」

俺は問い返す

「条件は、私の知らない知識の提示、です。主神の名前はメーティス様、知識の女神様ですわね」

んー・・・地球の知識なら、行けるかな? 神様の文化ってあんまり発達してなくて技術なんかも古いものみたいだったし。まあ挑戦してみようか。誰も突破した事ないから眷属0人の零細ファミリアだろうし、希望にも沿っている。

「そこに挑戦してみたいと思います、場所を教えてくださいませんか?」

女神様の住居は街の中心部から少し離れた場所にある図書館の一角らしい。流石は知識の女神だ。この道中なんの知識で試験に挑もうか悩んでいたのだが、意外に思い浮かばないことに驚いた。所詮凡人だったので豆知識の量も大した事なかったのだ。まあでも、幾つかある内のひとつぐらいはヒットするだろう。

図書館の司書の人に経緯を話し、案内してもらおう。司書の人に『メーティス様は生まれた時から本という本を読み明かしているから人間の知識人は皆既知の知識しか出せず逃げ帰ってきた』という事を聞いた。本当に本が好きなんだなあ。いくら何でも一つぐらい知らない事があってもおかしくないと思うのに。あ、でも、頭の良い人がわざわざメーティス・ファミアリアに入る必要も無いのか。そこそこの人の力試し的な？あんなり挑戦者もいないのかね。

部屋に辿り着いた、そこは図書館の片隅にある小さな扉だ。豪華な飾りなんかもなくただの木のドア。あまり外観を気にしない神様らしい。

「メーティス様、ギルドの紹介でまたー人」

「入れ」

声、綺麗だな。ふとそんなことを思った。

案内してくれた司書さんにお礼を言い、部屋に入る。そこに居たのは

・・・可愛いけど、特に畏怖とか感じない。普通だ。なんかこう、物語では描写し切れないような、感動して涙する位の美しさを期待していたのに。感想が出てこないじゃないか。

「何をぼーつとしている、早くお前の知識を見せるのだ」

ちよつと傲慢な感じもあるし・・・

見た目は、高校生位。金髪でスレンダーな体型をしている。少し小柄。部屋に溢れる本の中に鎮座するその姿に威厳のようなものは感じるものの、部屋に入ってきた俺にも向けず、目下の本に目を落とし続けているその態度。どれだけ俺に期待していないかが分かるね。

「鼻詰まりは脇の下を刺激すると改善される」

「・・・ん？」

「海水を飲みすぎると血中の成分バランスが崩れ幻覚をみたり最悪死に至る」

「海水の3倍の真水を飲むと症状は収まる」

「お、おい」

「だが水を過剰に飲むと死に至る」

「水を飲まないと声帯が壊れる」

「わ、分かった、合k」

「くしゃみの力で肋骨折れることがある、咳でも」

「風邪とは体の中で抵抗力がウイルスと戦闘をする際に体温が上昇する現象のことであり治療法はない」

「お辞儀姿勢で頭を振った時に悪化する頭痛は暗い所で冷やすと治る、それ以外は温めると治る」

「合格！合格だ！な！落ち着こうか！」

晴れて俺は、メーテイス・ファミリアの一員となった。

恩恵（ファルナ）

「なんなのだお前は・・・」

怪訝な表情で俺を見るメーティス様。そんなに変な事やったかね。

「少しメーティス様の態度に反感を覚えたので」

「・・・正直地上の人間に期待していなかったからな。今まで来た人間は、誰一人私に未知を教えることは無かった」

ふむ、今は期待していると。まあ、神様の専門分野で出し抜くのは至難の技だろうな。この世界の知識じゃないから通ったんだろうし、知識つても豆知識だからそんな誇れるものでもないけど。

地球にはインターネットなんて言う便利なものがあつて、小さい、しよっぱい物であろうとおつと思える様な知識を簡単に見つけることができる。でもこの世界だと基本的に学者なんかが研究成果を本にした様な小難しい知識しか本屋に売ってない、後は図鑑と伝記。その穴を突いたと言える。

「それにしても、あの知識はどこで手に入れたのだ。それに、その答えに辿り着く過程なんかは想像もつかんぞ」

他の人なら、お、おう。となりそうな位のマシングントークだったはずだが、知識の女神は全てを記憶していたらしく貪欲に知識を求めている。

「生まれ故郷がですね、とても学問が発達していて俺みたいない一般市民にも知識を学ぶ機会があるんですよ」

まあ、異世界という訳にも、まだ行かないので無難に答えておく。ついでに各豆知識でわかっている所を説明もする。

例えば水を飲まないと言帯が壊れるつてのは、人間の体には水分を行き渡らせる優先順位つてのがあつて、声帯はまあ無くなつても死にはしないから優先順位が低く、水分が足りてないとそこが乾いて壊れてしまうそうだ、怖いね。

キラキラとした目で説明を聞いてくれる神様。最初の詰まらなさそうな雰囲気は無く、悪い気はしない。こうして見ると、本当に常識の範囲でかなり可愛いな。アイドルのセンターなんか相手にならない。どのパーツも、完璧なんだよな、あるべき場所にあるべき姿で収まつてる。だからと言つて特別な感情は出てこないけど。フレイヤ様とか美の女神はやっぱ格が違うのかな・・・魅了されたくない。

「？私の顔に何かついてるのか」

「あ、いえ、別に。でもまあ、これ以上知識を出すともう俺の知つてる事が無くなつてしまいます。また今度にしませんか」

「何を言っている、眷属になったからには知識の有無なんぞどうでもいい。お前はもう私の家族なんだぞ。しかし、まあ・・・恩恵は授けた方がいいな。忘れぬ内に」

ファルナとな。それは重要だ。今後ダンジョンに潜る上でこれが無いと俺なんて即死するだろう。

ファルナつてのは、神の御業で対象の人間の経験を抜き出し、ソレを使い人間の器を強化・昇華するという物だ。ゲーム風に言うとなレベルアップと限界突破。

「ほれ、奥の部屋に行くぞ。ここに寝る所はないからな」

神様に連れられ、部屋を移動する、ドアを開けた先には、直ぐにベッドがあった。寝室のようだ。部屋の四方は本棚で埋め尽くされており、そこにはギチギチに本が詰め込まれている。死因が恐らく本による打撃だった自分は、その景色に少しゾツとしないでもない。

「そこに寝ころべ」

「あ、はい・・・つてえ？」

「なんだ？」

なんだつていや・・・この居住区の主はメーティス様で、そこに置いてあるベッドつてのはつまり、メーティス様のベットだろ？種族こそ神なんて言う人間離れた存在だとしても見た目は普通の可愛い女の子だし、ダンまちを見る限り普通に恋愛もする様

な、人間的な感情もあるはずだ。俺はめっちゃ恥ずかしいけど、神様は気にしないのか……？

「そのような事、気にする程でもないだろう、早くするのだ」

「あ、はい……」

羞恥心を押し殺して、ベッドに寝転ぶ。甘い香りがして押し殺した羞恥心は急速に勢力を強めた。更にお尻によいしょと断りもなくメーテイス様が座ってきて、思わず飛び上がりそうになった。

コイツ男と女の違いか全く意識してないな!?

嬉しいやら、心臓に悪いやら、慣れるまでは心臓に悪そうだ……

上着を捲られ、背中を神様の細い指が走る。こそばゆい。

暫くは黙々と作業していた神様だったが、途中で驚きの声を上げた。

何事かと聞き返すが、後で話すと云われた。

そして作業が終わり、身体を起こし神様の方を見る、何故か少し懨然としていて、初めて顔を合わせた時の表情が戻って来ていた。

「……コレがお前のステータスだ」

レベル・1

力・10

耐久・10

器用・10

敏捷・10

魔力・10

《魔法》

【作戦変更】

モードチェンジ

・ガンガンいこうぜ

・いのちだいじに

・じゅもんをつかうな

バシィツ！とまだ読み終わつてもないのに紙を奪い取られる、何故？

「なんだこれは？」

・・・ドラクエ的な、作戦魔法です

フンっ！

《スキル》

【フエイクヒーロー贗物英雄】

・ステータスの追加

・不老

・ストレージ

バシイッ！

「なんだこれは？」

・ ・ ・ ありがちなRPG ・ ・ ・ って不老!?

フンっ！

あちよつと待つてよ ・ ・ ・

【ジャックオブオールトレース万物商店】

・商店の追加

バシイッ！

「なんだこれは？」

・ ・ ・ 不老 ・ ・ ・ あ、よくあるよろずやね。

フンっ！

【イベントバトル強制戦闘】

・逃亡不可のフィールドを作る。

・戦闘続行不可能な状態か、降参の意思が認められた場合のみ解除
バシィツ！

「お前は本当になんなのだ。知識の女神であるこの私が聞いたこともないような魔法とレアスキル。ハッキリ言って異常だな」

うーむ、このRPG要素盛り沢山の魔法、スキル群は……この身体の影響かな。やってたゲームの要素が使えるってんなら、それはもうかなり心強い。カンストしたら魔法なんか何十発と打てるしね

「……まあいい。どうやらお前自身はこれらを理解出来ているようだし、話す気もないように見える。だが何時かは聞き出してやるからな？」

そう言つて紙を仕舞う神様の目は、己の欲望によつてギラギラと輝いている様に見えるた。

許してお姉さん

ステータス

色々あったように思えるが、実はまだ昼過ぎぐらいだ。驚きだね。まあ今日の所は取り敢えず冒険者登録と、スキルの確認ぐらいで終わるとしよう。

冒険者登録は何事も無く終わった、合格したと伝える際に頭良いんですねーと少し驚かれた位だ。あとはスキルの確認だが、ホームである図書館の一角に帰ると、俺の正体を暴く為の情報を虎視眈々と狙っている神様に捕まりかねないので、初めてこの世界に来た時の路地裏のお世話になる。

「まずは・・・贗物英雄からだな」

ステータスの追加、とあるからにはステイタスとはまた別のものなのだろう。

見方は・・・オーソドックスにステータスと声に出せばいいかな？おつ

レイニー

L v l

M P 4 5

物攻 1 2 0

耐久 1 0 1

魔才53

器用73

敏捷67

《特技》

・自守

・二段突き

《魔法》

・ファイア

・スパーク

目の前にウィンドウが現れ、そこにステータスが記載されている。

ステータスがやたら高いように見えるが、コレは初期ステータスで、街の外の最初の敵に苦戦する程度だ。俺はレベル60位まで上げていたが、そのステータスで3000を超えるものも出てきていたはず。装備の補正もあるともつとあがる、そしてそれでも油断すると死ぬのがあのゲームの鬼畜な所だ。

しかしこのゲームにもいい所はあって、特技、つまりスキルにMPの消費が無いところだ。

それに使い続けると特技が強化され、性能が向上する。今あるものだと

自守↓堅守↓厳守↓死守

の順に進化していき、

二段突き↓三段突き↓四段突き↓五段突き

なんかに進化する。他にも色々特技を覚え、更に途中で別系統の進化先が出てくる事もある。二段突きも途中で連撃と言うスキルに変わる。効果も若干変わりバリエーションはフリーゲームにしては豊富だった。

自守の効果は、使用から戦闘終了まで耐久5%up

二段突きは、まあ二段突き。

自守は使うとそれだけで一ターン経過するので、最初から使っていないと後でゴミに成り下がるスキルだ。この世界でターン制限は無いと思うのでどんどん使っていくたい

魔法に関しては、自身の職業であった英雄が専門職でない事もあり、ステータスの低さからあまり使い勝手は良くない。種類も魔法職より少ない、が、現実となった今魔法が使えると言うのはシンプルに嬉しいものだ。

まあ、ステータスはこんなものか。次は・・・万物商店か。コレは大体見当が付いている。ゲームで言う武器屋・薬屋だろう。取り敢えず万物商店と口に出す。

所持金1000G

武具

薬品

強化

売却

「またもウインドウだ、このどれかを選ぶらしい。所持金は、俺の記憶にある限り初期資金と同じ物だろう。まず武具を見てみる。」

武器

防具

アクセサリ

武器、を選択

短剣？ 剣？ 大剣？ 槍？ 斧？ 槌？ 杖？ 特殊

剣を選びそこにある初期装備の

木刀 50G

銅剣 200G

鉄剣 500G

「鉄剣を買う、ゲームの頃なら銅剣を買うのがセオリーなのだが、この世界はターン制バトルではない。はず。自分の力で避けるので最初は鎧買わなくていいだろ。」

ちなみに鉄剣は物攻+20の効果だ。

防具

頭？ 胴？ 腰？ 腕？ 脚？ 盾

盾を選ぶ。

木盾 100G

革盾 200G

スケイルシールド 300G

スケイルシールドだな。

耐久+25

アクセサリ

首？ 手？ 指？ 耳？ 足

これは数が多いので割愛、各ステータスを少し強化する補助的な装備で、どの箇所にも同じような効果のアクセサリがある。

今回俺が購入したのは

魔力のアンクレット 200G

MP+10

初期魔法の消費MPは5なので、魔法の発動回数を2回増やしてくれるありがたいも

のだ。

コレでピカピカの新品の剣を持ち、正体不明の鱗を貼り付けた盾を構え、足に輪っかをつけた布の服装備の男が完成だ。見事にアンバランスだな。

最後は薬品か、と言っても既に所持金0ゴールドなので何も買えはしないが。

薬品

回復？強化？道具

回復

薬草

10G

解毒草

20G

強化

道具

投げナイフ

50G

まあ、そんなもんかな、というようなラインナップ。特に感想はない。

コレで一通りステータスの確認は終了したな。残りは検証しにくいものだし・・・っ

と、そう言えばストレージのことを忘れていた。

ストレージは、まあ魔法の宝箱みたいなもので無限に物が入る。RPGの定番だな。作品によっては同じアイテムは一定数しか入らなかつたりするが・・・コレは分からない。ゲームと一緒に幾らでも入るはずだ。下手にドラクエ風な魔法があるせいでもしかすると他のもの混ざったんじやと言う疑念があるが、まあ無いだろう。

ストレージに購入した物をしまい、帰路に着く。そう言えば晩飯はなんなんだろう。金ないわ。

—————

家に帰ると、直ぐに出かけるぞと言われた。

「何が始まるんです?」

「飯だ、ここに飯を作る環境はない」

確かに、本棚とベッドしかないこの場所で食事を用意する事が出来るとは思えない。と言うか机すら無いし。

大丈夫かこの女神・・・

「そう言えば、お金はあるんですか?」

「コレでも私は知識の女神だ、写本や翻訳でそれなりに蓄えはある・・・。本に消えることもあるが(小声)」

・・・？最後はよく聞き取れなかったが、まあお金があるのならご相伴に預かろう。
「行先は？」

「そこら辺だ」

・・・うーん・・・。

ホントにそこら辺の屋台で適当に済ませて終わった、腹は満たされたけども肉ばかりで健康に悪そうな夕飯だった。

まあ、いいでしょう。俺のお金でもないんだから食べただけありがたい。

「明日はダンジョンに行くのか？」

「あーはい、一応？その・・・モンスター倒せるかは分からないですけど」

倒せるってか・・・殺せる？自信はない。でも折角こんな稀有な体験をしてるんだ、アルバイトなんかで異世界人生を終えるつもりも無い。

「そうか、しかしだな。お前はまだ恩恵を受けたばかり、私としてはお前のイマイチ不明瞭なスキルの効果が気になるところだが、お前を見る限りそう問題は無いように思える・・・まあ気をつけろ」

心配の言葉は素直を受け取っておこう。今日一日で少しは仲良くなれたみたいだ。

それではおやすみなさい。

寝ころべる場所なんてひとつしか無く、赤面して寝れなかったのは別の話

ダンジョンへ

「ええと・・・大丈夫ですか？ なんだかやつれていますが・・・」

「いやあ、昨日は神様が寝かせてくれなくて・・・」

「たった一晩でそこまで親密に!？」

「なんだか誤解されたような気がするが、まあいい。それよりも新しい発見をしたんだ。」

「どれだけ動き回ろうと、休みを取らずに過ごそうと身体は疲れない事だ。脳みそ、と言うか精神は疲れてる。昨日は神様に添い寝され、更に染み付いた神様の匂いに囲まれてとても寝られる環境では無かった。しかし朝ベッドからだときき上がった時に身体には少しもダルさを感じなかったのだ。コレもスキルの影響なのかな、中々とんでもないことだ。」

「まあそれは置いて、今日は1階層だけ潜ってみようかと思えます」

「え、ええ・・・無理はしないようにしてください」

なぜ俺がギルドに居るかと言うと、目の前に居る受付嬢、ミイシャさんが俺の専属アドバイザーという事になっているからだ。毎日毎日報告する必要は無いが、新しい階層

に踏み出したりした時はここに来よう。今日で言うところだとダンジョンに初潜入、一応それだけ報告しに来た次第だ。

防具を付け無いという衝撃的な軽装の俺に、メイシャさんは苦言を呈したが、俺の布の服にはまさかの不壊属性付きなのだ。防御力、という点では皆無だが防刃性が素晴らしい事になっている。

デュランダルと言うのは、まあ簡単に言うところ壊れなくなる魔法的な？

・・・RPGの装備って基本耐久値とか無いよね・・・

よって驚かれはしたし、何故そんな物をと疑われもした。さらに布の服になんて勿体ない・・・なんて事も言われたがなんとか許可を貰えた。ダンジョンの1〜3階層はゴブリンとコボルトと言う人型モンスターが主力で、小さなナイフや棍棒なんて武器しか出さず力も大した事ないので囲まれたりしない限り危険はないだろう、との事。

最後にソロなんだから気をつけて下さいよと忠告される、やはり人から見て自分の格好は心配に映るらしい。素直に頷いておく。

――――

うーん、ついにバベルの元にやってきました。バベルと言うのは神々の住む馬鹿高い

塔のこと、この下にダンジョンの入口があり、同業者らしい人達が次々バベルに吸い込まれていく。・・・よし、行くか。人混みの中を進み、冒険者ギルドの支部を見つけた。入口が管理されているようで先には冒険者の列と、その先にあるダンジョンへの道。薄暗い入口に少し寒気を感じる。ダンジョンに入れば、生命の保証は無い。

入口に反して中は明るい、確かなんかの植物が発光しているのだったか。

入口付近はまだ同業者の数も多い、しかし殆どの冒険者は厳しい表情で先を急いでいる。油断なんて欠けらも無いような雰囲気だ。お陰で周りにピリピリとした空気が流れている。俺もその空気に吞まれ、自然と顔が強ばる。

「ギギイー！」

その時、突如前方にゴブリンと思われるモンスターが現れた、しかし即座に切り捨てられる。剣を抜いてから仕舞うまでの動作が全く見えなかった・・・前方にいる集団はかなりの腕前らしい・・・

首を飛ばされたゴブリンの死体は、換金対象となる魔石も取られず放置される。時間が経過するか魔石が失われるまでは普通の死体と同じく存在し続けるので、辺りに血の匂いが広がった。

思わず俺は足を止めるが、周りの連中は意にもかかさず先へと進み曲がり角に消えていった、1人、取り残される。

俺はなんとも言えない気持ちでいた。このゴブリンは邪魔だから殺されたのだろう。生きる為の金策でも、危機を感じての自衛でもなく。

俺は無言でゴブリンの胸に剣を刺した、そこにあるらしい魔石を取り除く為。少し沈めると硬い感触があつたので、剣を使い取り出す。少し待つとゴブリンの死体が消えていった。

1人立ち尽くし、軽い気持ちでダンジョンに入った自分を恥じた。

—————

少し、出鼻をくじかれた感じはあるが、まあ先に進もう。俺は絶対に倒した、いや殺した相手は無駄にはしないと決意する。それが殺した相手への最低限のマナーだ。

前方に1匹のゴブリンを発見した。

手には棍棒を持っており、相手もこちらを発見した様で此方を向き、威嚇してくる。盾を構え、油断せずに近づく。

お互いの射程にお互いが収まった時、ゴブリンが仕掛けてきた。

「ギアッ!!」

ゴンッ！

つと鈍い音と共に手に伝わる衝撃。問題なく受け止められる程度だ。ゴブリンは戦法も何も無くひたすらに棍棒を振り回している、防がれようと気にも

しないようだ。落ち着いて、落ち着こうとしながら、棍棒を受け止める。実を言うとな腰が引けている、こんな敵意を剥き出しにして凶器を向けられるのなんて、もちろん初めての体験だ、慣れるのには時間が足りていない。

自分から攻める勇氣もまだ無く、ただただ防ぐ、しばらくすると相手の攻撃が目に見えて鈍くなった、しまいには攻撃をやめ、肩で息をしている。疲れたのか。棍棒を支えにして無謀な姿を晒しているゴブリン。しかしまだ攻撃しようとは思えない。どうしても、剣を振るう事に躊躇ってしまうのだ。

そこで閃いた、そうだ、魔法だ。あれならば言葉を唱えるだけで・・・

「ファイア」

敵を見据え、呪文を唱える。ファイアボルトも真つ青な短文詠唱だ。

すると予想外な事に、なんの前触れも無く敵が発火した、炎の塊が飛んでいくようなものだと思っていたが、どうやら違うようだ。肉の焼ける匂いが広がる、少し気分が悪い・・・

火が収まると、そこには未だ息のある、闘志むき出しのゴブリンが居た、勿論火傷を

負い息も絶え絶えの様だが、生きている。焼け焦げた棍棒を振り被り、襲いかかってくる！

「スパーク！」

「ギイギヤア!？」

「またも前触れなく魔法の効果が現れたようでゴブリンは直ぐに動きを止め、倒れ込む。」

息もなく、．．．死んでいる。

手足がビクビクと動いているのは恐ろしいが．．．スパークの電気が残っているのではないだろうか。

ついにモンスターを殺した。剣ではまだ無理だった。しかし自分の能力で、魔法で殺したのは事実だ、

剣で魔石を取り出し、死体が消える様を眺めていた。

こうして俺はダンジョンでの第一歩を踏み出したのだった。

日常

今日一日で大分擦れた感じがある。

あの後俺はゴブリン数十体、コボルト数十体を倒し続けダンジョンの入口に帰ってき
ていた。後で、そう言えば道を覚えてないと気が付き、何度も行き止まりに阻まれなが
らも。無駄に長く中に居たので、その分モンスタースとも何度も遭遇した。MPなんて直
ぐに尽きてそこからは剣で戦う事にした。必死で剣を振り相手を殺し、まあ殺しへの忌
避感なんてものは大分無くなったのはいい事だろうか。代わりに俺は死んだ目をして
いると思う。

そんな状況でもきちんと殺した相手の魔石は回収し、一つだけドロップアイテムも落
ちた。

換金すると実に3300ヴァリス。中々の戦果だ。相手がゴブリンとコボルトなせ
いでこんなものに収まったが殺せるかどうか、を乗り越えると強さ的にはかなり余裕が
あった。まだ下層に潜れるので稼ぎも増えるだろう。

そう言えば、ステータスも。

レイニー

L v 6

M P 1 0 9

物攻 3 6 0

耐久 3 0 4

魔才 1 7 6

器用 1 7 1

敏捷 1 4 8

《特技》

・自守

・二段突き

・大力

《魔法》

・ファイア

・スパーク

・アイス

成長を見せていた。

新たな特技、大力は物攻の増加のスキルだ。コレも最初は5%

魔法は・・・まあいいだろ。

ミイシャさんに帰還報告だけして、ギルドを出る。

人々の行き交う大通りを通り、途中にある図書館に入った。

司書さんに挨拶し、奥へと進む。

部屋に入ると、外出中の様でメーテイス様はいなかった。

まあ、好都合か。俺は奥の部屋に進みベッドへと倒れ込む。

今日は匂いも気にならない、神様の優しい香りに包まれ俺の意識は途切れた。

—————

「うわあああ「ぬわああああああ!?!」」

ゴスツ!

「あいたあつ!?!」

朝起きたら神様に抱き着いてた。あまりの衝撃に思わず神様を放り投げると、ステータスで強化された俺の体は神様を容易く投げ飛ばし、中々の速度で壁へと衝突した。

「ああああああ・・・」「ぬわあああああ!」バシツバシツ!

俺はと言うとそれどころでは無い、布団を被り震える。それほどの衝撃だった。添い寝でも童貞男子には過ぎた刺激であるのにあまつさえ抱きしめて眠っていただと!

後悔を続ける俺の布団に神様は打撃を加える、いや、転げ回ってるだけか。俺は腕に残る感触なんかを思い出したりして後悔する事もままならない。

おかしい膠着状態はしばらく続いた。

「自分からだきついてきたというのに投げ飛ばすとは何事だ！」

「申し訳御座いませぬ」

土下座である、俺が全面的に、100%悪い。

チラツと顔を上げてみるとポンポンしている神様の頭のテツペンには痛々しげなタニコブが。誠に申し訳ない。

平謝りをしている内に少しづつ神様の怒りは鎮火していき、最後には許して貰えた。そして昨日は出来なかった恩恵の更新に移る。

途中、む・・・と少し詰まっていたのが気になる、また何かあったのかね。

レイニー

レベル・1

力・1 13

耐久・1 8

器用・1 7

「私の知識よりも少しばかり成長が少ないような気もするが、初めての眷属だからな、実際のところどれほどのものがわからん。そして・・・お前レイニーという名だったのか。名無し子かと思っていたのだがな」

ん・・・名前？そう言えば前回の時は名前書いてなかった気がする。ステータスの方には載ってたけど。

何が原因なのだろうか、俺には分からない。

「ええ、俺の名前はレイニーですよ、何故前回名前がわからなかったかは、分かりません」
神様に疑いの目を向けられた、だが嘘をついていない事が分かったのだろう、直ぐにその目を辞める。

「お前は本当に訳の分からないやつだな・・・興味深い」

ひいつ！神様の目が実験動物を見るかのような冷えた目に！

「そ、そう言えば！魔力って本とか読むと上がるって聞いた事があるんですけど！俺本読んでみたいなあ！」

「ほほう？本当にそんな事が？確かめてみるか」

キラーンと神様の目が光った。話を逸らすためとはいえ、異常な程の本好きに本につ

いての興味を示すという地雷を踏んだ俺は無事死亡した。

レイニー

レベル・1

力・1 13

耐久・1 8

器用・1 15

敏捷・1 5

魔力・1 0

この日はダンジョンに行けなかったとだけ言っておく。

恐ろしくはやい動き、俺でなきや見逃しちゃうね

俺の体が疲れないことを神様に知られ、ひたすらに本を読まされた、記憶力に特別なものは無いので全部覚えている訳では無いが、神のおすすめだけあって面白かったり為になったりする本ばかりだった。最終的に読書では魔力は上がらなかつたが、途中2冊読みなんて真似をさせられたせいか器用が上がっていた。2冊読みは結局成功しなかつたけどね。と言うか人間業ではない気がする。神の力も恩恵も無いのにどうやって・・・

まあそれは置いといて、今日は何としてでもダンジョンに行こう、行かねば俺が精神的に死ぬ。徹夜で集中力が落ち注意が逸れた瞬間を狙い図書館から飛び出した、もしかすると神様投げ飛ばし事件の報復かも知れないけど1度頭を冷やして欲しい。

まずは飯だ、昨日は何も食べてない・・・お金が手に入ったら行って見たかった所に行こう。

「いらっしやいませー！おひとり様のご案内にやー！」

ここは大通りに店を構える人気店、《豊穡の女主人》だ。原作でも度々登場する店で、

可愛い店員達が働いているので自分のお金が手に入ったら来ようと決めていた。

今まで何やかんやでミィシャさん以外の原作キャラと出会っていなかった俺はそこにいる面々に少しばかり興奮していた。顔には出さないように頑張ってるけど。神様に対しても感じなかった感情だ、だつて神様原作キャラじゃないから「普通にびっくりするぐらい可愛い」位のレベルだもん。

ちなみに俺はダンまちの世界ならリユー・リオンさんが一番好きだ……。

サツと店内を見渡すも、リオンさんの姿はない、今日はお休みなのかな……

なんて間の悪い、と独りごちる。黒髪の、……名前忘れたけど店員さんに適当にメニューから選び注文する。そう言えば俺なんでか文字読めるんだよなあ。まあどうでもいいやコレは。

「お冷です」

澄んだ声と共に水の入ったコップがコトリと置かれる。ああ、ありがとう。と返そうと振り向くと、息が詰まった。

リオンさんだ。

余談だが俺は前世から無表情キャラが大好きでした、目の前に無表情なりオンさんが現れて心臓は飛び跳ねた後に停止した。

「あ、ああ、ありがとう」

再起動後何とか詰まりながらも言葉を絞り出しその後は届いた料理をパクつく。勿論リオンさんはもう別の所に行っている。向こうからしたら全くの初対面なのだし。

しかしまあ、これからもここを最前にする事は確定した。

この世界で初めて食べたマトモな食事はとても美味しかった。朝食を終え、いよいよ2度目のダンジョンに赴く。

ステータスも向上し、懸念だった殺害への忌避感も緩和されたので、もう少し先に進もうかと思う。具体的には5〜6迄だ。7階層からはキラアアントとか言う初心者殺しが出てきた筈なので少しばかり不安なのだ。

6階層初出のウォーシャドウは鋭い爪と素早い動きが売りの中々の強モンスターらしいが、人型の様なので対処はしやすいだろう。それに斬撃は俺の得意分野だし。早くも見慣れてきた大通りを進む俺、なんとか、生きていけそうだ。

「アイス」

「・・・」

ダンジョン、4階層。そこで俺はカエルのようなモンスター、フロッグ・・・フロッグなんたらに対して新魔法アイスを試していた。

ゲームでは普通に氷属性の攻撃魔法だった筈だけど、狙った場所を凍り付かせ、動きを止める魔法になっている。今もフロッグ・・あ、シューターだったかな。その足を凍らせていて、フロッグ・シューターも驚いているようだ。ん？シューター？

ヒュン

風切り音の後に油断していた俺の腹に衝撃と共に鈍い痛みが広がる。

「ゴホッ！おっ、おっえ、えあつ」

初めての負傷、痛みなんか慣れていない俺は思わず崩れ落ち、のたうち回る。混乱する頭に広がる知識、そう言えばあいつは舌を伸ばせるんだ！足を封じた所で油断していい相手じゃない！

吐き気に耐え暫くすると落ち着いてきた、そこで疑問が浮かぶ。なぜ相手は追撃を仕掛けてこなかったのか。

モンスターの方を見やると、答えは残されていた。モンスターの足が無くなっていて、相手は俺なんか目じやないぐらいに悶えている。

少し考え込み、答えにたどり着く。アイスの効果か、と。

凍り付いた場所に時間経過で欠損を与える魔法なのか？ステータスの差で封じられそうだが、相手によっては使える魔法だろう、現にこのバトルでは助けられた。

苦痛を続かせるのも申し訳ないので、介錯する、灰になったあと、フロッグシューター

はドロップアイテム【卵】を残して言った。

・・・売れるのかな？カエルの卵ってたしか食べれたし・・・。

一応ストレージに入れるか、と思った所でふと思いついた。そう言えば、売却を試してみよう。

前回装備を買ってから使用していない商店だが、ちょうど今薬草が欲しい気分だし、10G位にはなると思いたい。

そうして商店を開くと、思いもよらない事が起きた。所持金が856Gになっているのだ、なんでだ。暫く考え、モンスタ倒すだけで通貨落とすRPGのアレかな、と当たりを付ける。コレは嬉しい誤算だ、まさかこのシステムまであったなんてな。

とりあえず今やるべき事は薬草の購入だ、あとの事も考え5枚買う、残金806G。薬草を1枚食べるとスウツと痛みが薄れていく、しかしまだ痛みはあるのでもう1枚食べ、恐らく完治した。やはり薬草程度の回復量などたかが知れているのだろう、苦いからあまり食べたくない。

ついでに新しい商品も追加されていた様で、辺りを警戒しながらウィンドウを開く。追加されていたのは薬品の場所だ。

回復

魔力草

50G

強化

大力のポーション

300G

道具

煙玉

50G

の3つだ。まあそこそこお高いので今はいいだろう。

最後に卵を売却した、30G。

ドロップアイテムは基本、ギルドに売った方が良さそうだ：ナマモノでもストレー
ジは保存できるし。

ゴブリン・コボルトの2種類以外にもフロツグシューターとダンジョンリザードの2
種類を加え、計4種のモンスターが現れる1〜5階層を抜け、俺は6階層へと向かう階
段に到達していた。

レイニー

Lv11

MP238

物攻508

耐久 499

魔才 300

器用 268

敏捷 243

《特技》

・自守

・三段突き

・怪力

《魔法》

・ファイア↓ファイアストーム

・スパーク

・アイス

ステータスとスキルは強くなりつつあり、魔法も新たに範囲攻撃魔法、ファイアストームを覚えた。消費MPは20

これで数で囲まれた時も一安心、これまでで最高4体までの群れに会ったが、魔法無しで挑むとんでもなく苦戦した、未だ戦闘技術という面では初心者でしか無く、多対

一だと攻めあぐねるのだ。ステータスでは勝っているのに負ける事は無いし、相手が先に動きを鈍らせるので後半は有利に戦えるのだが、まあ先の階層でそんな悠長にカンカンやってたらモンスターが集まり、圧殺されるであろうことは想像にかたくない。

まして次の階層の、キラアアントはピンチになると仲間を呼ぶというタチの悪い性質をしていて、一体一体倒していてもキリがない。

つまりこのタイミングで範囲攻撃を覚えられたのは素晴らしい事なのだ、モンスターは割と1つ2つは階層を移動するそうだし、不安要素は一応消えた、最後に貯まったゴールドで4つの魔力アクセサリを購入する、800Gは大きな出費だがまあ、今現在は攻撃力や耐久力を上げるより直接戦闘力に繋がるMPを増やした方がいいと俺は思う。攻撃は油断しない限り喰らわれないし剣は正直活躍の機会あんまり無いしな。

追記・ピアスビックリするぐらい痛い

小話

MPの最大値が増えた場合残っているMPは増量に比例して増える。最大MPが100、残存MPは10だとして魔力アクセサリを付け110に増えたとしたら10分の1のMP1が増えて残存MPは11になる。

キーン

甲高い音が迷宮に響く、ウォーシャドウとの戦闘音だ。運良く一体のウォーシャドウと出会った俺は、魔法とスキルを封印し剣のみでの戦闘を試している、モンスターは基本的に生まれる度に、殺される。新しく生まれた個体には原則記憶は引き継がれず赤ん坊の様な状態だ、つまり戦闘技術なんてない。本能のみで人間と見ると襲いかかってくるのだ。

前世で剣なんか扱ったことのない俺と戦闘力はどっこいどっこい、しかし少しは戦闘を経験し、ステータスでも勝る俺が押しはいる。その時

ビキビキ・・・

ウォーシャドウの攻撃を跳ねあげ、後退する、向こうも仕切り直したいのか追撃はしてこない。

その後ろから見覚えのある漆黒のモンスターが現れた、2体目のウォーシャドウだ。「うっわ、2体目か・・・どうにかなるかな?」

戦っていて分かったが、やはり人型相手だと膠着する、カエルとトカゲは防御と言う行動を取れないので、避けようと動くのだがまあ、当てれる。しかし人型は棍棒なり盾なり、ウォーシャドウで言うとその爪で俺の剣を受け止めるのだ。未だ剣を滑らかに振ることさえままならない俺の技術では中々攻めきれない、それが戦闘の長期化に繋が

り、更に効率を落としている。

もつとガツガツ行かなきゃダメか・・・

幸い俺のステータスは攻撃・耐久力よりの前衛だし、装備の事もあり耐久はかなりの物だ、ウォーシヤドウの斬撃は肌に当たらない限りダメージは無いはず。

「よし・・・かかってこい」

その声に反応したのか、顔のない影の怪物は左右から俺に襲いかかる、テレパシーでも使っているのかよ、迷いのない動きだ。

右のウォーシヤドウ、仮にAとするがAは突き攻撃、何度襲われてもなれないその凶器への恐怖を抑え左に体を逸らす事で回避する。その途中、左のウォーシヤドウ　ー　Bとする　ー　Bの振り下ろしを盾で受ける、そのまま　ー　歩踏み込み遊ばせていた右の剣をAの腹にぶち込む、Aは吹き飛んだが、死んでない。

刃が倒れていて切り付ける事が出来なかったのだ、コレも初心者ゆえの失敗。

Bが左手で下から切り上げてくる、前へ！Bの攻撃は腰の部分に当たった、勿論そこに防具はなく、只の布の服があるだけなのだがスピードを求めた軽い斬撃は少しばかりの衝撃を残すだけだった。心無しか驚いた様子のBに、渾身の突きを入れる。心臓を狙ったのだが、脇腹から腹にかけて突き刺さる結果になった、Bを盾で突き飛ばし追撃、袈裟斬りで切り捨てる。コレは俺が唯一マトモに出来る技で、きちんと刃も立てられる

し、そこそこ威力もある。

それでも所詮素人の剣、切り捨てるなんて言ったけど途中で止まり、しかし魔石に傷をつけたようですぐに灰になる。

そして、ふらついているAに再び袈裟斬りを放つ、その剣はあっさりとAの体を切り裂き、Aも灰になる。

「……よしっ、よしっ！勝てたぞ、俺の力で！」

喜びを噛み締める、やはり守りに集中し過ぎていたのだろう。攻めに転じた瞬間、戦いは滑らかに進行して行った。しかし喜んでいたのもつかの間、ウォーシャドウA・Bの魔石をストレージに格納しようと灰の山に近づいた瞬間、

ビキビキビキキィ！

嫌な音が後方から響き出す

「……えっ？」

後ろを振り向いてみると、そこには五体のウォーシャドウ。俺の命を絶たんと、爪をギラつかせ壁から次々と産まれてきていた。

耳をすませば、まだ音は響いていた。どうやらこれだけではないらしい。

達成感にも浸らせてくれないダンジョンはやっぱりクソだなと思いました、まる

目標をセンターに入れてスイッチ

ウォーシャドウ達は、魔法で片付けた。しつかりと魔石を集め、これからのことを考える。

「先に・・・進むかあ」

範囲攻撃を覚え、スキル無しで敵を打倒した今、俺はまさにノリに乗っていると云う奴だ。ここはその流れのまま、少しばかり先に進んでもいいのではなからうか？

ちよつとだけ、先っぽだけだから！そんなことを思いながら、俺は7階層へと足を踏み入れ

地獄を見た

「ファイアストームファイアストームファイアストームファイアストーム！」

「「「「「ギイイイイイ!!」」」」」

俺の眼前にはモンスターの群れがひしめいている、全てキラアアントだ。

前世では、アリには特に嫌悪感を感じなかったが、こうして巨大化してみると

巨大な目

異様に細い胴体

ギチギチと鳴り響く異音

これ以上に気持ちの悪い生物がこの世に居るだろうか。いや、Gが居たか・・・

コイツらが名前を呼んではいけないあのGでない事を神に感謝しよう、ありがとう
メーティス様！無事逃げ切れたらお供え物をしまする！

「はくちつ！・・・うーむ、何か、下らないことを言われたような・・・？」

撃つても撃つてもモンスターは減らない。むしろ更に勢力を増しているような気さ
えする。倒し損ねた蟻のフェロモンを伝って新たなモンスターが増えてきているのだ。

通路を全力で後退しながら俺は魔法を唱える、不発。

「くっそ！また切れたのか！」

俺は叫びつつ手に持ったポーションを飲み干す、マナポーションだ。MPを回復して
くれる。剣？そんなもの置いてきちまったよ。

何故俺がこんな目にあっているのか、それを話すと長くなる。よって簡潔に説明す
る。

俺、蟻刺す

剣、抜けない

蟻、仲間呼ぶ

イマココ new!

分かったか？分かったな？割と絶体絶命のピンチだ。ファイアストームで通路を埋めつくし、全ての蟻に傷を負わせ、危険を感じた蟻が仲間を呼び、それをまた削るというスーパ―悪循環に陥っている。ファイアストームを唱えると蟻が怯み動きが鈍るのでその間に離れ、レベルアップでラインナップの増えた商店からmanaポーションを購入し、またファイアストームを唱える。気分は、地球防衛軍で爆弾を置き逃げし、少しずつダメージを重ねて一網打尽にしているアレだ。違うのは蟻の量。

きつと、きつと付近のモンスターを狩り尽くせばこの地獄は終わる筈だと信じ、魔法を放つ。蟻共は密集しているので面白いように魔法に焼かれていき、倒れる。そのお陰でゴールドが尽きる心配はない。

「うおっーこれ、まさか、行き止まり!」

走り回った先に、俺がたどり着いたのは・・・広大な処刑場^{広場}だった。俺の来た道以外に出入口は無く、そこは無数の蟻に塞がれている・・・

死

その単語が頭に浮かんだ。後悔が身体を走り回る、何故あの時調子に乗ってしまったのかと。

通路から溢れ出て来た蟻は俺を半円形に囲い、じわりじわりと接近する。

「やべえ……」

しかし、諦めるわけには、行かない。まだまだ、まだ行ける！俺は盾を放り出し、両手にマナポジションを抱える。馬鹿だと思うか？俺は最善だと思ったんだよ。

「ファイアストーム！」

火炎が広がり、最後の戦いが幕を開けた。

鎮火した後には、死にかけのキラーアント。こいつらに釣られて更に蟻は増えるかもしれない。しかし、俺はこの状況に終止符を打つための方法を思い付いていた。

「ファイアストーム！ファイアストーム！」

悲鳴を上げながら、次々と蟻は崩れ落ちる。通路から増援が続々と到着する、

広間は既に蟻まみれだ。牽制にファイアストームを唱えるが効果の範囲外から蟻は接近して来る。俺は足を動かし、広くも狭い広場の中を縦横無尽に駆け回る、強化され常人を遥かに超える敏捷はその力を遺憾無く発揮し、蟻の背に乗り、壁を蹴り、俺の生存時間を引き伸ばす。

不発になり追いつかれれば死ぬ未来しか見えないので、マナポジションは絶え間なく俺の口に吸い込まれていく、どうでもいいけど腹には残らないので気持ち悪くはならない。

目下の不安はゴールドだ、敵が広がった分巻き込める量は減っている、少しずつ、少しずつ所持金は減り始めていた。

「ファイアストーム！．．．よいっ、しよっと！」

目にも止まらぬ速度で走りながら、隙を見て地面に落ちているドロップアイテム「キラアントの甲殻」を拾う、商店で売却するのだ。

見ている間にも所持金は増減するため具体的な事は分からないが足しにはなるはず。

「ファイアストーム！」

まだ、求めている結果は訪れない、蟻は死に体のままだ。瀕死のキラアントは仲間を呼ぶ、もう広間は死骸で溢れていると言うのに。諦めてくれないかなあ！

「うわっ！」

色々と高速機動下で無理をした結果、蟻の死骸に躓き転ぶ。ここぞとばかりに飛び込んでくる蟻達にファイアストームをぶち込む、熱い熱い熱い！あまりに至近距離で展開された魔法は使用者である俺自身にも被害を及ぼした、火傷の痛みを堪え、再び走り出す。止まれば死ぬと分かっているから。

「ファイアストーム！ファイアストーム！ファイアストーム！ファイアストーム！ファイアストーム！」

なんどこの言葉を口に出しただろう、無限にも感じられたその時間はついに終止符を

打つ。

「ファイアストーム！」

代わり映えのしないその魔法は、しかし今までとは違う結果をもたらした。

狙った地点から吹き出したその豪炎は、敵を燃やし尽くした

火が収まったその場所に蟻は居ない、死体さえも！

「来たっ!!ファイアストームう！」

次も、そのまた次も、火炎は敵を燃やし尽くす。

【敵の防御の上から、確実に殺せるダメージを与えられるようになった】

簡単な話、ステータスが上がっただけの事。恩恵と違い更新も必要ないこのステータ

スは、蟻を殺し続けた成果を存分に発揮していた。

減っている、無限に思えた蟻達が。地獄が壊れていく。

気が付くと、蟻は消えていた・・・

「ハア、ハア・・・」

疲れを知らないはずの身体も、休息を求めている。倒れこもうにも、辺り一面に広がる魔石の海は俺の身体に突き刺さらんと機会を伺っていて、仕方なく重い体を動かし魔石を散らす。

「ふーーーーっ・・・」

ドサツと倒れ込むと、全く感じていなかった頭痛が発生した。かなり精神面で無理をしていたみたいだ。

俺、調子乗ってたな。怪我なんて殆どしなかったし、俺の持つてるスキルなんかは正直チートに近い。どこか頭の隅で楽勝楽勝、なんて思ってたこんな序盤に死にかける俺は、間違いなく大バカ野郎だ。フロッグシューターの時も痛い目見たつてのに学ばない奴、真正正銘の凡人、スキルを持つてるだけじゃないか。本当に調子乗ってた。

自責の念が込み上げてくる、それに合わせて火傷も存在を主張する、そう言えば自爆してたんだ。頭痛と相まって、身体を動かすのが本当にシンドい。

仰向けのまま商店を開き、ライフポーションを購入する。所持金は10830ゴールドで、ライフポーションは500ゴールド。マナポーションは800ゴールドだ。

飲み込むと、ミント系のスツキリ感と共に痛みが引いていく。お陰で一息つくことが出来た。

未だ動きの鈍い体だが、魔石を回収しなくてはならない。時間感覚なんてものは無くなってしまったがかなりの間戦っていたのは間違いない。その間に置いてきた魔石も回収することを考えると外はもう夜遅くなるだろう、それに魔石を置いていてモンスターがうっかり口にしてしまったら、強化種が現れてしまうと聞いている。早急に回収せねば。

落ち着いた状態で念じれば、自分の周りにあるものはストレージに格納されるのでいちいち腰を下ろして拾う必要はない、広場の物を格納し終え、盾を装備しなおし、今は通路の魔石を辿っている所だ。この怪物進呈^{パスバレード}で他の魔物は軒並み飲み込まれて行ったので、パラパラと別種のドロップアイテムを見かける。幸い．．．未だ他の冒険者の遺品には出会っていない。俺の馬鹿に巻き込まれて死んでしまった冒険者がいるかもしれない事を考えると申し訳ないなんでものじゃない。

今考えると、他の冒険者に鉢合わせしなかつた幸運、狭い行き止まりに追い込まれなかつた幸運、それらのお陰でどうにかこうにか生き残ることが出来た、本当に、神様に感謝しておこう。

どれ程辿つたか分からない、だが全力で走り回っていた道を歩いて遡っているのだから時間がかかるのは仕方がない。

足元の魔石が消える瞬間を眺めながら歩を進めていると．．．

「あ」

冒険者に出会った

茶色のショートヘアの軽装の女の子、可愛い系で、しかしどこかスレた雰囲気を感じる。

そんな事はどうでもいい、重要なのは

そいつが俺の倒したキラアートの魔石をバックパックと服がパンパンになるほど回収しているという所だ。

ある程度選別して集めているのか後ろにはまだまだ魔石が転がっているが。

「・・・オイ」

「あ、どうも・・・もしかしてこれらを討伐なさった御方で？」

自分でもビックリするぐらい低い声が出た、女の子は怯えながらも此方に質問をしてくる。

「そうだ」

「あーそうですかー・・・」

シュバツ！

女の子、いや、女は瞬時に身を翻し逃亡を図る。一瞬面食らった俺だが即座に全力ダツシュ。

「待てゴラアアアア!!」

「にゅあああああ!!?」

速い、追い掛けて感じたのはその一言。レベルも上がり、敏捷も人間離れしているはずのこの俺が追い付くのに5秒もかかってしまった。さて、コイツをどうするか・・・に、逃げ足には自信あったのに・・・」

「オイ、今すぐ盗ったもん全部出すか俺に身ぐるみ剥かれるかを選びやがれ」

「出します、今すぐ、迅速に。ハイ」

バックパックをドサーとひっくり返し服の中にぶち込まれた魔石も服を捲りあげガシヤンと落とす。その際瑞々しい少女特有のお腹が大胆に晒されるも、不機嫌の最中にある俺には関係無かった。

「あ、ちよちよちよちよつと待っていただけだけられる無いでしょうかコレぐらいの魔石は私がちやんと稼いだものなのでございします」

「知らねえよ」

女が何やら戯言を抜かしたが俺には関係ない。早く帰りたい一心で目の前に積み上がった魔石、ドロップアイテムをストレージでサツと回収する。

「え!? な、なにそれ!?!」

「あ」

しまった・・・つい目の前に他人がいることも気にせずストレージを使っちゃった・・・クソ、また面倒くさい事になった・・・

「え、えー何それ何それ！マジックアイテム!?レアスキル!?魔法!?そんな聞いたことも無い「黙れよ」・・・ハイ」

イライラがどうにも抑えきれず強く当たってしまった、こんな気分は直ぐには収まらない、寝てリセットしないと酷くなる一方だと言うのは経験則で分かっている、女のせいで少し無駄に進行してしまったのでさっさとさっきの場所に戻って集め直した。

—————

着いてくる・・・誰がつて？さっきの女だよ。かなり後ろの方を歩いているが、尾行が下手くそなのか俺が後ろを振り向いた瞬間思いつきり目が合った。女は直ぐに身を隠し、俺もその時は気にせず魔石の回収作業に戻った。もうアイツには見られてるからいいわ。

ポツポツと出て来たモンスターを盾で殴り殺しながら先へと進む、キラーアントは在庫切れでもしたのか出てきていない。

長く続いた魔石の道は終わりを迎えた、最初にキラーアントを仕留め損ねたあの場所に戻ってきたのだ。ぽつんと置かれた鉄の剣がその存在を主張している。はー、本当に疲れたー・・・

「お、お疲れ様っ」

「あ?」

振り向くと、あの女がいつの間にか目の前まで来ていた、何コイツ。

「ええーとですなー……ちよつと、本当にちよつとでいいんで私にお恵を頂けると……、稼ぎがゼロなのはキツイのですホントに」

……殴つてやりたい衝動に駆られるが、無言で30程魔石を放り出す。時間を置いても脳が落ち着かない。

「ありがたき幸せ……所で提案なのですがパーティーメンバーを募集していたりは……」
……ぶん殴つてやりたい衝動に駆られるが、ひとまず、ひとまず冷静ぶつた思考を巡らせる。

いきなり何を言い出した? パーティメンバー……つまり俺とパーティを組みたいと?
?

正直言つて今の自分を客観的にみるととても命を預ける相手として良い相手とは言えない、強さはあるかもしれないが、何か事情でもあるのか。

「金がいるのか?」

「そうですねー、ちよつと、ファミリアの方で、ええはい」

ファミリアで、金が入り用。もしかして……確証は無いけど。

「ソーマファミリア?」

「え？」

「アンタ、ソーマファミアなのか、アソコの冒険者は金に汚い」

「いや汚いって……(そうだけど……)」

小声で何かを呟く、俺は難聴系では無いが聞こえなかった。

しかし、この女をソーマファミアの人間として見ると……そこまで酷いように見えない。ファミアの弱者を食い物にしていたカヌウに比べ、そこまでの必死さを感じられない。

勝手な想像だけど……ファミアを抜きたいのかもしれない。脱退には何百万とヴァリスを要求されるクソーマファミア。もしそこから抜け出す手助けが出来たら……俺は考える、馬鹿な俺でも人助けが出来るとか。コレは調子に乗る事に入るのか？ 女の子を救済するのは主人公の特権だろう？

……目の前で所在なさげに佇む少女に1つ問い掛ける。

「ソーマファミアを気に入ってるか？」

少女は少し面食らった顔をするも、即座に答える

「まさか！……クソツタレなファミアだよ」

その言葉を聞いて、俺は心を決める。調子に乗らない程度に、俺に出来る限りのことをしよう、と。

「これから宜しく、俺は．．．、レイニーだ」

「え、ホントに？嬉しい！あ、嬉しいでございやすー！」

さつきから度々忘れていた、絶妙におかしな敬語を再装備し、ぴよんぴよんと跳ねる。可愛い。1人では癒せなかった苛立ちが収まっていくのを感じる。前世では女の子と縁がなかったからこんな解消法があるなんて知らなかったわ。

シャツチヨきーん

「そう言えば、敬語は止めてくれ、多分同世代だし」

「え？あたしは16ですけども・・・」

「俺もだよ」

ええ、全然見えない、と言われる。まあ俺の外見は相当に弄ったので大人な感じに見えるだろうね。

少女の名前は ニナ・アイリス。ソーマファミア所属のLV1冒険者だ。今は親睦を深める為少しばかりの世間話をしながら帰路についている。先程の一連の態度について謝罪すると、

『バレちゃったあたしが悪いから気にしないでいいですよ』

と言つて貰えた、まあ冒険者的には正しいのかも知れないけどバレなきやいいって事だよ。

道中、進行の妨げとなるウオーシャドウを向上したステータスで切り捨てる、今度こそ途中で止まることなく敵を切り裂くことが出来た、しかし

「うーん・・・なんか、剣の振り方がぎこちないよね？どうやってあれだけの魔物を・・・」

あ、詮索はマナー違反だったね」

そりや突っ込まれるか、と。落ちていた魔石の量は4桁に迫る。とてもウオーシャド
ウとキンキンしている男が殲滅出来る量ではない。ステータスでは勝つてるのにコイ
ツら防いでくるんだもん・・・!!

「まあ、詳しいことは言えないけど俺は魔法が使えるからね」

「魔法！いいなあ、あたしもスロットはあるんだけど全然出てこないし・・・（神様はロ
クにステータスを更新してくれないし）」

・・・少し病みが見えた。怖。

「あたしの妹分は魔法もスキルも発現してるのになあ、まあどっちも戦闘向きじゃない
んだけどね」

妹分？

話を聞くと、ファミリアの中に目をかけているバルウム小人族の女の子がいるらしい。

それはもしや・・・

いや待てよ？原作ではリリルカアーデに姉貴分がいたなんて描写は無かったはずだ、
つまり妹分はリリルカアーデではない、QED。

「ちなみに、その子の名前は？」

「リリルカアーデ」

俺の証明が容易く覆された、何故だ？少し原作と違う物語になってるのか？って、そう言えばこの世界はゲームも混ざっているんだった。

俺と言うイレギュラーがいる以上、原作の知識に頼り過ぎるのも危険か・・・

3階層に帰還、アイリスはキッチンと道がわかるようで迷う素振りも見せずに先へと進む。道中何度かアイリスも戦闘し、見ている限りその実力は中々のものだった。腰に下げている短剣がシュツとモンスターとの急所を切り裂き、危なげなく戦闘を終えていた。かなりステータスが高いらしい。

地上へと帰還し、ギルドに向かう、その際アイリスのバックパックに目いっぱい魔石を詰め込んだ。出来るだけ換金したいし、俺一人では大した量を持つことが出来ないからだ。詰め込まれた魔石をキラキラした目で眺めるアイリスは、ソーマファミリアなんか関係なく金に汚いんだらうなと思った。

「5万ヴァリス！すごい！」

バックパックに詰め込んだ魔石類と幾つかのドロップアイテムは、しめて5万3400ヴァリスとなった。これ、10分の1位なんですけど。冒険2日目にして小金持ちとなつてしまった。

配分は面倒なので金に困ってるアイリスに3万ヴァリスを取らせ、残りを俺のもの

する。こんなにも貰えないよ!と云っていたがコレは俺の決意表明だ。

自分で収入を得る様になり、お金に困る予定は無いと云っても大金を人に渡す事に多少の抵抗がある、抵抗って言うか勿体ないなど。しかし俺の稼いだお金で人が実際に救われるのならここでバーンとお金を渡し今後「まあいつも渡してるし」と自分を誤魔化す事が必要なのだ。その内渡すのを渋りそう、俺は自分の精神を信用していない。勢いのまま魔石も渡そうとしたが流石にコレは断られた。

その後別れの言葉と次の日の予定を告げ、俺は家へと帰る。夕飯はまだでお腹も空いているが・・・今日は本当に疲れた・・・

「うわああああ「またかああああああ!?!」

ドーン

朝目が覚め、再び神様に抱き着いていた俺は向上したステータスも相まって危うく神様を亡きものにするかと思われたが、家に帰ってから寝ている俺を見て嫌な予感がした神様は壁に緩衝材を貼りまくったらしい。その甲斐あって今回は傷一つなく無事に衝撃の目覚めを迎えられた訳だ。

ちなみにほつぺたにビンタされたんだけどやった神様の手の方が腫れてた。

それを見て薬草をプレゼントしたのだが、こちらの世界の人間に商店のアイテムが効かないという事が分かったただけだった。

神を実験台にするなど怒られた、苦かったらしい。てへ。

レイニー

レベル・1

力・I 13↓28

耐久・I 8↓21

器用・I 15↓80

敏捷・H 5↓108

魔力・I 25↓25

神様にお前は一体何をしてきたんだ、と怒られた。たった一日で器用と、ステイタスの中では低かった敏捷が他を遥かに凌ぐ成長を見せたのだから当然だろう、俺もこんなことになってるとは思わなかった。多分疲れ知らずの身体で有り得ない長時間の全力疾走をしたのと、走りながら色々としたので急上昇したんだろうね。凄く心配してくれている神様をみてほっこりした。

ちなみに特に新たなスキルは発現していないとの事、成長スキル無しでこの上昇は凄

いね、普通の人だったら10秒で死んでた場面を耐え切った甲斐あったわ。

気になるのは魔力の事、幾らRPGの魔法を使っても上がらないのがキツイ、いやまあ、俺の魔法は大した事ないから上がらなくてもいいかも知れないけどさ・・・仲間も出来たことだしとりあえずもつと使ってみるか・・・

そんなこんなで俺はこっちの世界のポーションを求めてミアハファミリアを訪れていた、これも俺の慈善、いや偽善活動の1種だ。原作でかなり切羽詰まっている様子だったミアハファミリアに少しでもお金を落とそうと。

ついでに、こっちの世界のポーションが俺に効かないのかも試しつつ、アイリスが怪我をした時に効果のないものばかり持っていて意味が無いので定期的に補充することにする。

あんまり持ち合わせないけどな

「・・・いらっしやいませ」

「マインド回復する物を1つと、普通のポーション10個で」

「・・・毎度、15000ヴァリスだよ」

うぐ、分かっただけが高い。ベルクラネルには確か10000とかで譲ってたのに。ポーション2個付きで。身内価格か。特に会話はなく店を出る、初対面だからね。ちなみに俺はケモミミストじゃないからあんまり興奮しない。

ちよつと指切つて試したけど効かなかつた、多分マインドの方もそうだな。高いから試さないけど。ついでにちよつと飲んだ奴はそのまま格納したよ、滝のみしたから大丈夫だつて。

レイニー

Lv29

MP640

物攻1408

耐久1359

魔才711

器用684

敏捷666

《特技》

・堅守

・三段突き

・怪力

《魔法》

・ファイア↓ファイアストーム↓ファイアプレス

- ・スパーク↓サンダーstorm↓サンダーボルト
- ・アイス↓ブリザード
- ・ヒール↓リジェネーション
- ・テリトリリー

道中、再び路地裏に入りステータスを確認する、とんでもない急成長だ。確か筋力とか500ぐらいだった気がするから、おおよそ3倍の力を持っていると。

魔法も増えている。役に立つ回復魔法と、テリトリリーと言う防衛魔法。

ファイアブレスはゲームだと敵数体にダメージを与える魔法で、サンダーボルトは単体への強攻撃だ。ブリザードは氷版ファイアstorm、魔法系ならまだまだ先に魔法があるが、確か俺はブリザードで打ち止めだった。

そして、俺はそろそろ鎧を付けることにした。お金もあるし安全重視だ。

防具

頭？ 胴？ 腰？ 腕？ 脚？ 盾

頭

力のバンダナ

1500G

耐久+200 物攻+300

胴

黒鉄の胸甲

2000G

耐久+400

腰

黒鉄の腰当

1500G

耐久+300

腕

力の籠手

1500G

耐久+200 物攻+350

脚

軽量金属の脚甲

6000G

耐久+400 敏捷+300

うーん高い、足が出たから魔石売ってどうにかしたわ。まあ上から4つは流すとして
 軽量金属、コレはゲーム内で正体不明の金属として紹介され、異様な軽さの割に黒鉄
 (まあなんか硬い金属)を上回る硬度を持つ素敵金属なのだ。戦時下の王国はひたすら
 これを採掘し装備化し戦力の強化をした、的なバックストーリーがある。民間には降り
 てこないのかゲームでもレベルアップして商店行っても各部位がひとつずつしか解放
 されていなかった。んでレベル50位で全部開放されたんだけどその頃には他にもい
 いものあったんだよね。まあフリゲだから仕方ない。

剣や盾も新調しようかと考えたが・・・まあまた今度にする。

確認を終えたら腹ごしらえだ、もちろん「豊穡の女主人」へと向かった。

・・・まあ、なんのイベントも無く食事終了。いや、期待なんてしてないよ。うん。俺
ベル・クラネルと違って主人公じゃないもんね、そんな女の子との素敵イベントなんて
早々起こるはずもないよねうん。

多分俺の魂の色なんて平々凡々で、フレイヤ様の目にも止まらないんだろうね。

昼からはアイリスとパーティを組みダンジョンへ、普通は朝早くから行くものだけ
ど、ちよつと俺がキツかったんで昼頃に待ち合わせ。無事に合流出来た。

出来ただけど・・・

「その後ろの方はどちら様で？」

「昨日言ってた妹分のリリだよ、リリルカ・アージェ」

ええ・・・。

言い分を聞くとサポーターが居れば大量に魔石を持ち帰っても怪しまれない、鑑定員
はいちいち相手の力量を確認なんてしないから、との事。まあ、そうかもしれないけど
も・・・、ベル・クラネルに救われるまでのリリは窃盗常習犯だからね、うん。まあ、大
したものの持つてないいいか。

小話

主人公は自分の装備が全て不壊属性付きだと言う事の重大さを理解していないらし

・ ・ ・ ハハツ♪

深くフードを被った栗色の髪の少女、見た所、素の小人族の姿か。大きなバツクパツクに見合わない小さな体軀、こんな子に原作では非道な事を強いていたのか、あの人達は・ ・ ・。

「・ ・ ・ まあ、よろしく、アーデさん」

「こちらこそ、よろしくお願いします。レイニー様」

「ちよい、あたしは最初っからアイリスって呼び捨てしてたのに年下にさん付けとは何事だ」

「第一印象悪かったから仕方ないだろ、後、様付けって辞めてもらえたりは」
「出来ません、そして私の事はリリと呼んでください」

ああ、はい。

当然ながら、まだ彼女に信頼されて居ない様だ。コレから、彼女の不信を解ければいいが。

「それにしても、本当にレイニー様のソレはサポーター殺しですね・ ・ ・」

ダンジョン7階層、上昇した筋力でキラアアントをバツバツサと狩り、魔石を回収しているトリリにそう言われた。結局ゲーム仕様で無限収納だった俺のストレージ、現実として見ると異様に過ぎると言う点を除けば素晴らしいスキルだ、楽だ。

「まあ、自分でも恵まれてるなどは思ってるけどね」

「本当にズルいよねー、パーティ組んでる分には恩恵しかないけどさー」

傍を歩いていった二ナが俺の脇腹をうりうりと肘で押してくる、ダル絡み辞めてくれ殴るぞ？

7階層までの道程でほとんど何もしてねーやつが・・・。

二ナは9階層までは到達した事があるらしい、リリとふたりで。その日は調子が良くスーッとそこまで進めたそうなのだが、その時突然二ナに「毒」症状が現れ撤退したそうなの。

そう言えば途中に出るパープルモスってそんな能力持ってたな。

・・・アレ？俺解毒薬は買ってなかったわ。まあそこまで進まないかなあ・・・。

なーんか、気が抜けている。調子には乗らない、そうは言ったものの正直キラアアントの入れ食いでここらでは最強の力を持つてるし、キラアアントが大量に来て、まあ2人に魔法を見られちゃう事を無視すれば普通に倒せてしまうし・・・。

その後も、俺はどうにも本調子にはなれなかった。燃え尽き症候群ってやつかな：

次の日も、その次の日も、その次の次の次の日も。ずうっと、俺は何処か気の抜けた戦いをしていた。その間に怪物祭がいつの間にか終わってた。つまるところベルはもうヘステイアナイフなんかを手に入れてるのか、ようやく時間軸が分かったぞ。ちなみに俺も神様も祭り好きでは無いので行っていない。

レイニー

レベル・1

力・I 28↓99

耐久・I 21↓40

器用・H 80↓140

敏捷・H 108↓168

魔力・I 25↓68

レイニー

Lv30

MP659

物攻1468

耐久1403

魔才755

器用701

敏捷699

《特技》

・堅守

・三段突き

・怪力

・騙し討ち

《魔法》

・ファイア↓ファイアストーム↓ファイアブレス

・スパーク↓サンダーstorm↓サンダーボルト

・アイス↓ブリザード

・ヒール↓リジェネーション

・テリトリ

新たな特技、騙し討ちは防御貫通ダメージを与える物だ。実際に使ってみると、防御貫通ってか名前の通り騙し討ち、いや幻術？モンスターは見当違いの場所を防御し、俺

の攻撃をともに食らっていた。多分モンスター視点ではそこに攻撃が来ていたんだと思う。コレはかなりの強スキルだ、気配を読むとか言い出す天才が出てきたら通用しない気がするけど普通に強い、はず。

後、ステイタスは割と急成長、ステイタスからすると格上の敵を倒しているのが良いのかな。

そう言えばリリが来て魔石を換金できたお陰でヴァリスにはかなりの余裕が出来た。一応3日に分けて換金し、ドロップアイテム込で80万ヴァリス。俺は20万もらい残りは2人へ。本当に、本当に勿体ないと思うけども、渡した。頑張れ俺の自制心。

その際リリが何かをボソリと呟いていた、多分「・・・変なの」じゃないか、スレてた時の口癖だし。

・・・ちよつと待つてくれ。おかしい、おかしいぞ

何故リリが、(ついでにニナも)普通にファミリアを脱退しているんだ

いや、いい事だよ、暴行とか、キラーアントに囲まれて死ぬ寸前になつたりする嫌な思ひ出は無くてもいいけどさ。うん、ベルは?ベルクラネルさんは?

原作乖離し過ぎだろう、どうすんだよコレ・・・。いつベルのとこ行くのかなーとか思ひながら冒険してたらもう終わっちゃったよ?

「不味い．．．俺がイレギュラーすぎる．．．!」

ホームで1人布団にくるまり考える、既に神様の匂いは俺の精神安定剤のような役割を果たしているため気にならない。くんかくんか

ホントに待つてくれ、何処で俺は間違えたんだ、いやまあ俺がこの世界に来た時点で間違つてるけどさ。まさか、まさかここまでずれるなんて思わないじゃん、ねえ。ダンまち世界に冒険を求めるのは間違つていた、ホントに。俺がホームの隅つこで震えてたらこんな事にはならなかったのかな。

でもさすがにさ、うん、何度も言うけどこんな大きな変化が起こるなんて思つてなかったもん。ニナと出会つてから全部崩れたんだよ．．．てか俺があの時調子乗つてなかったらワンチャン出会わなかったよね。バタフライ効果怖過ぎない？舐めてたら最悪死ぬわ。

あーでもないこーでもないで現状の打開策を練っていると部屋のドアが開く音がした、神様が帰ってきたのかと入口に目を向けると、絶句。

「か、神様．．．後ろのふたりは．．．?」

「入団希望者だ、と言うか既に入団した」

「．．．原作帰つてこーい（小声）」

2人がソーマファミアを抜け、まあ、行くファミアに困ったのでウチに来たのはまあ、分からんでもない。しかし我がファミアの誇る(知識の)置いてけ堀はどうやって乗り越えたというのだ!

冒険中に俺が自慢げに話してた豆知識使ったらしい、俺自分で自分の首絞めてんじゃん馬鹿。

いやだって、重ね重ね言うけどこんな事になるなんてさ、うん。

はー(クソデカため息)

「あの・・・やっぱりご迷惑でしたか。そうですね、レイニー様のスキルがあれば二ナはともかくサポーター如きは邪魔者でもんね・・・」

「いや、そんな事ないよ全然、俺が悩んでるの別の事だから」

どんな悩み事もしおらしい女の子の前では灰燼と化すんだね。

—————

忘れてしまいそうなので覚えている内に書いておきます。

リリの平穏なファミア脱退、コレには主人公の存在が大きく関わっています。

まず原作、リリはいつもの様に窃盗を働き、路地裏に入り魔法で姿を変えるのですがその瞬間を盗んだ相手である男性冒険者、ゲドに見られてしまいます。リリは逃げ出し

路地裏で鬼ごっこをしていたのですがその際にベルクラネルと接触、酒場の店員リユーリオンと共にゲドを追い返して貰います。その際ベルの持つヘファイストス作のナイフ【ヘステイアナイフ】に目をつけ、その後別人としてベルクラネルに近づきます。

ここで1つ、何故リリルカアーデは窃盗を働くのか？

コレは別にリリの性根が腐り切ってる訳ではなく、差別によって分け前が貰えないからです。原作では分け前をキッチンとくれるベルを見て、「このままでもいいかも」と思っている様子があります。

しかしその後、ベルとゲドが会話をしているシーンを目撃し作戦変更、やはりヘステイアナイフを売る事を決意します。ゲドに自分の悪行をバラされたと思ったりリリは流石に見限られるだろうと思い、真偽を確かめられる前に行動に移し、逃亡中に別のところで進行中だったゲドの罠に嵌り、死にかける、そしてベルに助けられ真の仲間になる。そういうシーンですね。

しかしですね

この小説だともうゲド出てないんですね、はい。多分原作だと怪物祭のら辺でゲドに接触して暫く隙を伺ってその後盗んだんでしょうけど、その時この小説だと主人公と行動ともにしてますしね。もう少し貯めたらファミリア脱退出来る状況で、わざわざ危険を伴う窃盗を働く必要ないんですね、主人公しつかり分け前渡すし、いっぱい稼ぐし。

そんなこんなであっさりソーマファミリア脱退、ゲドすら死なず平和な世界が訪れたのであった。

英雄の真似事

レイニー

レベル・1

力・D 99↓568

耐久・SSS 40↓1500

器用・G 140↓210

敏捷・E 168↓486

魔力・C 68↓654

レイニー

Lv48

MP968

物攻2406

耐久2298

魔才1121

器用1076

敏捷999

《特技》

- ・ 死守
- ・ 三段突き
- ・ 怪力
- ・ 騙し討ち

《魔法》

- ・ ファイア↓ファイアストーム↓ファイアブレス↓イグニス
- ・ スパーク↓サンダーstorm↓サンダーボルト
- ・ アイス↓ブリザード
- ・ ヒール↓リジエネーション
- ・ テリトリ→ゾーン

衝撃の原作乖離を迎えた俺は、それを忘れようとするかのようにダンジョン探索に力を注いだ。まあ現実逃避と言うか迫り来るであろうイベントに備えて？もうリリがストーリーから離脱するなんて大事件が起きちゃったし今後どんなイレギュラーが起こるかわかったもんじゃない。なるべく早急にステータスを鍛え上げないと、と決意した次第だ。ニナ達とはやる事のレベルが違うので、とりあえずしばらくソロで動かさせても

らった。換金の時のみ合流し、手伝ってもらう。

その結果、恩恵の方がおかしな事になった。SSS? 多分あるだろうとは思ってたけど一つだけぶっ飛びすぎやしないですかねえ・・見事なまでにアンバランス。何故力とどっこいどっこいだった筈の耐久がこうなったのかと言うと、キラアアントに囲まれてむしやむしやされるという特訓をしたからだね。ステータスが上昇したお陰か上層のモンスターじゃかすり傷すら付かなくなってるね、コレ利用できるかなって。

なんか、どうなってるのか分からないけどステータスと恩恵は多分別で、実際はステータスのお陰で傷一つついてないんだけど身体にはびっくりするぐらいの経験値が蓄積されていたらしい。んー、分かりやすく言うと、本体はレベル1(恩恵)だけど先輩に最前線の装備(ステータス)貰ったからそこの敵だと相手にならない、的なの? パワーレベリングの様な効果を及ぼしている。

力もそうで、最初はダンジョンの壁を全力で殴って壊してたりしたんだけど途中で壁からポロツと金属が出てきてね。リリに見せたら「デミ・アダマント」だって言われてそれを壊す勢いで色々試してたらここ迄上がった、まあ耐久ほど効率良くなかったみたいだ。

敏捷はよく分からないけどとりあえず走り込みしてた、的外れではなかったよう。魔力も似たようなもの、ひたすらに魔法の切り替えをやり続けていた、普通の人より

も簡単に回数をこなせるし、1度の消費マインドも微々たる物。しかし欠点もあり。予想どおりにマインドがポーシヨンで回復しない、と言うこと。睡眠時以外は回復しないと言う物だ。まあ、そこまで頻繁に切り替ええないし、合っていないような欠点だ。

確か、真剣に取り組まなければ経験値として認められない、と言われていたので自分的に真剣に、より効率よくと意識はしたがそれが身を結んだのかは分からない。しかし現実としてステイタスは上昇しているので気にするものでもない。

そんな感じで、まあ、筋トレ？ステトレ？に勤しんでいた俺にある情報が届いた。

冒険者ベル・クラネル レベル2到達

ミノタウロスを討伐したのか・・・1人で、本来守るべき存在に後押しされ全身全霊を振り絞り撃破した筈のミノタウロス戦、贗物とは違う本物の英雄は少しのイレギュラーなんてものともせず、その英雄性を世界に示して見せた。

「レイニー様も桁違いにお強い筈なのですが、やはりレベルアップという物はそうそう出来るものじゃないんですねえ」

ホームへの帰り道の途中、リリにそんな事を言われた。

「まあ、レベルアップには偉業が必要だから、格上を討伐しないと行けないらしい。俺にはそんな度胸はないな・・・」

そう、それなのだ。ステイタスは順調に成長を遂げているが、流石にレベルアップともなると一筋縄では行かせてもらえない。アビリティ平均はギリギリD、しかし偉業に値する経験値は殆どないぞ、と最近出番のないメーティス様に言われた。(メタ発言)

正直、死ぬかもしれない程の強敵に戦いを挑む自信はない、ついでにパーティを組もうにも同レベルのメンバーが居ないので偉業はいくら戦っても貯まらない、ここに来て、俺の能力は伸び悩んできていた。

「じゃあじゃあ！あたし達が頑張つてレベルアップして、レイニーの事手伝つて上げたらいいんだよね！」

脳みそお花畑とは言わないが花壇は備え付けてあるだろう二ナがそう言い出す、無理に決まつてるだろ。そう言えば、一応俺のステイタスがレベル1を遥かに超えるものがあることは話している、と言うか話させられた。前世の事は未だ誰にも話していないが、もうスキルの効果とかも洗いざらい。メーティス様の追求はなんやかんやのらりくらりと交わしていたのだが2人が陣営に加わった途端勢いが強まり、ついに折れた俺は話すことにした。ずるいずるいと言われたが、まあ今現在伸び悩んでるんだし割と追いつかれそうだ。

「二ナさん、普通レベルアップには才能があつても2年ほどの時間がかかります、まあ二ナさんはもうステータスも高いですし可能性はありますが、私は・・・」

そう眩き、自信なきげに下を向くりり。うーん、どうすつかない。俺、苦手なんだよな、こう言う空気。脳みそ花壇の二ナも流石に言葉を濁す。

ああ、そうだ。

「リリ、これ持ってみろ」

「へ？」

【Forge Solid】20cm四方

「重い、ですな」

「どれどれ？つてあつ」

びぎやああああ!!!

大通りのど真ん中に女の悲鳴が響き渡る、やっべ。負傷した二ナを連れ俺はホームへと帰宅した。

「ヒール」

腫れ上がっていた二ナの脚にヒールをかけると見る見るうちに腫れが引いていく。

「うう、まだ痛いよお・・・」

「いや、すまん、落とすとは思わなかった」

【Forge Solid】は、世界でトップクラスに重い金属らしい、アイテムの備考

欄にはそう書いてる。3.8cm四方のもので1キロにもなるその金属。それを軽々と片手で持ち上げていたリリが異常なのだ。

ちなみに、投擲アイテムである。

一定以上の装備荷重における補正、それがリリの持つ唯一のスキル【縁下力持】の効果。コレは荷物運びにのみ使つていいようなスキルではない。

「それで、レイニー様、コレがどうかしたのですか？」

頭につつけられると軽く死ぬるその物体、多分勢いよくベツトにつつけたら壊れるぐらい。そんなものを容易く持てるスキル、素晴らしいスキルじゃないか、そんなに悲観する必要は無い。

「待つてろリリ、もうお前に自分なんてとは言わせないぞ」

用意するのは、商店から購入した縄と鉄のパチンコ。

投げ縄 200G

鉄のパチンコ 500G 物攻+30

縄の結び目を解き、鉄のパチンコの紐を外す、コレは破壊には入らないので簡単だ。

そしてパチンコの二股に別れている部分に核となる【Forge Solid】を載せ、何本もの投げ縄でどーにか固定していく、下手すれば重機並みのパワーがあるんじゃないかという筋力を活かし、破壊不可なその特性を活かし、ぐぐーっ、と固めてい

く。そして、まあ見た目はかなーり不格好ではあるが不壊属性（笑）の武器の完成だ。

「俺はコレにミヨルニルと名付けるぞ」

投げても戻ってこねーけど。

とりあえず完成品をリリに渡す、やはり持ち運びに困っている様子はない。

しかし未だ困惑しているようで、コイツ頭大丈夫かみたいな目で見られる。やめれ「いや、リリのスキルつてさ、一定以上の装備荷重に力の補正じゃん？ただ重いものを持つだけのスキルじゃなくて重い物で攻撃してみてもいいと思うんだよね。それアホみたいに重いけど壊れないしき、多分モンスタ―殴り倒せるって、リリなら」

そう説明すると、納得行ったようだ、最初は遠慮がちに、しかしだんだんと興奮したようでブンブン振り回す、ちよ、あぶつ、危ないっ！

「ありがとうございます！レイニー様あつ！」

ちよ、まつ、ほんとに待っ！ぎやああああ！

その後数分は暴れ狂うリリから逃げ惑う時間となった。

—————

「さあ！レイニー様！今日もダンジョンで冒険ですよ！」

昨日からずっとテンションの高いリリに引き摺られ、ついでにまだ寝たいメーティス

様と二ナに追い出され、俺はまだ日も登らないような時間にダンジョンに連れ出されていた。いや、身体は疲れてないけどさあ。

でも……びっくりするぐらいの笑顔で、人生が楽しくてしょうが無い、見たいな表情のりりを見ていると。俺も自然と笑顔になってしまうのであった。

ヒヤツハア！汚物は消毒だあー！

「うりやあああああー！」

ゴオン!!

キラアアントの硬い甲殻が凹む、他の誰でもないリリの力だ。リーチこそ短いものの重量はピカイチなその武器をリリは軽々と振り回し、モンスターに致命傷を与えている。戦闘していて分かったのは、あくまで重いものを持ち運ぶ、それに対して力が働いている為に鏝迫り合いなんかでは元のステータス通りの力しか出せないことだな。武器の打ち合いなんかでも難しいかもしれない。

しかしやはりその威力は絶大、この辺りだと硬い部類に入るキラアアントの甲殻をものともせずボッコボコにしている。ヤベー奴だわ。

リリ御用達のバックパックはストレージにしまつてある、ここで嬉しい誤算というか。まとめているものは1つとしてカウントされるようだ。あまりにアイテムが増えると把握が面倒になるから有難い。

「レイニー様！レイニー様っ！私、戦えます！もう弱っちいリリじゃ、無いんですよね！」

「ああ、今のリリは誰がどう見ても1人前だよ」

俺はそう返す、まあ、いい事だ。卑屈にならずこうして笑顔を見せてくれるなら。偽物の俺でもリリを救えたかな。

その日はリリの気が済むまでダンジョンを探索した、無力な自分を変えることの出来たりリ、コレからどうなるのかはもう俺には分からないが……。悪い様にはならないだろうと信じた。

レイニー

レベル・1

力・D 99↓568

耐久・SSS 40↓1500

器用・G 140↓210

敏捷・E 168↓486

魔力 C 68↓654

《魔法》

モードチェンジ

【作戦変更】

- ・ガンガンいこうぜ

- ・いのちだいじに

- ・じゅもんをせつやく

《スキル》

フエイクヒロー

【贗物英雄】

- ・ステータスの追加

- ・不老

- ・ストレージ

ジャックオブオールトレース

【万物商店】

- ・商店の追加

イベントバトル

【強制戦闘】

- ・逃亡不可のフィールドを作る。

- ・戦闘続行不可能な状態か、降参の意思が認められた場合のみ解除

レイニー

Lv48

MP968

物攻2406

耐久2298

魔才1121

器用1076

敏捷999

《特技》

・死守

・三段突き

・怪力

・騙し討ち

《魔法》

・ファイア↓ファイアストーム↓ファイアブレス↓イグニス

・スパーク↓サンダーstorm↓サンダーボルト

・アイス↓ブリザード

・ヒール↓リジェネーション

・テリトリ→ゾーン

ニナ・アイリス

レベル・1

【シンダー・エラ】

- ・変身魔法
- ・変身像は詠唱時のイメージ依存。
具体性欠如の際は失敗
- ・模倣推奨

- ・詠唱式【貴方の刻印は私のもの。私の刻印は私のもの】
- ・解呪式【響く12時のお告げ】

【スキル】

【縁下力持】

- ・一定以上の装備荷重における補正
- ・能力補正は重量に比例

5 卷

魔王からは逃げられない！

引つ越した、資金はリリに鉄の剣とか売り捌いてもらって用意した、以上

はいどうもレイニーです。今現在17階層に居ます。

何故かと言うとステイタスが伸び悩んだからだねやっぱ、流石にキラアートの大軍とかもう経験値として認められないって言うか。まあ一番効率良かった耐久はカンストしたし、残りは普通に俺に才能が無いのか頭打ちだ。あとステータスのLvも上がらなくなつたし。だから少しばかり冒険してみようかとね。

・・・グスツ

ホントは違うんだ、やけでここまで突撃して来ただけなんだ。

リリが覚醒してからもう2週間、俺達は連日連勝、危ない素振りすら見せずに毎日ダンジョンに潜つてて、今日はオフにするかって1人で『豊穡の女主人』で飲み食いしてたんだ。そしたらさ、オーダーミスかなんか知らないけどお酒が届いた訳よ。それをさうと知らずに飲んじゃってさ、俺。酒は効かない筈なんだけど雰囲気ですつ払ったんだ

よね。

酒なんか前世で飲んだ事ないけど、なんか幸せな気分になってテンション上がってさ、何の意味もなく立ち上がってみたりしてたらふらつとしてさ、コケそうになったんだよね、んで倒れ込んだ先がさ、リオンさんの方でさ、頭の中でもちよつとだけやべつて思っただけでリオンさんと触れ合ってると思うと身体動かなくて。

その後腹蹴られてノされたんだよね。

いやー、ヤバかった。吐きそうになつたもん。頭1発で醒めて腹に走る激痛と戦つたね。Lv4、その中でも上位のステイタスを持つリオンさんは俺よりも格上だった。

んで、まあ、推している人に腹蹴りされ、更に相手よりも自分が遥かに弱い、と言う事態に心に傷を負つた俺はベル何某君のようにダンジョンに逃亡してきた訳だ、今ならベル君の気持ちわかるぜ、逃げたくありませんねクオレワ。

そんで、シルバーバツク、ハードアーマード、ヘルハウンドやミノタウロスなんかの初遭遇のモンスターを尽く切り捨ててここまで駆け抜けてきたわけだ。

我ながらアホみたいなことしてんな。

「あー、むしゃくしやる」

マナポーションを口に含みながら先へと進む、まだ精神は落ち着いていないのだ。

「……ん？同業者か。つて、怪我してるじゃないか！」

視線の先に3人の冒険者が支え合うようにして遅々とした歩を進めている様子が見えた。急いで駆け寄る。

「大丈夫か・・・ベルクラネル!？」

なんと、相手はかのリトルルーキー、ベル・クラネルだった。つまりもう1人はヴェルフ・クロツゾで、3人目はリリルカ・アーデ・・・な訳が無い!誰だあんた!

3人目は俺の全く知らない人だった、薄いピンク髪の子だ、俺の知る限りそんなキャラ居ないぞ!?ゲームでもダンまちでも!

「うう・・・冒険者の、方ですか・・・?」

「!あ、ああ、そうだ!待ってる、今ポジションを」

「仲間をつ、助けて下さいっ・・・!」

待てーい、おい待てーい。話を聞きなさいってばおい。ベルクラネルは気絶した、残り2人は既に気絶していたようで3人の自分で動けない重傷者が増えた事になる。

「おいおい、勘弁、っ!」

ゾクリ

全身に怖気が走る、身体が言う事を聞かない。

ゴゴゴゴゴ

ダンジョンの中に、異音が響く、それと同時に、俺の頭の中にはダンまちのとあるシ

ンが走馬灯の様に流れていた。

ベルクラネル、Lv2到達

17階層

パーティの崩壊

「ゴライアス・・・」

何も考えずに通り過ぎた壁が、崩れ落ちる。そこから現れるは灰色の巨人
「嘆きの大壁だったのかよ・・・！」

早いよお！展開がさあ!?!この前3巻終わったばかりダルオ!?

『oooooooooo』

『oooooooooooooooooooooooooo!!』

「ゾoooooooooo!!ゾーンゾーンゾーン!!」

バキイイイツ!!

咄嗟に貼った防御魔法、2枚破れたところでゴライアスの初撃が止まった。

ええと、ええと!まず3人の安全確保だろ!

「ゾーン!ヒール!リジエネーション!」

時間稼ぎの防御魔法、その間にさっと回復魔法を掛け、ベルクラネルを蹴り飛ばす、乱暴になるが時間が無い!

「がつ!? な、なにが!？」

「おい! ベルクラネル! そいつら連れて逃げろ! 俺も逃げたいけど! そいつら邪魔だ!」

「ひ、一人で大丈夫なんですか!？」

「耐久には自信があんだよねー!!」

土の魔剣	20000G	物攻+600	耐久+250	耐久+10%
ミスリルの兜	16000G	耐久+450	魔才+150	魔才+5%
ミスリルの胴鎧	18000G	耐久+500	魔才+200	魔才+5%
ミスリルの籠手	14000G	耐久+300	魔才+150	
ミスリルの腰あて	15000G	耐久+350	魔才+150	
ミスリルの脚甲	16000G	耐久+350	魔才+150	敏捷+150
オリハルコンの盾	35000G	耐久+950	『物理・魔法ダメージ30%カット』	

「どうだア! コレが毎日ダンジョンで稼ぎ続けた成果だ! 前と違ってもう既に資金の不安はない! 未だ所持金には57万Gぐらい残ってるわ! オリハルコンシリーズ揃えるにはレベル足りてないだけだからなあ!

「うおおおつ・・・!」

ヒュオオオオオ・・・!!

無造作にふり抜かれたゴライアスの拳、ソレはゴライアスに比べれば蟻のような俺の身体を容易く吹き飛ばし、壁に叩きつけられる。ダメージは、殆どない。無いが、ゴライアスが俺に目もくれず逃げ出し始めたベルクラネルへとターゲットを変えている!

18階層への出入口は未だ遠く、2人の怪我人を抱えているベルクラネルの足取りは重い。あれでは間に合わないっ!

ベル・クラネル、英雄。神様に見初められた、本物の・・・やるしかねえ。俺は所詮偽物だしな。

『強制戦闘!』
イベントバトル

ベルクラネルの背後へと迫っていたゴライアスの拳は、不可視の壁に防がれる。何度ゴライアスが拳を叩きつけようとビクともしない、俺はゴライアスが壁に意識を奪われているその間に準備を進める。・・・どちらかが死ぬまでココからは出られない。

視界の端にベルクラネルが此方を振り向きながら、18階層へとかけ下りる姿が見えた、ベルクラネルは救援を呼ぶだろうか、そう言えば、降りてすぐにはオラリオが誇るLv6冒険者、アイズ・ヴァレンシユタインが居るはずだ、すると、俺の戦闘風景はロキ・ファミリアの面々に見られてしまうのかもしれない。

・・・目をつけられるのは嫌だな。

意外に思考に余裕がある、勝てると感じているのか、諦めているのか。戦闘中ポーションを買う隙がないことを考え、購入したポーションをストレージにいくらかしまし、残りは全て地面に投げる。

冷静な俺の頭は様々な考察をする、ゴライアスのギルド指定Lvは4、俺の強さは具体的には分からないが、リオンさんの攻撃で悶えてたことを考えるとLv2強位？今は装備でステータスは耐久は倍増と言っている、耐久に関してはLv3の上位に位置する筈だ、更にスキルや魔法の効果なんかもいれたら、さっきの攻撃のようにダメージは無いに等しい。よって俺のやるべき事は、耐久にものを言わせ超攻撃的な戦法でのゴリ押し、だと思う。

ゴライアスは壁の破壊を諦め、俺へと身体を向けた。これ以上考える暇はないな、俺は剣を構える。

「かかってこいやー！」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

永き戦いに終止符が打たれる

なんかね、膠着してるわ！

「三段突きイ！」

チクチク

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

「ぎやあああああああ！」

ヒューーーン、ビターン！

気分は安全装置のないジェットコースター、俺の攻撃はサイズの問題で致命傷には程遠く。相手の攻撃は俺の耐久を上回らないのでダメージが出ない。しかし攻撃自体のダメージは無くとも体重は一般レベルなのでひたすら吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる身体には痺れが走っていた。衝撃は貫通してくるからな。身体の中で地震でも起きているかのような感覚だ。

「イグニス！」

『グオオオオオオオオオ!!』

魔法はまあ効いてる、18階層に出る奴と違って再生能力は無いし。いつかは倒せ

る・・・かな？想像以上に俺の耐久が凄かったせいで、緊張感にかける所があるけど。魔法で狙っているのは胸部部分だ、少しづつ火傷が重なり、その内魔石が見えて来るだろう。ブハツ!?

ゴライアスの口が光つたと思った瞬間、頭に衝撃が走る。突然攻撃を受けた俺の身体は後ろへと倒れてしまった。

そこへゴライアスの攻撃、地面と拳に挟まれ、逃げる場所を無くした振動は全て鎧の中の俺の肉体に吸収されていた、やめろ！気持ち悪い！吐きそう！

暫くしゴライアスが攻撃の手を休めた、俺が死んだと思ったのだろうか、グロツキーではあるがダメージらしいダメージは負っていないぜ。

「ゾーンー！」

今のうちに回復だ、そこら辺に転がってるマナポーションとライフポーションを一気飲みし、ゾーンを破ったゴライアスの追撃を避ける。ハンターばりの緊急回避だ。俺のすぐ横をゴライアスの足が通り過ぎる。直撃していたら天井の染みになっていたかも知れない。無傷の鎧の中からぶちゅつと・・・

いやいや、と頭を振り集中する、それよりもさっきの攻撃だ。原作の知識と照らし合わせる、レーザーの様なものだと思う。そう言えばファイアボルトと似た感じだな、チャージすれば威力上がった気がするし。

ピチュンピチュンと小チャージの攻撃が次々飛んでくるが落ち着いて回避する、口が光った瞬間前傾姿勢で盾を構える。そこその衝撃は走るものの、不意をつかれなければ倒れる程ではない。

「イグニス！」

遂に胸部の肉体が焼け落ち、紫の魔石が露出した。

よしよし、何とか生きて帰れそうだ・・・

そう確信し、とどめを刺すために唱えた、イグニス

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

「・・・え？」

ゴツ！

ピンピンとしていたゴライアスに油断していた俺は容易く蹴り飛ばされた。

「なああああんんんんんでええええええ!!」

またも境界の外縁部に叩きつけられた俺は考える、なぜ魔石が破壊出来ないのか。属

性？

「サンダーボルト！ブリザード！」

ダメだ！傷一つ付いていない！威力が足りないのか!?

威力、そこで俺は過去のある光景を思い出した。

『……みんな、道を開けろおおおおおおおおお!!』

かの英雄、ベル・クラネルは特殊なスキル『英雄願望』を用いて強化されたゴライアスの上半身を吹き飛ばし、そして剥き出しにされた魔石にナイフを突き立て討伐した。

上半身を吹き飛ばされても、無傷。

魔石は名前の通り魔法の石で、魔法で傷を付けることは出来ないとも言えるのか!マジかよ!

長くも短い記憶の海から抜け出し、接近して来ていたゴライアスから逃亡する、今もゴライアスの弱点は剥き出しであるのに攻撃手段がない!

魔法……効かねえよ

剣……当然届かない

盾……俺防具だから

鎧……俺専門の防具だから

「役立たず共め……!」

さんざん身を守ってくれた武器に文句を言う、役に立ってねえもん。

この状況を打破する鍵を探し当たりを舐めまわすように確認するが瓦礫とポーションしか落ちていない結界内にろくな物なんて……瓦礫だ!

「死ねやオラ!」

走りながら瓦礫を拾い、魔石目がけて投げ飛ばす。野球部でもなんでもないので自信はなかったが何とか命中してくれた。

破壊には至らなかつたものの、紫色の欠片が宙を舞い、ゴライアスが苦悶の表情を浮かべる、そして直ぐに魔石を左手で隠した。

敵ながら見事な投石対策である！秒で瓦礫も役立たずになったなおい！

一応投げるが、ただの石に階層主の肉体を貫通する能力など無く、ぽとりと落ちた。投石のため速度を落とした俺の身体をゴライアスの世界最高峰の蹴り上げが襲う。

またもや吹き飛ばされていく、ワンパターンなんだよ！

「こうなりややけだよ！ファイア！ファイア！」

『グオオオオオオオオ！』

たつた今思いついた作戦、目を焼く。何故思い至らなかつたのか不思議になるほどの単純な作戦だが、まあ気にすまい。効果は上がっている。

悶えるゴライアスを尻目に俺は『万物商店』を開き、対抗策を探す事にした。

スパイラルボウ 3500G 物攻+250

初心者がマトモに矢を飛ばせるはずが無かつた！

スネイクソード 6500G 物攻+250 『出血付与』

サイズがね！足りないね！

ロングボウガン

4500G

物攻+150

ああっ！あいつ狙われていることに気がついてまた魔石隠してる！最初にボウガン出してたらあ！

爆発石

150G

『敵に150の固定ダメージ』

ダメージ無し！

大・爆発石

1500G

『敵に1500の固定ダメージ』

ダメージ無し！

わくせいはかいばくだん

5000G

『敵に5000の固定ダメージ』

『

よおおおおし！腕が吹き飛んだアアア！！

『今度こそ死ぬやアアア！』

腕も無くなり、無防備な魔石にわくせいはかいばくだんの無情な爆発が迫る。

ゴライアスの胸部を覆う爆発に思わず「やったか!？」と呟いてしまった、コレはやってないパターンだ。

予想通り、無傷の魔石が現れる。爆発は物理攻撃にはいらんの？なんで？

クソっ！ならまた瓦礫の番だぜっ！

と投石の姿勢に入るも、ゴライアスは吹き飛んだ手の残り、手首よりも下を使い魔石

を隠しやがる。仕方ないのでわくせいはかいばくだんを・・・ってアレ!?

わくせいはかいばくだん

5000G

在庫切れです、再入荷まで2

3・56

在庫お!?在庫なんて概念が存在していらっしやったのですかねえ!そう言えばゲームでもポーシヨン以外は制限あつた気がするわあ!

—————

最初なんて目じやないぐらいの膠着状態に陥つた。あれから30分ぐらいお互い有効打を与えられていない。目を失つたゴライアスは狙いも定めず暴れ回るが、魔石の守護だけはしっかりとやっている。

「あー、めんどくせー」

もう俺は殆ど諦めていた。結界の端っこで悠々と昼寝の時間だ。結界の外に白髪の少年とか緑髪の長耳とか居るけどもういいわ。なんかもういいわ。

降参して結界を解除しようとしたんだけど

イベントバトル
【強制戦闘】

・逃亡不可のフィールドを作る。

・戦闘続行不可能な状態か、降参の意思が認められた場合のみ解除

この降参の意思が認められた場合のみつてのがくつそめんどくさい所で、認めるのは

自分じゃなくて相手らしい。モンスターに知性はなく認める認めない以前に何が何だかもわかってないのだろう、結界は解除されなかった。

一応策を考えてるんだけど、どうしたもんかね・・・

何か俺には無い発想をくれないかと結界の外の人間に目を向けるも俺の視線に狼狽えるばかりで。

その横で結界相手にキンキンやってる女剣士に目を向ける。

少し前からずっとキンキンしてるけどまだ諦めてない。途中休憩してたけどしまいには魔法を使って身体ごと結界へと突撃し、勢い余っておでこをぶつけ悶えていた。それを見て白髪の少年、ベルクラネルが慌てて介抱に向かう。

成果はともかく、あの突撃の速度は素晴らしかったな、目にも留まらぬ速さとはあのことか。

俺にも風魔法の適性があれば似たような事が出来たのかもしれないが、あいにく俺は火と雷、氷しか使えない。ソレにRPGの魔法はこの世界のものに比べて融通も効かないしな。威力の調整も出来ないし、範囲の調整もできねー。

と、凄いやうで使い勝手の悪い魔法に嘆いているの俺の頭に発想の神が舞い降りた。やられた帯電していて、思わずビリビリと呼びたくなる様な神様だ。

誰？

『コレが私の、全力だああ!!』

ハッ! そうか、サンダーボルト!

神様から発想を得た俺は、商店で鉄剣を購入する。

鉄剣

500G

物攻+20

「サンダーボルト!」

雷の力を纏った鉄の剣は凄まじい速度でゴライアスへと接近し・・・!

太ももを貫通しその先の結界で火花を上げ、動きを止めた。

・・・コントロールに難あり!

—————

鉄の剣を再利用しながら、およそ67回目のチャレンジで見事魔石をぶち抜いた。

不穏な気配

ゴライアスのドロップアイテム、『ゴライアスの硬皮』へと近付く、さて、格納するかという所で重要な事実が付いた。

ロキ・ファミリアが見てるっ！

しかも増えている、途中見た時は精霊剣士と緑長耳と白髪の少年しか居なかったはずがパツキン勇者と凸凹姉妹あとレス長耳と思いき長耳が新たに登場していた。

無視して地上に帰還しようかとも考えたのだが……情けなく飛び出してきた手前、未だ帰るのは躊躇われる。仕方がないので、皮を担いで遠回りで18階層への道を目指す。

てくてくてくてく

ザツザツザツザツ

ピタツ

ザツ

シユタタタタタ

ヒユン ガシャ！

「まあ待ちなよ……ちよつと話をしようじゃないか！」

逃げる俺にあっさりと追いつき腕を掴んできた男の名前はフィン・デIMUMナ。神々に『勇者』の名を授けられたLv6冒険者だ。

「離せ、お前に話すことなど無い（低音）」

目をつけられそうなので、どうにか逃げられないものかと抵抗を見せる俺、しかしびくともしない。貧弱過ぎて涙出そう。

「君、何処のファミリアに所属しているんだい？」

「・・・」

「名前は？レベルはいくつなのかな？」

「・・・」

「さっき僕達の行く手を阻んだ壁について聞きたいんだけど」

「・・・」

怒涛の質問マシンガン、しかし答える訳には行かん、というか割と踏み込んだ質問してくるね。

「ふむ・・・まあ、答えられないならしょうがないか、それにしても今の戦いは凄かった、もし良ければ握手位はして貰えないかな？」

そう言つて、勇者は手を出した。握手・・・まあでも、触れたら相手の情報が分かるスキルなんて持つてなかった筈だし、それぐらいならいいか・・・と、籠手を外しこれ

に応じる。小人族の手はとても小さく、しかし凄まじい力を感じた。
 「それじゃあ、またね」

何か、忘れていたような気がするがまあ、気の所為だろう。俺は18階層へと進んだ。

—————

入り口近く、森へと入り入り口を監視する。誰も見ていない事を確認しゴライアスの皮を格納する。そして装備も全て外し、全く別の物を装着した。

餓狼の双牙 18000G 物攻+950 耐久—150 『鎧カテゴリー装備不可』

コレは特殊カテゴリーの武器、装備すると特技が一変する。色は白で反り返って居ることから牙に見えなくもない。

侍ヘッド 6340G 器用+634 『敵物攻6.34%カット』

侍ボディ 6340G 器用+634

侍ハンド 6340G 器用+634 『武器攻撃時敵耐久63.4%カット

(初撃)』

侍の腰当 6340G 器用+634

佐々木レッグ 3390G 器用+339 『敵敏捷33.9%カット』

まあ、ネタ装備だ。効果は凄いいけど防具としてゴミ、耐久はまさかの+0。後でちゃ

んとした装備にするけど、とりあえず今はいい。森を出て、何食わぬ顔で街へと向かう、まだロキ・ファミリアの面々は来ていなかった。

レイニー

L v 5 5

M P 1 2 1 3

物攻 2 7 4 9

耐久 2 6 2 1

魔才 1 2 5 3

器用 1 1 9 9

敏捷 1 1 4 7

《特技》

・ 死守

・ 乱れ突き

・ 鬼神化

・ カウンター

・怪力

《魔法》

- ・ファイア↓ファイアストーム↓ファイアプレス↓イグニス
- ・スパーク↓サンダーストーム↓サンダーボルト
- ・アイス↓ブリザード
- ・ヒール↓リジエネーション
- ・テリトリリー↓ゾーン

ロキ・ファミリア1

「ア、アイズさん!?! . . . いや、この人なら . . . 上で冒険者がゴライアスに襲われているんです! 助けて貰えませんか!」

白髪赤目の兎のような少年、つい最近レベル2になったと聞いたのに、もう18階層まで出てきたのか。と金髪の女剣士 アイズ・ヴァレンシユタインは思う。両脇には2人の冒険者を抱えている、気絶しているようだ。

目立った怪我は見受けられないけど . . . ?

それはともかく、ゴライアス。ベルに頼まれた事だし、助けに行こう。

「. . . 進めない?」

「な、なんか透明な壁が!」

ゴライアスと戦っている冒険者を発見して、救助しようとするが見えない何かにぶつかった。痛い。

「あつ」「ああつ!」

冒険者が吹き飛ばされていく、コレはもうダメかもしれない。無防備に喰らったその

一撃はレベル3冒険者位なら致命傷を受けただろう。と、思ったけど、件の冒険者は少しふらつきながらも怪我を負っている様には見えず、元気にゴライアスへと突撃している。

ゴライアスの脚に吸い込まれていく太刀筋を見ると、お世辞にも上手いとはいえない。そもそもサイズが違うし、片手剣ではろくなダメージも通らない。

「せめて、魔法があれば・・・」

そう呟いてから、それは無理な相談だと思った。装備からして、あの冒険者はガチガチの前衛職だ、それに先程高い耐久を見せていたし、少なくとも魔法メインでは無いだろう。戦闘しながらの呪文詠唱は至難の業だと聞いた、私の様な短文ならともかく。

『・・・ッ!』

燃えた、ゴライアスの胸の辺りが。しかし、火が消えた後に残るのは少しばかりの火傷。致命傷には程遠い。

「不味いかも・・・決定打がない」

魔法が使えたのは驚きだが、威力に乏しい。やはり魔法は使い慣れていないか、短文の魔法にありがちな威力不足だろうか。

こうして見ている間にも、何度も、何度も吹き飛ばされている。まだ動ける様だけど、いつかは体力が尽きてしまおうだろう、早く助けないと。

「……ふっ！」

ギヤイン！

！……弾かれた、手加減はしていないのに。

腰を入れて、切る

ギイン！

力を抜いて、切る

ギイン！

心を無にして、切る

ギイン！

切る切る切る切る

ガガガガガガガガ！

—————

「アイズ！落ち着け！」

「はっ」

団員に呼ばれ17階層へと赴くと、アイズが一心不乱に見えない壁？を攻撃していた。隣に居たいつかの少年は完全に怯えている様だ。

「何があつた？」

「ベルに助けを求められて、救助に来たら壁に止められた」

先程アイズが攻撃していた場所を触ってみる、なるほど。確かに壁が存在している。レベル6の冒険者たるアイズの攻撃を受けて傷一つ付かないとは、一体誰の仕業だ？

壁の向こうでは、冒険者がゴライアスと単身戦っている、状況を見るにあの冒険者を隔離する為に使われた魔法だろうか・・・、それにしても異常である。

どうしたものかと頭を悩ませていると、驚くべき事が起きた。

『……………ッ！……………ッ！』

例の冒険者が幾度も火の魔法を重ね、露出した魔石に対して魔法攻撃を仕掛けたのである。それだけならまだ魔石の特性が頭から抜け落ちていた、で済むがその魔法が問題だ。目を焼くような閃光と、凍えるような氷の渦。

「3種の魔法を使うとは……………」

前例が無い訳では無いが珍しい、魔法に適性のあるエルフでも3つの魔法を持たない者はいるというのに。

魔法が効かないことを悟った冒険者は、投石をする、それは魔石を撃ち抜きダメージを与えた。しかしゴライアスもバカではない。生命の危機に対し適切な行動を取る。

魔石を隠したゴライアスに対し攻め手を失った冒険者はまたも吹き飛ばされる。アイズの防御力は異常だな。私が来る前から何度も攻撃を喰らっているであろうに怪我

をする素振りも見せない。防具が優秀なのか？

「ね、寝転んだっ!？」

あの後、火の魔法でゴライアスの目を焼いた冒険者の人は倒すのを諦めて寝転がってしまった。ダンジョンで死にかけていた僕達を助けてくれた命の恩人の冒険者さんは、とんでも無く強かった。いや、強いのかな？微妙だけど、とりあえず僕よりは強い。

ホントは今すぐにも助けに行きたいんだけど、なんでか見えない壁があつて進めないんだよね、冒険者の人も同じみたいで吹き飛ばされては壁にぶつかって滑り落ちていた。アイズさんの攻撃を受けても壊れない謎の壁、とても僕では太刀打ち出来ない。エルフの人が来てどうにかなるかな、って思ったけどなんだかブツブツ眩いていて怖い、どうにもならないみたいだ。

「そうだ、アルゴノウトなら・・・!」

いや、でも、僕の魔法ってアイズさんの剣戟より威力があるのかな？インファイト・ドラゴンに倒せたけど、それだってアイズさんなら秒殺だろうし・・・

どうすればいいんだろう

「テンベスト目覚めよリル・ラファアーガ」

それは突然だった、普段から『何を考えてるのか分からない』『ド天然』等と言われていたアイズ・ヴァレンシュタインが魔法を使ったのだ。思考の海に沈んでいた2人は止める事が出来ず、壁に切りかかる金髪の剣士を見ている事しか出来なかった。

ギャゴツ!!

金属音が鳴り、その後直ぐに鈍い音が響く。壁は健在だった。

「……ッ……ッ……!」

「うわあ!?だ、大丈夫ですかアイズさん!」

慌ててベルがアイズへと駆け寄る。無言で蹲りおでこを押さえるその様は、とても都市最強の剣士だとは思えない。

「アイズ……何をやっているんだ……」

ハア、と深い溜息を付き、リヴェリアは思考を中断しアイズの介護へとまわる。辛い強くおでこを打った程度で、赤くなるくらいで済んでいるようだ。

(しかし……アイズが魔法を使っても、傷一つないだど? 一体何が起こっているんだ……) 明らかな異常、常軌を逸脱した堅固な結界を前にリヴェリアは寒気を感じた……。

「私だけでは、判断が付かないな……」

アイツも呼んでこねば。 団長を。

—————

「これは……」

何なのだろう、僕は何を見せられているんだ？話を聞いた時は、さすがに冗談かと思つた。しかし他の団員ならまだしもリヴェリアがその様な事を報告して来たのだ、切り捨てるわけにも行かなかつた。

アイズが攻撃しても割れることの無い結界、エルフの知識においても解除は不可能だと言うそれ。もしその魔法を自在に操れる者がいるとするのならその物は自分達を超えるLvの持ち主でもおかしくはない。

そしてそんな魔法を使つて何がされているかと言え、ゴライアスと冒険者のタイムだ。冗談を疑う事も当然さ。

指は疼かない、危険は無いかもしれないが、あまりにも不自然……。

ゴライアスは自分達からすれば脅威ではないが、それでも1冒険者が挑む敵としては強大なモンスターだ。大きな体格はそれだけで攻撃を防ぐ盾となるし、その質量は攻撃においても活かされる。間違つても単独で挑んで良い相手ではない。

そんな相手の目の前で寝転がっている彼は何者なのか、興味は尽きない。話によると、ゴライアスの攻撃を何度受けようがものともしない耐久力を示しているらしい、Lvは不明だが人並外れた耐久の持ち主だ。

更に威力は乏しくとも短文が並行詠唱を用いて射程の充分な3種の魔法を使い、定か

ではないが何も無い所から物を取り出す力もあると。

「(そんな冒険者、聞いた事がない！頭角を現し過ぎて、疎まれていたのか？だが、そうだとすると街の外の冒険者だとしても情報が無すぎる！)」

優れた耐久、見た事の無い装備、珍しい3種の魔法の所持者。どれをとっても少しくらい聞いたことがあってもおかしくない個性だ。ただというのにフィンの耳には何も入って来ていない。

「フィン？」

心配そうな仲間の声、そうだ、僕はロキ・ファミアの団長。動揺を抑えろ、頭を回せ。

「今はひとまず待とう、リヴェリアはもう少し解析を、アイズは落ち着かないか、無駄な力は使おうじゃない」

そう指示を出した時、壁の中の鎧は新しい動きを見せていた・・・

「良かったのか？あのまま行かせてしまつて」

私は鎧男が消えていった18階層への入り口を見つめ、考えを巡らせている様子のフィンへそう問いかける。

「大丈夫だよ、まだ考えはあるから」

そう言って、
フインはニヤリと笑った。

属性・主人公

「そう言えば、クラネルがここに居るってことは、もう5巻のゴライアス戦が来てるのか・・・」

林の中で着替えを終えた後リヴィラの街へと向かいながら、俺はそんなことを考えていた。

ゴライアス、先程倒したものと違い、Lv5相当の能力を持つ化け物だ。恐らく俺の魔法は弾かれ、剣戟では先ほど同様針に刺されたようなダメージしか与えられないだろう、あるいはそれすら弾かれるかもしれない。原作では数多の冒険者が命を懸けて挑み、多大な労力を持って討伐していた。

その他にも覗きや神様誘拐事件なんかもあったが・・・

「俺、どうすればいいんだろうか」

そもそも、リリが俺と行動を共にしている時点で原作から離れているのだ。これ以上原作に干渉すると、とんでもない事態が起こってしまうのではないか、そんな危機感が漠然とある。だが、原作乖離を恐れて全て見殺しにしようのものはばかられる。うーむ。

「まあ、後で考えるか、確か事件が起こるのは明日のはずだし」

問題は先送りするものである。

リヴィラの街に辿り着き、ぼったくりではあるものの比較的安い宿を取り、一息をつく。そこで身支度を整え、街を散策する事にした。

「うわあ、やっぱ全部たけー・・・」

この世界に来て数ヶ月、凡その物価は把握しているので、ここの物資の値段が異常である事は分かる。特に必要な物は無いので問題ないのだが・・・俺の能力で大量の物資を安く売ればヴァリスが稼げそうだな、なんて事を考えていたその時。

「はあい、お兄さん。ちよつと来てもらえなあい？」

「え？」

獣人の女の人がそう声を掛けてきた、年は20代？とても美人な人で、最初は誰に言っただろうと思うていたがすぐ近くには人もいないこともあって対象が自分であることが分かる。しかし、なんで一体？

「ほら、早く♪」

「え、ちよー！」

力強つ?!ステータスも合わせたら上級冒険者にも勝る筈の俺がろくに動けない・・・!

「たすもがつー！」

助けを求めようとするも、口を塞がれそのまま路地裏へと拉致られる。

何が起こったのかさっぱり分からない、俺がなにかしたのか？ 混乱の中打開策を探そうとしたが、上手い策は浮かばない。

「団長、捕まえましたよ〜」

路地裏に少し入った所で女は立ち止まり、誰かを呼ぶ。団長？ それって・・・

暗がりの中から、小柄な人間が出てきた、いや、人間ではない。小人族だ。

それはロキ・ファミリア団長、フィン・ディムナであった。

—————

「いやあ、手荒な真似をしてすまないね。こうでもしないと逃げられてしまいそうだからさ〜」

連れて行かれたのは、街の外のキャンプ地。ロキ・ファミリアのキャンプ地なんだろうなあ・・・。そこにある一際大きいテントに案内され、ようやく解放された、解放されたといつてもさつき俺を捕まえた女の人は居るし、目の前にLv6冒険者であるフィン・ディムナがいるので逃げる事は出来ないだろう。

「あーっと、なんでバレたんですかねえ・・・」

顔は見せてないし、名前も知らないはずの俺を見つけるとは。装備も変えてアイテム

も格納したのに・・・森で見られてたのかな、俺が見つけられなかっただけで。

「獣人は鼻がいいからね、少し恥ずかしい話だが、手の匂いからなんとか見つけることが出来たんだ。迂闊だったね」

手の匂いって、握手の時!? 気持ち悪いよお・・・そんなところから身バレすんのか。と言うか、こんな事をしてまで俺に何の用があるんだろうか。別になんもしてへんですやん。

「さて、本題だけど。君は、何者だ?」

「っ!」

ビリビリと目の前の男から発せられる重圧が俺の身体を竦ませる。なんでホントにこんな事になってんだろう。何が引つかかったんだ!

「ゴライアスの単身討伐、少しトリツキーな所はあったけど最低でもLv4の冒険者でなければ成しえない偉業だ。防御力を見るにLv5でもおかしくはない。でも、そこまでの冒険者なのに、無名なのはおかしいと思わないかい?」

・・・まあ、少々おかしいかもしれないけどヘルメスファミアのどこみたくにLv詐称する事もあるんじゃないのか。なんで俺に限って・・・もしかしてヘルメスファミアのやつてることはバレてなかったり?

「Lvを詐称するファミアなんかもあるけど・・・証拠はなくとも詐称している事実く

らしいは掴んでいるよ。その点君は全くの無名、今僕達は警戒しなければいけない時期でね、少しの不穏分子も放っておけないのさ」

警戒しなければいけない時期・・・？なんかあったのか？外伝？俺見てないからわからないんすけどマジで。

それにしても、いよいよ逃げる訳にはいかないみたいだな。顔は割れてるし、ロキ・ファミリアを敵に回してまで逃げ回らなきゃなんない何かがある訳でもない。さつさと情報を渡して見逃してもらうか・・・

「分かったよ、何が聞きたいんだ」

観念してそう答えると、フィンは少し驚いた様子を見せた、あまりに素直だから驚いたのか？

「所属ファミリアは？」

「メーティス・ファミリア、無名の零細ファミリアだ。眷属は三人」

「何故あそこまでの強さを？」

「特殊なスキル、詳細は言えない」

「17階層での結界はなんなんだ？」

「特殊なスキル、詳細は言えない」

「剣を飛ばしていたあれは？」

「魔法の応用、詳細は言えない」

「そもそも何処から剣を出していたんだい？」

「特殊なスキル、詳細は言えない」

「・・・」

「・・・」

態度には出ていないが、謎のオーラが見えるような気がする。

だつて言えないんすもん。

—————

何やかんやあつて無事釈放、不安な事も言われたがとりあえず見逃してくれるそう。

やったね。

ぶつちやけクラネル達を探しに来るヘステイア軍団と出会うのが面倒臭いし、地上に戻つてもいいんだけど、色々な原作乖離がこのイベントの時にどんな失敗を招くかわからないため、近場で見ておかなければならない感じもある。

・・・まあ、残つとくか。

街を散策し、適当に時間を潰したり、「万物商店」からアイテムを仕入れたりし、一日を終えた。

ええと、俺の記憶が正しければ・・・明日ゴライアスだっけ？

小話

主人公はリヴィラの街でのあれこれが、1日目に色々あつて2日目にゴライアスが来た、と思つている。実際の所は1日目はほぼ気絶し、その日の夜に神様達と合流、2日目は街を散策＋水浴び、3日目にゴライアスである。

次の日、ゴライアスの前になんかクラネルがリンチされるシーンがあつたはず、もしもの時には手を貸すために、あらかじめ近くに潜伏しよう。

そう考えた俺は、未だクラネル達がキャンプ地にいることを確認し、先んじて戦闘の舞台となる1本水晶とやらを指し、森の中へと足を踏み入れた。

迷つた。森に入る前には真つ直ぐ目の前の方向に見えていたはずの水晶は、森を進むうちに見当違いの方向へと向かつていたのか跡形もない。かれこれ1時間近くはさまよつているというのに・・・

うーん、これもう戦闘始まつちやつたかも知れん・・・つと、水の音がする。こりや

完全に別のところに来ちまったのかね、水晶の周りに水とかなかった気がするし、アニメの知識だけど。

そういや、喉乾いたなあ。そんな歩き回るつもりでもなかったし、水を持って来てなかった。水筒はあるから補充して行くか。

茂みをかき分け、水源へと向かう。少し進むと、直ぐに泉が現れた。のだが

「・・・ナツ」

属性・主人公2

「・・・ナツ」

俺の目はおかしくなっちゃったのだろうか、幻覚が見える。妖精が水浴びをしてい
る・・・。いつの間にかモンスターの攻撃を受けていたのかな？

「――何者だれ！」

ヒュオン！

顔の横を通り抜けていくナニカ。まあ短剣でしょうね。そのお陰で我に返った俺は
地面に埋まろうかという程額を地面に押し付け、渾身の土下座を披露した。

「申し訳ありませんでしたアアアア!!」

—————

「そう言えば、貴方はあの時の・・・」

「アツハイ、あの時もあの時でホントにすみません」

なんとか、リオンさんから許しを得た。20分ぐらい土下座したけど。邪念を感じな
かったやらなんやら。でも油断すると普通にさっきのシーンが頭に浮かび上がってき
て・・・その度に何故か察知され短剣を突き付けられるので抑えるのも一苦労だ。1人

の時にゆっくり思い起こそう。

「いえ、あの時は私も悪かった。少し力加減を間違えてしまったようです」

レベル1だったら即死しかねない一撃が少し．．．そんなドジっ子な所もイイツ（末期）

「ええと、まあ、また今度店に伺います」

「ええ、豊穰の女主人の店員として、貴方をお待ちしております」

流石にこの後の墓参りに同行するほどの勇氣はない．．．向こうもちよつとした知り合い程度は連れて行かないだろうし。

まあ、今回の水浴び事件で分かったことは、俺が勘違いしてたつてことだな。ゴライアスと、クラネルリンチは明日か。無駄足踏んだな．．．まあでも水浴

カッ！

．．．

—————

次の日、街の住人にきちんと道を尋ねてから1本水晶を訪れた俺は遠くからリンチの様子を観察していた。気分は良くないが．．．これもクラネルが成長する為のイベントらしい、どうしようもなくなった時以外は手を出さないと決めている。実際、ステータスの差では無く姿を消す魔道具のせいで押されているのだから、視線を察知できるクラ

具はまた今度使つてあげよう……。

木から飛び降り、冒険者に加勢する。ゴライアスは多分クラネル達が倒してくれる筈だ、俺は裏方で十分。敵はLv2相当のモンスターばかりだが、俺の高いステータスはそれをものともせず敵を切り裂いていく。苦戦している冒険者を手助けし、怪我を負っている冒険者にヒールを掛けていく。それを少しの間繰り返している内に、10人ほどの小規模グループが形成された。

「おいあんた！助かったぜ！」

ゴツイ顔の冒険者が感謝の声を投げかけて来る、それに合わせ俺は指示を出した

「それは良かった！とりあえずここから抜けて街を目指すぞ！前の奴は切り刻んでやるから俺の前に経つんじやねえぞお！」

鬼神化を発動、筋力が跳ね上がり、その動作も素早くなる。モン○ンのアレだね。視界が赤く染まり、言いようのない高揚感が身体を走り、その衝動のままにモンスターへと切りかかる。

「はええっ！ちよ、ちよつと待つてくれよっ！」

技術も何も無く、ただ力任せに剣を敵に叩き付ける、刃は立てている為あらゆるモンスターへの防衛を貫きその命を散らす、ああ、この精神状態は不味い、と頭の冷静な部分が発警を鳴らすが止まらない。まあ人を殺している訳では無いしいいか、と理性も身体

の説得を諦めた。

鬼神化を發動したレイニーはまさに鎧袖一触で、戦闘もしていない冒険者達が追い続けることで精一杯だ。暴れ回るレイニーは、しかしキチンと街へと向かい、暫くして森を抜けた。

それと同時に身体から力が抜け、思い出したかのように疲れが身体に浮かぶ。たまらず倒れ込んでしまった。しかし、俺の身体は疲れはしないので精神的な物だろう。

「お、おい、大丈夫か？」

先程、声をかけてきた冒険者が手を差し出してくる、俺は素直にその手を取り、ふらつきながらも立ち上がる。

「ああ・・・少し疲れたただけだ、全員無事だったか？」

「おお、それなら良かった。俺らは全員無事だぜ、助かったよ。にしてもあんた、つえーな。見ねえ顔だが、外の冒険者なのか？」

んん、コレは適当に流しておくか。

「ああ、そんな所だ。俺はゴライアスの所に行くが、アンタらはどうすんだ？」

俺がそう言うと、その冒険者は余程驚いたのか目を見開く。

「おいおい、ホントかよ？ありゃバケモンだぜ。遠くから見るだけでもやべー匂いがプンプンしやがる。普通のゴライアスですら手に余るつてのに、俺は逃げるさ」

逃げる道は閉ざされてしまったのだが、それは言うまい。木の上に居たから崩落したのが分かったのであって、それを伝えたらなぜ木の上にと言われかねない。元々森を出るのを手伝っただけだし、街に行けば逃げられない事を知って他の行動を取るであろう。

「そうか、気を付けろよ」

それだけを告げ、その場を離れる。目標はゴライアスだ、走りながらストレージからポーションを取り出し一気に飲み干す。身体から倦怠感が抜けて行き、身体が力を取り戻すのを感じた。

VSゴライアス

ゴライアスの周りを誰かが飛び回っている、コレはリオンさんだろうか。時折発生する爆発は「万能者」と名高いヘルメス・ファミリア所属のアスファイ・アンドロメダの物だろう。

俺は、ゴライアスの全身が見える程近くへと接近していた。確か・・・途中からアンドロメダが空を飛ぶシーンがあった、それがまだと言うことは戦闘はまだ序盤という事だ。

「※※※※※！※※※※※※※※※※※※※※※！」

誰かが、大声で叫んでいた、それに呼応してゴライアスへ切りかかっていた前衛達が後退する。そして、轟音。

ゴライアスが炎、氷、風、雷。ありとあらゆる攻撃魔法へ晒され、その身体に確かな傷を負って行く。その光景は、この攻撃がゴライアスの治癒能力によって無意味となる事を知っている俺でさえもしかすると、と希望を持たせるほどの迫力を持っていた。

しかしまあ、勿論治癒された。その後の反撃の衝撃波から魔導士達を守る為、魔法を幾つか掛け被害を抑えた、味方が減って得することは無いからね。

「ファイア」

前の戦いの時に有効だった、目潰し戦法。目の防御力はなんとか貫通してくれて、ゴライアスは痛みにも呻く。治癒しようとするも、俺の魔法は暫く残るし、消費MPも大したものでは無いので重ねがけし、視界を潰し続ける。

ゴライアスは当てもなく暴れている、咆哮がちと危ないが、まあ無視だ無視。その間に俺は魔導士達の元へと走り、回復を施す。見殺しにするのはちよつとな。アニメや小説では描写のなかった、血みどろの冒険者達を癒していく、少し血の匂いで噎せた。

その場にテリトリーを3枚残し、次はゴライアスだ。モンスター程度ならテリトリーを壊すことは出来ないし、盾役も復活したので暫くは持つ筈。

つと、ゴライアスの目が復活した様だ、他の奴らも態勢を整える位はできたようだし、仕切り直しだな。

とりあえず・・・ぶちかまして見る、ベル・クラネル

—————
絶望の空気を切りさく、希望の雷炎。あらゆるものを灰燼に帰すその魔法は、黒いゴライアスの頭を消し飛ばした。そして俺は走り出す。わざわざ・・・英雄に無駄な傷を負わせる必要は無いだろ。

「テリトリー！」

俺の防御魔法が、クラネルを守らんと展開される。通常であれば容易く削られたであろうその壁は、機能の不十分な口から放たれた咆哮を軽減する事は出来た。完全とは言わない迄もその威力を減じた咆哮はクラネルを吹き飛ばす。しかしこれで終わりではない、今度は、咆哮を放った張本人であるゴライアスが飛びかかる準備をしている。その時には既にクラネルの元に到着し、駆け寄って来ていた大男、桜花に睨みを利かせ動きを封じる。

「ブリザード！」

放たれた魔法は、氷の嵐。今まさに跳躍しようと言う所であったゴライアスの足元を凍り付かせ、態勢を崩したゴライアスは地に膝をついた。その衝撃で容易く氷は砕け散ったが、時間稼ぎにはなった。

「あ、貴方は……17階層のっ……」

息も絶え絶え、そう言った状況でクラネルは声を出す。

「ああ、そうだ。しかし、今はそんな事を話している暇はない。アイツを殺しうるのはお前だけなのだ（低音）」

クラネルにヒールを施し、ついでにリジエネーションもかける。1本だけ持っていたマインドポーションも飲ませ、原作よりも好条件なベル・クラネルだ。頑張つてゴライアスを倒してくれい。

「俺はグライアスの足止めに行く、頼んだぞ（低音）」

「あ、ちょ……ありがとうございますっ!!」

よっし、あと一息。頑張つて終わらせませるかあ!

防衛戦の開始だ、と言つても俺のやる事があるかは怪しいが。とりあえず

「【モードチェンジ】ガンガンいこうぜ!」

クラツ

目に見える範囲の冒険者、およそ100名全員に全力で魔法を掛けたら、割と真面目に『マインドダウン精神疲弊』で倒れそうになった、流石に調子こき過ぎたね、うん。ポーシヨンないのに倒れたら何しに來ただお前つてなるし。

冒険者達の身体からは赤いオーラが立ち上り、かつこいい。気休め程度の効果かもしれないが、どうせなら使つてたほうがいい筈。心無しかモンスターを押ししてるような気がせんでもないし。

モンスター達は冒険者に任せて、グライアスにダメージを出せるヤツはグライアスを攻め立てる。魔導士は2度目の総攻撃を仕掛け、相当なダメージを与えていた。そこにリオンさんの打撃が加わり、グライアスは膝をつく。クラネルを無視する訳には行かないが、魔導士達の魔法も痛い。さらに1人でありながらダメージを与えてくるリオンさ

んの存在。ついでにアンドロメダ。ゴライアスはその身体に確かなダメージを蓄積させていた。

『――今は遠き森の空。無窮の夜天に鏤む無限の星々』

リオンさんが詠唱を始めた、どんなのだっけ、確か禁書の麦野みたいなやつ。

その身から立ち上る魔力に驚異を感じたのか、立ち上がりざまに攻撃を仕掛けるゴライアス。ヒヤツとしたが・・・危なげなく回避していく、流星はLv4、敵の攻撃を避けながらも攻撃を仕掛け、魔法の詠唱も途切れさせない。簡単には出来ない芸当だ。

「っし、俺も手を出しますかねー」

負けてはいられない、と気合を入れたんだけど・・・光の剣がゴライアスを突き刺し、再びゴライアスを地に沈める。驚きのその光景に思わず足を止めてしまった。

「そう言えば、重力魔法使ってたな。なんとか命さんが」

さて、正体も分かったし、確かそこまで長くは持たないはずだ。即座に追撃を・・・
「火月いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

「あああつづ!!」

ゴオン、ゴオオン・・・

熱いよ馬鹿!ヴェルフの馬鹿!私が攻撃してる途中でしようが!!リオンさんはさつと躲してたけど俺敏捷低いんだよおい!掠ったぐらいでよかったわ!

英雄の条件

「イベントバトル
強制戦闘!!」

咄嗟に……俺はスキルを発動していた。

（うっわ、やつちまったああああ！クラネルへの追撃は止められたけどっ!?俺が、絶対絶命いっつー!）

普通のゴライアスは、なんとか倒せた。でも、コイツは？潜在能力はLv5に届くらしい。俺の能力はダンまちで言うほどどれくらいだ？そして、人間的なLvと階層主のLvは違う。Lvがどんなものでも普通は1人で倒すものじゃない。

突如現れた壁にぶつかり、憎き兎への攻撃を中断させられたゴライアスは吼えた。壁を壊そうと打撃を加え、咆哮も飛ばし攻撃を仕掛ける。まあ割れない。

破壊を断念したゴライアスは、他の方法で突破しようと試みる、あたりを見渡すと……俺。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!』

「ファイアツ!」

魔法を唱えつつ全力で走り、タックルを回避する。未だクラネルの与えた傷は癒えて

おらず、恐らく魔力の底が見えてきたのだろう。右腕がなく、顔も右側は焼けただけ弱々しい赤い粒子が舞っているのみだ。

目が見えず、俺を見つけることの出来ないゴライアスから可能な限り離れ、咆哮のまぐれ当たりを防ぐ為に何重にもテリトリーを重ねがけし小規模な安全地帯を作成する。

「ステータス」

レイニー

レベル・1

力・D 568

耐久・SSS 1500

器用・G 210

敏捷・E 486

魔力 C 654

《魔法》

【作戦変更】

モルドナエンジ

・ガンガンいこうぜ

・いのちだいじに

・じゅもんをつかうな

《スキル》

フエイクヒーロー

【贖物英雄】

- ・ ステータスの追加
- ・ 不老

- ・ ストレージ

【万 物 商 店】

ジャックオフロールトレス

- ・ 商店の追加

イベントバトル

【強制戦闘】

- ・ 逃亡不可のフィールドを作る。
- ・ 戦闘続行不可能な状態か、降参の意思が認められた場合のみ解除

レイニー

Lv55

MP127

物攻2749

耐久2621

魔才1253

器用1199

敏捷1147

《特技》

- ・ 死守
- ・ 乱れ突き
- ・ 鬼神化
- ・ カウンター
- ・ 怪力
- ・ 騙し討ち

《魔法》

- ・ ファイア↓ファイアストーム↓ファイアブレス↓イグニス
- ・ スパーク↓サンダーストーム↓サンダーボルト
- ・ アイス↓ブリザード
- ・ ヒール↓リジェネーション
- ・ テリトリリー↓ゾーン

打開策・・・無くね？んんん、とりあえず・・・

「サンダーボルト！」

鉄の剣を飛ばしてみる、コツを掴んだためとりあえず身体のどこかには当たるとの

が・・・刺さり甘い、刺さるのは刺さるが貫通なんかはしないので魔石には届かないだろう。

爆弾は、数が限られているからここぞという時のみ使おう。

ええと・・・後は・・・

「とりあえず商店！あ、ファイア！」

目潰しを忘れる所だった。危ない危ない

で、商店だけど・・・何も無いな、まあそうだよな。

んで、ストレージ・・・っと

侍ハンド 器用+634 『武器攻撃時敵耐久63.4%カット(初撃)』

「コレだ！」

蜻蛉切 10000G 物攻+400 『敵耐久貫通ダメージ30%

アサシンマスク 9900G 耐久+50 物攻+100 『武器攻

撃時敵耐久15%カット(初撃)』

姿隠しの衣 15000G 『非視認時物攻+500』

侍ハンド 6340G 器用+634 『武器攻撃時敵耐久63.4%

カッタ（初撃）』

侍の腰当

6340G

器用+634

佐々木レッグ

3390G

器用+339

『敵敏捷33.9%カッタ』

ト』

《特技》

・死守

・乱れ突き

・武術 弱

・カウンター

・歩法

装備を変える際、顔は見られてしまったが仕方ない。装備は耐久ガン無視で一撃の威力に特化、外せば次は無いから自ずと接近戦となる。耐久ガン無視の状態で……

武術は武器のダメージ5%アップ？だった気がする

歩法は敏捷5%アップ

そして各種ステータス増強アイテムをば、体に力が溢れてるような……ないような。

準備は完了、希望も見え余裕が出来た俺は周りを見渡した。結界の中には暴れ回るゴライアスしかないが、外には此方をじっと見つめる無数の瞳があった。モンスターは

ゴライアスの声が聞こえなくなり撤退した様だ。

みんな混乱してるみたいだけでも、後でどう説明しようか。
リオンさんの困惑顔かわいい……。

「アレは……！」

神ヘルメスは、未知を目の当たりにしていた。弱すぎる魔法、強すぎる結界、無から有を生み出す、神の御業……とても1冒険者が起こしたとは思えない現象だ。

しかしヘルメスは、かの冒険者が何かを叫んだ瞬間ゴライアスの跳躍が中断され、目に見えぬ結界が出来た瞬間を目にしたし、魔導士の援護射撃が結界を超えて届かない以上あの弱々しい炎は冒険者が使っている魔法なのだろう。魔力の数値が異常に低いのだろうか、それにしてもこの結界の事が説明出来ない。いや、スキルなのか……？

最後に、創造だ。素材を加工し物を生み出す技術は数あれど、何も無いところから物を出すなど人間業ではない、神の力アルカナムを使用した所で、門外漢なら神ですらなし得ないものなのだ。

「彼の主神が何かしたのか？あるいは……彼自身が神なのか」

石へ槍を

『オオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

「いづつ!!?」

まさに背中を貫く直前、身の危険を感じたゴライアスは空中に衝撃波を飛ばした、踏ん張るものもないレイニーは為す術もなく弾き飛ばされ、絶好のチャンスを失った……

「マジかよっ!!?もうちよいだったのに……」

……いや、また挑戦すれば良いだけだ、幸いダメージは殆ど無かったし、アレも魔力を使う攻撃だからいつかは限界が来る。諦めるなっ!

とりあえず、

「ファイアー!」

残り僅かな魔力を燃焼させ、一気に視力を回復したゴライアス、これまで散々目を焼いてくれやがった俺への怒りを隠す事もせず一旦散にこちらへとかけて来た。だから、また目を潰そうとしたのだが……

「あれ、不発?」

『オオオオオオオオオオツツ!!』

レイニーは宙を舞った

ステイタスと騒ぎの前触れ

身体がバラバラになるかのような衝撃を受けた。当然だ、紙装甲なのだから。咄嗟に飛び上がったたりしてなんとかかんとかしようとしたけどちよつとぐらいは軽減出来たんだらうか。

魔法の不発の原因、考えるまでもない、MP切れだ。そう言えば準備の時に回復していなかったなあ、と今になって思い至る。準備全然完了してなかったわ。

ドスッ！

「ゴホッ」

地面に叩きつけられ、噎せる。しかし、倒れたままでいる訳には行かないので痺れるような痛みを発している身体を無理やり起こし、追撃に備えた。生まれて初めてこんな痛みを感じた、もしかしたら、ヒビとか入ってるのかな・・・

そう考えながらも、敵の単調な攻撃を避ける。武器の使用は出来ない。初撃に認定されてしまったら今度こそ太刀打ち出来なくなる。魔法も使えないが・・・

攻撃を喰らったのは上半身である為、足は問題なく動く。走ると骨に響いてズキズキと疼くが我慢しなければならない。

敵の攻撃は素早く、ストレージを開く暇を与えてくれない。どうすれば・・・相手は魔力が底をついて居るが、階層主だ。体力は人間とは比べ物にならない。

更に、俺のMPは自然回復しないのに比べ敵は時間が経つ事に回復していく。持久戦は俺の死を招く結果にしかない。

つくづく、何故スキルを使ってしまったのかと後悔した。

クソっ！敵から距離を取れさえすれば・・・

・・・そうか、コレだ！少しばかり覚悟は居るが・・・仕方が無い。まだ、行ける！

ゴライアスと向かい合い、機会を伺う、拳を躲し、踏み付けを避け、まだだ・・・

ゴライアスの鋭い蹴り、よしっ！

「うおおおおおおおっ！」

ゴスっ！

「ぎやああああああっ！」

痛いっ！分かってたけどっ！でも我慢してっ！

「ストレージ！」

ゴライアスから高速で遠ざかっていく中、落ち着いてストレージを開く。簡単な作戦だな。痛いけど。ストレージに入っていたポーション類を全て取り出し、辺りにばら撒かれるモノの幾つかを気合いで掴み取る。青が2つ、緑が2つ。

まって、緑ライフポジションかと思ったけどダンまちの方の奴やん、きかんやん。

2度の攻撃を受けた体はどこか折れてるんじゃないかという勢いで痛むが・・・幸い動く。大人しくマナポジションをのみ魔力を回復した。

「フアイア!」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ!!』

ゴライアスは再び、目を潰された。先程まで俺がいた場所へと飛びかかってくるが、なんとか移動していたのでダメージはない。しかし、隣をすり抜けていく巨体は見えていないとわかっていても肝を冷やすものだった。

重い体を引き摺りながらも途中撒き散らしたポジションを回収していく、ライフポジションおいしい・・・

怪我を癒し、MPを回復し、疲労は初めっから感じていなかったのでもうやく完全体だ。

しかし、もう痛いのは嫌だなあ・・・なんとか他の策を・・・せめてもう1人誰か居れば囿でもしてもらえるのに。丁寧に俺とゴライアスだけ巻き込みやがって。

・・・囿・・・

挑発人形 5000G

敵の攻撃は1度だけこの人形に向かう、使い捨て。

勝ったわこれ。

その日、絶体絶命かと思われた安全地帯の悲劇は、冒険者の勝利で幕を閉じた

レイニー

レベル・1↓1↓1

力・D 5 6 8 ↓C 6 2 3 ↓S 9 5 8

耐久・SSS 1 5 0 0 ↓SSS 1 5 0 0 ↓SSS 1 5 0 0

器用・G 2 1 0 ↓G 2 5 5 ↓E 4 5 8

敏捷・E 4 8 6 ↓D 5 3 2 ↓A 8 0 1

魔力 C 6 5 4 ↓C 6 6 5 ↓A 8 1 2

《魔法》

モードチェンジ

【作戦変更】

・ガンガンいこうぜ

・いのちだいじに

・じゅもんをつかうな

《スキル》

【フェイクヒーロー賈物英雄】

- ・ステータスの追加
- ・不老

・ストレージ
ジャックオラオールトレース
【ジャックオラオールトレース万物商店】

- ・商店の追加

【イェントバトル強制戦闘】

- ・逃亡不可のフィールドを作る。

・戦闘続行不可能な状態か、降参の意思が認められた場合のみ解除
《レイマンブライドNew》【レイマンブライド俗人矜恃】

- ・ステイタスに成長補正
- ・諦めない限り効果上昇
- ・見捨てぬ限り効果持続

レイニー

Lv69

MP1650

物攻3512

耐久 3 4 5 5

魔才 1 5 4 0

器用 1 4 7 0

敏捷 1 4 6 9

《特技》

・死守

・乱れ突き

・カウンター

・剛力

・見切り

・騙し討ち

《魔法》

・ファイア→ファイアストーム→ファイアブレス→イグニス

・スパーク→サンダーストーム→サンダーボルト→《New》ライトニング

・アイス→ブリザード

・ヒール→リジェネーション→《New》エクスヒール

・テリトリ→ゾーン

ステイタス説明

元の数値↓黒ゴライアス戦後の数値↓その後成長してからの今現在
見切り

ダメージ20%カット

この世界に来て、一番死を身近に感じたゴライアス戦を終え、俺は穏やかな日々を送っていた。あの後その場に居た冒険者の追及を避け、地上で神様やニナ達にしこたま叱られたり、生還祝いをしたり。更にちよつとだけリオンさんと仲良くなり、酒場でも話すぐらいの仲になったのだが・・・

「明日、夜の予定は空いていますか？」

「ダンジョン潜った後は何も無いですね」

「そうですか、今度クラネルさん達が火鉢亭という所で仲間のLvアップのお祝いをするそうです。レイニーさんにも改めてお礼を言いたいし、と伝言を頼まれたのですが・・・」

「あー・・・いや、俺人見知りする方なので、遠慮します」

こんな会話が あった、俺の記憶が正しいのならこの後『戦争遊戯』編に突入する筈だ、お祝いの席はそれの開幕戦。わざわざ騒ぎに自ら手を突っ込むことも無い。あそこで

は別に死にはしないし。

それにしても、戦争遊戯で勝てるのかな。ゴライアス戦の時、予想外にクラネルの戦鬪力は落ちていた。俺がいる事で様々な影響が出ているのだろう。原作ではクラネルはほとんどのイベントをその時のギリギリの能力値でクリアしてきた、その時よりステータスは下がり、相手は変わらないのだから厳しいだろう。ミノタウロスは倒していたから大丈夫だと思っていたが・・・

俺の出来ることと言えば絶対に壊れない鎧を支給したり壊れない剣を支給したりなんだけど、ヴェルフが居るからなあ。負けられない状況なら受け取ってくれるかな？あ、爆弾渡すか。

—————
次の日、俺はここ最近出番の無かったファミリアの面々に囲まれ、難題を突きつけられていた。

「発展アビリティ・・・」

「そろそろランクアップをしてもいい頃合いだろう。と言うか、やれ。全部MAXまで上げるとかアホなこと言うんじゃない」

ええ、だつて上げたんだよ・・・。

ゴライアスとの激戦を終えた俺の身体には、十分な偉業が蓄積されていたらしい。昇

華が可能だと帰還してからの最初の更新で言われていた。

しかし、新たに取得したスキル「俗人矜持」の効果により、クラネルみたいな勢いでは無いものの普通に見れば異常な勢いで能力が上昇したため、ランクアップをせずにギリギリまでステイタスを鍛えていたのだ。お陰で既に凄いな事になっている。でも器用がホントに上がらんね、うん。クラネルですらなしえなかつたALLSSSを目指していたのだが主神に止められた。

「あたしもLvアップしたい・・・」

ニナが、自分のステイタスが書かれた用紙を睨み、溜息をつく。

ニナ・アイリス

レベル・1↓1

力・D 506↓D 507

耐久・E 418↓E 418

器用・C 653↓C 691

敏捷・B 711↓B 715+801+@?／ 9+339

魔力・I 15↓H 103

魔法

〇

【

スキル

【追跡衝動】

- ・ 敏捷が早熟する
- ・ 対象の居場所を捕捉する
- ・ 対象者の敏捷の数字分所有者の敏捷に加算

なんか恐ろしいスキルを獲得していた。なんでも、俺が酒場から逃げる際に追いつけなかった事が悔しかったのと、魔法が欲しいと呟いてしまったばかりに本をしこたま読まされここから逃げ出したい、と考えていたらこういうスキルになったそう。ここ最近の特に走ったりしていないのに能力が上がっているらしい。対象者は3人までで、今は俺とリリを追跡している・・・。

それはいいんだけど俺のステータスの方の敏捷でバグってね？

「リリはてんでダメです・・・」

リリが、自分のステータスが書かれた紙を見つめ、溜息をつく。

リリルカ・アーデ

レベル・1

力・I 79 ↓I 88

耐久・H 111 ↓H 113

器用・G 221 ↓G 226

敏捷・F 332 ↓F 339

魔力・F 399 ↓E 412

自分で敵が倒せるようになり、前よりは良く上がっているようだが今までサポーターとして戦闘に参加せずにいたので元のステイタスが低く、先は長い。スキルも発現せず。

「まあ、俺も戻って来た事だし探索手伝うから頑張ろうな」

「・・・はい」

意気消沈、といった風なりり。本気でどうにかしてあげたいとは思ってる。

「そんな事よりお前は自分自身の発展アビリティについて考えろ、よくわからんものも、お前なら見当が付くのだろうか？」

神様がこの前からちよつと刺刺しいのはどうすればいいんだ？いや、心配かけて悪いとは思ってるけどさ。まあ時間に任せるしかないか。

そして、俺に選択肢が与えられた発展アビリティはこの通りだ

狩人

堅牢

逃走

模倣

まあ、模倣しか無いんですよ

「俺模倣でいいです」

「・・・大丈夫なんだな？」

「あい」

「・・・」

無言でステイタスを更新された。これで俺のレベルは2になり、ステイタスは全て0に。そして発展アビリティの欄に模倣が追加された。

期待してるけど・・・どんなものなんだろうかね。

6 卷

宴の前日

模倣の検証完了。よくあるその魔法やスキルの事を理解して、発動した場面を見なければならぬ系かと思ひ、よく知っているファイアボルトを使おうかと思つたが使えなかつた。アビリティが発現してから見なければ行けないのか、と思つたがリリのシンダー・エラーは使う事が出来た。

と言つても普通にやると獣耳を生やしたりする程度の効果しか出ず、全身を変えようと思えば魔力の五分の一ほどを持つていかれる。リりに聞くと、魔力はあまり使わない筈らしい。それなのにリリよりも魔力のステータスが高い俺がこんなに苦労するのは、体格差と言うのもあるかもしれないが恐らく、模倣だからだろう。付け焼き刃と言つてもいい。本来の効果よりも劣る形で魔法を使う事が出来るアビリティだ。

スキルは、ニナの物を模倣してみた。対象に出来るのは一人だけ、恐らく早熟の効果も劣化しているだろう。しかし強力なスキルだ。とりあえずニナを対象にしておいた。

「なんだか・・・恋人みたいだね／＼／＼」

とニナが言っていたが、恋人はお互いの居場所が分かるような特殊能力は持ち合わせ

ていない為、その考えは改めた方がいいと思う。GPSで監視し合ってる恋人とか怖い
わ。居ると思うけど。それ言った瞬間リリが無言で二ナをシバいてた。

結論、恐らく同じファミリアの者のスキル・魔法だけ模倣出来る。

—————

次の日、俺達メーティス・ファミリアの本拠地ホムにアポロン・ファミリア主催の宴への招待状が届いた。

ファミリア総出で机を囲み、緊急会議だ。4人しかおらんけど。

「メーティス様、アポロン様の所と仲がよかったですか？」

リリが、黙り込む神様に向けて問い掛けた。招待状の宛名を見てからずっとこの調子だ。神様はじつと招待状を見つめ、やがて重い口を開いた。

「そんな訳ないだろう、アイツほど気持ちの悪いやつを私は見た事がない」

アポロン・ファミリアの主神、アポロン。神々から『悲愛ファルス』と呼ばれる程深い、そして一方的な愛を持つ。狙った相手は地の果てまで追いかけて、それを手に入れるためなら何でもするそう。原作でもヘステア・ファミリアに『戦争遊戯ウオーゲーム』をしかけ、断られるとホームを襲撃し無理やりにも受けざるを得ない状況へと持って行ってた。

でもまあ、もう少し我慢すればギルドが何とかしてくれてたと思うんだけどなあ、我慢できないものだろうか？2人だけなんだし、ギルドに泊まるとか。

まあ置いていて。

「天界に居た頃からアイツの悪い噂は聞いていた、ある日私の所へ来て『見目麗しい知識の女神メーティスよ！貴方の辞書に私の事を記したい・・・』等と言いながら抱きつこうとしてきたのだ。ぶん殴ってやったわ」

キモツ。

他の2人も微妙な顔をする中、俺はとりあえず問い掛けた

「で、結局行かないんですか？」

「そういう訳にもいかない、正式に招待されたものだ。正式な理由が無ければ断った時に角が立つ」

面倒な事になってますなど、他人事の様を考えているが、行くとなれば随伴すべきは団長である俺だ。まあ、ぶつちや俺としてはどつちでもいいから良いんだけどね。万一こつちにとぼつちりが来ても正直どうにでも出来るような気がするしなあ・・・もしかしてまた調子乗ってるかな、いやでも、出来る、だろ？

「まあ、行くにしても行かないにしても、今後の為に服ぐらい買っておきましょう。メーティス様もレイニー様も、ロクに服を持っていませんし」

「・・・ん？」

—————

「うわ〜！この服可愛ー！」

「おいコラ、また迷子になる気か」

「この店は質が悪いですね・・・次の店に行きましょう」

「服など要らぬというのに・・・」

思い立ったら即行動。直ぐに準備をし、俺達メーティスフアミリアの面々は街の商店街へ買い物に来ていた。

ニナが入って数分で迷子になり、割と時間を取られたりしたが——居場所は分かっている、道が——俺がしっかりと見張っているので2度目は起きていない。

リリはしっかりと服を見るが、質と値段の兼ね合いで納得いく物がないようだ。

神様はブツブツ言ってる、同じ服三枚しか持ってないアンタが悪い。

え？俺？二種類を三枚ずつ持つてるから同じにすんなよな。

だつて要らないじゃん？前世じゃ学校以外でまず外にでないし、出てもオシャレなんかしなくていいじゃん服高いし。ここに来てからはゲームもラノベも無いから外に出ないし、ダンジョンにオシャレして行くわけないから余計要らね。と言うか宴とかに行くならタキシードでいいじゃん、どうせ真っ黒だしどれでも変わらんでしょう。

「ここはいい感じですね、デザインも新しいですし」

まだ話してたのに、リリが立ち止まった建物は、確かにオシャレな服が並ぶ店であつ

た。興味はなくともセンスがない訳では無いので（当社比）デザインの善し悪し位はわかる。質は知らん。

店はスクナヒコナ ・ ファミリアという所が出しているようだ。日本の神様かね？
ここでは極東か。

「値段もお手頃ですし、ここで買いませうか。とりあえず自由時間です、幾つか自分が気に入った物を持ってここに集まりましょう。時間は30分ほどで」

「長くないか？10分でいいだろ」

俺が余りに無駄に思えるその時間に物申すと、はあー、つと深い溜息を付かれた、4人に。あん？4人って・・・

「分かってない、分かってないわアンタ」

そう非難してくる少女の顔に、全く見覚えはない。赤毛で釣り目、勝気な雰囲気を出しているスレンダーな少女だった。

「いや、誰だよ」

「この店員だけど」

いつの間に・・・、てかなんで他人の会話にさりげなく潜り込んで来るんだよ。長いだろ30分は、妥協して15分だよ。

「その顔は心の中で文句言ってる顔ね。いい？女の買い物は長いものなの、30分って

言ってるのも気を使つての事よ。本音を言えば1時間2時間は居てもいいぐらいだと思うわ」

「まあ・・・そうですね」

「うん、そうだね」

「ああ、そうだ」

「アンタ一番乗り気じゃなかっただろうがオイ」

まさかの総攻撃に思わず口調が乱れる、少し前までのブツブツ言つてたアンタはどこいったんだよ。俺を非難できる機会があればお構い無しか。

「私自身に服への興味は無いが、それでも買物をする事の楽しさ位は分かる。それに共感の声を上げただけだ」

ぐぬぬ・・・、まさかものぐさな神様が敵に回るとは・・・同志だと思つていたのに。まあ・・・ゲームを物色している時の気分が女にもあるつて考えたら仕方ないか・・・。待つてりやいいんだらう？

「悪かった、買物物の時間なんて人それぞれだよな」

「分かればいいの、さ、早く服を選びましょう？店員として、お手伝いします」

最後は丁寧語に変え、笑顔も付けて接客モードになった様だ。最初からそれで来なさいよ。

「お客様、モノは宜しいのですから少しオシヤレをするだけで意中の女性に好印象を与えられると思いますよ？」

適当に1着外着を買い、ついでに安い黒の燕尾服？を買って残りはどう時間を潰そうかと考えていた俺に、先程の態度を見てからだど鳥肌の立つような猫被りを見せる例の店員が語り掛けてきた。

モノはいい？はて、俺は至極普通のモブ顔で・・・と答えかけたが、良く考えれば俺は中々のイケメンになっている筈だった。こちらに来て、水溜まりで顔を確認して以降中々鏡をお目にかかる機会が無かったので自分の容姿には無頓着だったのだ。

店に備えてあつた鏡を意識して見つめると、そこにはエルフにだって劣らないんじゃないかなんてことさえ思えてくるようなイケメンが、俺イケメンだったんだ。

盲点だった、リオンさんとどう仲良くなるうかと常日頃考えていたが、オシヤレか。イケメンにオシヤレと言えば鬼に金棒と同義。

男嫌いな女でもイケメンにかかれば落とせない訳はない・・・っ！

問題といえば中身が伴っていないと言う所だろうか。しかしまあ、

「とっておきの服を、1つぐらいいは買っておこうかな・・・」

「毎度ありー」

今日の購入品

黒の燕尾服・Tシャツもどき。スニーカー・黒のデニムパンツ・シャツ・ブラウス・グ
レーのスウェット・腕時計・バックパック・スニーカー・靴下

21万9000ヴァリス

なんだか騙されたような気がするが、まあ大した出費では無い。

「レイニー様、何故服飾店で時計を？」

知らん

キマシタワー

こんな夢を見た。(夢十夜感)

『攻城戦だど!?城にどうやって入れば……』

「リリが居なきや入れねえっ!」

暗い部屋の中で、俺は夢から目が覚めた。最悪の目覚めだ。また、原作乖離?

そろそろリリが関わる事もないわー、戦争遊戯でも戦ってなかつたし、寧ろ攫われるシーンないから楽しじゃね?クラネル達。なんてこと思ってたら半端ないくらい重要な感じだったわっ!

まじかーまじかあ……、どうしたらいいんかね?

「神様や、アポロンファミリアの『宴』、絶対参加しましょう」

朝、ファミリアの面々が集まるリビングにて早々に進言する、とりあえず戦争遊戯編の開始を、この目で確認したい。もしかしたら何やかんや原作乖離があつてクラネル達喧嘩してないかもしれんし……(願望)

と、思い神様へ伝えたのだが、怪訝な顔でこう問われる

「何故だ？ お前も昨日まで参加したがっていた訳ではないだろうに」

当然の疑問だ、そしてこれに対する有効な返答を俺は持ち合わせていない

「いやなんか、やっぱ良い経験になるかなとか」

これで行けない・・・？無理？

あまりに薄い俺の答えに神様は少し疑問を抱いた様だが

「良い経験・・・？まあ、もとよりそこまで嫌がっていた訳では無いし、お前が行きたい

と言うのならかまわんが」

よっし、第1関門は完了。

「少し調べたら、アポロン様というのは美しい者に目がないそうです。レイニー様はその・・・お顔が宜しいのですから気をつけて下さいねっ」

と、リリには警告を貰い。

「美味しいものいっぱい食べれるなんていいなあ」

ニナはクソ呑気な事言ってた。

――
宴当日、この前購入したばかりの服へと袖を通し、俺と神様は会場に入場した。

「凄い人数ですね、アポロン様は交友関係が広いのか・・・」

「悪ガキ共を束ねるお山の大将と言う程度だがな。真にアイツと仲の良い神など殆ど居らんよ」

中々に辛辣、まあ、そんな感じするね。なんかちよつと嫌な顔してる神様多いもん。「そう言えば、神様と仲のいい神様つて居るんですか？話してるとの聞いたことないんですが」

ふと、疑問に思ったので、特に考えもせず口に出す。

「・・・」

黙り込む神様、あ、ボツチなんですな把握です

「おい、勘違いするな。居るには居るが、最近は交流が無かったから悩んでいただけだ」「ちなみに何人ほど？」

・・・すつと立ち上がる三本の指、3人とかクソワロタ。

顔に出ていたのか、憤慨した神様に小突かれながら会場を進む、コレからの事を考え、緊張していたのだからいつもの調子のやり取りを少し笑みも漏れていた。直ぐに引き攣ることになったが。

前方に見える小集団、白髪の人間族ヒューマンにチビ巨乳の人物、黒髪の男女コンビと隻眼の女、最後にイケメンと獣人のコンビ。

(原作キャラグループやん)

「神様、あつちにいきま」

「おお、ミアハではないか。久しぶりだな」

神様アアアアつ！接触せんでいいわつ！大人しくしてようぜツ!?

「おお、メーティスか、元氣そうだな、なによりだ」

・・・あのグループの中で、わざわざミアハ様に絞つて声を掛けたということは数少ない友人の一人なのか？なんて偶然だよ、ミアハ様なんか女に刺されてしまえばいいに。

「おお、その眷属は・・・そなたの子だったのか」

「む？知っているのか？」

「最近、よく私のファミリアを訪れてくれてな、助かっている」

んんん、世の中は狭いもんだなオイ。俺の傍観作戦が水の泡だよ。

「ーやあやあ、集まっているようだね！オレも混ぜてくれよ！ん？その子は・・・
殺戮者君じゃないか！」

スレイヤー・・・？俺の2つ名？怖。

なんでも、森での虐殺や、ゴライアスさえも殺したその姿から、殺戮者と。Lvアツプの時の2つ名の最有力候補らしい。まあ、恥ずかしい名前でもないしいいか。

人も増え、各々が好き勝手に話している中俺は孤立していた、クラネルは眷属の女の

子に囲まれて楽しそうだし、神々の間に割り入る勇氣はない。自ずと肩身が狭くなり、箸で豪華な食事をパクついていた。

「やあ、レイニー君、だったかな？」

声をかけられ、振り向いてみるとそこには一柱の女神が居た。神ヘステイア、主人公であるベル・クラネルの主神で、たしか寵の女神だったかな？ ネットで見た時、オリュンポス十二神に入ってた。さり氣に凄そうな神だけど逸話が大きいから有名じゃない。

「む、失礼な事を考えていないかい？」

「いえ、滅相もない、して、私に何か御用でしょうか？」

食事を止め、そう尋ねると、ヘステイア様は咳払いを一つ入れてから

「いや、用ってほどのものじゃないさ。うちのベル君を助けてくれたと聞いて、お礼にね。・・・本当にありがとう」

と、綺麗なお辞儀をして俺に感謝の言葉を伝えた。

「い、いえいえ！人間として当然の事をしたまでです。どうか頭を上げてくださいっ」

神に頭を下げさせたなんて、無駄に目立つ要因だ、幸い直ぐに頭を上げてくれた。

「ボクに出来ることなんてたかが知れてるし、貧乏だからろくにお礼の品も渡せないけどこの恩は必ず返す。困った事があつたら言ってくれよ？」

そう言い、ヘステイア様は食事に飛び付いた。イイハナシダツタナー

「恋愛に熱い神、つてことさ。なあ、ヘステイア？」

「知らないよっ！」

原作で見た覚えもある言葉の掛け合いを聞きながら、俺はさっきのお礼の事について考えていた。

（ありがとう・・・か）

二ナとか、リリとか。ゴライアス戦の時の冒険者達やあのリオンさんにも幾度となく言われて来たその言葉。そのどれよりも心のこもった感謝の言葉だった。自分の力じゃなくて、与えられた物だけ。人を救って来たんだなって実感が湧いてきた。しかし、思いがけず温かい気持ちになった俺の心を冷やす出来事が起こった。

「おっと・・・大物の登場だ」

その言葉に釣られ、入口に目をやると。猪人の巨人を連れた目を見張るような美女が姿を見せた。

都市最強のレベル7冒険者、オツタルと、その主神であるフレイヤである。

見るものを神人問わず魅了すると言われるその『美の女神』を直視するも・・・俺はなんの感慨も覚えなかった。

ダンジョンでヘステイア様の神威解放を見た時も、特に畏れを感じなかったし。俺は

頭を打って死んだ際に感情の一部を欠落でもしたのだろうか。正直、様付けなくもいいかなと思う程度には神に対して特別な想いを持っていない。メーティス様は主神だし一応敬意を払うけどね。

辺りを見渡すと、呆然とフレイヤに視線を向ける眷属の多い事。何人かは務めて視線を外し、自衛策を取っているようだ。つまり、見てしまえば魅了される危険性があるという事だろう。

神にも目を向けると、呆然とする程ではないが目が離せなくなっているようで、多くの男神がフレイヤの元へと駆け寄る。詰め寄られるフレイヤは、しかし艶やかな笑みでそれをかわし、こちらへと歩み寄ってきた。

「来ていたのね、ヘスティア。それにヘファイストスも。神会以来かしら？ 貴方は…メーティス、だったかしら？」

「ああ、初めまして、だな」

「どうやら、面識のない2人だったようだ、フレイヤはそのまま男神に視線を向け、俺の所で少し止まる、止まると言っても本当に少しで、次の瞬間にはクラネルへと足を向けていた。」

「…今夜、私に夢を見させてくれないかしら？」

「…見せるかア!!」

ヘステイア様が間に飛び込み、クラネルを守るように後ろへと送る。そして反転し、いかにフレイヤが危険であるかを指導しているようだ。

「あら、残念」

と、全く残念そうでない微笑みをたたえながらフレイヤは続ける

「ヘステイアの機嫌を損ねてしまったようだし、もう行くわ。それじゃあ」

そう言い、どこかへ向かおうとするフレイヤはしかし、立ち止まり。思い出したように俺の元へと。そして俺にしか聞こえないように・・・

「気持ちの悪い・・・体だけ成長した子供みたい。あまりあの子の邪魔をしないでね・・・？」

打倒フレイヤ（※アポロン）

・・・その後、アポロンは忠実通りヘステイア・ファミリアへ『戦争遊戯』を申し込み、断られていた。恐らく明日からはクラネル達は怒涛の襲撃に見舞われるだろうが、死にはしない。そこでは手を出さないでおく。

俺はもう全力であのクソババアに嫌がらせをしてやることにした。別にクラネルを殺すとまでは言わないがこうなりや至る所でクラネルのイベントに参加してやる。ウザインだよなんでも分かりますみたいな雰囲気出しやがってよ。人の事デイスってんじやねえぞコラ。原作の時からおまえが1番嫌いだっただよ！なんでも思い通りに行くと思うなよコラ！レベル7が自分に心酔してるからって調子こいてんじやねえよババア！お前よりニナの方が100倍綺麗だわ！

レベル7がなんぼのもんじやい、こっちは69レベルやぞ！

—————

ヘステイア・ファミリアは原作通り襲撃にあつたようだ。そしてアポロンへと受諾の意思を伝えた。町中お祭り騒ぎだ。それに合わせ、俺は行動に移る。

『貴方キズの刻印は私のもの。私の刻印キズは私のもの『シンダー・エラ』』

イメージするのは、前世のヤンチー。金髪と鋭い目付き、やたらついてる筋肉。威圧感満載でとても元の優男な感じの俺には結び付かないだろう。

そう、俺はこれで全くの別人としてヘステイア・ファミリアに助っ人として飛び入り参加する。

怪しまれるだろう、しかし変身魔法と言うのは希少な魔法だ。原作ではリリのもの以外に変身のへの字も出ていないし、この魔法はステイタスも書き換えられる。勿論能力が変わる訳では無いが・・・、ヘステイア・ファミリアの面々に事情を説明し、ステイタスをコピーらせて貰って数値をちよちよいと入れ替えれば見た目上は完全にヘステイア・ファミリアの冒険者だ。

何処から足が着くか分からないので、路地裏で変身し別の場所からそこを出る。

「ちわー」

「はい、どちら様で・・・ヒッ」

ヒッって言ったな、ちつちやい声で。

本拠地である教会に赴くと、本来教会があったであろう上の建物は全て崩落していた。瓦礫をどかしているピンク髪の女の子が居たので声を掛けてみる。

「すみません、ヘステイア様はいらっしゃいますか？」

「ええつと・・・なんの御用でしょうか・・・」

明らかに怯えながらも、俺の存外に丁寧な口調に対し困惑を覚えている少女。当たり前だよなあ・・・

「怯えさせてしまい、申し訳ない。俺は入団希望のものです。怪しまれるのも当然ですが、どうかお目通りをお願いします」

少女は、入団希望・・・？と、訝しげに俺を見つめる。普通なら、今この状態のヘステイアファミリアに入団したがるものなど居るはずもないだろう。明らかかな上位ファミリアに睨まれている状態なのだから。

「・・・話をしてみます」

とりあえず、そう言い瓦礫の仲にある入口から地下へと入っていく少女。そう言えば、あの少女もイレギュラーなんだよな。もしかすると俺がいる事によってクラネルの冒険の遂行を危うんだ世界がもたらした救済策なのかな、そうならば俺は必要ないのかもしれない。

しかし！あのババアに一泡吹かしてやる為にはクラネルの周りにいる事は最低条件なのだ！足を引っ張りほしくないものの、クラネルの成長イベントを手伝うという名目の元自分自身で消化し、この凡人筆頭の俺が英雄を越える存在になってやるよ！

熱い想いを滾らせながら待っていると、地下室から少女が顔を出し、ちよいちよい、と

手招きをして来た。

「さて、ボクのアミアリアに入りたいという事だったけど……君はどこかのスパイかなにかかい？」

「違います」

神に嘘は付けない、俺はそれを知っているため正直に質問に答えていく。狭い地下室の中に尋問のように座らせられている俺、疑われる事は重々承知である。幾つか続いた質問が尽き、神様がどうしたものかと悩んでいるタイミングで、正体を打ち明ける。

「実は俺、この前の宴の時に居た殺戮者スレイヤーなんですすよね」

「……ん？」

「なんだよお！そんな作戦があるのなら先に言ってくれば良いのに！」

俺の作戦は、随分あっさりを受け入れられた。万一バレればペナルティは免れないこの作戦は、クラネルが負けて奪われるより遥かにマシらしい。原作では『君なら出来る』と言っていたハステイア様も、発破かけただけで実は現実を見ていたのだろうか。

「それでね、ステイタスの件なんだけど……ベル君は暫く戻ってくる予定が無いんだよね」

んー、そう・・・だったかな？付きつきりで修行する、って描写があつた気がする。
「でね、もう一人の眷属君もちよつと忙しくて・・・ここに居る、エマ君のステイタスを
コピーして貰えるかな」

期せずして名前を知る事が出来た、エマと言うのか。フリゲでも、ダンまちでも聞いた覚えのない名前だが・・・

「は、はい・・・」

そう返事をした少女は俺に背をむけ、躊躇いながらも服に手をかけ

「待てやオイ！」

「うひゃあ！な、なんだいスレイヤー君！今の君はとても怖いんだから凄まじいでくれよ！」

それは悪いと思ったが、そんな事はどうでもいい。なんで服脱ぐんだよ、隣で紙なりなんなりに書き移せばいい話だろう？

「ハッ！確かに！」

いそいそと部屋を移す主従を見て、コイツらに未来の英雄を任せて大丈夫なのか、と思つた。

エマ・フローレス

レベル

1

力

D 538

耐久

D 501

器用

I 0

敏捷

G 275

魔力

F 323

《魔法》

【ブレイクフルドール】

・広域速攻攻撃魔法

・魔力吸収

・範囲・効果は所有者の魔力依存

《スキル》

【勇敢気質】

・力・耐久・敏捷に高補正

・感情の昂りによって効果上昇

【逆境強化】

・ダメージを負うたび力・耐久に補正。

・詠唱半節省略

ヘステイア様は、俺にヒエログリフが読める筈もない、そう考えたのだろう。特に何を言う訳でもなく丸写しされたステイタスの紙を渡してきた。しかし、この世界でヒエログリフと呼ばれているものの大半はカタカナ、ひらがなのだ。癖がすごくてイマイチ分からないところもあつたがこんな感じだろう。

何処の主人公だと。

能力が完全に主人公級、スキルは特別とまでは言わないが役に立つ強スキル、魔法は多分レア魔法だ。

そもそもクラネル以外で魔法・スキルをレベル1の時点で発現するのは珍しかったはず。

それから考えると・・・俺みたいな転生者か、現地主人公の類い・・・？

まあ、良いか。レベルを3にし、スキルや魔法は勉強を重ねた者でも読むことが難しいとか書かれていたので適当に書いておく。

「ふむ・・・凄いな魔法だね、それじゃあ、戦争遊戯の際は頼んだよ。まあ、戦いの内容によつては参加してもらわなくても大丈夫かも知れないけどね」

ああ、そう言えば原作とは色々違うんだし、攻城戦じゃない事も十分有り得るな。（フラグ）

モーキス・アングリー（偽名）、ヘステイアファミリアに（偽装）入団。

そして後日、ヘルメスの野郎は数有る戦闘方法の中から無事攻城戦を引き当てましたとき、コレアイツがなんやかんや仕組んでた説あんどオイ。

始まる英雄譚

ファミリアには何も伝えていない。止められる可能性があるから。まあ、事前に数日留守をする旨を伝えてあるし、なにより戦争遊戯の様子はオラリオ中で放送されるので勘のいいウチのメンバーにはバレると思うが。俺の戦闘を見た事のあるメンバーはロキ・ファミリア幹部とヘルメスとアンドロメダ。そして、失礼な言い方だが名前も知らない有象無象の冒険者達だ。ストレージを使わず、更に武器を変えていけば俺に結びつくものは無い、ハズだ。

新たな武器に慣れるためにダンジョンへ潜り。全てのステータスは30位上がった、ステータスは上がらず、まあ誤差だ。

俺の今の装備は

ユグドラシルの杖	150000G	魔才+1400	魔防+800	MP+4
00 『魔法ダメージ30%アップ』『固有魔法：プロミネンスフレア』				
賢者のサークレット	100000G	魔才+900	魔防+300	MP+
200				
賢者のローブ	100000G	魔才+200	魔防+500	耐久+200

『魔法ダメージ100%カット』

賢者の靴

100000G

魔才+300

魔防+200

耐久+100

『浮

遊』

賢者系アクセサリー×5

+1000MP

そう、魔法使い。威圧感満載の見た目にしたのはいいのだが、ゴライアスの時ガンガン前衛で戦ってたし、魔法使いで行けばもう絶対バレなくね？と思いきや適当に魔法使いふうな装備にした。割とデカイ出費。確か魔法使いのほぼ最終装備だった筈。ユグドラシルの杖の効果であるプロミネンスフレアは消費MP300と言うかなりの化け物魔法。威力はイグニスとは比べ物にならず、更に全体攻撃。ついでに素のダメージ+火傷でよりダメージを出す。めっちゃ強いと思われるかも知れないが撃つと一ターン休み、そしてヘイトを貯めて紙装甲のおかげでお亡くなりになられるのだ。

俺耐久だけは飛び抜けてるし大丈夫だろうとは思う。

クラネルは昨日ぐらいい戻って来た、クラネル、実は俺が鎧の冒険者だって知らなかったようで大層驚き、感謝の旨を伝えてきた。いえいえ。

クラネルが来たからにはいいよいよ会場へと向かうのみだ。あとついでにヴェルフにも挨拶はした。

原作通りな部分は、攻城戦である事、助っ人としてリオンさんが来ているということ、

2本の魔剣、ヴェルフ・命兩名の加入。こんな所だな。

違っている部分は、リリの不在、エマという新キャラの存在。そして俺。

リリの不在により、原作とは違い情報で敵の動きを誘導する事が出来ず、門を開ける事も不可能だ。自然と、正面から戦う流れになっていた。

0 (: 3) < (, 3) <

まあ、そうは言っても負けはしないだろう。クラネルが一騎打ちに敗れた所で、こちらの敗北ではないしあのクソ女神を喜ばせる意味も無いので俺がサクツとヒュアキントスを倒してやろう。多分レベル4位の能力はあるし行けるだろ。

—————

無事会場入り、そしてさほど時間もかけずに、オラリオ中から待ち望まれる『戦争遊戯』が開催されようとしていた。

「作戦を確認します・・・と言っても、時間をかけて城壁を削って侵入するだけですけど・・・」

そう、城門を中から開けない以上原作のような陽動からの城内侵入、そして短期決戦で片をつけると言うやり方は使うことが出来ない。よって、城壁に修復不可能な程の損害を与え正面から全員叩き潰してやろうという考えだ。

相手の戦力は大半がレベル2ではあるものの、正直印象に残らないモブだ。クラネル

『魔法』の威力、そして射程距離はまず詠唱文の長さに比例する。元々城壁はとても奥行きがあり、分厚く、生半可な短文詠唱級を何発叩き込もうがまず崩れない。警戒すべきは発散される魔力が探知しやすい長文詠唱のみだ。

迂闊に近付いてくれば矢の雨を降らせ、遠方でちんたら詠唱して来たのなら狙撃してやる、と青年は豪語する。

得意げに交わされる二人の会話に、雑用を押し付けられたルアンは「けつ」とグレる。その時だった。

(アレンジ)

振り返った彼の目に、ある光景が飛び込んでくる。

北側、城砦正面、荒野の中央を静かに歩んでくる……いかにも魔法使い然とした風体の人間と、全身をマントで覆った、謎の人物。

「おっ、おいつ」

「なんだ……?」

奇怪な格好をした2人だった。今どき珍しい位の全身を覆う黒ローブ、古めかしい木を素材にした杖。もう1人はフード付きケープの上からマントを羽織り、その正体は伺いしれない。

まず間違いなく敵だろう、そして敵は城門から遙か遠く、500メドルは下らない場

所で立ち止まった。

何をするつもりなのか、魔力は感じないし、そんな所から魔法が届くはずも無い。よしんば届くにしても短文の長距離魔法が如何程の威力を發揮すると言うのか・・・

「アイツら、ヤケになったんじゃないのか？」

「もしくは、相当なチキンなんだな！」

ハハハハツ！意味不明な行動をする敵を嘲笑い、緊張感を解いていく見張りの二人。それを見ながら、ルアンはとてつもない不安に襲われていた。

（本当に・・・やけっぱちなのか？）

ルアンは、ジリジリと城への入り口に後退していく。

「おいルアン、どこ行くんだよ」

「ビビってんじゃねえよな？」

二人の居る見張り台が、何故だか処刑場に見えてくる。止まらない不安はルアンを絶え間なく襲い、そしてそれを目にしてしまった。

「うわあああああ!!？」

脇目も降らず、逃走、それを見た2人はあいつは頭がおかしくなったのか？そんな事を話す。そして、

空から落ちてきた太陽に呑み込まれた。

「何だ今のおおおおおおおおお——ッ!?」

バベルは絶叫に包まれた（1回目）

「……凄い威力ですね」

「見掛けだけですよ、身体クソ痛いし」

此処から見える城壁は、一部が消失していた。焼失ではなく、消失。魔才特化でもないのでこの威力は恐ろしい限りだ。しかしながら放つと同時に身体に莫大な負荷がかり、耐えられないほどではない無きものの1発ぶん殴られた程度の痛みが全身に走る。もっとわかりやすく言うと強化ゴライアスの一撃より少し弱い位。レベル低い時に放つたらワンチャン死んだ説ある。

「移動しますよ」

「ええ」

場所を移し、準備をする。そして小っ恥ずかしい限りだが詠唱付きでの魔法行使。

「紅き黒炎、万界の王。天地の法を敷衍すれど、我は万象昇温の理。崩壊破壊の別名なり。永劫の鉄槌は我がもとに下れ！エクस्प……ロミネンスフレア！」

め〇ぐみんとか言っではいけない、無詠唱で魔法を使うとなると、それも俺に繋がる

一因と成りかねないのでこの○すばにハマってた時に頑張って覚えた爆裂魔法の詠唱文を流用する。勿論威力などにはなんの影響もない。

慌てて敵が矢を放つものの、500メートル離れてるんだ、届くはずも無い。RPGだと敵がやたら大きい数百メートル級の場合もあるので、それに致命傷を与える為には長射程高威力の魔法が必要なのだ、かなり遠くまで届く。

パラパラと、敵が城から飛び出して来た、誰かが指示をしているのか、纏めて倒されないように部隊を分けて迫ってくる。20人ほどだろうか。

他の魔法はバレたら事なので使えない、俺がこの『戦争遊戯』の間に使えるのはこの威力過剰な爆裂擬きと素のステータスのみ。レベル2とかの奴にこれ使ったら即死だよ。壁にいた奴も足場崩しただけだし死んでない。

「んじゃすみません、頼みました」

「ええ、任せて下さい」

俺はその場から離れ、特殊効果である『浮遊』を使い素早く別の場所へと移動する。攻城戦1日目の戦果、敵攻撃部隊32名の捕虜と、城壁の完全破壊。

それは残像・・・では無い

「半端ねえな、お前の魔法」

赤毛の鍛冶師、ヴェルフ・クロツゾがそう語り掛けてくる。威力、範囲共にクロツゾの魔剣の方が上なのであまり嬉しくない。

「それじゃあ、僕達は見張りをして敵襲に備えましょう」

俺・クラネル・ヴェルフが前半の見張り。残りの女子が後半の見張りだ。未だ城には80人近くの冒険者が残っており、その内の幾らかを索敵に回すことは充分に考えられる。

「それにしても、なんでレ・・・あー・・・」

「モーキス」

「ああ、そうそう。モーキスさんは僕達に協力してくれるんですか？」

森の中を注意深く見つめながらも、クラネルがそう尋ねてきた。

当然の疑問だな。そして毎度のように質問に対する適切な回答を持ち合わせて居ない。

「・・・強い奴と戦いたいからかな」

「おお・・・」

「戦闘マニアなのかあんた・・・」

俺の評価が戦闘狂で固定された気がする。

――――
2日目開始、既に城壁は無く、申し訳程度に入り口に物が置かれ侵入を防ぐバリケードとなっている。

「光に覆われし漆黒よ。夜を纏いし爆炎よ。紅魔の名のもとに原初の崩壊を顕現す。終焉の・・・もうこつち来て一年弱だ、忘れた！プロミネンスフレア！」

関係無く吹き飛ばす、門ごと吹き飛び、城の中が良く見える・・・。

Foo→気持ちいいく

外に出ても、捕えられるだけだと分かっているので籠城を決め込んでいるようだ、矢が飛んですらこない。位置を移動し、午前の内に全ての門を消し飛ばした。最初に飛ばした門へ向かうと少しでも侵入を防ごうと冒険者達が涙ぐましい迄に努力しているが、遠くに俺が見えた瞬間脱兎の如く逃げ出した。

「頃合いだな」

拠点に戻り、既に城の防衛能力はなくなつたと伝える。なんか、微妙な顔をしているが勝てりやいいだろう。本当はもう外から城を完全にぶっ壊してやればいいかなと

「なんなのだあの冒険者は!？」

また、ヒュアキントス団長様がお怒りになっている。城の城壁は敵の常識外れな魔法によりその姿を消し、今日は門さえも無くなってしまったのだから、その怒りも最もだと思う。

部隊長格で集まり、王の間でこの状況を打破する為の意見を出し合おう。そう言つて集められた私達は昨日から城を襲つていた衝撃を再び感じ取り、今度は門を壊された事を知つた。

「敵は我らが痺れを切らして城から出てくるのを待っているのではないか?」

「それは無いだろう、その気になれば城すら吹き飛ばせるような奴らだぞ・・・」

「何故このような事に・・・」

私は言ったのに、夢で見た。でも誰も信じてくれない。

私も最初は信じられなかった、太陽が、太陽に飲み込まれるなんて。

でも現実として、ソレは現れた。落ちてきた太陽は、今私達アポロンファミリアを敗北へと導こうとしている・・・。

沈黙が支配する王の間に、少女の声が響く

「・・・死なない限り何でもしていいの?」

私達の視線はその少女、ダフネへと向けられる。団長様は・・・

「・・・やってみせろ」

「なんか嫌な予感するから俺が先に入るわ」

他の面々が城の各所で陽動に動いている中、俺とクラネルは王の間へと足を進めていた。原作通りならそこにいるはず。そして、そこに繋がる唯一の通路に入る前、俺の身体を言いしれない悪寒が襲ったのでクラネルに離れてもらい、単身通路へと突入する。怖いのでリジエネもかけ、一応準備万端。

「撃て」

ドドドオーンチュインチュインバリツチュバリツゴオオオオツ!!
ヒュウウンガツガツガツ!

「俺が何したって言うんだアアアアア!痛いヤバいつ!」

扉を開けた瞬間、各種魔法に矢の雨が俺を集中攻撃して来た。魔力をたつぷり込められているのだろうその魔法は俺の乏しい魔防を貫通しダメージを与えてくる、かと思われたが破壊不可能なローブに阻まれ、物理的衝撃以外はなんの痛みも無かった。魔法使い装備のせいで耐久が下がっているため矢の衝撃が痛い、野球ボールぶつけられたぐらい。

顔も両腕で庇っている、被害と言えば両手が火傷と霜焼けになり身体に雷のせいで痺れが残っているぐらいだろうか。ソレも少しして回復された。

「これで倒せないの!?! 化け物め……!」

酷い、スレンダーな美少女に嫌な目で睨まれた。レベル高い奴はみんな化け物だろうよオ!

「残念だが、コレぐらいで死んでやる訳には行かないな。痛い目を見たくなければ大人しく道を譲って貰おうか」

地道な演技でモーキスIIレイニーとならないように努力する。意識して高圧的なセリフを吐いた俺に、少女は笑う。

「ハハッ、幾らレベルが高いからって、魔法使いがこの人数に勝てるだけでも? 詠唱する隙も与えないわよ」

そう言う彼女の周りには、先程の俺の耐久力を見て及び腰ながらも20人ほどの冒険者達が、恐らくレベル2。

ジリジリと包囲網を敷いてくるその冒険者の1人に、杖を投げつける。
ゴツツツ!

目にも止まらぬ加速をみせ、杖は冒険者を吹き飛ばす。壁に叩き付けられ、一撃で昏倒したその冒険者。辺りは沈黙に包まれた。

「悪いな、接近戦も得意なんだ」

そう言つてローブを脱ぎ捨てる(特に意味は無い)。中から現れたのは泣く子も黙る

日本製のヤンチーさん。見るからに力の強そうなキン肉マンの登場に、少女は少し涙目になりながらも呟く。

「アンタら、全力でかかれー！ー！」

「ほら、先に行つてろ」

「ア、ハイ」

あの人は本当になんなんだろう、倒した冒険者を縛りながら先を促すレイニーを見て、ベルはそんな事を考えた。男の冒険者は容赦なく殴り飛ばすが、女の冒険者は優しく拘束するその姿を見る限りフェミニストなんだろうか。人となりはいいと思うけど、自己申告によれば戦闘狂らしいからいつ目をつけられるのかとひやひやしていたり。

とんでもない魔法を使うのに、全然近接戦闘もこなす事が出来て。アイズさんやテイオネさんにも負けないぐらい強いと思う、とんでもない事だ。何故だか僕の事を気にかけてくれてるみたいで、2度も命懸けで助けられた事がある。見たことのない能力も持つていて・・・結局よくわからないんだ。

・・・まあ、今回もこうして助けてくれているし。本当にいい人なんだろうなあ。

冒険者ベル・クラネルはこの上なく油断していた。強い助っ人の参戦、あまりにも容易く成功した城への侵入。レイニーから漂う楽勝ムードに当てられて、油断していたの

だ。

カチツ

「アババババババ!？」

ダフネが用意していた罠に見事に引つかかった、倒れた英雄を予言の姫がそそくさと拉致する・・・

6巻 後書き

「あん？アイツどこ行った」

化け物とか罵ってきた女の子を辱めてたら存外に時間が経っていた。クラネルに合流しようとして階段を登り切ったのだが、居ない。コレ捕まったな。

なんか、もう原作通りに行かないのが当たり前な雰囲気あるから既に驚きは無いっすわ笑。

どうやってクラネルをヒュアキントスに勝たせるか考えていたのが馬鹿らしくなつた為王の間の入り口のドアを蹴り飛ばして中に入る。

「ウイイイーツス！」

「……………」

中に入ると、一番奥に縛られて転がされているクラネルと、周りに5人ほどの冒険者。柱に隠れてコッチを見ている黒髪の女と玉座に座り、その顔面でドアの残骸を受け止めているヒュアキントスが1人。

「あ、わり」

「貴様……殺してやるっ！」

突然の戦闘、口上も何も無く突撃して来た。拾っていた杖で敵の『太陽の剣』フランベルジェを受け止める。カウンターを発動しながら。

「なにっ!?!」

まあ、木に剣が止められるとは思わんよね。そして反撃。敵の剣を払い、そこから流れる様に頭部へ攻撃を加える。レベル3の強靱な肉体はその攻撃を受け止めきれず、容易く吹き飛ばされた。

そして、もう起き上がってこない。まあ頭に喰らったからね。でもそんなに柔くて切り札がある訳でも無いのに、なんで酒場でベートに喧嘩売ってたんだらう。ナルシストって恐ろしい。

『戦争遊戯』は終わった、呆気ない幕切れに多くの神から不満が出たものの、やり直しなどあるはずも無く。

「あの杖・・・間違いないわ。ユグドラシル・・・何者なの?」

バベルの頂上では、とある女神が思考に耽っていた

「失礼ですが、フレイヤ様。ユグドラシルとは・・・?」

「天界にあった、9つの世界を支える大きな木・・・今は、あるはずのないもの」

さしもの堅物も驚きを隠せない、詰まるところ、あの冒険者は神である可能性が・・・

(いえ、それは無い・・・神の力は感じなかった。つまり、誰かが肩入れしている・・・?)

オラリオ中のありとあらゆる場所で、モブ主要問わず神は考える。

「「「なんかあの杖見覚えあんなあ・・・ん?」「」」

小話

魂の形から本人特定余裕でした

想像もしていなかった部分のせいで多方面から警戒度を爆上げされた我らがレイニー、まあ邪魔だと思われてサクツと殺されるよりマシなのかもしれない。本人特定したのはフレイヤだけだし。

「ねえ、レイニー。なんで戦争遊戯の場所に居たの?」

非常にいい笑顔で、俺に尋問を仕掛ける二ナ。どう誤魔化すかなと頭を悩ませながらホームに帰宅した俺を待ち構えていた現実には、二ナのスキルで居場所即バレという非情な物だった。ストーリーカーこあい・・・

「不当に団員を連れて行かれそうだったへステイアファミアを救おうと思った次第で

す」

「・・・まあ、良いだろう。それよりも私は気になる事があるのだ。あの時使っていた杖を出してみろ」

「・・・ん？ユグドラシルの杖？なんでまた・・・」

顧問に思いながらも指示に従い、ストレージから杖を取り出す。

「やはり・・・お前、これを何処で手に入れた？」

「え、何時もの【商店】から・・・」

「・・・今度こそ、お前の本当の過去を話してもらおう必要がありそうだな」

え？

「この世界が物語だと・・・!？」

「え、あたし存在しない人なの？」

「私がベル・クラネルの元に・・・？」

なんか、俺やつちやってたらしい。なんの考えもなく商店から購入したユグドラシルの杖は、ガチでユグドラシルの杖で天界に存在する世界樹と同じものなんだとか。

ええ・・・。なんでやねん、関係無いやろ普通・・・

こんな訳の分からないものが原因で、この世界の事や俺の前世の事、全てがバレてし

まった。もうダメだア、おしまいだア……。

「「まあ、いい（か）（です）」」

「……えっ？」

「話を聞くに、もう歴史は変わって来ているようだからな」

「私が存在しないってのはなんか複雑だけど、ここには居るし」

「ベル・クラネルを慕う私と今の私は別人ですよ」

マジで？話の分かりすぎるファミリアの仲間に驚いた。

「しかし、ようやくお前の知識の出処に納得がいった。異世界か……どんな所なんだ？」

「美味しいものいっぱいありそうだよね」

「平和なのでしょうか……」

三者三様、しかしながらいつも通りの風景。俺はそれに救われた。

とりあえず神様には前世の話を神様が寝落ちするまでしたし、ニナにはじゃが丸くんを腐る程買ってあげたし、リリは溶けるほど撫でた。

それで……俺の知識の最終巻、7巻を迎える……

小話

主人公の知識は7巻までです。外伝は見た事ないです。

アニメは見て（2018年）7巻から買ってない（2015年）

「神様、俺どうすればいいんですかね」

7巻、元タケミカツファミリアの団員であった命の極東時代の友人

ええと・・・、サンジヨウノ・春姫だっけ。それが歓楽街に囚われ、ソレを助け出すのが目的の話だ。彼女は所属しているファミリア イシユタル・ファミリアの繁栄のための生贄にされようとしていて、最終的に助けられてた。

んで、クラネルの弱体化が何処まで響くかだけど・・・まあ、今回は大丈夫だろう。そんなにギリギリだったイメージは無い。と言うか、本当なら丸々1レベル分足りずに勝てるはずのなかった戦闘を春姫の持つ固有魔法「ウチデノコツチ」で逆転勝利。そういう事が目的で、多分ステイタスが100とか低いぐらいだったら影響ないと思う。完全に流れを物にしていたし、ちよつとやそつとでは播るがない。まあ、近くには居るけどね。

「どうもこうも・・・お前は人を見捨てられないのだから助けるしかなかるう」

・・・？そりゃ、助けられるなら助けるけど、見捨て、られない？

「なんだその顔は。お前は自分のスキルも覚えていないのか」

レイマンブライド
【俗人矜持】

・ステイタスに成長補正

・諦めない限り効果上昇

・見捨てぬ限り効果持続

見捨てぬ限り効果持続

・．．．ここも諦めない限りだと思ってたっ！

だつてさ！クラネルのスキルの効果は想いが続く限りと、想いの丈だったじゃん。俺も同じだと勝手に頭ん中で考えてたっ．．．！

「お前の知識が確かなら、このオラリオはコレから英雄譚の1ページに記されるような大事件の中心地となる筈だ、もちろん、自分を蔑ろにしてまで人を助けろとは言わんがくだらない事で成長を止めるのはやめた方がいい」

コレ．．．どれぐらいの範囲が見捨ててるのに入るんだろう．．．子どもが泣いてて無視したら終わり？つらたん、意識しないままそんなイベントが起こらないでよかった。「もう直ぐに俺の知識も役立たずになるし．．．」

そう言えば、クラネルがレベル3に到達したと聞いた。7巻は既に始まっているのだろう。ああ、どうせこの世界に来るなら最後の巻まで読んでから来たかった．．．。予知能力欲しい。

これからの流れをもう一度思い出すかあ、クラネルがレベル3で、アポロンファミリ

アから全財産奪い取って派閥として落ち着いたから団員募集して、2億の借金バレてダ
フネとかも見限った・・・

「あ」

実はプライドなんて無かった

今俺は、ヘステイアファミリアの新たなホームの入り口に立っている。

何故かって？

カサンドラを確保するためだよっ!!

カサンドラは、ステイタスには何故か現れないもの予知夢と言う稀有な能力を持っている。ちよくちよく挟まれたカサンドラ目線の話で出てきた予知結果は何故コレが信じられていないのかと思う程に的確なのだ。戦闘力とか全て置き去りにしても欲しい、俺にはカサンドラが必要だっ!

「ベルさーん!?!」

中から緊迫した声が響いた瞬間、これほどの人数が中に居たのかと思う程に勢いよく人が飛び出してきた。どうやら原作通り、借金がバレてしまったようだ。
さて・・・ココからは俺の腕の見せ所だなっ

「お金払うんでウチのファミリアに入って下さい」

「ええっ!?!」

「何コイツ……」

プライドなんてあるもんかい、先がわかんねえ事が一番怖いんだよ。前世じゃそんなこと無かったのにこの世界で未来知識中毒になっちゃった。

「今なら何もしなくても50万ヴァリスのボーナスが出ます」

ファミリアから出てきた所を勧誘し、近くの喫茶店で話をする事になった。

この前のアポロンファミリアとの1戦の後、ヘステイアファミリアから謝礼として300万ヴァリスを貰ったので還元しておこう。

「あの……ウチらレベル2だし、見てたと思うけど戦争遊戯で良いようにされたファミリア出身だからそんな好条件を出されると裏があるんじゃないか……って思っちゃうんですけど」

「いえ、カサンドラさんの予知夢が目的なだけで裏なんて何も無いです」

怪しまれて逃げられるのは何がなんでも避けたいので正直に答える。アンタそんなモン信じてんのか……みたいな微妙な目で少女1人確かダフネーが見てくるが、気にしない。カサンドラ様さえ来てくれればお前は要らないんだがなあ……チツ カサンドラ様は予知夢について信じた事に好意的なようで乗り気な雰囲気を感じられる。

「あ、申し遅れましたが私、メーティス・ファミリアという所の者です」

「メーティス……そう言えばリトル・ルーキーに次ぐランクアップの記録保持者がいる

所だっけ。もしかして……」

「私です」

ひっじょーに疑われている。仕方ないので腕相撲で瞬殺して信じてもらった。

レベル2になって長いのになんでこんな簡単に……と悲しんでいたが知らない。

「まあ……、とりあえずファミリアの方を見せて貰えますか」

「お安い御用です」

—————

内心入団を決めかけていたヘスティアファミリアが、まさかの借金塗れだったと言う悲劇が起き、途方に暮れて居たウチらに怪しい男が話しかけて来た。掃いて捨てるほど、とは言わないもののどこに居てもおかしくない程度のレベル2冒険者であるウチらに即時50万ヴァリスを支払うと言出したのだ。

正直ファミリアが解散して自分で持った資産以外は没収された今、50万ヴァリスはかなりの大金で。食いつきたくなる好条件ではあるものの……怪しすぎる。ホイホイで行けば、奴隷商にでも売られるのでは無いだろうか。

予知夢を信じるなんて言われたから時は正気を疑ったけどチョロいカサンドラは能天気にも男を信じているのでそれを狙ったのなら効果的だったのだろう。

男はメーティスファミリアの団長で、ウチらと同じレベル2だ。少し前にランクアッ

プしたばかりであるはずなのに長くレベル2でいるウチを圧倒する力を見せてきた、そう言うスキルでも持っているのかもしれない。

ウチらの戦闘力を期待して誘っている訳でも無いと思う、100万ヴァリスを即時用意出来るというのなら、借金してるのでない限り十分にファミリアの運営は上手くいつているのだろう。なら、本当にカサンドラを・・・？

怪しくはあるのだが、嫌な感じはしない、もつと情報を得てから見極めるか・・・。

「え、もう自前のホーム持つてるの？・・・ですか？」

「ええ」

驚きで思わず敬語が抜けてしまった、しかしそれも無理はない。この前までこのファミリアは何の変哲もない弱小ファミリアだったはずで、しかもこの男を団長にしているのならそもそもファミリアの歴史も浅い筈だ、1年もないだろう。レベル1の冒険者が1日に稼げるヴァリスは4000ヴァリスも無いと言われている。パーティを組むと分け前も減るし、装備の点検やらポーションの購入やらで首が回らないのがレベル1冒険者だ。1年と経たずランクアップするだけでも異常なのにどうやって金策まで？なにか商売でもしているのか・・・

「どうやってホームを買うお金を作ったんですか？」

「あー・・・、ダンジョンで不壊属性の武器拾ったんですけど、ファミリアの誰も使わないで売って、それで買いましたね」

・・・それが本当なら相当な幸運だ、そして、本当でないなら危険である。ヤバイ事に手を染めているのかもしれないが、まあ、納得は行かないかそれは無いだろう。

アポロンファミリアはその外面と違い、内実はかなり汚い。色々とヤバめな所と手を組んでいて、知恵の回ったウチもその分野に少しだけ関わっていたのだ。代表的な所で言うと、ソーマファミリアなんかと交流があった。

しかしメーティスファミリアと言うのは聞いたことが無い、恐らくその方面では安全だ。・・・本当にカサンドラの予知夢が目的なのだろうか。珍しい回復術師ヒールラーでもあるし、普通に誘って来たという線も無くはないが。まあ、まだ結論を付けるのは速い。折角自由の身になれたのだし、よく考えよう。

「とりあえず、中に入らせてもらっても？」

さしあたって、中の雰囲気を確認させてもらおう、人間関係も重要な事。アポロンファミリアには無理やり所属させられた様なものだが、団員には仲のいいモノも居た、カサンドラはその筆頭だ。

「おかえりー、どこ行って・・・その子達誰？入団希望？」

「有望だったからスカウトしてきた」

ほへー、とアホみたいな声を出す少女。団員の1人なのだろう、男が気負いせず話しかけている様子から伺える。少女は二ナ・アイリスと言うようだ。少しだけ話をし、中へと進む。話した感じ暗い雰囲気も無いし、強制されているような様子もない。男はアイリスにリリと言う少女の所在を訪ねたようだが、出掛けているらしい。

・・・主神は女神で、団員3人の内2人は女。

「・・・もしかして、ハーレムファミリアにしようとか考えてませんか？」

「いや、まさか」

あまり信用出来ない・・・

家は中々広く、その割に人影がない為団員は非常に少ないのだろう、男に聞くと、団員3名のファミリアだとか。そんな状態でレベル2に・・・？何処か親交があるファミリアでもあるのか、いや、かのリトルルーキーもウチらに戦争遊戯を挑まれる前はたった三人でパーティを組んでいたようだし、ありえない話ではないのかもしれない。

「神様ー、入っていいですかー？」

一応敬語であるものの、あまり敬意の感じられない口調である部屋のドアを叩く男、かなりアットホームなファミリアであるようだ。アポロンファミリアであつたら即座に殴り飛ばされてもおかしくはない所業、コレは好印象だ。ウチは堅苦しい事は苦手な性分だし、カサンドラは天然なのでドジをやらかしても許して貰えるような所が望まし

い。

「入れ」

「誰だ、その二人は」

「この前解散したアポロンファミリアの元団員です、俺らのファミリアもそろそろ人増やした方が良くないかなーって思ってたんで勧誘してきました」

神様はホームの一角に書斎を作り、殆どの時間をそこで過ごしている。今もそこを本を読んでいたようだ。

「まだ入団するか考え中なそうなので、後でリリが帰ってきたら後は女同士で。聞きたい事あれば聞いて見たりし合っただけでお願いします」

「・・・ああ、分かった」

2人の了承も得、俺は退室する。やる事ないし、部屋に籠ってしよう。

結論から言うと普通に入団してもらえた、行くあてもないし、変な所ではないようだし、と。早速俺は2人に50万ヴァリスを渡し、気の変わらぬ内に入団の儀式を終わらせた。入団テスト？ 団長権限でカットしたよ・・・だって、この2人結局ヘステイアファミリアに入らなかつたし、ウチに勧誘しても乖離しないでしょ。

7 卷

そして、7 卷

新たに入団した2人には、俺の前世の話なんかは話していない。あと戦争遊戯の時の一人だったことも。ダフネとか俺の評価悪いと思うし、わざわざ嫌われる必要も無いだろう、墓まで持っていこう。

それはさておき

ダフネ・ラウロス

レベル・2

力・D 501

耐久・E 475

器用・B 701

敏捷・C 694

魔力・F 370

耐異常 I

魔法

【ラウミユール】

・防護魔法

・『耐久』強化及び『敏捷』の高強化。

・効力は所有者の『魔力』に依存

詠唱文【追従せし空の太陽。全ては汝から逃れるため――咲け、月桂樹の鎧】

スキル

【鉛矢受難】

・『敏捷』の小補正

・追走受動時、発展アビリティ【逃走】の1時発現

【月桂輪廻】

・消耗時及び瀕死時、『耐久』の超高補正。

カサンドラ・イリオン

レベル・2

力・H 101

耐久・H 189

器用・G 248

敏捷・F 341

魔力・D 588

治癒 I

魔法

【ソールライト】

・ 範囲回復魔法

・ 精神力に比例し効果領域拡大

・ 詠唱文【1度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕。届かぬ我が言の葉にの代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよ】

【キユア・エフィアルティス】

・ 単体解毒魔法

・ 詠唱文【「知らんけどー】

スキル

【謳え悲劇世界の王女】

・ ?? ♪!! ♪ # ♪ # ♪ # ?

「カサンドラさん、ヒーラーだったんだ。ダフネは案外強いな」

「・・・ねえ、なんでウチには敬称が付いてないの?」

「あ、あの、私も付けなくて大丈夫です・・・」

ダフネのステイタスは二ナと同系統の様だ。特徴のないヤツめ。・・・スキルで耐久が上昇するようだが、まあ女の子が傷付く所など見たくないので使われる機会は無いだろう。その点カサンドラは珍しいヒーラーで、常にファミリアに貢献してくれることを間違いないだ。スキルは・・・文字化けてて分からない。しかし、名称からして良くないものだろう。悲劇か、この世界には似合わない言葉だと思うが。

魔法やスキルは本人の望むもの、本人の特徴を表したものが出てくるから回復に特化した彼女は心から人を助けたい、そう考えられる人なんだろう。なんて素晴らしい人間なんだ。

人知れずカサンドラの心の清さに打ち震えた。あと、良くはないけどスキルの王女気質でもあるのだろうか、いい所の人？

—————

「んじゃ、ちよつと歓楽街に偵察行ってきます」

「・・・ハメを外しすぎるなよ」

次の日の夕暮れ、昨日から話していたのだが、いつ原作が始まるのかさっぱり分からないので毎日歓楽街を歩くという事になった。男の夢、歓楽街。この世のあらゆる快樂が集められた桃源郷・・・しかし、自由に遊べるのかと言うとそうではない。

「・・・なあ、お前ら本当にずつと着いてくんの？」

「レイニー様がまたおバカな事をやらかささないか、心配なので」
「エツチなことはダメだよ」

ニナとリリが、監視役に付いているのだ。チツ

まあ、俺はまだ童貞だけどココで捨てようと思つてた訳じゃないから別にいい。しかし娼婦の人に目を奪われる度に身体はどこかを抓られるのが非常に面倒だ。自由にしたい・・・それにしても香水の匂い凄いな、鼻が馬鹿になりそうだ。

何となしに、彼女持ちの気分を味わっていると、歓楽街がにわか騒ぎ出す。元々うるさかったのだが、何人かの娼婦が『今からサービスタイムー!』

と叫んだ瞬間周りに居た客達が一斉に移動を始めたのだ。はぐれそうだったので2人は捕まえておいた。

ん? ああ、そう言えばこんな描写あつた気がする。あ、じゃあ早速始まつているのかな。

辺りに視線を巡らせると、ピンクの迷い子と今まさに連れ去られている白髪。そして遙か遠くに背を見せる赤髪の鍛冶師の姿が確認出来た。

・
・
・

「原作ウツ!」

白髪ーークラネルは、んー、まだ良い！先にピンクの奴を助けよう・・・

2人がしつかり着いてきているかを確認しながら、人混みに吞まれ兎と同様に連れ去られかけているフロールレスに追い付く。

「おい、大丈夫か」

「え、あ、ありがとうございます・・・」

人混みを押し退け、あれよあれよという間に路地裏に入り込みそうだった所でようやく追い付いた。

「んー・・・どうすつかな・・・」

クラネルが連れて行かれた方角は覚えていたが、まあ逃げ出せば騒ぎが起きるし分かりやすい。問題はヴェルフだ、コツチはどこ行ったのかイマイチ分からん。つと、アレは、ヘルメスさんやないですか。

俺の記憶にある限り、時系列的には既にクラネルに精力剤を渡して後は特にすることのないフリーの状態だったはず。これを使わない手は無い。

「ヘルメス様ー！今すぐファミリアに連行されたく無かつたらこの3人組保護しといて下さいー！ファミリアに送り届けてあげてね！」

「えちよまつ、スレイヤー君・・・なのか!?オレは今から仕事がつ!」

無事に保護者を見つけ、ついでに足枷をも押し付けた俺は高いステイタスを存分に活

かし彼らの視界から消えた。まあ後でお叱りを受けるのは確実だけど、戦闘には巻き込めないし、アイツらは正直付いてこれない。

屋根伝いに、クラネルが原作で連れて行かれた建物を思い出す、イシユタルファミリアのホーム、バベルには及ばない物の相当に高い、大きい建物だったはず。

辺りを見渡すと、それは直ぐに見つかった。

7巻が、始まる。

「おー、逃げてる逃げてる」

追いつがろうとする戦闘娼婦達アマゾネスを軒並み置き去りにし、逃走の一手を打ち続けるリトル・ルーキー。しかし、そんな逃走劇を妨げる巨陰が一つ。

「うげ……マジでブサイク……」

あまり顔で差別はしたくないのだが、ブサイクなのに本気で自分のことを綺麗だと思ってるって言う異常な精神を知っているのでどうも忌避感を覚える。頭と胴体はデカいのに手足のサイズはそれに追い付いておらず、クラネルが付けたヒキガエルと言うあだ名はなるほど、納得のいくものだった。

逃げるクラネルの近くの建物を飛び回り、何かあれば助太刀に入ろうとは思っているが今の所特に何かあるわけではない。しかし、飛び上がった際に遂にアマゾネスの放つ

たブーメランがクラネルの足を打ち据えた。

おお、確かコレで体勢崩して春姫の部屋に突っ込むんだっけ。

しかし、どうにも飛距離が足りないように思える。ステイタス不足か・・・

「ふべっ！」

見るだけで痛そうだな、と思う程見事に顔面から地面に突っ込んだクラネル。そして逃がさんと言わんばかりに包囲し始めるアマゾネス達。

行くかぁ・・・

『貴方の刻印は私の物、私の刻印は私の物〔シンダー・エラ』』

見た目を変える、今回は前世の外人俳優をイメージしてみた。

鬼の仮面 39000G 物攻+950 耐久+450 『物攻20%アップ』

仮面をつける、身バレ対策は万全な筈だ、フラグではない。

屋根の上から力を溜め、一足で飛び上がる。ちよつと着地点を見誤ってクラネルを踏み付けそうになったが気にしない。

「誰だ!?!」

ヒキガエルさんがそう問うてくるが、無視だ無視。

「クラネル、悪く思うな」

「え?その声・・・悪く思うnうわあああああ!」

クラネルを後ろの遊郭に向けて投げ飛ばした。まあ、何処に春姫が居るか知らんけど適当にステイタスがあれば届いたんじゃないかって所に放っておく。俺はここに残って足止めだ。原作とどう変わるかわからんし。

「アンタのせいで獲物が逃げちまつたじゃないかあ！こりや、アンタの身体で払つてもらうしかないねえ……」

突如標的を変え、俺の体を舐め回す様に見つめるヒキガエル。生理的に無理です……。もう少しの所で、横槍を入れられたせいかわりに居るアマゾネス達も殺気立っている。モテる男は辛いなあ……

「仮面の下は見えないけど、良い男の雰囲気が出ているよオ？まあ、天井のシミでも数えたいれば終わっているさ！ゲゲゲッ！」

余裕の表情で、俺を捕獲しようと腕を伸ばしてくる。簡単に捕まってやる訳にはいかな。触られたくないので、スッと腕を避ける。

「ああん？あんた、逃げられると思ってるんじゃないだろうねえ……大人しくしなア！」
ゴウツ！風を切る音と共に、常人では視認することも難しいような速度で腕が伸びてくるが、それも避ける。レベル5の冒険者であるヒキガエルの腕を2度も避けた為、周りの冒険者達の視線が変わった。

ここで思うのがさ、やっぱアマゾネスって普通と違うなって事だね。確かイシユタル

ファミリアってヒキガエル以外はレベル3以下だった筈だからレベル5の攻撃を避ける俺は相応なレベルだと思わず、普通ならそこで警戒度を上げるはずが、なんか視線が熱くなったんだよね。目が言ってるよ

『『強い雄・・・欲しいっ!』』

「・・・この年中発情期共が!」

「ヘルメスう?随分と、待たせてくれたじゃあないかあ・・・」

「い、いやあ、ちよつと厄介事に巻き込まれてしまつてね・・・」

月夜が見える、宮殿の高階にその部屋はあつた。豪華な絵画風織物に大輪を彷彿させる美しい絨毯。卓を挟んで天鷲絨張りの長椅子が二脚用意された広い室内は応接間のようでありながら、隅には天蓋付きの寝台も備わっている。焚かれているのは麝香の香りだ。

天井に吊るされた魔石灯が輝く中、長椅子に腰掛ける女神は苛立ちを隠そうともせず、そう言葉を発した。

非難を込めたその言葉を男神は冷や汗をかきながら受け流す、言い訳をさせて貰えるのなら自分のせいではないと声を大にして言いたい。

淡い光以外に光源のない薄暗い部屋の中で、1人の狐人を悲劇に陥れる取引はつつが

なく終了した。

そして、男神はとある物語同様に、美の女神の尋問を受ける、物語と違うのは、「ベル・クラネル、そしてレイニーか・・・」

鈍く輝く英雄と、鍍金に包まれた偽物は新たな物語を紡ぐ。

襲撃

まあ、特に言うことは無い、アマゾネス達との戦闘は終わった。帰宅した後、シャワーを浴びて香水の匂いを消し、自室で追想する。

ヒキガエルは強敵かと思われたが、無装備の上に速度的に俺より劣っていたので物攻マシマシな俺の連撃で沈んだ。正直俺よりも技術というものを感じなかった。んで、残りのアマゾネス達だったが相手になるはずも無かった。何人かのアマゾネスにアイシャ!と呼ばれた人物がいたお陰で主要な人物の顔が分かった。しかし、倒される度に視線の温度が上昇して行くのがとても恐ろしかった。

本日の成果

自分の能力は、少し歪なレベル5

アイシャ・フリユネ兩名の確認

ベル・クラネル・・・春姫と遭遇・・・?

・・・まだ確定するのは早いかな。明日、確認しに行こう。確か春姫は普通に客を取っている筈だし。

時系列がよく分からない事が難点だな、．．いや、そう言えば、殺生石に魂を封じる儀式は特定の日にしか出来なかつたのだったか？確か．．満月の日に。

窓から、月を見る。地上でどれ程の悲劇が起きようとも、月は変わらず輝くだけであった。

「4分の1はかけてるか．．？」

まあ、明後日位じゃないか？コレも後で調べよう。

全然違った、4日後だ。そんなに余裕あつたんだな．．。ええと．．クエスト行つて、拉致られて、地下で1晩過ごして．．ダメだ、細かい記憶が残つてない。

とりあえず、状況の確認だ、歓楽街に行こう。

「白い髪 of 冒険者に会つたか？」

金髪 of 人間族である今日のお客様は、行為に至るでも無く私にそう問いかけた。質問の意図は理解しかねたが、どんな理由であれ、客が望むのなら答えるのみだ。

「いえ．．そういう風貌の方がこの建物に飛び込んできた、という話は聞きましたが．．」
私がそう返すと、「マジか．．やっぱ乖離ヤバいな．．」とお客様は呟いた。よく分からないが、此処に来る予定の人だったのだろうか？

「あの……致さないのですか？」

「え？ああ、いいよ」

……良いの？先程の質問をする為だけに来たのか、こんな事は初めてで、何をすればいいのか分からない。あどけない顔立ちのその少年は、とてもこのような所で女を買うような人には見えなかった。質問を終えたその人は、もう話すことは無いとばかりに時計に目をやる。まだ時間は残っているが、残りの時間、ずっと待っているつもりだろうか

白い髪の冒険者……

「……その方は、どういうご関係なのですか？」

「ん？」

どれ程無言で居たのだろう。気が付くと、そう問い掛けていた。

「その、白い髪の冒険者の方と……どういうご関係なのでしょうか」

「あ……」

お客様は少し困った顔をして、こう答えた。

「君を救ってくれる、英雄と、それを見守る偽者つて所だな」

「英雄……まさか。私のような汚れた女を助けて下さる英雄なんて、いません」

突拍子の無いお客様の言葉に、咄嗟に反論が出てしまった。いきなり何を言い出すの

か。何人もの男に身体を許したこんな女等、英雄に相応しくはない。

分かつてゐるのに……、何故、悲しく思つてしまうのだろうか？

思わず、一筋の涙が零れ落ちる。

「あつ、も、申し訳ございません！直ぐに、止めますので！」

何をやってゐるのだ、こんな事で涙を流すなんて。しかし、袖で目元を拭う度、新たに雫が落ちてくる。その涙は、止まる気配を見せなかつた。

なんで、今更涙を流すのだろうか。私は娼婦、破滅の象徴。こんな所に堕ちた時点で、英雄譚に夢見る資格など無くなつたのだ。

「……まあ、」

泣き続ける私に、声が掛けられる

「もし英雄が助けに来ないのなら、俺がちやつちやと助けに来るよ」

そう嘯く彼の顔に嘘はない、大言を吐いてゐる訳でもない。とても簡単なことでは無いのに、なんでもない事のように彼は言った。普通なら、戯言を言つてゐるようには無思えないはずなのに、彼の言葉はどこか信じられる様な気がする。イシユタルが、私を逃がす筈はないのに。

「……無理です、それに、私も望んでいません」

嘘だ、本当なら連れ出して欲しい、でも、私が逃げてしまえばあの女神は何を犠牲に

してでも私を追い詰めるだろう。私なんかを助ける為に、誰かが犠牲になるなんて耐えられない。そんな事になるぐらいなら、1人で寂しくしんでしまう方が余程いい。

もう、いいのだ。

――
予想外に重い雰囲気になってしまった、こんな俺の柄じゃないってのに。

まあでも、そうだよな。春姫は、イシユタルがフレイヤと戦う為に欠かせない道具だ。それを奪おう物ならあの女神はその相手を地獄に落とすだろう。イシユタルファミリアとやりあえる派閥なんて多くはないし、その数少ない派閥だって春姫1人のためにイシユタルファミリアを事を構えるなんて有り得ない。

原作でだって、イシユタルファミリアが解散に追い込まれなければ、ヘステイアファミリアの面々はアマゾネス達に付け狙われ、最後には潰されてしまったかもしれない。

春姫を救うという事はそういう大きな危険を伴っている。

……確実に救える保証もないのに、軽率な言動をしてしまったかもしれない。でも、涙を流しているこの子を見て、思わず言ってしまったんだ。

クラネルが助けてくれる、そう言ったけど、本当にそうなのかは分からない。これからも原作を気にして、できる事をやらずに人任せで生きて行くのか？

仕方ないじゃないか、この世界の主人公は俺じゃない。かなり前に英雄を越えるとか

言っちゃったけどぶっちゃけ原作崩壊は今でも恐ろしいし。

でも・・・

狐人の少女を見る。それに気付いた彼女は、儂げに笑った。人の感情なんて読めやしないけど、笑顔の奥には未だ涙が残っているように見えた。

ヘステイアファミリアに、春姫についての情報を渡した、その後拉致られてもらわねばならないので身請けについても話した。恐らく商会からのクエストが届き、ダンジョンで襲われる事になるだろう。死にはしない。

そう言えば、家のファミリアにも怪しげなクエスト依頼が届いていた。目をつけられた・・・？どこから正体がバレたのか、気になるが考えていても分からない。これを断り、また別の方法で襲われてはかなわないので受ける方向で行こうと思う。まあ、昨日は普通に勝てたし装備も付けて魔法も自由にすれば負けることー無いだろ。

フラグでは無い。

簡単だったな、目の前で蹲る20人ほどのアマゾネス達を見つめ、そう考える。

アイシャ、フリユネといった主力は来ていなかった。まあそれは当然だ。俺はゴライアスを討伐したとして少しは有名になっているが見ていたのは極少数だし、まさか俺が

単身で討伐したとはだれも思っていないだろう。実際消耗したゴライアスを倒しただけだし。

ついでに、ギルドから伝わっている情報では、俺は所詮レベル2の上級冒険者である。ステイタス的にはまだまだ貧弱な筈の冒険者なのだ。何か秘策があると思われたとしても、数で掛かれば行けるって感じかね。

という訳で俺の確保に送られてきたのはレベル2からレベル3の下位、ダフネ達よりも強いらしいので、そこから辺だろう。人数も少なかったので人質を使うなんて事も出来ず各個粉砕して行った。

「オレ、サミラってんだ・・・覚えておいてくれよな・・・ガクツ」

なんか、意味深な事を言われたが気にしない方がいいだろう（戒め）

「コレに懲りたら俺達に手を出さないように、主神に伝えておいてくれないか。もしも仲間に危害が加わるような事があれば全力で抵抗するとな」

コクコクと頷いた、あまりダメージを負っていない敵の1人にリジェネーションをかける。ジワジワ回復して、まあ数分で復活するだろうからモンスターに食われるなんてことは無いだろう。

「れ、レイニー。あの人達、なんだったの・・・？」

レベルが上位の冒険者の殺気に当てられ、ビクビクしながら周りを警戒する二ナがそ

う聞いてきた。

「多分イシユタルファミリアのアマゾネス部隊だな。戦闘娼婦って言うのを聞いた事がある」

「イシユタル・・・!?!」

他の面々も、それぞれのリアクションで驚いていた。それはそうだ。レベル5のフリユネ・・・なんたらに加えレベル4冒険者である・・・タンムズなんとか、更にレベル4間近と噂されるアイシヤ○○○まで擁し、団員の多くがランクアップ経験済みの正真正銘の大派閥。

更に歓楽街の夜を牛耳り資金的にもそこらのファミリアでは太刀打ち出来ない都市最強格のファミリアなのだ。

三日後に滅びるけど。

俺に対した執着があるわけでもないだろうし、主力が来ていないのなら向こう、クラネルの方に駆り出されているのだろう。恐らくそのまま拉致られると思うのでそれで満足して欲しい。

やめられないとまらない原作乖離

『ひっー』

細い靴音が背後より迫り、イシユタルが慌てて振り返った瞬間、どんつと胸を押される。

右手でイシユタルを突き飛ばしたフレイヤは、もう一度、右手で突き飛ばす。

後退する体。崖の際に迫る足。もう後はない。

宮殿の下に広がる黒い地上が、イシユタルを呑み込もうと顎を開く。

『待っー』

「・・・(っ、ω、c)マツ..」

ベットの上で、俺は静かに嘆いた。

襲撃され、そのまま探索を続けるのもなんなのでホームに帰り、昼寝でもするかと寝ているとまさかの夢を見た。

え、助けないといけないんですか、そうすか。

なんか暗い噂もあるし、助ける候補に入れなくていいんじゃないですかねえ・・・

「レイニーさあん！」

夢の内容を思い返し、理不尽な救出強制クエストに怒りを示しているとカサンドラが部屋の中へと入って来た。コレ、そんな大きな声を出すもんじゃありませんよ。

「どうかしたのか？」

「あの・・・予知夢を見たんです・・・」

そういうカサンドラの顔色は優れない、恐らく悪夢の類だったのだろう。なんの夢だろうか？

詳しく教えて貰った。

狐は希望を抱き夢を見る

救われぬ兎は絶望に沈み

蛙は笑いコレを飲み干す

忍びは戯れに潰された

そして世界は闇に包まれる

救いの鍵は殺戮者

という事らしい。ふーむ・・・

予言をキチンと見るのは初めてだが、具体的にどうなつてどうなつて、という事が分かるのではないのか。キーワードを貰つて謎解きをするイメージか。

とは言え、コレは簡単だな。

つまり春姫が寝ててクラネルを助けられないからヒキガエルにペロリと食べられる、助けられるのは知ってる俺だけって事だ。

クソツタレめ！原作なんてどこにも居ないじゃないか！

「春姫さん居ますか？」

「今は客は取れない状態だね、アタシなんてどうだい？」

カサンドラに歓楽街に出かける旨を伝え、街へと繰り出した。人はほとんど居ないものの、チラホラと動いている人を見かけるイシユタルファミリアの建物へと入り、中の受付嬢らしき人に質問を投げ掛けたのだが。求める答えは帰って来なかつたので、既に軟禁されているのだろう。

仕方ない、潜入しよう。

その類の能力は全く持っていないが、兎に角今は飛び込むしかない。壁を無理やりよ

じ登った。何処にいるかは分からないので適当な窓から中へと侵入する。

人は・・・居ないな。左右に誰も居ないことを確認し、サツと、それはもうササツとGの様な動きで壁へと張り付き、通路の角で先を伺う。

居た、単独行動をしているアマゾネス、顔に見覚えは無いので問題は無いだろう。

一定距離までジリジリと、振り向くなよと念じながら近付く。そして飛びかかった。

「えっー」

「喋るな（低音）」

首元にナイフを突き付ける、勿論刺す気なんて微塵もないが騒がれても困るだけだし。効果は抜群で、名前も知らないアマゾネスは口を噤んだ。

「フツ・・・!」

「ウツ」

殺すぞ貴様、口は閉じたが足は開きおった、金的された。驚きの衝撃、ゴライアスの一撃さえも耐えた俺の体に痺れる様な震えが走る。思わず拘束していた両手を離し蹲ってしまう。

「オラツ！つて痛い!?!」

そのまま背中に向けて蹴りを仕掛けてきたが、そこは純粹に硬い、ダメージは感じな

かった、寧ろ全力で壁を蹴ったのと同義の結果に終わったアマゾネスがダメージを受け、此方も蹲る。

「ひ、ヒール……ふう……」

そのまま逃げられていたらとんでもない事になったのだが、ここで倒そうとしてくれて助かった。痛みをヒールで誤魔化し、そしてアマゾネスの方を見た。

どうしてくれようかこの女……

倒れているアマゾネスにのしかかり、今度こそ抵抗出来ないように両手を掴みあげ、顔の前にナイフを持って行った。

「おい、良くもやってくれたな。余程命が惜しくないと見える（極低音）」

「ヒイ、す、すみませんちよつとした出来心なんです許してお兄さん」

許す訳ないだろうが！トラウマになるかと思つたわ！もしくは新しい扉開くところだったわオイ！

フーフーフー！

……まあいい、こんな事に時間をかけている場合ではないのだ。

「最後のチャンスをやろう……春姫と言う娼婦の部屋を教えろ（低音）」

「春姫……、ええと、19階の上上がる階段のすぐ側です……」

アマゾネスに眠り薬を飲ませ、人のこなさそうな通路にポイツとしておく。

19階か、今は8階だからまだまだ上だな。

「レイニー！なんで逃げるんだよオ！オレと一緒にあそぼうぜえええ！」

あの女は殺すべきだ、そう感じた。女の言葉を信じ、人と会わないように気をつけながらも10分程で俺は19階へと辿り着いていた、そして警戒も無く部屋の扉を開けたのだが、俺の顔を襲ったのは煙。

中は休憩中のアマゾネス達の喫煙所だった

死ねっ！もう・・・死ねっ！中に居たアマゾネスの数は、ダンジョンで襲って来た者達より多く、更に一人一人の質も高いように思える。ついでに、騒ぎを聞きつけて上の階から増援が来たし、今も続々と追加の人員が登場中だ。

とりあえず、逃げの一手を打っているのだが諦める気配は微塵もないし、地の利はむこうにある。

仕方ないか・・・

「スパーク！」

「ピッ！」

追跡部隊の先頭を走っていた、この前ダンジョンにもいたサミラとやらにスパークを放ちその動きを止める。急に先頭の者が止まり、立ち止まらなかった後ろの面々はサミ

ラにぶつかり倒れ込んだ。

しかしそれも束の間、次々と立ち上がり、魔法を食らった筈のサミラでさえ少し動きはぎこちない物の問題なく動いていた。

「タフ過ぎないかお前ら！」

しかしまあ、スパークで特に問題ないのなら、もう一つ段階を上げても死にはしないだろう。

「サンダーストーム！」

「—————びっ！—————」

一網打尽、狭い通路を隙間なく走った雷風はアマゾネス達の体を痺れさせ、行動不能へと陥れた。

「体術で……闘いたかった……ガクッ」

嫌だよ

—————

「アイシャ！襲撃だ！とんでもない強さの奴がホームに侵入してきた！」

侵入だと……ただでさえ今は忙しいってのにまた面倒事か……

「侵入者の特徴は？」

「それが……サミラ達が返り討ちにされた、あのレイニーとかいう奴らしい。なんでか

私達の喫煙所に入つて来たから追い掛けてるけど……多分勝てないよ」

レイニー、ギルドの情報ではレベル2の筈の冒険者。サミラ達数名のレベル3に、念を入れてレベル2の冒険者を十数名付けて行われた襲撃を1人で返り討ちにした男。簡単に終わる筈だった襲撃は全部この男に止められたらしい。

サミラが言うには、フリユネと同等のプレッシャーを貰ったとか。

レベル5、もしくはそれ以上。その域に達している冒険者はそう多くはない。

思い返されるのは過去の記憶。

街で兎を追い詰めていた時、突如現れた仮面の男の事だ。レベル3の冒険者である私達を軽くのし、フリユネさえその速度に追い付けず翻弄されたあの男。襲撃に言っていたメンバーの1人であった獣人の仲間が、仮面の男と同じ匂いを感じたと言っていた。同一人物なのだろう、すると、ベル・クラネルが攫われたと聞いて無理やり襲撃をして来たのだろうか。

それなら残念だ、アイツの居場所は誰にも分からない。フリユネが攫ってしまったのだし。

「私も迎撃に出る、お前達はどうにかフリユネの居場所をー」

ドオン！

部屋のドアが蹴破られる。

「ここに春姫と言う娼婦がいらつしやるといふ噂を耳にしまして、身柄をとつとと寄越して貰えませんかねえ」

・・・なんだか寝れているような気もするが、レイニーだ。春姫に用があるのか？理由は分からないが・・・タダで通す訳には行かない。

「お前達！時間を稼げ！」

私は、奥の部屋へと足を向けた。

V S イシユタルファミア

イシユタルファミアの団員から散々逃げ回り、その内の1人から春姫の部屋の情報を得た俺は、今度こそと言う思いを胸に部屋に侵入していた。苛立ちもいい加減MAXなのでドアを蹴飛ばしてしまったが許して欲しい。

「ここに春姫と言う娼婦がいらつしやるという噂を耳にしまして、身柄をとつと寄越して貰えませんかねえ」

見事な敬語でフレンドリーに話しかけたのだが、部屋の中にいたアイシヤに逃げられてしまった。他に残っていた3人の女の子は俺に襲い掛かってきたのでスパークを撃ち優しく気絶させる。レベル2位だったようだ。

ポーシオンを飲んで身体を回復させながら、注意深く部屋を進む。

『ブレイク・ボデー』

『呪いの足枷』

『ヒューマンキラー』

『アンチマジック』

部屋に入った瞬間、奥から黒いモヤが飛んできた。咄嗟に避けようとして、実際避け

たのだが追尾式。モヤは体に吸い込まれ、途端に身体が重くなった。

『ウチデノコツチ』

そして、暗い部屋の中が急激に明るくなった、直前に聞こえた言葉、ウチデノコツチ。それは対象をランクアップさせる、反則級の魔法の名前で・・・

「ゴッ!?!」

俺は姿を現したアイシャの攻撃を止める事が出来ず、吹き飛ばされた。

「ゴホッゴホッ・・・、リジエ、ネーション。ヒール」

コレは・・・確か呪詛^{カース}ってやつだったか？本で見た事がある。効果はイマイチ不明瞭だが、俺の身体能力を下げるモノではあるのだろう。推定レベル5だった俺の能力は下がり、レベル3の冒険者の中でも上位のステイタスを持つアイシャは、ステイタスはそのままにレベルは4に。

まずいですねクオレハ・・・

「それは回復魔法かい？詠唱もなしになんて、どこぞの兔を思い出させるねえ」

「・・・」

身体の痛みは引いてきた、剣で切られたのだが咄嗟に腕で受け、いつもの如く不壊属性である装備に助けられた。骨が折れることも無かったようだ。

「防具の性能に助けられたみたいだけど、次はそうは行かないよっ!」

「ゴハッ！」

目立った防具の無い、脇腹を神速の斬撃が襲う。そして俺は吹き飛ばされる。

「え、そ、そこタダの布だろう!?なんで切れてないんだい!?!」

殺すつもりは斬撃は、俺の不壊属性の布とかいう頭の悪い装備によつて防がれた。斬撃は最も俺との相性が悪い攻撃だ。

俺の装備は、何処の部位の装備であろうと全身に同じ効果を与える。足に装備をしたら頭の防御力も上がるし、ピアスを付けたら全身の防御力が等しく上がるのだ。よつて、鎧と布と言う材質の違いで衝撃に違いは出るものの、基本的にダメージは変わらない。

そんな事情を知る筈もないアイシヤは混乱していた、殺したと思ったのに、ピンピンしているのだ。タダの布に、斬撃を止められた。つまり、余程高価な装備という事。タダの布にレベル4の攻撃を防ぐほどの能力を持たせるなど正気の沙汰ではない。そんな事が出来る冒険者、もしかするとこの冒険者はレベル6で、深層の怪物のドロップアイテムでも使つて作った装備だとも言うのか。

「スパーク」

「ピッ」

「サンダーボルト」

「ピイツ」

そんな事を考えていたアイシャの意識は、カースを受けても全く威力の減じない、異界の魔法によって沈んだ。

死ぬかと思つた、状況的にはゴライアス戦の時よりもやばかつたんじゃないだろうか。相手がそこそこ重いとはいえ、剣で攻撃してくれて助かつた。

例えば、もしランクアップした相手がフリユネであつた場合、大斧でぶちゅつと潰されていたかも知れない。

4人のカース持ち達は戦闘能力は余りないようだ、特に抵抗を見せなかつたのでちやつちやと春姫を助ける。

「・・・よつ、この前の客だけど」

どう話しかければいいのか、分からなかつたので軽めな挨拶。すると春姫は目を見開き、この前の焼き直しの様に涙を流した。

「何故・・・ここに・・・」

来たくは無かつたかな・・・もちろんそんな事を言う訳には行かない。

「ちよつと不穏な噂を聞いたもんで。嘔吐きにはなりたくないし・・・助けにやつて参りました」

それに対し、囚われの姫は

「どうして……、助けてなんて、言っていないじゃないですか！」

今までの人生で、味わったことの無い真剣な感情。どうしようもなく、助けて欲しくて。それでも助けを求める事が出来なかった女の子の叫び。前に出会った時、棘を密かにぶつ刺してきた、その感情が今爆発した。

見覚えのない悪行、家を追われ、見知らぬ男に買われ、勘違いながらも多くの男に春を売り、拳句の果てにはあつたことも無い女神との戦争の為、殺されそうになっている。そんな状態なのに、彼女は助けを求めなかった。無理だと分かっているから、どれ程理不尽な目に会い、その命を散らす羽目になっても手を伸ばすことは無かった。

本で読んでいた時、そんな事は気にしなかった。どうせ、ベル・クラネルに助けられるヒロインだ。山場を乗り越えて、過去を精算し、後はオールオツケーハッピーエンド。悲しい過去はあるものの、ソレは輝かしいこれからを彩る為のスパイスに過ぎない。

現実になって思った、最高にクソツタレな話だ。しかも、俺なんかがいやがるせいで物語は崩壊した。英雄は現れず、女神魔王に囚われた春姫女王を助けるものは居ない。

今思えば、俺は何もしない方が良かった。冒険者に向いた能力が発現してしまったのが悪かったのか。そもそも関わるつもりなど無かったのに何やかんやで主人公の邪魔をして、こんな事になってしまった。

ここに立つべきなのは俺ではない。クラネル・・・いや、ベルだ。しかし、今居るのは俺だけ、助けることができるのも・・・俺だけ。

原作とは全てが違う、そして、現実には少しの違いが大きな齟齬に至るものだ。今後どうなってしまうのかは分からない。でも、

自分の過ちは自分で償わなければならない。

助けよう、俺の全てをかけて。

「俺が助けたかっただけだ！文句を言うなら、助けて欲しそうにしてた自分の表情筋に言ってる！」

春姫の手を取り、無理矢理お姫様抱っこにして部屋を飛び出した。

ハハッ！ヤベー！本当の英雄みたいじゃないか！一人の女の子を助ける為に、巨大な組織に喧嘩を吹っかけちゃった！

「落ちたら怪我すんで、大人しく助けられろっ！」

「なんで、なんで私なんかを！」

なんで、か。この世の中には悲しい過去を持つものなんて幾らでも存在するのかもしれない。しかし、その全てを助けるなんて俺には出来る訳が無い、なら、目の前にある悲劇ぐらいは全力でハッピーエンドにしてやる、ソレが俺のプライドって奴なんだ。

俗人矜持

俺は、人を見捨てない。俺にはそれが出来る。誰であろうと、どんな絶望的な悲劇がソイツを襲つていようと、俺がいる限りバッドエンドはお呼びでないんだよ！

平凡に埋もれた俺が、この世界に来て力を得た。調子に乗っていると思われても仕方がないが・・・助けられるなら、助きたい。他の誰でもない、自分自身で。そういうものなのではないだろうか。

「お姫様は、無条件で英雄が助けに来るもんなんだよ」

「・・・お、お姫様つて、私はそんな上等なものでは・・・」

「まあその話は置いておこう、忘れていたが今は世界がヤバイ」

「・・・え？」

もうちよい、シリアスに浸りたかった感じもあるが、冗談抜きで世界がヤバイ事に気がついてしまったので雰囲気壊していくんですねー、はい。

忘れるとこだったよ、ベルの救出。

遭遇 1

春姫から、例の地下道？とにかく、ベルが監禁されているであろう場所について尋ね、案内をして貰った。ここに来るまでに、近くのイシユタルファミリアの団員は気絶させていたせいか、疎らな襲撃はあったものの問題無く対処出来る程度だったのが嬉しい。

そして、地下道へとたどり着いたのだが……

フリユネを見つけた、それはいい。まだ行為には至って居ないのだろう。しかし、その手に持っているものが問題だ。

「あれ……もしかして精力剤じゃ」

小瓶に入った赤い液体、見たことは無いが知識と照らし合わせると、多分そうだ。フリユネはすぐ近くの部屋に入った、そこか。

「此処で待つてろ、なんかあれば部屋まで逃げてきていいけど」

「わ、分かりました」

春姫は置いていく、部屋の中にはレベル5の冒険者がいるのだ、戦闘になればL V I の春姫は死にかねない。

ドアを開きそつと中を伺うと同時に俺「オエエエエ！」

ヒキガエルの下着姿を見てしまった、鬱だ、殺そう。

「ライトニンググライトグライトグライトグライトグ」

「ぎやあああああああああああああああああああああ!!?」

焦げてプスプス言ってる汚物を極力目に入れないようにし、サツとベルの拘束具をぶち壊し連れ出そうとした、その時。

「レイニーっ!」

「どわあっ!」

ベルが、襲い掛かってきた!と言っても攻撃を仕掛けてきたんじゃないやなくて俺の手を掴み押し倒してきた、と言う意味だが。いや、なんで?

赤い顔

荒い息

いきり立つアレ

・：視線を巡らせると、例の小瓶がすっからかんになった状態で転がっていた。おつとお、発情中って訳ですかあ。

「ハア、ハア、レイニーって以外と女顔だよね・：!」

「殺すぞテメー!」

ダメだ、正気を失ってやがる！俺はホモじゃねーしお前も違うだろ!?クスリなんかに負けてんじやねえよオイ！

ステータスの差を活かし、拘束を振りほどく。息を荒らげながら足にすがりついて来るその姿は幾ら美少年でも気持ちが悪い。やめろンなもん擦り付けんな!?

「ライトニング！」

「イギツ!？」

・・・もうベルはダメだな。クスリが抜ける迄使い物にならねえ。むしろ所構わず発情されたら邪魔にしかなんねえよ。気絶したベルを見詰め、そんな事を考えた。しかし、誰かに預けようにもレベル3であるベル・クラネルの暴走を止められるものなどそう居ないし、外間が悪い。女好きの英雄つてのも居るとは思うがベルはその路線行っちゃダメだろ・・・。

そして、何処かに拘束するとしても、抵抗のできないベルをパクツと・・・可能性としてはある。

まあ、ここで考えていても状況は進まない。とりあえずフリユネが起きる前に春姫と逃げ出そう。

通路に居た春姫とは直ぐに合流出来た。そして

「と、殿方の・・・」

ん？なんか、嫌な予感が。

「裸あああ——！！」

ポテツと倒れた春姫、仰向けにしてみるが完全に気絶していた。

そう言えば鎖骨見るだけで気絶する様なクソザコナメクジだったつけ。

その場に残されたのは、発情中の兎と発情中の兎をみて発情した狐、それを冷めた目で見つめる英雄の卵であった。

—————

生物はストレージに入らないので、2人を脇に抱え、地下道を出て路地裏に潜む、ただ2人は起きる気配が無い。まあベルは起きなくても良いけどね。ぺちぺち春姫を叩いてみたのだがううんと唸るのみ。

どうするか、今の空は茜色。色々なイベントが本格的に起こるのは夜に入ってからだがど……フレイヤとかがどうなるのか分からない

……待てよ、そう言えばまだヤマト・命さんが居たわ……コレは放置で？いや、ソレを人質にとってまたベルを巡ってなんやかんや起こる可能性もあるしコレも助けねば……？

しかし、今の自分は重い荷物を2つも抱えている状態だ。幾らステイタスの恩恵で力が人間離れしていると言っても俺の手は2つ、手の塞がった状態で敵陣に突撃するのは

基本的に馬鹿の所業では無いだろうか。

せめてベルさえマトモになれば春姫を預けて動くことが出来るんだけど……ソレも叶わない。起きれば誰でも襲いかねない危険人物だ。

「……あ、そうか。ここで拘束すりゃいいんだ」

まず剣を取り出しまして、壁に刺します。ぶっ刺します。5本ぐらい。んでいつかの投げ縄を再び購入し、結びを解いて全力で剣に括りつけて括りつけまくる。最後に手首に残っている手枷に巻き付け、不壊属性の拘束具の完成である。誰も見ていない事を確認してから戦争遊戯の時に使った魔法使い装備に着替え、

「ゾーンゾーンゾーン」

魔才が上がっているので防御力も上がっているだろう防御魔法を貼っておく。

コレでレベル5以降の冒険者でも無いと壊せない要塞の完成だ、見た目なんもない所に美少女と美少年が放置されてるようにしか見えないけど。

メモで、俺が戻ってくるまで待っていてくれという旨を伝え、その場を離れる。

時間が押してる、さっさと行動に移らねーと。

—————

とある一室で、ヤマト・命は人生で最大の危機に陥っていた。

彼女はダンジョンで捕えられ、忠実とは違い拘束から抜け出す事は出来ていなかった

た。そこへ、怒りに震えるあの神物が、現れる。

かの神は、部屋に入るやいなや命を、魅了した

万人に通用する状態異常、美の女神の魅了を受け、命の意識は急速に塗り変わっていく。抵抗など意味は無い。どれ程の高レベル冒険者であろうと容易く墮とされるその力は突き抜けた馬鹿でも無い限り耐える事は出来ない。

(このお方の寵愛が得られるのなら他の全てはどうでもいい・・・)

彼女の意識がそれに染められるのにさほどの時間はかからなかった。

「言え、今我がファミリアを襲撃している青髪の男は何だ」

「レ、レイニーのことはあ、良く、わからないのですう・・・」

今まで生きてきた中で受けたことの無い衝撃、身体は意志に反して勝手に昂り、喋る事も儘ならぬほど。これが女神、これが魅了。命は隅に追いやられた理性の欠片でそんな事を考えていた。

「なんでもいい、知っている事を全部話せ」

「は、はあい・・・」

媚びに媚びたメスの声、タケミカツチがこのシーンをみようものなら一度失神してから例え美の女神であろうとも問答無用で殴りかかっていたことだろう。

「レイニーはあ、ゴライアスを本当に一人で討伐したのですう・・・、後はあ・・・アポ

ロンファミリアの時にいた、魔法使いもレイニーですう」

もう誰だよお前、と言うぐらいにキヤラが崩壊している命だが、まあ仕方ない。それよりも、レイニーの情報が流出した事が問題だ。そこから、異常な結界能力の事や、ストレージ、神フレイヤと仲が悪い事、無詠唱ながら半端ではない威力を出す魔法の事など、おおよそ命が知っている情報はイシユタルへと渡った。

イシユタルは思った、そいつが眷属になればあの女に地を舐めさせることが出来る。フレイヤと仲が悪い、最高じゃないか。あの女に勝てさえするならどんな乱暴者でも受け入れよう、今日の事も水に流してやろう。春姫共々、骨の髄まで魅了してやればいい話なのだから。

「よくぞ話した、褒美をやろう」

「ああ、ありがとうございますっ」

イシユタルの手が、命の身体に触れる、その瞬間。

バリバリッ！

「ピィッ」

扉の外から、奇声が聞こえた。それと同時に、奇妙な音も。

なんだ？イシユタルは命から離れ、扉へと近付く、

「おい、なに、がつ!？」

バーン、と勢い良く開かれたその扉を、目の前まで接近していたイシユタルは避ける事が出来なかった。久しく感じた事のなかった鈍痛、一体何が。

「あ、すんません。大丈夫ですかね」

樽をすれば、と言う奴だ。

遭遇2

やっちまった。

再びイシユタルファミリアのホームに侵入してから、命が囚われている場所を聞き出し直ぐに助けに来た。見張り役を気絶させて、ドアを開けたんだけど……前に誰かが立っていた様だ。

女の人は顔を抑えうずくまっている。うわ、顔か。申し訳ない事したな。お詫びに、ヒールをかけておいた。

「い、イシユタル様あ！」

部屋には、拘束されていた命がいる。今度聞き出した相手は本当の情報を教えてくれたらしい。しかし、イシユタルとな？もしやこの女の人か？んじや助けなくて良かったわ……。

と言うか、今、様って言ったな。いや、神に様を付けるのはおかしくは無いけど少し違和感を感じた。命に目をやると、目は潤み、息は荒く。一応仲間であるはずの俺を親の仇かのように睨みつけている。

「レイニー！貴様っ！」

「魅了されてんのかーい」

魅了されてた、マジか。なんで皆戦闘不能になってるんだろう。

拘束具をガシヤガシヤと鳴らし、手首に傷を負うことも厭わずに抜け出そうとしていた。

「レイニーだと、そうか、貴様が。丁度いい、私のモノになるがいい！」

蹲っていた女神、イシユタルが立ち上がり俺の目の前に飛び出してきた。

・・・

「ふふふ、まさか自分から来るとはなあ、お前には価値がある。私のファミリアに会い、天国を見せてやるぞ・・・?」

「嫌です」

即答、分かっていたけど、美の女神の魅了を受けても何も感じなかった。フレイヤと宴で出会った時も何も感じなかったで大丈夫だろうと思っていたが、それが証明された形になる。俺には精神的に訴えかけて来る系の何かはさっぱり効かないということらしい。

「な、何故、何故魅了が効かない!?!」

と、狼狽えに狼狽えているがとりあえず今の所この人に用はない、L v I の駆け出し冒険者より貧弱なその身体に攻撃を仕掛ける訳にもいかないし、する必要も無い。俺は

命にサンダーボルトをぶち込んで気絶させてから拘束を外した。

「ま、待て！魅了が効かない理由はな」

「性根が綺麗じゃないからじゃないですかねえ」

命を抱えたまま、イシユタルファミリアの追手を振り切り2人を置いてきた路地裏に辿り着いた。イシユタルをちよつとばかし貶したら鬼の様な形相で追いかけて来たが所詮低レベル共よ。特に問題はなかったようで、同じ場所にいる2人の姿が見える。ここから見える限り、ベルは未だ興奮状態の様だ。おっ立てたまま暴れている。春姫は未だに気絶中、長すぎんかね。

「ハアツ、ハアツ！レイニー、男同士でも○ッ○は出来るんだよっ!?!」

「サンダーボルト!」

コイツヤベエな。投与された媚薬は、余程強力な物だったようだ、最高に頭がイカれてやがる。

「う、ううん……」

おお、春姫が目を覚ましたようだ。

「あ、……と、殿方の裸ああー!」

うーんこの。気絶が長いと思ったら無限ループに陥っていたんだね、なんか一気に力

抜けたわ。

「ううん……イシユタル様あ……」

命Ⅱサンも未だ魅了の中、戦力にはならない事がわかる。とりあえずベルの反対側の壁に同じような自作拘束具を設置し拘束、防魔法を重ねがけておいた。どれくらいで魅了が解けるのか、そもそも溶けるものなのかはイマイチ分からない。

ベルに適当に布を被せておき、次春姫が起きた時に気絶しない様にする。

そして、考えるのはこれからの事だ。

フレイヤが動いた理由は、ベルが歓楽街に攫われ、歓楽街で騒ぎが起きたからだっただけかな？ベルは原作通り攫われ、俺の襲撃により騒ぎは起きている。動く可能性は充分あるだろう。

「んで、追い詰められたイシユタルは屋上から突き落とされると」

勿論、この通りに行くかは分からないので油断出来ないが、あのフレイヤが突然武器を持つて殺しに行くなんて血なまぐさいことをするとは思えないので大丈夫だろう。

3人は戦力にならない、今回問題であった春姫の救出には成功、しかし不本意ながらイシユタルを助けねばならないということ、原作では逃れられたのだろうイシユタルファミリアからの追撃はこのままだとモロに受ける事になる。

最悪、スキルのことは諦める選択肢もあるが、数ヶ月あればレベル7とか余裕で行き

そうなるベルが死にかけるようなイベントが今後立て続けに起こる、そこで俺は生きていけるか？冒険者を辞める選択肢もある、でも、そうしたらベル達がどうなるのかが分からない。俺だけ諦めて、地上に残るとしても他の団員にまでそれを強要するのは不可能だ、ダンジョンの中で誰かが死ぬかもしれない。

最善は、何らかの形でイシュタルを都市外追放する事。

そうする為にはどうしたものか・・・

「――殺生石だと!？」

ある女神のホームで、男神が叫ぶ。彼はこの中で唯一、殺生石というアイテムの危険性を知っている神物じんぶつだったからだ。

殺生石

名前からしてただならぬ物であることは計り知れるが、その効果は凶悪だ。

狐人の魂たまごを閉じ込める

狐人によって作られ、狐人にしか効果を表さないこのアイテムは、その非情な所行を選んでしまいかねないほどの効果を得る事が出来る。

そもそも、狐人とは獣人の中で唯一と言っ正しい、魔法に才能を持つ種族だ。

と言っても単純に火を出したり、傷を癒すと言うものではなく。キワモノ揃いの呪術

師と呼ばれるような魔法を扱う。

そしてこの殺生石は、その石の欠片を持つ全てのものに、封じ込めた魂の持ち主が扱っていた魔法を

本物と変わらず

それでいて詠唱を必要とせず

魔法のスロットの限界さえ超えて使用することが出来るようになる、とんでもないものだ。

春姫の覚えている魔法は、ただ一つ。

レベルブースト
階位昇華

対象者のレベルを、1段階上に押し上げる反則技

覆すことなどありえないはずのレベル差が数行の詠唱でひっくり返る恐ろしい魔法、ソレをイシユタルは求めた。フレイヤを地に引き摺り下ろす為に。

封じ込められた魂は、元に戻せる。一欠片も欠かさずに元の体へと戻せたのなら、だ。あまりの効果に、神の眷属達は言葉を忘れた。

「殺生石に魂を封じる儀式が行われるのは、材料の性質上満月の夜だけだ」

絶望の中に、一筋の光が差し込む。

「つ、次の満月は・・・!?!」

「・・・今夜だ」

「フレイヤ様」

また別の、ある場所で。

「アレン達から報告が上がりました。【イシユタル・ファミリア】はベル・クラネルを捕え、更に不穏な動きを見せていると。・・・更に、襲撃を受けているとかで、騒ぎが発生しています」

決まりかと、と従者が言い切る前に、フレイヤは椅子から立ち上がった。

「【ファミリア】の子は全て揃っているわね？」

「はっ」

「号令をかけなさい」

「それでは」

「ええ。イシユタルは線を超えた」

底冷えする声とともに、フレイヤは銀の双眸を細める。

「今までの悪戯なら笑って許して上げたけど・・・駄目よ、それだけは許さない」
メンヘラストーカークソビッチ女神が、動き出した。

不穏な気配

思考を終えた俺は、今後の方針を決定した、早速行動に移す。

3人をこのまま放置するのは危険だ、恐らくイシユタルファミリアの連中は辺りを虱潰しに探すだろう。数人のレベル3程度ならまだ大丈夫だろうが1度場所が割れれば次々と冒険者が到着し、いつかは壁が破られる。フリユネが隠れ家になっていた場所の近くなだけあつて未だに見つかる気配は無いが……。

んー……。仕方ないな。まだフレイヤファミリアは来ていないし、速攻で3人を運んで速攻で戻つてこよう。目標はヘステイアファミリアのホーム。

「あ、ヤバイ」

春姫の首輪の事忘れてたヤバイ。ぶち壊して逃げる。いや、マジヤバイ。場所分かんじやん？ 確か。一刻も早くこの場所を離れる理由が出来た、俺は無駄なく高速で行動に移る。

ベルを腰から伸ばした紐に括りつけ、残りのふたりを肩に担ぎ極力振動を起こさないように気を付けながら街を駆け抜けた。検問の様な物もあったが敏捷の差で無理やり抜いた。ベルシールドも使った。その際ベルが目を覚ましてしまったが密着している

状態で雷を落とす訳にも行かないので泣く泣く放置。幼い顔を見合わない勢いで隠語を連発するその様はあまりにも哀れだった。

――

Bannon!

「ひよわあ!?! な、なんだい!?! 敵襲かアアア!」

タケ達と、今後の行動について話し合っていたその時、突如ホームの扉が開きそこから何者かが飛び込んできた。

突然の事態だが子供達は皆対応し、各々戦闘態勢をとった。しかし、それは杞憂だったようだ。

「ベル君!」

「命っ!」

「春姫殿っ!」

「と、レイニー?」

「俺の時だけテンション下げないで貰えませんかねえ。疑問形だし」

いつかの冒険者、レイニーがイシュタルファミアに捕えられて居たはずの3人を抱えていた。もしかして。一人で救出したのかい? どうやって。と言うか、なんかベル君が焦げ臭い。 . . .

「はい、とりあえず拉致られた2人と古い縁のある春姫は助けて来たので終わりましょう、解散解散」

「え？」

しかしまあ、そうか。こうやって集まる理由だったベル君は戻って来たし、タケ達の方も命君と春姫君も帰ってきた・・・終わり、か。

命は、ヘステイアファミリアの所属だが、春姫と言う旧縁の者が現れた為、タケミカヅチは久しぶりに歓迎会の様なものを開きたい様だ。2人を連れて帰ることになった。

「あ、命はイシユタルに魅了されているので気を付けてください」

「お、おう、じゃあ、・・・お疲れさま」

「お疲れ様ー・・・」

タケ達は帰って行った。

「あ、ベル今発情中なので気を付けてください」

「「発情!?!」」

一体イシユタルファミリアのところで何があつたつて言うんだい!?!

ベル君に目を移すと、確かに顔が赤く息も荒い。媚薬を飲んだのは確かなのだらう・・・。

レイニー君は、ベル君を拘束した。・・・壁に穴開けるのは酷くないかなあ・・・?

まあ、ベル君はレベル3だし、それを拘束できる道具なんてすぐには用意できないけど……。

それに、ベル君の恩人だし怒る程でもないかあ。

「じゃ、俺ちよつと忙しいので」

「ああ、また今度お礼をさせてくれよ！」

レイニー君はホームを出ていった。なんだろう、実感が無いな……イシユタルファミリアに囚われたと聞いて、とんでもない絶望感に襲われたのに、あつさり解決してしまつた。

「あ、私、ナアーザさんに媚薬の解毒薬？ 貰ってきますー！」

「じゃあ、俺は護衛を」

「ああ……そうだね。ベル君も苦しそうだし……そうして貰えるかい？」

2人も、ホームを出ていった。残っているのは気絶してるベル君とボクの2人だけ。な、なんだか緊張するな……。前はずつと二人だったのに。

エマ君がファミリアに入って、ヴェルフ君も入って。タケ達とも前より仲良くなれたし、ヘアアイスロスには馬鹿みたいな借金が出来ちゃったけど……ベル君には感謝してる。

ボクはココ下界が大好きだ、ココを好きにさせてくれた、ベル君が大好きだ。まだ出会っ

て1年も経っていないけど、君と過ごした時間はボクの神生の中で1番大切な時間さ。帰って来てくれて、ありがとう。

リイン、リイン・・・

・・・そう言えば、ベル君は発情してるんだっけ・・・

リイン、リイン・・・

今なら誰にも邪魔されず・・・

リイン、リイン・・・

ってダメだ！ボクは何を考えているんだ！

リイン、リイン・・・

ベル君の気持ちも考えずに、意識が朦朧としているところを襲おうだなんて

リイン、リイン・・・

惜しいけど、非常に惜しいけどもっ！自制しようっ！

リイン、リイン・・・

正気に戻った時、ベル君に顔向けできないからね。所で、さつきから聞こえるこの音

は・・・？

「フアイア、ボルト」

ドオン！

壁が爆ぜた

「うひやあつー！」

それと同時に、誰かがボクの上につ！つて、今ここに居る人なんて一人しか・・

「べ、ベル君!?なんで動けるんだい!？」

拘束されているはずのベル・クラネル、その両の手を括りつけていた壁が、破壊されていた。直前に聞いた鐘の音、そしてファイアボルトと呟いたあの声。

拘束を外せぬと思うやいなや、英雄願望アルゴノウトを使い自らを拘束する紐の根元、壁をぶち壊したのだ。

恐るべき性への執着、自宅を破壊してまで、性欲に走ると言うのかつ・・・!

「あ、あの、ベル君つ！嬉しいんだけどさっ!?ちよつと落ち着いて・・うわあああつ
!」

—————
なんだか、嫌な予感がする。

ベルをハステイアファミリアへと引き渡した後、俺は歓楽街へと戻つて来ていた。

遠くに見えるイシユタルファミリアのホームへと近づいて行く俺、今日だけで何度も往復したので道も覚えてる。ものの数分でホームに辿り着いた俺は再び壁を登り、ひよいひよいと空を飛び回つてここらで一番高い建物の屋根の上に辿り着いた。既に

空は暗いが、歓楽街は夜が本番。町中が光を放ち状況を確認する事に支障はない。

街を見ると、外縁部の方では未だに娼館が活動しているらしく、一般人が多く見える。そして中心に近づく程にポツポツと明かりのない店が増えていくが、中心であるこのイシュタルファミリアのホームはバタバタと忙しく動いている様子が伺える。

そして、奴らが現れた。

ドンツドンツドンツ！

街の至るところで、爆発が発生した。今の状況でこんな騒ぎを起こすファミリアなんて1つしかない。

フレイヤファミリアだ。

折れた心

「何が起きている!?!」

街の様子を観察していると、階下からそんな声が聞こえて来た、この声は……

「な、何者かが歓楽街を襲撃しているようです……!?!」

「襲撃……!?!また、レイニーか!?!」

違います、まあ、イシユタル自身も気が付いたようで、顔を青くしていた。

イシユタルの視線は、とある一点に固定される。そこに目をやると、銀髪の女神、フレイヤのお出ましである。

――――
――――
――――
(アレンジ)

「こんなことになってしまうなんて……」

都市を囲む巨大市壁、その南東部から歓楽街を見下ろす優男やさおとこの神は悲嘆めいた声を出す。

羽付き帽子を被ったヘルメスは、背後に従者アスファイを置き、市壁上から街を眺望していた。

「彼等の存在を、イシユタルに知らせてしまったのは他でもない、オレだ……」

今も変わり果てていく歓楽街に向かつて、ヘルメスは言葉を落とす。

胸壁の前に立つ彼は橙黄色の髪と瞳を赤く照らされながらその胸を震わせた。

「オレが原因の一端を担ってしまったなんて……ああ、なんてことだ、胸が痛む……」

両腕を広げ、大仰な身振り手振りをした後、胸を押さえうつむくヘルメス。

そんな主神の背中に、アスフィは冷たい視線を注いでいた。

一際大きな爆発音が光とともに発せられる最中、彼女はおもむろに口を開く。

「で、どこまでが計算通りなのですか？」

眷属の問い掛けに、悲劇を演じていた男神は凍りつく。

豹変する雰囲気、それまでの芝居がかった仕草を止め、アスフィにぎこちなく振り向

いた。

「全部、計算外さ……」

そう言つて、ヘルメスは力無く笑つた。

「なんなんだろうね……レイニー君が全てを壊していく。全てが思いのままになるのはとても詰まらない事だけど、こうも上手くいかないとやるせなくなるよ」

思い通りになつたのはフレイヤの出陣位なものだ、期待していた英雄譚は影も形も残っていない。神の描いた台本は、喜劇に塗り替えられてしまった。

「神の掌オレの上で踊れ、なんて言うつもりは無いぜ、それでも、予想外が過ぎるけどね……」

いやあ、ままならない。下界は恐ろしい所さ」

白い光を見極める事も、出来なくなってしまうた、これでまた振り出しだ。

「よつと」

神イシユタルが姿を消したバルコニー、そこに俺は飛び込んだ。イシユタルはドンドン上に追い詰められる筈なので、後ろから追いかけてようと思う。

リリの魔法で、鼻だけ変身させる。獣人の嗅覚を得た俺は、キツイ香水の匂いを追って行った。匂いは殆ど一種類で、恐らくイシユタルの匂いで間違いない、しかし、大きな階段を登って行くと途中から別の匂いが混じってきた。

キツイ香水とキツイ香水が混ざりあつてキツイ、鼻がもげそうだ。

気分を害されながらも、しつかりと前には進んでいく、コレはフレイヤの匂いだろう、つまり2人は既に出会っている。

存外余裕は無いようなので速度を上げた。ココには被害が出ていないようで、通路も階段も綺麗なままだ、そして、ここに来て男の匂いが追加された。確か・・・記憶にある限りここにいる男と言えば、タンムズとかいうイシユタルファミリアの副団長の筈、イシユタル一筋の癖してフレイヤに即墮とされた尻軽ヤリチン野郎だ。まあイシユタルの魅了がしよぼかったんだらうけどね。ベル程突き抜けてたら魅了は防げるんだか

ら本当に好きならそこまでぶち抜いて欲しい。所詮魅了されて、本心で好きかも分からない気持ちなんてその程度なのかと思ってしまう。

お、追い付いた。まだ逃げているな？イシユタルは後ろを振り向かず一心不乱に逃亡し、フレイヤが静かに追跡する。その傍らには1人の男が追従しており、君はやっぱり墮とされたんやね。

しかし、もうここは屋上なんだけど……。イシユタルはそのまま、自室らしき部屋の扉を開き、中へと入ってしまった。

また、なんか変わったんだな。

扉は豪奢に飾り付けられてあるものの、防御力があるようには見えない。傀儡となつたタンムズがこの場にいる限りイシユタルに平穏は訪れないだろう。

事実、タンムズは1人扉の前に。

大きく振りかぶって……。殴りましたっ！

「ヒイっ！タ、タンムズッ！目を覚ませっ!？」

コソコソと後ろから接近する、するとそんな言葉が聞こえてきた。

「無駄よ？この子はもう私のモノ、貴方には勿体ないくらいの子だわ……。タンムズ、やりなさい」

自分の手は汚さないスタイル、反吐が出るわ。俺は一気にスピードを上げ、現場へと

突入した。

ギーン!

躊躇いもなく振り下ろされたその剣、心の底からフレイヤに魅了されているのが分かる。

「あら、あなたは、レイニーだったかしら。イシユタルを助けるなんて、どういふつもりなの?」

助けないと、スキルの効果が失われる、なんて事は言えるはずが無い。なんで俺は何時でも、言い訳を用意してこないのだろうか? さて、なんと答えれば……。まあ、答える必要も無いか

「答える義理は無い」

「……へえ、私の前に立って、反発する事が出来るなんて……。気に食わないわ、やっぱり、気持ち悪い……」

その言葉を聞いた瞬間、落ち着いていた心が熱を持った。

「自分の意見に口答えしない、タダの人形達が欲しいなら引つ込んでろってんだ」

ピクつと、フレイヤの眉が上がる。まさかそんな事を言われるとは思っていなかったんだらう。

「……ふ、ふふ、面白いことを言うわね。人形? 子供達は別に」

「魅了で、無理やり自分の事を愛させてるだけだろうが、もしアンタがブサイクで、中身が全く変わらなかつたとしたら何人の眷属がアンタの元に居たのか、分かつたもんじゃねえな」

それだけ言い、俺はイシユタルを抱えた。言い逃げしますね、オツタル来たら死ぬし。「ここにイシユタルを殺される訳にはいかないんだよ、じゃあなっ！」

逃亡成功？とりあえず、人通りのない、しかし直ぐにでも人のいる場所に逃げ込める路地裏に逃げ込む。そこでイシユタルに春姫の事と、都市外への逃亡について提案した。

「む、無理だ・・・フレイヤの執念は半端じゃない。何処へ逃げたって、もう・・・」
・・・との事、まあ、言われて見ればそうかも知れん。

「それに・・・私はフレイヤに負けた、目の前で眷属を魅了されたんだ。1番目をかけて居たタンムズでさえも一瞬で・・・、どう足掻いても勝てない事を理解させられた」
精神的にボロボロになったイシユタル、長年目の敵にしていた相手にけちよんけちよんにされて意気消沈している様子。

まあ、恋人・・・とは違うな、コイツらが人間を恋人とまで思っているようには思えない。精々ペットか。

何年も共に過ごしたペットが不倶戴天の敵に寝取られた感じ？それも何十匹と。あまつさえそのペットが自分に牙をむいたと、コレは精神やられても仕方ないですわ。

・・・なんだか可哀想になってきた。嫉妬で狂って非行に走っちゃったけどどうにかマトモな道に戻れないものかね。

「んー、まあ、性根が綺麗じゃないって前言ったけど、見た目なら全然負けてないから好みなんじゃないですかね」

魅了なんて言う変な力があるから面倒なことになるんだよな、俺はなんの影響も受けないからあんまり実感無いけど。

つと、話を戻すか。都市外では無く、イシユタルが生き延びる方法ねえ・・・。

ああ、なら、コレで行こう。普通なら受け入れられる選択肢じゃないだろうけど、今なら。

「天界に帰りたくないなら、ギルドに自首して匿ってもらおうとか。捕まる程度に後暗い事とかあるでしょう？」

未来への1歩

イシユタルは、その提案を受けた。詳しい事は聞いていないが、自首すれば数百年は自由が効かなくなるほどの罪を告白するらしい。資産の大半は没収、更にファミリアは解散。そして今後一生ファミリアを作ることは許されない、その位の処分を受けるだろうと言っていた。それももう天界に帰ったほうが楽じゃね・・・？

ま、まあ、命あつての物種って言うからね、頑張れ。

こうして、消化不良な嫌いはあるモノの、物語は幕を閉じた。

—————

「えー、それでは、無事騒動が収まったことを祝して、乾杯」

「「「かんぱーい！」」」

イシユタルファミリアの騒動は集結した。フレイヤファミリアは多額の賠償金を支払い、ギルドからいくつかの罰則も受けたようだ。あの後、随分なことを言ってしまったのでフレイヤからの逆襲が来るんじゃないだろうかと肝を冷やしていたが、特に何かということは無かった。

そして今、メーティス、ヘスティア、タケミカツファミリアの面々が集まり、豊穣

の女主人を貸し切つて宴を始めている。言葉の通り、無事にこの一連の騒動を乗り切つたことに對するお祝いだ。諸費用の負担の分け方は、メーティス6ヘステイア2タケミカツチ2。まあ、ウチが1番余裕があるので文句は言うまい……。

それにしても、今回の事件もなんとか原作通り(?) 終える事が出来たな……。相違点と言えば春姫がウチに来たこととサミラがウチに来たこととイシユタルが死んでない事位だ、まあ許容範囲……。

「おいレイニイ、呑んでるかあ? 呑んどこうぜえ……」

「俺は酒に弱いからいい、と言うかお前既に酔つてないか」

酔つてねえよおつ、ドンドン酒持つてこーい、と店員にも絡みに行つたサミラ、千鳥足でどう考えても酔つていた。20名弱の小規模な宴ではあるが皆楽しそうで何より……。俺は頼んだ果実水を口に含みながら宴の様子を眺めていた。

そして、少し気になる事が……。紐神様が、やたらと静かなのである。こう言う催しでは無類の絡み酒を披露し煙たがられそうなヘステイア様、今は隅つこでチビチビと飲み物を飲むばかり。意中のベルが、あのピンク髪のエマ? とイチャコラしていてもピクッと反応するばかりで行動に移さない?

何かあつたのだろうか。

「ヘステイア様? 気分が優れないんですか?」

「んん？ああ、君か・・・聞いてくれるかい？」

お、おお、なんか予想外に、やさぐれてる。本当に何かがあったんだろう。

少し外の空気を吸ってくる、そう皆に告げ俺とヘステイア様は店の外に出た。

「君が、ベル君を連れて帰ってきてくれた日、君がホームを出て行った後、二人つきりになる機会があったんだ」

ほう、二人つきり。

「それでね、ベル君・・・魔法で壁を壊しちゃってね」

ん？ちよつと雲行きが・・・

「近くに居たボクに襲い掛かってきたんだよ」

「ええっ!？」

えマジで?!いやヤベーよそれ!ベル完全に終わったわ、主人公として!ヘステイアルート行ったらスキル消えてオワコンっ!?

「まあまだ続きがあつてね、手の紐は何故か外れなかったから、服を脱ぐのが上手くいかなくて決定的な事にはならなかったんだよね」

・・・んっ、ナイス不壊属性。しかし、ならなぜここまで落ち込んで居るのだろうか、心の中にそつと閉まっておけばいい話なのでは・・・?

「最後まででは行かなかつたけど、ベル君アレをボクに擦り付けて、まあ自分は満足してか

ら気絶したんだよね」

「ベル君、正気じゃない時の事全然覚えてないみたいで……でもボクはアレを擦り付けられたんだぜ!?どんな顔で会えばいいのか分かったもんじゃないよっ!」

そこで、今に至ると……いや、とりあえず良かった……まだ終わってない……。ベルは全部忘れてるのか、道理で、俺にも大概な事言っていたのに気にした素振りを見せなかつたわけだ。

「ベル君にこんな事言えば絶対に後悔するし……ボクはどうすればいいんだい……?」
……これは、下手な事は言えないな。

「まあ、良かったじゃないですか」

「良かった……?」

下手な事は言えないが、上手いことを言える脳もない

「人に言いふらせる話じゃないですけど、恋敵よりも1歩リードじゃないですか。この経験を、相手の痴態を知っている、お前より私は進んでいるんだぞと言う余裕に変えることが出来れば恋愛戦争で相手に先んじる事が出来ると思いますよ（適当）」

もう、自分でも何を言ってるのかがよく分からない、勢いで押し切ることはできるか……?

「こ、恋敵……、うん、そうだねっ!ボクはヴァレン某よりも遥かに先の経験をしたん

だね、その通りだっ！」
 押しきれた・・・

サミラ

レベル 3

力・C 604

耐久・D 523

器用・F 354

敏捷・D 511

魔力 H 195

耐異常 H

魔防 I

《魔法》

二

《スキル》

【自己再生】

・マインド精神力を使用し、欠損以外の全ての傷を再生可能

- ・意識の喪失と同時に効果消失

- ・速度は所有者の魔力に依存

【闘争欲求】

- ・非戦闘状態の時間を計測し、任意のタイミングで発動

- ・ステイタス上昇

- ・時間の幅により効果増減

- ・最大3日間計測可能

サンジヨウノ・春姫

レベル・1

力・1 8

耐久・1 3 2

器用・1 1 5

敏捷・1 2 3

魔力 E 4 0 3

《魔法》

【ウチデノコツチ】

レベル・ブリスト
・階位上昇

- ・発動対象は1人限定
- ・発動後、一定時間の要間隔^{インターバル}
- ・術者本人には使用不可

《スキル》

メーテイスフアミリア

主神

メーテイス（ニート）

団長

レイニー（魔法剣士）

副団長

リリルカ・アーデ（アーチャー（物理））

平団員

ニナ・アイリス（シーフ）

ダフネ・ラウロス（軽量戦士）

カサンドラ・イリオン（ヒーラー）

サミラ（タンク）

サンジヨウノ・春姫（バツファー）

「オレはサミラだ！よろしくなっ」

「サンジョウノ・春姫と申します、よろしくお願い致します」

宴もつつがなく終了した、翌日。

最後の最後まで乖離し続けた原作とのお別れの日、そして新たな団員を迎える記念の日である。

名前の付いたモブと称されるアマゾネスのサミラ、むつつり疑惑のある狐人の春姫。男キャラなんか神とヴェルフと桜花以外敵キャラじゃねえか、と評判のダンまち世界の法則に違わない、見事な黒一点ファミアリアの完成という訳だ。

入団試験は、サミラはその、夜系のアレ、春姫は極東の知識をメーティス様に提示し、無事に合格した。

コレから先、俺の知っている事は多くない。8巻は友人に後日談的な物だと聞いて手が伸びず、ソレから購入していないからな。まあ、暫くは平穏だと言うことが分かっただけ良いのだろうか。

俺というイレギュラーを抱えながらも世界は物語を紡いでいく。

これは、少年が歩み、異物が狂わせ、女神が記す、

――
【眷属フアマリア・ミイスの物語】
――

〽
完
〽

閑話

ラキア王国軍、出兵。

朝イチでその知らせを聞いた瞬間、あれ？平穏なハズの未来が・・・と、絶望に沈みそうになったが、よくよく聞いてみると伝えてくれたりりの口調に悲嘆はない。

曰く、またか

数日は交易が滞り物資が高騰するだの、冒険者が出払ってダンジョンにモンスターが増えて危険だの少しばかりの愚痴はあったものの、特に暗い雰囲気は感じられなかった。

「ええと、大丈夫なのか？その、戦争が始まるんだろ？」

「・・・？何を言っているんですか？」

戦争ではなく、ごっこ遊びですよ。

—————

世界最大の規模を持つファミリア〔アレス・ファミリア〕

軍神アレスに率いられたこのラキア王国という国、非戦闘員を合わせると60万の団員を抱える国家系ファミリアだ。

かつては「クロツゾの魔剣」を擁し、不敗神話を築き上げたこの偉大なファミリアは、
――低迷していた。

戦力の要であった「クロツゾの魔剣」は、度重なる自然破壊により精霊達の怒りを買
い、その全ては砕け散り、クロツゾの家系に与えられていた魔剣作製の能力も消えた。

魔剣を失ったラキア王国は脆く、これ迄に奪取してきた土地を全て奪い返され、その
規模は魔剣を得る前に逆戻りを果たした。

こんな歴史がある故に、魔剣を作る事の出来たヴェルフは周りに魔剣の鍛造を強要さ
れ、それに嫌気がさし国を出たのだが、それは今はいい。

要は、ラキア王国が強大であったのは昔の話、オラリオ外のモンスターは非常に弱く、
同じ種族であってもその戦闘力には天と地の差があるらしい。そして、それを倒してい
る兵士達の実力もそう。オラリオの外でトップクラスの实力者となるとレベル3のこ
とを表し、殆どの人間はランクアップを経験せずに引退する。

ラキア王国もその例に漏れず、平兵士は軒並みレベル1、百人隊長クラスでようやく
レベル2がちらほら。将軍クラスがやっとこさレベル3、その程度である。

それでも数が尋常ではない為、オラリオの外では・・・最強のファミリアとも言える。
外では

死なずにダンジョンに潜っていれば数年後にはレベル2になれるような、このオラリ

才は違う。トップクラスの下限はレベル5である、都市には複数のレベル6も在籍し、量より質のこの時代において最強の勢力といえれば迷宮都市オラリオが圧倒的にトップを獲得する。

そんな両者が争うこの戦争

蹂躪である。

わかりやすく例えるなら、人数の増えたアポロンファミリアとロキファミリアの全面抗争と言う感じだろうか。レイニー1人に容易く蹴散らされた100人の眷属達。ソレがいくら増えた所で、レベル6を複数擁するロキファミリアに勝利する事が出来るはずもない。

戦術や地形の利に頼ろうと行動に移しても、オラリオとて戦争に通じていないわけではない。ただでさえ地力で圧倒的に劣るラキアは奇策妙策全てを投じようと簡単に対応するオラリオに、今まで何度も蹂躪されてきたらしい。

『第六次オラリオ侵攻』

この戦争の、戦争ごつこの名前である

「ほへー……」

「痴呆みたいな声を出さないで下さい……と言うか、本で見なかったんですか？」

もう忘れた、言われてみれば何回か見たような気もせんでもない。

そう伝えると、心底呆れた様な顔をされた。だって、しょうがないじゃないか。俺、頭普通なんだ。

しかし、この戦争がオラリオにとつて不利益を被る災害では無いことは分かった。ただ、この展開からどうやって友人の言っていた後日談的な物になるんだ？一応戦争中だぞ。流石に俺の存在が戦争を引き起こす程のイレギュラーになったとは思えない。

・・・まあ、知らない事を考えていても仕方ないか。

「あふようございませうにーさん・・・」

ちようど、呂律の怪しいカサンドラがリビングに降りてきた。それを皮切りに次々と団員達が生きてリビングに降りて来る、昼ご飯の時間である。

リリと春姫とカサンドラが厨房に立ち、料理を作り始める、3人は料理が出来る。俺は男料理しか作れないし、他の女性陣も同じだ。神様とか何年生きているか分からないのにさっぱり家事ができない。はーつつかえ。

昼食が出来るまで、談笑する、しかし俺にガールズトークに参加するほどのトーク力が無いので相槌を打つだけ・・・。サミラが猥談を振ってくるが女の子と猥談し始めたら終わりだと思ふ。

昼食が完成、今日はパンとおかずのグラタン、スープの3つだ。スープは具沢山で

しっかりと栄養を摂ることが出来る、美味しい。

食後はカサンドラの今日の夢の話を書くのが日課だ。何の変哲もない夢も多いが、たまに予知夢を見るらしく、トラブルを事前に知らせてくれるカサンドラは非常に有難い存在である。ほかのメンバーは頑なに彼女の予知夢を信じないのが気になる、遠回しな言い回しだけど、実際に予知した物事が目の前で起こっているのに何故……

まあ、そんな事もありファミリアの中ではカサンドラが一番仲がいい。

腹もこなれた頃、話さねばならない議題をリリが持ち出した。

すなわち、春姫をダンジョンに連れていくか否か。

「リリは何がなんでも付いてきて欲しいと思っています。春姫様の『魔法』は説明が不要なほど、非常に強力です」

「でもさ、春姫さんだっけ？かなりステータス低いんだよね、戦い方も知らないみたいだし、危険じゃない？」

「あー、そう言えば、その事で渡したい物があるんだったわ」

「？全員の顔に一斉に疑問符が浮かび上がった。その視線は声を上げたレイニーへと向かう。」

「コレをどうぞ、と」

「コレは……？書物の様ですが」

俺が取り出したのは古い本、誰にも読めない、意味不明な文字が題名の欄に載っており、その詳細は不明だ。ちなみにページを捲ることは出来ない。

これは、先日の騒動を終えレベルが70になった時にショップに出現したアイテム、『魔導書』である。この世界に存在する魔導書とは違い、この本の所有者は特定の魔法を使えるようになる、という代物だ。

値段はなんと、1つ100万G。残金は2万G・・・

大した金策をしていなかった上に、全く予想していなかった高額アイテムだったので一つ買っただけでGが心元無さすぎる状態になってしまったが、使い捨てるものではないので損はしないものと思われる。

開放された魔導書は3種

シールド

ブラスト

リペア

各魔法の効果は名前の通り、ゲームではまだ買えなかったアイテムなので、正直どれ程の効果があるのかは分からないので期待し過ぎては居ないが、回復魔法なんかはたえしよぼくてもあれば嬉しい物だろう。

そして、今回買ったものはシールド。買った時に、自分で効果を試したが容易く割れ

たのでレベル5とかの攻撃はさすがに防げないみたい。

「サミラ、ちよつとこの盾殴ってみてくれない？」

目の前に盾を出現させ、サミラにそう声をかける。レベル3の冒険者である彼女の攻撃は十分な検証材料になってくれるだろう。

「おうー！」

席を立ち、机から少し離れた場所に移動する。この盾は追尾型なのだ、便利だな。

向かい合う俺達を他のメンバーが真剣な眼差しで見つめる、コレが使えるか使えないかで、今後の方針に関わりかねないからな。

指をポキポキ鳴らして準備完了

気合いの声と共にサミラは突撃する。

ビキイツ!?

「硬えっ!!」

手加減無しで盾を全力で殴った、すげー痛そう。回復魔法を掛けようと思ったが、サミラの右手は淡い光に包まれ、次第に腫れが引いて行った。

そう言えば、自己再生と言うスキルがあつたな。それにしても痛いのに代わりはないと思うが・・・

「レイニー、素手じゃキツイぞコレえ、オレ全力で殴ったのによー」

そう言うサミラの視線の先には、全体にヒビを作りながらも砕けずに原型を留めている盾の姿が。無手とはいえ前衛型のレベル3の全力を受けて尚壊れない。充分にその実力は伝わったんじゃないだろうか。まあ、相対的にレベル4の攻撃には耐えられないのが分かったのだが、中層なら事足りるだろう。

魔法に対する防御力もイマイチ分らないが、俺のライトニングは防げたので長文の魔法以外は大丈夫かと思われる。

「じゃ、コレ春姫が持つてくれ。使い捨てじゃないし、危ないと思ったらバンバン使つてくれよ？」

「え、そ、そんな……こんな高価そうなもの……」

「金渋つて死なれるのは絶対に嫌だから、受け取つてくれ、頼む」

そう言うのと、春姫は躊躇いながらもそれを貰つてくれた。

参加に反対していたダフネも、春姫の魔法の有用性は認めていたので安全の確保された今、強く反論する気は無いようだった。

8巻

フルメンバー

光量は充分にあるとはいえ、迷宮はあくまで迷宮である。

広いとは言えない通路、冒険者達を襲う閉塞感は彼らの精神を少しずつ削っていくのだ。

「レイニー様、あまり本気を出されると私達の経験にならないので春姫様達の護衛でもして下さい」

ダンジョン15階層、そんな事を言われた俺はパーティーの後ろでいじけていた。

「レ、レイニー様、どうか気を確かに・・・」

「そ、そうですよ、別にリリさんもレイニーさんが嫌って訳じゃ・・・」

後衛の2人が優しい・・・、前方では、前衛4人と言うバランスの良くないメンバーながらも危なげない戦いを披露する団員達だ。そこに俺が入ればそれはもうヌルゲーになって経験にならないのは納得出来る。大人しく護衛しとくか・・・。

春姫達と同じ、後衛だったハズのリリは随分とアグレッシブなスタイルになっている。狭い所でハンマーを振り回す訳にも行かないため武器はかつて俺の作成したミョ

ルニル（笑）のままだが、あの後追加で複数個作つたためリリは投擲具としても活用している。

遠くから火を吹いてくる厄介なヘルハウンドは死なないまでも行動を止められ、アルミラージ等の軽量級は重さを感じさせないリリの1振りで沈められた。

ニナは、まあ。いつの間にかリリに追い抜かれようとしている事に危機感を抱き必死で頑張っているようだが如何せん。と言うよりアルミラージ以外に攻撃が効いていない。敏捷はそのレベルにそぐわない高さなのでどのモンスターにも先手を取れているが火力がない。それに耐久も所詮レベル1の為無理を通すことも出来ない。

これからに期待といったところか。

ダフネ

攻撃の通るニナ

サミラはもうガンガン行くなあ、ガントレットを装備した完全なインフアイト。敵の懐に飛び込み次々と魔石を打ち砕いていくその様はモンスター相手にダンスを踊っているかのよう。

そして換金対象が減つた事にリリから文句を言われるまではセットだ。

春姫とカサンドラは必要になる場面が今は無いのでサポーターの真似事をしていた。

ビキビキ・・・

つと、傍の壁にヒビが入った。モンスターが産まれるのだろう。春姫達の前に立ち、モンスターを迎え撃つ姿勢を見せる。

「キュー」

「アルミラージか」

現れたのは小柄な体軀に見合わぬ好戦的な気質をしたモンスター、アルミラージ。手斧を投げつけ冒険者に手傷を負わせるそのやり方は何処と無くりりに似ている、小柄だし。

「春姫、アレ、使ってみてくれ」

「分かりました、では・・・シールド」

モンスターと人間を分けるように出現した半透明の壁、およそ2m四方の物体はモンスター目の目に奇異に映ったようで、怪訝そうに動きを止める。暫く待ったが、どうも警戒心が強く、じわじわと離れようとする動きすら見せていた。

春姫も、どうするべきかと困惑している。仕方が無いので、壁を迂回して自分でトドメをさした。

多少知恵のある生物なら、警戒するのも当然か。

次に現れたのはヘルハウンド。前回の反省を活かし火を吹き、止められないタイミン
グでシールドを出してもらった。結果は無傷。

横側から抜けてくる熱風は防げないものの、直接的な炎は完全に遮断することが出来た。原作ではヘルハウンドの炎は魔法扱いだったので、最低限の防御性能は保証されたという事になる。

「魔法使い？」

次の日、ダフネが俺の部屋をわざわざ尋ねてきたかと思うと、突然そんな事を言い始めた。

「そう、団長も分かっているとおもうけど、今のファミリアはバランスが悪い」
飛び抜けて上にいる俺を除くと、

準壁役、そしてステイタスの暴力で中火力のサミラ

軽装甲小火力のニナ、ダフネ。

遠距離小火力のリリ、と言うかそもそもサポーター。

回復のカサンドラ

直接戦力にはならない春姫

後衛の火力が圧倒的に不足している、と。

ベル達へステイアファミリアは、その問題をクロツゾが作製する魔剣やベルの英雄願望で補っていた。生半可な魔法使いよりも強力なその力で。

そもそも魔法使いと言うのは珍しく、100人冒険者が居れば半分は魔法を持つておらず、その中で探索に有用なものとなるとまた半分に数を減らす。さらに攻撃、防御、補助と細分化して行くその魔法達、そう考えると団員のほとんどが魔法を使える現状は恵まれているのだが、欲を言えばといった所だろう。

「そりゃ、俺も誰か来て欲しいなとは思ってたけども」

脳裏を過ぎるのはあの酒場の店員、しかし来てくれる訳がないので即座に消去する。

「このファミリアには、面倒な入団条件もあるしなあ・・・」

「ああ、そう言えば・・・」

この間ダフネ達を無理言って入れさせた時に、主神が愚痴愚痴言っていたのでまた新たに無理やり入れると言うのは好ましくない。ついでに俺の豆知識などはとうに品切れである。

あ、それは春姫かサミラに頼めばいいのか、まだ知識もあるだろうし。

「この前メーティス様が2人から知識を搾り取って行ったから無理だと思っわ」

・・・俺の知らぬ所で対策は取られていたようだ。

総合すると、今現在魔法使いの不在による問題は表面化していないが、硬い敵に苦戦する事がある。敏捷は皆高い為数で来られるのはどうにでも出来るが圧倒的に強い個と戦う時に面倒な事になると。

「団長だって、威力自体は大した物じゃないし」

うぐつ、ま、まあ確かに中層の敵ならライトニングを直撃させれば死亡するがソレはシヨック死。イグニスをミノタウロスに当ててみると全身を炎に包まれながらも即死とは行かなかつたし、破壊力という点ではそう凄いものではない。まあ普通で言うところと異なる短文詠唱な上にこの効果、その多様性。充分な筈だが・・・、まあ、人を増やして新たな選択肢を手に入れる事は悪いことでは無い。最悪俺がプロミネンスフレアぶち込むけど。

「しかし、勧誘した所で人が来てくれるものか・・・」

「まあ、その問題もあるわね、まあ、今すぐに必要な訳じゃないし、おいおい解決すればいいわ」

そう言つてダフネは部屋を出ていった。魔法使いか・・・、どうしよう。

—————
それから数日、ダンジョンに潜り続けGが多少貯まった所で新たな行動に移る。

皆に装備品を配るのだ。

俺の持つスキル、「万物商店」で手に入るアイテムは全て不壊属性、修理の必要は無く経済的である。

装備に付いている効果は俺以外には発動しないのが難点ではあるが不壊属性と言う

だけで武器にしろ防具にしろ、そんじよそこらの装備よりも優秀なのだ。

用意したのはコチラ

銅の短剣

雰囲気だけはある安物の杖

動きやすい初期の革鎧

刺々しいが性能に特徴は無い籠手

人数分の鎖帷子

シンプルな見た目のロープ

しよぼくない？そう思われるかもしれないがこれでいい。実際に鍛造された訳では無い商店の装備達は銅だろうが鉄だろうが、オリハルコンであろうが俺が装備しない限り硬いだけの物質だ、形状による差異はあれど性能に違いはない。

Gに余裕がある訳でもなし・・・、リリは儉約家なので賛同してくれるだろう。

「別に良いのですが・・・、そうだ。折角落ち着いてダンジョンに潜れる様になったんですし、1度レイニー様の商店のアイテムを見せて頂けませんか？何か必要なものもあるかもしれません」

「あ、あたしも気になるー」

オレも、私もと団員達の希望に押され、抵抗の甲斐無く多数決で商店の物を公開する

事になった。

「このアクセサリー可愛い！」

「オレこのカッコいい籠手がいいんだけど」

「バックパックは売っていませんか・・・」

「いち・・・じゆう・・・あ、あの魔導書が100万G・・・っ!?きゆう」

春姫えっ!?

少し、トラブルと支出はあったものの平和な1日だった。

裏側

「あの男はどうしているの？」

「はっ、ファミリアの団員と迷宮の探索に赴いているようです。特に動きは見られませんが」

神々の住まう場所バベル。その最上階に居住区を構えるフレイヤは今日も部屋に引きこもり、手足のように使っているオツタルからの報告を受け取っていた。

最近、レイニーは監視されていた、某冒険者の様な視線察知能力の無い彼は全く気が付いていなかったが、ファミリア内以外の全ての場所で誰かが常に彼の事を監視していたのだ。ダンジョンでさえも。

「こちら、メーティス・ファミリアの団員の戦力の推察です」

ギルドで手に入る公式情報の他に、独自の調査でメーティス・ファミリアの面々の能力は明るみになっていた。

レイニー

公式レベル2

メーテイス・ファミリア団長であり、信憑性は低いもののゴライアスを単身討伐、レベル2に至る。冒険者登録から半年、非公式の2つ名は『殺戮者』スレイヤー。さらに、レベル5冒険者であるフリユネ・ジャミールに勝利。レベル4冒険者タンムズの攻撃も受け止めていた所から、本当のレベルは4以上であると思われる。

超短文の炎、雷、防御。更に、回復と思しき物を含め4種類の魔法を扱う。短文ながら高威力。スロットの枠を越え魔法を扱っている為、『千の妖精』サウザント・エルフの様な希少魔法を所持している可能性がある。

剣技は兇戯に等しい有様だが、時に異常な程冴え渡った技を見せることもあり、要注意。

特記事項

耐久に秀でていて、ゴライアス戦では何度も直撃を受けつつも死亡には至らなかったとの事。

二ナ・アイリス

公式レベル1

元ソーマ・ファミリアの一員であり、後述するリルカ・アーデと共にファミリアを脱退。敏捷特化型、中層探索時ヘルハウンドに攻撃が通らず苦戦している事を確認、レベル通りの能力であると思われる。

特記事項

無し

リリルカ・アーデ

公式レベル1

元ソーマ・ファミリアの一員であり、前述のニナ・アイリスと共にファミリアを脱退。冒険者としての才能が無くサポーターとして働いていたはずだが、何らかのスキルの発現を切っ掛けに戦闘力を手に入れた。重量物を軽々と持ち上げ敵へと投擲する。中層探索時、アルミラージュを吹き飛ばしていた。

レベル1の上位、あるいはレベル2と思われる。

特記事項

リリルカ・アーデのファミリア脱退後、下級冒険者の中で広まっていた『装備を盗む小柄なサポーター』の噂が途絶えた。何らかの関連性がありえる。

ダフネ・ラウロス

公式レベル2

元アポロン・ファミリア

ギルドの情報では、短剣を扱う敏捷型の前衛。自分単体の防御魔法を所持しているが、使用する場面がなかった為詳細は不明。

指揮官としての能力を持ち、探索時に指示を出している様子が見受けられた。

特記事項

無し

カサンドラ・イリオン

公式レベル2

元アポロン・ファミリア

希少な回復魔法を使用する。最低限の自衛も可能ではあるが、レベル通りのステータス。回復術士としての技量は不明（レイニーが多くの場合対応するため）

特記事項

レイニーと特別仲がいい模様。

サンジヨウノ・春姫

公式レベル1

元イシユタル・ファミリア

ギルドに情報が無い、また探索時も戦闘には参加しておらずサポーターとしての働きをしていた。

短文の防御魔法を所持しており、その硬度はヘルハウンドの炎を完全に防ぐ程のもの、魔力特化の後衛と思われる。攻撃魔法の発動は確認されていない。

特記事項

無し

サミラ

公式レベル3

元イシユタル・ファミリア

無手で敵に接近戦を挑むインファイター。素早い身のこなしと、多少の被弾をもつてもしない耐久を持つ。

ギルドの情報ではマインドを消費し怪我を癒すスキルを所持している模様。

レイニーを除いた中で一番戦闘能力が高く、探索時は進んで前衛を担当していた。

特記事項

無し

「・・・やっぱり、問題はこの男ね」

その戦闘力が計り知れない。世界最速兎であるベル・クラネルには劣るものものそれに次ぐレコードホルダー。しかし、今現在レベル3であるベルよりも高レベルなタンムズ、フリユネの撃破。急激な成長を遂げていることは間違いない、レアスキルを所持しているのだろう。更に、ユグドラシルの杖・・・本当に底が見えない。

不穩の芽は早々に摘み取りたい、そう思つて監視をつけたのだが、それで分かつたことは簡単に手を出すには相手の戦闘力が未知数であると言うもの。

少々言動や行動が目障りではあるが明確な敵意を向けられている訳では無い、可愛い我が子を危険に晒してまで潰したい程では無いと、最近は考えていた。

「それで、繋がっている神の情報は来ていないの？」

「はい、そちらの方も動きはないようです」

「そう簡単には尻尾を出さないという事ね・・・」

「監視を続けなさい」

「はっ」

邪魔さえしなければいい、イシユタルの時の事は、彼を助けたその功績で許してあげる。でも、次は・・・

「ダメだもう我慢出来ねえ！」

「ど、どうなさつたのですか・・・？」

リビングでのんびりとした時間を過ごしていると、話し相手であったレイニー様が突然叫び出しました。直前まで朗らかに話していたはずなのに、何があつたというのでしょうか。

「春姫．．．一生のお願いだ、尻尾を触らせてくれ．．．（土下座）」

「ふえっ、し、尻尾ですか？」

獣人にとつて尻尾や耳を他人の自由にさせることはその者に対する無類の親愛を示すのですが．．．、そこまで考えているようには見えません。

と言うより、何処か様子がおかしい．．．？目が血走っていて、正直に話すと少し怖いです。

「俺はっ．．．俺はケモノじゃないハズなのにつ！春姫の尻尾が俺を惑わせるんだよっ．．．！」

「そんな事を言われても．．．」

「何もなー、という物はよく分かりませんが理不尽な事を言われているのは分かります。獣人の尻尾はそう易々と触らせていいものではないのですよ？」

色々と敏感ですし。

「うう．．．、ちくしょう．．．っ」

．．．

「．．．耳なら、ちよつとぐら」

「ありがとう！」

「嘘泣きですか!?!」

騙されました！あまりに悲しそうなので、妥協点として許可をだそうとしたら、食い気味に復活しましたよこの人。しかし、許可を出してしまった手前今更拒否する訳にも……

「ちよ、ちよつとだけですからね……」

「ああ、任せてくれ」

し、心配です……、普段の凜々しい（？）レイニー様は何処へ行つてしまわれたのでしょうか……。

しかし、コレは考え方を変えてみればチャンスなのでは？今このファミリアは女所帯です、しかも、その多くはレイニー様に少なからず好意を抱いていて……。この前、サミラ様が「媚薬盛つて襲つちまおうぜ」とレイニー様の不在の際に提案された時何人かがピクつと反応したのを見ました。

結局リリ様が「レイニー様は回復薬ポーションを含む薬物全般が効果を発揮しないようなので、無理だと思えます」と古参ゆえの情報と言葉にした為作戦は廃棄されました。いえ、勿論出来たとしてもやりませんが……、勿論です。

ともかく、ライバルの多いこの状況で、レイニー様が私の耳や尻尾に執着を見せるというのにはチャンスです！少しばかり恥を忍んで、一気に距離を……

ムニツ

新たな力

イシユタルファミリアの騒動を終えてからは特に事件も起こらず、ダンジョンに潜って何事も無く帰ってくる日々が2週間ほど続いていた。

その間に俺のステータスは飛躍的な成長を遂げ、耐久は再びカンスト。魔力・筋力は800を超えその他のステータスも500を上回って来ていた。

なに、ちよつとヘルハウンドと焼肉パーティーを開いていただけだ。

最近、リリの成長が凄い。中層で積極的に戦闘に関わった事を神様は経験と認め、ステータスは破竹の勢いで育っている。コレからが楽しみだ。

後は二ナはレベル2に到達した。中層での戦闘経験は二ナに高位の経験値、偉業をもたらしたらしい。

発展アビリティは走者^{ランナー}と言う一般的なものの、敏捷、スタミナに常時補正が掛かる。他に耐異常、狩人と言う選択肢はあつたが、異常はカサンドラが治してくれるし、自分の特徴を活かしたいと思ひ決断したそう。

その他のメンバーも、まあ常識の範囲内で100〜200程の成長を果たした。しかし、表面上は変わらずともその装備は全て不壊属性。戦闘力は桁違いとなっているはずだ。

と言うか、防具に不壊属性って、本来ついていないもののような気がしてきた。この世界に来て半年は過ぎたけど、聞いたことが無い。まあ、いいでしょう。

そう言えば、最近忘れていたが模倣を再び使用した。そして、衝撃の事実を知った。

【鉛矢受難】

【月桂輪廻】

【自己再生】

【闘争欲求】

【ラウミュール】

【ソールライト】

【キュア・エフィアルティス】

【ウチデノコツチ】

コレは、新たに加わった団員の所持するスキル、及び魔法の一覧である。そしてここにニナの【追跡衝動】リリの【シンダー・エラー】と【縁下力持】が加わる。

ダフネの【鉛矢受難】と【月桂輪廻】、そしてサミラの【自己再生】を、やはり劣化させつつも問題なく模倣した後には、【闘争欲求】の模倣に着手した。しかし、幾ら試そうとも発動する気配がない。そのスキルの特性上、暫く戦闘を控えねば効果が現れない可能性もある。それに加え効果は劣化している事であるし、と次の日はダンジョンの探索を

自粛し一日の終わりに再びスキルを試したのだが、微塵も効果が感じられなかった。

サミラが言うには、一日の休みでも十分に力が溢れるのが感じられるそうだ。幾ら劣化していると言っても心配すら感じられないのはおかしい。様々な考察をした結果、5個以上のスキルは覚えられないのではないか、と言う結論に達した。

魔法は問題無く4つとも扱え、スキルと魔法を合わせ9個までしか模倣出来ないというのも中途半端であるので、恐らくスキル5個、魔法5個の計10個までは模倣出来るのではないだろうか、そして、覚えた物を忘れる方法は分からないので自分が覚えられないのは魔法1つを残すのみとなった。

コレは誤算だ、いくらでも覚えられるものと思っていたのでリリの【縁下力持】と言う、直接戦闘力に繋がらないスキルで1つの枠を潰してしまっている。別にリリのスキルが悪いという訳でないが、戦闘スタイルが違うので役に立つ場面は少ないだろう。

魔法にしても、【ソールライト】なんかは自前で幾らでも代用出来るものだ。一発逆転の要素を秘める魔法の枠を使う対象としては少し勿体ない。

しかし時すでに遅し、最後の魔法は慎重に考える必要がある。魔法を扱える人間が入団するのが何時になるかは分からないが気を長くして待っていよう。

とりあえず、詠唱文を完璧に覚えるのに3日ほどの時間を要した。流石の凡人クオリティである、魂に刻み込まれた訳では無いこの魔法達を自分のモノにするには時間がか

かるのだ。並行詠唱なんて以ての外……。

「模擬戦？」

「ああ、中層のモンスターとばかりじゃ身体が鈍っちゃまう。レイニーもそうだろう？」

いや、別に……と返そうとも思ったが、コレはいい機会なのでは無いか？

俺は戦闘技術と言う点ではリリにすら劣る勢いだ。ステータスの特技を使えば、一つの技では敵を圧倒することが出来るが全体の流れというものを掴むことが出来ない。我流では限界がある、しかしダフネやニナなんかはステータスに差があり過ぎて故意でなくとも怪我をさせてしまう可能性があった。

幾ら治せると言っても好んで女の子を傷付けたい訳では無いし、他の団員はそもそも自主訓練に消極的だ。対人戦が得意では無いのだろう。

その点サミラはレベル3の実力者、模擬戦に積極的でもある。俺が力押しをせずに言えば俺は立ち回りを見て学ぶことが出来るし、ステータス的に上位の俺と戦うことはサミラにも良い影響を及ぼす……かもしれない。

「……おう、やるか」

「マジで？ やりい！」

俺が受けるとは思っていなかったようで、驚きつつもサミラは喜びの声を上げた。

俺は一番殺傷能力の無さそうな木刀を購入し、さすがにリビングで戦うわけにも行かないので庭へと移動する。

すると、思い思いに寛いでいた他の団員達も興味を示し、勉強になるからと家の中から観戦する胸を伝えてきた。良いけど、下手な戦いを見せる訳には行かなくなつたな……。

軽、サミラと相対し、手に持つ得物の感触を確かめると心許ないほどに軽量だった。しかし、こんなものでも不壊属性の武器だ、壊れる心配はない。

「全力で行くぜ？レイニーも、手加減なんかしてくれるなよ？」

「おお、まあ、うん」

手加減しなかつたら、流石に死ぬと思うので力は抜くが、まあ技術的には全部を出し切る予定ではある。歴戦の冒険者からすれば屁のような全力ではあるが。

勝利条件は急所への十分な威力の一撃を決める事、コレはまあ、周りに決めてもらう。互いに武器を構え、どちらからともなく動き始めた。

—————

ギイツ!!

鉄と、木が拮抗すると言う異常な現象。しかし2人にとっては分かり切っている事で

あるのでそれによって行動を変えるところは無い。

「ぐっ、重いつ……!」

右腕でレイニーの一撃を受け止めたサミラは、その一撃に込められた威力に慄いていた。手加減するなよ、とは言ったがフリユネさえも倒したレイニーの一撃をまともに受ければ骨折で済まない可能性すらある、幾分か力を抜かれているのは間違いないだろう。

それでいて、この威力。

レベル3の中でも、力と耐久に優れたサミラの一撃を完全に封殺し、あまつさえ骨に響く様な衝撃を此方に伝えてくる。思わず足が止まりそうになるがそういう訳にも行かない。剣を振り払い、一思いに懐へと飛び込む。

射程の短い拳術は、距離を取られると出来ることが一気に減ってしまう。それを防ぐために敵の攻撃を避け、受け流し、逆に敵が動きにくい超接近戦を強いる事で勝機を生み出すのだ。

今まさに、レイニーは距離を取ろうと後退するが。幾らレベルの差があるにしても後ろ歩きでは思うような速度は出ない、サミラはここぞとばかりに責め立てる。

レイニーは、モンスターとはとても出来ない技術の戦いを身を持って感じていた。力を抜いているとはいえ未だ上位にある筈の己の斬撃は空を切り、命中を確信した一撃は

肌を撫でる様に流される。どうか敵の攻撃を弾くのが限界のレイニーとは違い、完全に威力を相殺されている。ガッツな普段とは違い高度で繊細な技術を持つてステイタスで劣るサミラはレイニーの攻撃を無効化するばかりか、猛攻を繰り広げている。

圧倒的に経験と、技量が足りていないのを感じた。

「レイニー！そんなもんじゃねえだろ!? 何時ものキレっキレの技を見せてみるよオ！」

「くっ……！やってやるよっ！」

カウンター！

顎を狙い放たれたサミラの拳を、受け流されたサミラ自身も何をされたのか分からなほどの妙技で受け流す。そして、隙を見せたサミラの脇腹をレイニーの攻撃が襲うが、なんとか左手を間に潜り込ませ衝撃を緩和した。

「どわっ!?!」

吹き飛ぶサミラ、レイニーはそれを追わない。

コレが、フレイヤ・ファミリアの監視役によつて警戒に値すると評されたレイニーの能力。自分の身体が勝手に動き、最適解の攻撃を行うレイニーの十八番だ。カウンターならば、防御が間に合うタイミングであればどんなフェイントからの一撃も防ぎ、敵の隙に痛烈な攻撃を返す事が出来る。防御を置き去りにする程の速度を持つてしか、この

技を抜ける事は出来ない。

レイニーの攻撃を受け止めたサミラの左手はジンジンと熱いほどの痛みを発していた。ヒビくらしいは入っているかもしれない。しかし、その程度なら【自己再生】で容易く快復出来る、実際痛みは既に消えつつあった。

「サミラさんすごい」

「レイニー様は良いようにされ過ぎです・・・最後の返しは良かったですけど」

「アイツ冒険者になって半年位なんですよ？あれだけやれば上出来よ」

「うわぁ・・・アレ怪我してないですか・・・？大丈夫かな・・・」

「サミラ様ー！ボコボコにして差し上げて下さーい！」

「春姫、お前・・・」

観客席は盛り上がっていた。軽いツマミに飲み物を用意し、映画でも観るかのように模擬戦を眺めている。

サミラが立ち上がり、再び激しい戦闘に移ると邪魔にならないように小声で話し始める。

サミラはステイタスが劣っている事など感じさせない程に連撃を繰り返し、レイニーに思うような動きをさせていない、しかし、レイニーも技量が劣るなりに一つ一つしつ

かりと対応し、未だに有効打は受けていない。

状況は、持久戦へともつれ込んでいた・・・サミラはレイニーのカウンターを警戒し隙の大きい1発を打つことが出来ず、レイニーが一撃を狙っても上手く流されてしま

う。
このまま行けば、いずれ能力で勝るレイニーがスタミナの関係で勝利する事になるだろう。

それでは面白くない

闘いを見ていた女神は、神特有の意地の悪さを発揮した。

「春姫、サミラに魔法を使え」

「ちよっ!?メーティス様!それは流石につ」

「承知しましたあつ!」

「春姫様っ!」

リリの静止の声を聞こえないふりで通し、春姫は詠唱を始める。

「ー大きくなれ。其の力に其の器。数多の財に数多の願い。鐘の音が告げるその時まで、どうか栄華と幻想を」

どうか止めようとするリリの行動は、ダフネによって防がれた。

「ダフネ様!」

「いいじゃない、死ぬ訳じゃないんだし、いつもスカした面してるアイツがぶっ飛ばされてるところウチも見てみたいし」

周りは敵だらけなのか?!と慄くリリであったが、カサンドラの存在を思い出す。

「か、カサンドラ様!一緒に止めましょう!」

「無、無理ですよ。私、力無いし・・・」

そうだ、彼女は後衛じゃないか!かくなる上は

「二ナ!レイニー様がボコボコにされてしまいますよ!?止めなくていいんですか?!」

先日レベル2に上がったばかりの二ナ、彼女なら希望が・・・

「ええ?面白そうじゃん?」

リリの、そしてレイニーの味方をする者は居なかった。大丈夫かこのファミリア。

『どうか貴方に祝福をー大きくなあれ』

そうこうしている内に、春姫の詠唱が終わった。少しばかり魔法を使えるリリが目にしたのは、可視化できる程に練られた魔力のひかり。全力で魔法を唱えたようだ、何故ここまでレイニーを敵視しているのだろうか?ソレは本人たちしか分からぬ事だ。

『ウチデノコヅチ』

サミラの身体を、目を覆うような光が覆った。

模擬戦

ゴツツツ
!!??

「あつづ!」

サミラが光に包まれたかと思うと、その姿が掻き消え、直ぐに顔面に鋭い痛みが走る。最近痛みなんて感じていなかったため、動揺して後ろに倒れてしまった。

いってえ・・・っ!?

痛みを堪え、目を開けると、やはり白い光に包まれたサミラが目の前にいた。サミラに殴られて痛みを感じたのか? しかし、モロに喰らってもこんなに痛いはずが無い。まるで、急激に能力が上がったかのような・・・

ハツとした

観客として此方を眺めている団員の方に目を向けると、春姫からサミラに向けて細かい光の糸が繋がっているのがわかる、つまり、「ウチデノコツチ」が使用されたようだ…。

「いや、流石に酷いだろ!」

「そう元のステイタスが離れていると経験にならないだろう! 春姫が居てくれて助かったな!」

あのアマア……！つと、いけないいけないあれでも大切な主神様だ。

メーティス様、春姫、ダフネ、ニナは今の状況を楽しげに見ている、リリとカサンドラはオロオロとしている。あの二人は関わっていないのか、人間不信になる所だったぜ。

状況を整理しよう、俺の能力は、恐らくレベル5は越えている。そしてサミラは元々レベル3の中程、【ウチデノコツチ】を使われたのならレベル4の中程となる訳だ。うん、それぐらいなら何とかなりそう……、なるか？

いやまあ、どうにかするしかない。

と、決意し立ち上がったのは良いのだが、サミラを包む白い光の中に赤い光が混じっているように見える。

「……なあ、サミラ。もしかして【闘争欲求】使ってないか？」

「ん？ああ、神様は対等な勝負をご所望の様だし、別にいいだろ？レイニーも出し惜しみ無しでやろうぜ！魔法もなんでも使ってくればいい」

んな事言われたって、仲間の女の子炎で炙るとか上級者にしか出来ないプレイなんですけど。流石に躊躇する

あ、でも雷ならー

「あ、流石に雷のは無しな、オレゼってー勝てねーし」

あ、はい

へへっ、面白いことになって来やがったぜ・・・！

レイニーの奴が消極的な行動に出始めて、攻めきれずに不利な持久戦に持ち込まれそうになった時。急に身体が軽くなって世界が加速した。突然の事だったからオレも力が入りすぎて身体が浮いちゃったんだけど、その攻撃は同じく突然の事態に驚いていたレイニーの防御をすり抜けて鼻っ面に一撃を加えた。するとそれ迄顔を歪めなかつたレイニーの表情に苦痛が浮かび、倒れ込んだ。すた。

んで、オレは状況を理解したぜ、春姫がやったんだとな。イシユタル様んとこに居た時はいつもウジウジしてて気に食わねーと思ってたがやるじゃねえか。

こんなオイシイ状況を逃す訳には行かねえ。「闘争欲求」も発動してオレの今の全てを注ぎ込む。今ならフリユネにだって負ける気がしねえ！

レイニー！今度はオレが勝つぞっ！

先に動いたのは、サミラ。急激な加速に加え、最初のサミラの速度に慣れていたレイニーはタイミングを外された。

「カウっんっ!？」

カウンターの発動も間に合わず、木刀を払いのけられた上に腹に重い一撃を加えられる。昼かけようとしたサミラであったが

「ファイアっ!」

咄嗟に横に飛ぶ

「ストームウ……!」

短文かつ広範囲のレイニーの魔法は対人戦に置いて無視出来ない要素だ。

レイニーはサミラが飛び退った隙に後退し、回復魔法リジエネーションを唱えた。

「い、いきなり速くなりすぎだろうよ……」

「強化されていられる時間も速いんだ、次行くぞっ!」

カウンター!

今度のレイニーに油断はない、しっかりとカウンターを発動し、敵の攻撃に備えた。しかし、サミラもとうぜんそれは予測している。レイニーにすれば、そのまま来れば絶対に防げるし、距離を取ってくれば時間を稼げる。そう考えての行動だったのだが、相手が1枚上であった。

スウッー

サミラは攻撃をしなかった、攻撃の構えのまま接近し、無造作に構えられている木刀を抜け唇が触れるほどの距離にまで近付く。

「えっちよっ」

特技カウンター、敵の攻撃を防ぎ、体勢の崩れた敵に対して手痛いカウンターを放つ技である。

つまり、攻撃されなければ発動しない。

ソレを本能で見切ったサミラはカウンターを信用していたレイニーの懐に易々と潜り込んだ。

カンッ！

軽い音、動揺で握りの緩んだ木刀が弾き飛ばされた音だ。つまり、今現在レイニーは無手という事になる。勢いのままレイニーの身体を押し、地面へと転がらせる。

殺ったっ！

確信を持ってサミラは拳を振り下ろした。

「消えたっつ!?!」

その戦いを見ていたものは、目を疑った。サミラによって武器を失い、押し倒されたレイニーに勝機はないものと思われた。しかし、サミラの攻撃により土煙が上がり、それが晴れた時にはその場にレイニーが居なかつたのだ。

いや、その場どころでは無い、広い庭のどこを見ても姿が見えない……。

「え、レイニー消し飛んだ？」

「さ、流石にそれはないと思うが……」

見ている者の動揺も去る事ながら、目の前で消えられたサミラの混乱も相当なものだ。

「え、いや、あんな体勢から逃げれるハズ……いてっ」

「危なかった……首の裏なら急所扱いでいいよな？」

サミラの背後に突如出現したのは、皆が探していたレイニーその人だった。

「どういう事なんだ？レイニー」

模擬戦を終えた後、皆で品評会を開く事になったのだが、話題は当然それについてだった。

「どうということなんだ、と言われても話すことは少ない。」

「あれは素手の時のみ使える特技『陽炎』だ。効果は1ターン攻撃無効化。」

武器を失い、見た目の上では素手になった俺は咄嗟に陽炎を発動した。正直賭けだったが無事効果を発揮し、サミラの攻撃は俺の身体をすり抜けたのだ。

そして特技の副産物として、俺の姿が見えなくなっていたよう。後ろから急所を叩き、勝利条件を満たした。大した攻撃では無かったが、全く反応出来ていなかったの

本気なら死んでいただろう。

「ええと……、その技はどんな原理で……？」

「分からねえ、自分の身体を腕が貫通してて漏らすかと思つた……」

今後非常時以外にこの特技を使うことは無いだろう、精神ダメージが予想外にでかい。

「ずりー……、結局参考にならねーじゃねーかよ」

「んん、まあ、すまん」

サミラはご機嫌ななめのような、初見殺しが過ぎるしな。どう考えても不思議パワーがない限り人間が取得できる技ではない。つまり、実用性の無い経験ということだ。

負けたく無かつたし仕方ないね。

「と言うか、俺の技よりもウチデノコヅチについて話をしましょうよ……」

アレは酷い、模擬戦なのに割と命の危機を感じたぞ。サミラもノリにのつて闘争欲求まで使つて俺を追い詰めてきたし。

「……レイニー様が」

「ん？」

俺？

「レイニー様が悪いのです」

俺が・・・って、もしかして！

「昨夜、私の事をあんなにめちやくちやにするからっ」

「「っ!!」」

彼と彼女の名誉の為に詳しくは話さないでおくが、彼の味方はただのひとりも居なかったという事だけは伝えておこう。

P S

女の嫉妬とはいと恐ろしいものなり・・・

日常（リリ・カサンドラ・二ナ）

「うおっほんー！」

「ん？どうした、リリ」

予想外に白熱した模擬戦を終え、その日はもう何かをするという気分でも無くなってしまうたので各々自由になっていた。

俺は日当たりの良い、テラス？って言うんだっけな。そんな所で1人読書をしている。読んでいるのは神様が読んでくっけて渡してきた英雄譚だ、内容は王道なものだが詰まらないとは思わないので少しずつ読み進めている。

そろそろ終わるかと思いついた時、目の前にリリが居ることに気が付いた。

最初から居たのか？本を読んでいると大きな声を出されない限り気が付かないんだけど。

「・・・」

んん？何故か無言。先程、春姫が爆弾を放り投げた時にやけに苛烈に責めて来たのでまだ機嫌が悪いのかもしれない。と、考えを巡らせていると、ぴよこぴよここと視界の中で跳ねる物体を見つけ、それに意識を奪われる。

ケモミミだ。

恐らく猫耳と思われる物体がリリの頭の上に君臨している。コレは……？
入り用な訳でもないのに、何故魔法を使っているのだろうか。

視線で問い掛けるも、ぷいっと顔を背けられてはそれもままならない。

……？いや、分からん。何が伝えたいんだ？

「おーい、リリー……？」

「……リリにだって、耳はあります」

え、耳？……まあ、言われてみればリリは魔法で自由に姿形を変えられるけども……

「春姫様には土下座までして頼んだそうですね」

「えそれ聞いちゃったんか」

よしてくれ、あの時の俺はおかしかったんだ。頭にアルテイルとか名乗る奴の思念が流れ込んで来たんだよ……。俺はケモミミ好きじゃ無いんだ、いやまあ、確かにあの耳と尻尾は正直病みつきになるぐらいにふわふわでぷにぷにで気持ち良かったけど……。

ジトオ

「ハッ」

リリが湿度の高い視線をこちらへ向けてくる。ええと、これ迄の状況整理すると、嫉

妬……してるのか？春姫に、俺の事で？

……触つてもいいのだろうか。コレは、むしろ触らないとおかしな事になる流れでは？

目の前には、ツンつと直立した猫耳にパタパタと振られる尻尾。
恐る恐ると、手を伸ばす。抵抗はない。

ぷにゅ

「んっ」

クイクイ

「ちよっ、引っ張るのは……」

「お、おう、すまん」

なんだこの空気

気まずい空気を誤魔化すべく、尻尾へと手を伸ばす。

「ふっ……！」

ナデナデ、ギユムギユム。

すごいなコレ、魔法で作られたモノなのに本物と同じ感

「春姫様の事を考えたりしていませんか？」

いえ、なんでもないです

余計な事を考えると、穴にハマリそうなので無言で尻尾に集中した。

めっちゃ辞め所が見つからず晩御飯の時間までギュムギュムしてたらいつの間にかリリが使い物にならなくなっていた。

レインニーさん

私の予知夢を、家族ですら信じてくれなかった予知夢を本気で信じてくれた人。笑顔で、怪訝な顔ひとつせず・・・

「あふようございますれいにーさん・・・」

私は寝起きが良くない。予知夢を見た日なんかは特にそう。早起きなレインニーさんにだらしのない姿はあまり見せたくないけれど、朝ごはんを作らない訳にも行かないのでしぶしぶと部屋を出る。

レインニーさんは何時も誰よりも早く下に居て、一人で本を読んでいる時もあれば誰かと歓談中の時もある。本を読んでいる時は、邪魔にならないようにそのままご飯を作り厨房に行き、誰かと話している時はそれを寂しく見つめる。

今日は珍しく、まだ何もしていないタイミングだった様だ。こういう日は、ちよつと勇気を出して隣に座るのだ。

「ご飯は後回し。」

「あの、今日、怖い夢を見たんです」

嘘だ、今日は心が暖かくなるような優しい夢だった。

それを言ってもレイニーさんは笑顔を見せてくれるだけ、悪夢を見たといえれば私の恐怖を和らげるように、頭を撫でてくれるから、こんな嘘をついてしまふ。

いけない事だと分かっているけれど、他のみんなみたいに積極的に動けない私はこうでもしないとレイニーさんと触れ合う事が出来ない。自分から動いて、否定されるのが怖い。

「どうかしたか?」

「あ、いえ……」

今は話に集中しよう、こうして二人きりになれる機会はそう多くない。

いつかは話すだけでなく、その先も……

「おはよう」

「おー、おはよう」

「あ……おはようございます……」

む、一番乗りだと思ったのに、今日もレイニーに負けたかあ。

レイニー、あたしとリリをソーマ・ファミリアから助けてくれた恩人。出会う方はちよつとばかり悪かったけど、良い人だし、尊敬している。

あたしよりも冒険者歴は短いのに、あたしの何倍も強くて。

自信を無くしていたりもする。

・・・あ、そうだ。

「カサンドラ、ご飯出来るまでどれくらいかかる？」

話をやめ、厨房へと移動していたカサンドラにそう尋ねた。

「ええと、そうですね・・・20分程かと」

20分、充分だ。

「レイニー、あたしとも模擬戦しようよ」

「え？」

無理を言つて、模擬戦を受けてもらった。最初の頃は、ステイタスでは勝っていたのにレイニーはドンドン強くなっていった。

ダンジョン探索で、自分が一番役に立てていない。リリは、スキルの使いようでも通用するようになったし、春姫はとてつもない魔法を持っている。

あたしには何も無い。唯一発現したスキルだって、ストーカーとか言う犯罪チックなものだし・・・。ソーマファミリアから助けてもらって、いつかはあたしがレイニーを

助けるんだなんて考えていたのに叶わぬ夢となってしまった。

この間レベル2になれたけど、ソレは今まで普通ぐらいに戦ってきたからで、あたしよりも戦闘で活躍しているリリのステイタス上昇は著しい。その内に追い抜かされてしまうだろう。

レイニーは昨日の模擬戦で、あたしよりも遥かに上位にいるサミラを圧倒した、いつの間にかあたしとレイニーの間には埋めようのない大きな溝が出来ていたのだ。

みんなの前ではいつも通りに振舞っていたけど、1人だけ置いていかれる悲しみに部屋で人知れず泣いた。

兎に角何かをしたい、レイニーにあたしを見て欲しい。何を思ったのかあたしはレイニーに模擬戦を挑んでいた。当然レイニーは困惑していたし、当の本人も何がしたいのかはよく分かっていない。

しかし、何となく何かが分かりそうな予感がしていた。

「レイニー、手加減無しでいいからね」

「えっ、いやでも、流石に勝てる訳ないだろう？春姫がどつかに隠れてるのか？」

勝てる訳がない、その言葉はなんの抵抗もなく私の心に入り込んできた。当たり前だろう、勝てる訳はない。あたしの攻撃はレイニーの眼球にすら傷を付けられないだろうし、向こうは腕を振るだけでこっちにダメージを与える。

「いいの、本気でやって」

「んん、まあ良いけどさ……」

武器を構え、戦闘が始まる。その瞬間、レイニーの姿は掻き消えあたしはいつの間にか仰向けに倒れていた。

「本気出したら、こうだけでも……」

気まずそうにレイニーがあたしを見下ろす姿が見えた、負けたのか、あの一瞬で。何をされたのかもわからなかった。

「そっか……ありがとう。先に帰ってて？」

「え、あー、うん。早めに来いよ……？」

家に向かうレイニー、その背中は隙だらけだ。

「とうっ！」

「うおっ!? な、なんだよ!? いきなり飛びかかってくるなよ心臓に悪いって!」

「模擬戦の勝利条件決めてなかったでしょ? 相手の背中を取った方が勝ち」

「えっそんなのありかよ……」

あたしは逆立ちしてもレイニーには勝てない、追跡出来ない付いていけない、それはこの模擬戦で痛い程に分かった。でも、諦めたくない、レイニーに置いて行かれない……頭には何時もレイニーの居場所が浮かんでいる、でも、このままだとレイニーについて行

く事は出来なくなり、レイニーが危険な所にいる事が分かっていても、あたしがその場所に居合わせることは出来ない。

リリも、カサンドラも。春姫もダフネもサミラも、レイニーの後を追ひ、仲間として絆を育んでいくのかも知れない。なら、あたしも・・・

背中に刻まれたステイタスが、燃えるような熱を持った気がした。

ニナ・アイリス

レベル・2

力・I 3

耐久 I 1

器用・I 4

敏捷・I 19

魔力・I 2

走者 I

魔法

【メリー】

・詠唱式【何時でも貴方の背中が見える、何があつても逃がさない】

・転移魔法

- ・ 思い浮かべた対象の元へ転移する
- ・ 具体性欠如の際は失敗

□

スキル

【追跡一途】
ストリーキング・ラブ

- ・ 早熟する
- ・ 対象の居場所を捕捉する
- ・ 対象者の敏捷の数字分所有者の敏捷に加算

（原文）

地中の奥深く。

いくつもの道が錯綜する広大な地下迷宮。巨大樹の内部を連想させるような樹木の迷路。

天井や壁面にはこびる苔が青や緑に発光し、幻想的な秘境と見紛う光景が広がっている。どこからが凶暴な怪物の遠吠えが響き渡り、錯綜する木の迷路を震わせて行った。

やがて、ビキツ、と。

迷宮の一角で壁面に亀裂が走り、また新たなモンスターが産まれ落ちようとする。

ビキリ、ビキリ、と音を立てて壁面を破り、最初に現れたのは、青白い肌の腕だった。すぐに同色の肩、首、頭部、次には一気に上半身と下半身が出て、地面に落ちる。

四肢を持ち、女性を彷彿させる滑らかな線を描く人型の体躯。肩や腰を初めとした部分的に生え渡るのは無数の鱗。

頭部から伸びる青銀の長髪を揺らし、倒れ伏した体勢から、ゆっくりと顔を上げた。

額に美しい紅石を埋め込んだ一匹のモンスターは、虚ろな瞳で辺りを見渡し、樹木で防がれた天井を見上げる。

細い喉が、震えた。

「……ハハ、ゴハハ。」

9 卷

始まる物語

彼は、彼女と出会った――

――ちよつと待てよ……

元々今日はあんまり探索に乗り気ではなかった、朝、カサンドラから

『都市を巻き込む混乱が起きる』

そう言われていたから。

俺達メーティスファミリアは日々の探索の結果、リヴィラの街まで進出していた。そして、原因は不明ながら時折発生する異常事態に対する冒険者依頼を、半ば強制的に受けることとなった。

内容は、19階層で大量発生した希少種『ファイアーバード』の討伐。自然の繁殖する19階層以降の『大樹の迷宮』を度々燃やし進行を妨げる厄介なモンスターであるらしい。

早期解決を目指すべく、リヴィラの街の冒険者は元よりたまたま立ち寄った上級冒険者達にも依頼が出された。断つても良かったが・・・リヴィラの街の経営陣に悪く思われると今後の街での生活に影響があるやもしれない、自分にとっては対した危険もないしと、受ける事を決めた。

パーティでそのまま行くのかと思いきや、この間のゴライアス戦の時の実力を買われ、俺は速度重視の先遣隊に配属された。・・・ベルと共に。他の団員が心配なので、サミラはどうか元のパーティに残してもらったが。

この時点で少しばかり嫌な予感はしていたのだが、土壇場でやっぱり辞めると言う訳には行かない。19階層へと、進んで行った。

クエストは順調だった。既に20程のファイアーバードとその他のモンスターを討伐し、パーティの雰囲気も悪くない。

『ガアツ!』

その時前方に現れたのは十数体のファイアーバード、思えばここで落ち着いていれば良かった。いや、落ち着いてはいたが、認識が甘かったのだ。

俺はそれまで通り先手必勝とばかりに群れへと突撃した、そして、パーティメンバーも当然後に続いてくれるものと思っていたのだが・・・

「あの数はやべえ!?!逃げるぞっ!」

「「応っ!!」」

「はっ。」

俺は、自分自身が行けると感じて居ても周りからすればとても成功率が高いとは言えない行動である事を失念していた。

自分のファミリアのパーティならば、俺の實力は十分に分かっていているし、連携も取れている。しかし、コレは急造のパーティである。レベル位しかお互いに知らないし、どれぐらいできる奴かなんて事は知りようもない。まして、仲間なら命を託して助け合えるかもしれないが深い仲間でもない奴に命は掛けられないだろう。

そんなこんなで、突撃した俺と逃げ遅れたベルは取り残された。

「ブリザードー!」

モンスターは、問題ではない。人を巻き込む危険があったため使っていなかったが、既に冒険者達の姿は見えない。宙を舞うファイアーバード達は氷によって動きを止め、砕け散った。

「す、凄い……!」

ベルもチャージすればこれぐらい余裕だろ、と思つたがそう言えば範囲は広くなかつたっけ。

「それよりさ、……道、分かる?」

「あつ……」

冒険者達の姿は、見えない。

「俺地図読めない」

「ボクも、あんまり……」

2人はダンジョン19階層で迷っていた。ベルは簡易的な地図を持っていたのだが、そもそも現在地がよく分からない。遠くから聞こえる戦闘音に近付こうと地形を地図と照らし合わせながら進んでいるのだが……。

「なあ、アレ同業者じゃないか？」

「あ、本当ですね」

視線の先に、足を引きずる人影が映った、怪我をしているのか!と、慌てて2人は駆け寄るが途中、違和感から足を止めた。

モンスター

人に見えたその影は、希少種である竜女^{ヴァイヴル}だった。

いや、ヴァイヴルなのか?と2人は目を向け合う。本来ならば人の上半身に蛇の下半身を持つ、ラミアのようなモンスターであるはず、しかし下半身が人の形をしている。額にはヴァイヴルを象徴する紅の石が嵌っているが……

「突然変異……なのかな？流石にここまで人に似ていると躊躇するな……」
「そう、ですね」

モンスターを殺す事には慣れた、しかし四肢を持ち、積極的にコチラを襲わないモンスターを殺すのは心に負担がかかる。

「う……！……！……！」

更に、モンスターは泣いていた。人のように、感情を持つ、只の生き物のように、怯え、恐怖し、とても殺意に溢れたモンスター達と同じモノには見えない。冒険者達の心に動揺が走る。

カチャツ

白髪の冒険者はその音に驚き、目を疑った。片割れは、構えていたハズの武器を鞘に入れていたのだ。

「ちよ、ほ、本気ですか？」

「……俺には無理だ。殺るんなら、俺が見てないところでやってくれ」

そういった青髪の冒険者は竜女から遠ざかり、白髪の冒険者も躊躇いながらも武器をしまい、後を追った。

「……？」

少し前に足を折り、人間に補足され死を覚悟していた竜の少女は目の前から恐ろしい

人間が消えた事に不思議そうな顔をした。チラチラと冒険者達が消えた先を探すように視線を巡らし、誰も居ないことを確認するとゆっくりと立ち上がった。足を庇いながらも、移動を開始する。

バサッ

ヨタヨタと歩み始めた少女の後ろから、ファイアーバードが現れた。にわかになつた空気、それに気がついた少女は振り向き

「ライトニングッ！」

『ゲエツ!?!』

暗い通路から飛来した一条の光は正確にファイアーバードを射抜き、魔石へと姿を変えさせた。

「ちよ、レイニーさん!?!」

「うるせえっ! あんな可哀想な子見捨てられねえだろお!?!」

少女の危機を救ったのは、消えたはずの青髪の冒険者だった

—————

「エクスヒール」

俺の発動した魔法は目の前の少女の身体を包み、折れた足や斬られた方の傷を直し始める。

チラリと見える鱗、白目のない人間離れした瞳。肌の色や耳の形など人との相違点は多々あるが、この少女には人間に酷似した感情がある様だ。安心したかのように涙を止め、傷を治療する俺を不思議そうな顔で見つめている。

可愛い

人に話した事は無いが、俺は少々モン娘と呼ばれる存在に関心がある。少々ね、うん。しかし、モンスターが明確な災害であるこの世界でモンスターに殺意以外の感情を持つ者は『怪物趣味』と罵られ、人から理解されることは無い。さらに言えば、十中八九この子が都市を巻き込む混乱の原因になるのだろう。この世界が物語なら、絶対にそうなる。そう言う事情もあり、この少女に飛びつく訳にはいかず見逃すという選択を取った。しかし、同じ存在であるはずのモンスターに襲われている所を確認した瞬間全てどうでも良くなった。

何かある

その直感に突き動かされ、——元々見逃した所で誰かに殺されるのは分かっていた——衝動的に魔法を放ったという訳だ。

「ありが、．．．とう？」

「．．．っ！」

やはり、何かはありそうだ。

「!?」

「だ、誰か来ましたよレイニーさんっ……」

「任せろ、……ファイアブレス」

俺のファイアブレスは、声の聞こえてきた方向に着弾し、勢いよく燃える。

2 発、3 発と続け様に放った魔法達は辺りに広がり、完全に道を塞いだ。

「クソッ！ファイアーバードだっ！別の道から行くぞっ！」

道の向こうから聞こえてきた声は直ぐに途切れ、炎ノ燃える音だけが辺りに広がる。

どうにかなったな、俺はもう大丈夫だと言うように少女の頭をポンポンと撫でた。

くすぐったそうにする少女、特に理由は無いが、何故か鼻血が出そうだなあ……。

「レイニーさん……この子どうするんですか……?」

「……ベルんところで預かってくれないか?」

「む、無理ですよっ……!」

無理か。恐らく、9巻とかのイベントなのだろうし、助けたからにはベルの所にこの

子を頼むのが1番イレギュラーが少ないのだが。

「……や」

ギユウウツと、俺の腕を掴む少女を見る限り二重に手間がかかりそうだ。

それに、もう原作の知識は無いのだから必要以上に気にしていても仕方ない。中途半端に予測して動いたところで既に原作からは程遠い所を進んでいるんだ。

「分かった、俺が何とか皆を説得してみる。ただ、この事を言いふらしてくれるなよ？」
「まあ・・・はい」

隠し事は苦手なベルではあるが、元よりこんな話を信じる者も居ないだろう。念の為に
という奴だ。

後は・・・どうやって、説得するか、の前に。

正規ルートに復帰する事だな。

説得

どうにか、街へ帰還すると。

「——嘘じゃない、モンスターが喋ったんだ!!」

「どうして信じてくれないの!？」

2人のエルフがそう叫んでいる場面に遭遇した。もしや、と思い少女に目をやると傷があつた肩を抱き怯えたように2人を見つめている。

「あー、おい、こいつ等に宿を紹介してやれ。夢見のいい枕が置いてある場所だ」

「ボールス、本当なんだ!本当にモンスターが……!？」

……騒ぎに巻き込まれて正体がバレては堪らない。迂回するように別の入口から街へと帰還した。

「じゃあ、僕は此処で……、気を付けてください」

「ああ」

入口でベルと別れる、さて、どうするかな……っ!?

前方から恐ろしい程の覇気が……!

「良かったー!」

「むぐっ!」

体当たりをかましてきたのは、二ナだ。少し前はなにやら悩んでいたようだが今は元
に、いや、前よりもアクティブになっている。

「動いてたから生きてるのは分かってたけど、怪我が無くて良かったー。何度レイニー
のところに飛ばうと思ったか」

二ナは3人までの居場所を把握する事が出来、顔を思い浮かべれば対象の元に転移が
可能だ。予定と違うルートへ移動したりしていれば、転移し状況を把握することが出来
る。まあ、対象がどんな危険な場所にいるかわからないので転移した所が悪ければ大惨
事に繋がるかもしれない、あまり使用出来る魔法ではない。

「ん?その子、誰?」

もう少し考えてから会おうとしていたのに突然来られたから心の準備が出来ていな
い、説得できるのか・・・?

「その、な」

「えいつ」

あつ

「」
「」
「」

「また女の子?」

・・・あれ？予想外の反応

つて不味い！誰かに見られる前にフードを戻して・・・

「ねえ」

「・・・喋れるモンスターなので助けました。物語の鍵となる存在だと思います」

「ふうん・・・」

怖いよお・・・、なんなんだよお・・・。

物語、メーティス様とリリ、そしてニナのみが知るこの世界の真実。俺がこの世界の人間ではなく、この世界が物語の中の物であることは他の4人には話していない。言うタイミングを逃したし、なによりこんな話を話して大丈夫なのかという根本的な問題もある。

ニナ達は、何故か何事も無く受け入れてくれたが。誰もがそうであるとは思わない方がいいだろう。そんな考えもあり、今の今まで打ち明けられずにいる。

「んー、良い機会だし皆に言っちゃえば？」

「ええ・・・」

軽くないか、これはそんなに簡単な事じゃ、

「そうかな？前も言ったと思うけど、レイニーの知ってる私達と知識の中にある私達は似てるけど、色々変わってきてるんでしょ？そんな不確定な物で私達の仲に亀裂が入る

ことは無いよ。それにカサンドラとかいっつも予知夢だなんだって言ってるじゃん。それと同じような事だし、気にしなくてもよくない？」

「・・・俺の知識は信じてくれるのになんでカサンドラは信じてあげないの・・・？」
「え？うーん・・・何となく」

何となく、頭の中にいるカサンドラが涙を零したが、まあそれは今はいい。

それよりも、そういう物なのか。俺が勝手に伏せていなければならぬと考えているだけで、案外どうって事ないのか・・・？

「分かった、一緒に・・・話してみる」

受け入れて貰えました。

なんか、あらゆる重りを投げ飛ばしてこれ迄にないぐらいに清々しい気分だ。

話す過程で戦争遊戯の時に突然現れた魔道士が俺だということを伝えた瞬間ダフネに殴られ、その後他の面々にも一斉に殴られたが気にしていない。あれ？デジャヴ・・・
何故殴られたのか？

(6巻参照)

「あん？アイツどこ行った」

化け物とか罵ってきた女の子を辱めてたら存外に時間が経っていた。クラネルに合流しようとして階段を登り切ったのだが、居ない。コレ捕まったな。

化け物とか罵ってきた女の子を辱めてたら

殴られても仕方は無いね、うん。

「しかし、皆受け入れてくれるとは……」

「まあ、信憑性もあるしね」

「(知ってたから、信じてくれたの……? ……ううん、それでも、レイニーさんが心から本気で信じてくれたことに変わりはない)」

「物語だろうがなんだろうが、オレはオレだしレイニーはレイニーだろう?」

「あの白髪の冒険者様と、私が……?」

一部を除き、取り乱しても居ないようだ。

何と肝の太いメンバーなのだろうか、とても同じ人類とは思えない。

「んで、まあ……そんな訳でこの子はどうか助けてあげたいんですが……」

「……まあ、物語としてみるのなら、確かに有り得る展開だわ」

「そう、ですね。モンスターと英雄の恋愛物語は、古今東西何処でも一定数見られるものです」

「『異類婚姻譚』とかねー」

流石に多少の動揺は隠せないが、実のある議論が進んでいく。

「わ、私、今朝『オラリオが混乱に巻き込まれる』って言う予知夢」

「それはない（ねえ）（です）（わ）（よ）」

「なんでえ・・・」

カサンドラは無視の方向で話が進み、人の目が少ない夜に地上に帰還する、と言う結論になった。

「——不味いぞ、ウラノス」

闇の中で、黒衣の人影が声を発する。

「理知を備えるモンスターが、冒険者達と接触した。今、『バベル』を出る」

水晶には『バベル』地下一階——天井画の青玉を通した光景が映し出されていた。

「モンスターを連行しているのか？」

「いや、どうかね・・・水晶越しでは保護しているようにも見える」

黒衣の人物が水晶の光景を観察する他方、松明の中心地から重々しい声音が響く。

松明の火に照らされ闇に浮かび上がるのはら石製の巨大な神座でありそこに腰掛け
る巨大な老神だった。

2Mを越す巨軀にローブを纏う男神は、彫像のような表情を変えず問いを重ねる。

「冒険者は誰だ、フェルズ」

フェルズ、と呼ばれた黒衣の人物は答えた。

『スレイヤー』レイニー、「メーティス・ファミリア」だ」

水晶に映し出されるのは、青髪に青藍せいらんの瞳。

もたらされた内容に、老神は己の蒼色の瞳を細める。

「都市に混乱をもたらす新人冒険者スレイヤー・・・確か、イシユタルのお気に入りだったか」

「やけにメーティスファミリアを庇っていたね、襲われたのは自分達の方だって言うのに。まあ、それはいいだろう？それより、どうするんだい、ウラノス」

神ウラノスは、しばし瞑目し

「様子を見る」

そう答えた。

「いいのかい？「メーティス・ファミリア」はどうも怪しい。アポロンにソーマにイシユタルファミリア。碌でもない所が集っているファミリアだよ？今は分からなくても、いつかは・・・」

「メーティスは下界の者に興味が無い、眷属子供たちが好きに動いている可能性もある・・・それも含めて見極める」

神は続ける

「我々には希望が必要だ、彼等がそうなるのか、絶望となるのか。既にゼノスと接触している中で無理は出来ん、『目』を放て、メーテイス・ファミリアの団員達、そしてモンスターの少女を監視しろ」

「ああ」

静謐な石造りの広間の中。

翻る黒衣が、闇の奥へと姿を消した。

「ねえ、レイニー。さつきから周りを気にしてるけど、どうかしたの？」
「俺の勘が、こういう時は誰かに監視されてるものだって言ってるんだ」

忙しなく視線を移す彼だったが、所詮凡人。空を舞うフクロウ使魔を見つける事は出来な
かった。

地上

「コレはまた・・・面倒な事になっっているな」

帰りが遅いからと、少し心配してみれば。コイツは自分の事を凡人凡人と言うが、トブルを引き寄せる力だけは一級品ではないのか？

確かに、数多の物語を見てきた私からすれば怪物と人間の話は熱い展開ではあるが・・・まあいいだろう、面白いしな。

子供レイニの背中に隠れ、怯えたようにこちらを見る姿を見せつけられては無下にも出来ん。19階層での出来事を聞き、未知の事象に少しばかり興奮しつつも、今は抑える。

モンスターに襲われていた、か。

モンスターと言うのは、基本的に同種でなくともモンスターを襲う事は無い。1部の例外、強化種はその限りでは無いが、強化種は冒険者が取り損ねた魔石を、モンスターがわざわざ食べてみようとしなければ発生することは無い為、珍しいパターンである。

襲いかかってきたモンスター全てが強化種であるはずが無い。

つまるところ、モンスターの見た目をしているだけで、全く別の種族と捉えてもいいのだろう。

「その少女に名前はあるのか？何時までも少女と呼ぶのも具合が悪い」

「ああ、そうか・・・名前って分かるか？」

レイニーが、その竜の少女へと問い掛ける。すると、こてん、と首を倒し。

「名前？・・・わたしの？分からない・・・」

「そうか、ならレイニー、お前が付ける」

「えっ？」

当然だろう、助けて来たのはお前なのだ。言うなれば親代わり、懐いているようだしレイニー以外に適任の者は居ない。

レイニーは暫く考え込んでいた。「原作が・・・」とか「ベルの思考を読み取れっ・・・！」とか言っていたが、どういう事だろうか。

「そ、そうだ！リヴィラの街で誰かが物語の名前を呟いてたよな、なんだっけ？」

「異類婚姻譚メリユジーネの事でございますか？」

「そう、それだ！・・・（ええとそれと・・・多分ヴィーヴルとかを組み合わせて・・・）
ウィーネ、うん、ウィーネとかいいんじゃないかな！」

「ウィーネ、わたしの、名前・・・？・・・ありが、とう」

「グフツ」

竜の少女、ウィーネがなんとも庇護欲をかき立てるかのような声色でレイニーへと

葉を発した。その途端コイツは胸を抑えて蹲りおった、怪物趣味だったとは……まあ、通常のヴィーヴルよりも人に程近い、有り得ぬ話でもないか。

「では、明日よりウィーネについての情報を探るぞ。私の知識には全く載っていない未知の現象だ。あまり収穫があるとは思えないが……」

——ウィーネがどーしても離れてくれないので、一緒に寝る事になった。

ヤメロオ！（建前） ナイスウ！（本音）

「風呂……いや、眠そうだし今日はもう、寝るか」

俺自身は、最悪眠らなくても大丈夫なのだが団員達、ひいてはウィーネも疲れが見える、全員でリビングに集まり就寝する事になっているので、俺だけガタガタ動き回るの
は他の皆に申し訳ない。

少しばかり、血とかの匂いが気になるが……冒険者をやっている慣れて親しんだ匂いである。我慢しよう。

……ぎゅっ

理由はさっぱりだが3時間ほど眠れずに居ると、腕に少し力がかかった。ウィーネに目をやると、……泣いている。

「たす……けて……」

リリは、情報売り買いしている酒場へと向かい、ニナは街で自分なりに情報を探してくるらしい。神様は3人しか居ない神友の元へ、ダフネとカサンドラは古巣をついてくると言つて出掛け、サミラはイシユタルに会つてくるとか言つてた。

……会えるの？

俺は春姫とともに留守番だ、まだウイーネが俺以外に懐かないと言う理由から。しかしその問題も解決した、春姫は予想外のコミュニケーション能力を発揮し瞬く間にウイーネの信頼を勝ち取つたのである。

「あれは……なあに？」

「あれは「あれは太陽……お日様でございます」

「おひさま……レイニーなにかいった？」

ぐぬぬ……！おのれえ……

まあしかし、ウイーネを笑顔に出来る存在が増えた事は喜ばしい事だ。

——たす……けて……——

何があつたのかは分からない、こちらから聞くのも躊躇われる。今俺達にやれることは悲しい記憶を風化させる程に楽しい記憶で全てを覆い尽くす事ぐらいだろう。

できるとは言っていない。

「春姫、春姫」

そう言いつつウイーネは春姫に手を伸ばす、くそう、悔しいけど微笑ましいなあ……
その時だった

「っ……！」

春姫が、ウイーネの手を迎えるように掌を差し出す、しかし、なんの疑いもなく伸ばされた手に三本の赤い線が引かれた。

「あ、え……うそ……は、春姫、痛いっ?」

血に染まった自らの手を見つめ、呆然とした風だったウイーネは直ぐに春姫へと駆け寄り、手を伸ばそうとするが……。再び手に目をやり、動きを止めた。その瞳には涙が貯まっている。

俺自身思考が止まっていた。何の変哲もない、ただの日常だったハズ。それが少しの差異で、お互いを傷付けるなんて。

「ヒール」

春姫の傷を癒した、悪いが心配するのは後だ。ウイーネ……

「ウイーネ、手を貸してくれ」

「や、やだっ！レイニーを、痛くしたくないっ！」

「いいから」

ウィーネの手を取り、俺の肌へと近付ける。

「いいか、見た目が人間なだけで、ウィーネよりも遥かに凶悪な力を持っているんだ。だから、こんな爪じゃ傷h」

サクッ

ツツ・・・

・・・

時が止まったのを感じた。

「うわああん!？」

「ウィーネ様つ!!わ、私はこのとおりなんとも御座いません!だからどうか落ち着いて・・・!」

ウィーネダムが遂に決壊し、我がメーティスファミリアのホームは混乱に包まれた。その一端を団長であるこの俺が担ってしまった事を誠に遺憾に思う。

簡単に防御を破られた事は想定外だったが仕方ない、装備、そう、装備を解除していたからね。

俺は高速で現在所持している中で最硬の防具を身にまとった、そして手の部分だけ露出させ。

「よしウィーネ！今度こそ、今度こそ大丈夫だ！ほら」
チクツ・・・

「セエエエフ!!痛くない、全っぜん痛くない！わかつたウィーネ！春姫ならともかく俺にはなんのダメージも無い、そして攻撃力という点でも俺の方が上だということを教えてやろう！」

むぎゅっ

俺はウィーネのほつぺたを蹂躪する。縦横無尽に引つ張られるその頬は、見た目に反し非常に柔らかい。やはり、女の子の体なのだろう。

「い、いふあい、いふあいよレイニー！」

ぱっ、と手を離し。俺はウィーネへと告げた。

「このように、ウィーネよりも遥かに強い俺が問題なく暮らしているんだ、少しばかり事故は起こっちゃまったが気にする事はない、な？」

ウィーネは俺の目を見つめる、暫くして、口を開いた。

「レイニー・・・」

「おう」

ウィーネは、俺に摘まれた頬を擦りながらこう言う。

「嫌いつー!」

「フアツ!」

ウイーネは、春姫の元へと行ってしまった。少々切れ味の良い爪も、直接肌に触れなければいいので、お互いに注意しあつて慎重に触れ合っている。

そこに俺の居場所は無いようだが……まあ、まあ……。

涙は消えたようでも何よりですわ……

「ゼノス?」

「ああ、理性を備えたモンスター達の総称だ」

暗いギルドの地下牢、そこに囚われている麗しい女神はかつての眷属へと話し始める。

「人型のモンスターならば人間に近い姿になり、言葉さえも容易く話す。痛みを叫び、悲しみに嘆く人とおなじ感情を供えた存在……。【イケロス・ファミリア】の連中は、それを金持ちに売り払っている」

「ウイーネみてえな奴らが、他にもいるのかよ、ですか……、それに、イケロスファミリアか……確かに聞いた事があるぜ、ます」

敬語がおかしいが、それを気にしてはいけない。イシユタルも慣れたものだ。

イシユタル自身、春姫を犠牲にし神フレイヤを陥れようとした過去があるが、イケロスファミリアの行動原理は金だ。金の為に多数のゼノスをオラリオ外の変態共に売り、多額の利益を得ている。

到底許されるべき行為ではないと思う。

通常であれば、即座になんらかの介入が入るような所業だが・・・

「奴らにはなあ・・・、とっつておきの秘策があるんだ」

イシユタルは、勿体ぶるかのように言葉を貯め、言い放った。

「人工迷宮、クノツソス」

その時のドヤ顔を、サミラは生涯忘れないであろう。

「人工迷宮、聞いたことが無いぜ、です？」

「当然だ。誰にも頼らず、たった一人の男の妄執が創った物だからな。どれぐらいデカいのかは分からんが、犯罪組織が隠れ住むぐらゐは容易いだろうさ。コレはもう、ウラノス・・・ああ、ギルドの主神だ。そいつにも伝えてある」

今頃真偽を確かめて、その内に行動に移すだろうな、と、イシユタルは暗闇の中でニヤリと笑った。

「何故この情報を私が知っていると、奴らにとつて知られても困らない物だったからだがな、何せ、入口の場所を誰も知らないんだ」

「はあ．．．、それじゃあ、意味がないんじゃない？」

「馬鹿を言うな、死ぬまでバベルを見張っていようが、なんの成果も挙げられないということを見せてやったんだ。コレが事実ならば懲役を200年減らすとウラノスは約束したぞ」

ちなみに、懲役何年を喰らったので？

1240年だ

進展

情報のまとめ

・ヘルメスファミリアが、喋るモンスター【ゼノス】についての情報を追っている（リ）

・人工迷宮クノツソスの存在（サミラ）

・ゼノスは見目麗しい者も存在するため、「怪物趣味」の貴族などに売られている（サミラ）

・主犯は【イケロス・ファミリア】（サミラ）

・人工迷宮クノツソスには【イケロス・ファミリア】のアジトがある（サミラ）

・イケロスファミリアは、エルリアの貴族にまで手を伸ばしている（ダフネ・カサン
ドラ）

「サミラ、頑張ったなあ．．．でも．．．」

「おう、でも、な．．．」

・ダイダロス通りにクノツソスへと繋がる最硬精製金属製の扉がある（3番通路〇ー〇〇ー〇）（二ナ）

・扉は特殊なアイテムがない限り開く事は不可能（ニナ）

「これには、勝てねえわなあ・・・」

「おう・・・」

「頑張ったよー」

能天気には笑っているニナ、とんでもない情報を持ってきていた。

「なんかねー、ちよーつと脅したら、ペラペラ喋ってくれたよ?」

街中で偶然前所属ファミリアであるソーマファミリア、そしてその団長であるザニスと遭遇したらしい。

おっ、コレは、と思ったニナはザニスを捕獲し尋問（え?）、見事重要な情報を引き出してきてくれた。

いやなにしてんねん。

仕事ぶりは良いけどちよつと手荒すぎやしませんかね?

「と言うか、ザニスは確かレベル2だろう?この前上がったばかりのお前がどうやって・・・」

「えー?あたしのスキル、忘れちゃったの?」

スキル・・・・？ニナからこの前の更新時に受け取ったステータスの紙を貰い、じつくりと眺める。

ニナ・アイリス

レベル・2

力 E 434

耐久 G 201

器用 D 503

敏捷 C 601+400+30+\$メ*♪/5<

魔力 H 154

走者 I

魔法

【メリー】

・詠唱式【何時どこでもでも貴方の背中が見える、何があっても逃がさない】

・転移魔法

・思い浮かべた対象の元へ転移する

・具体性欠如の際は失敗

【

スキル

ストーリーキング・ラブ

【追跡一途】

- ・ 早熟する
- ・ 対象の居場所を捕捉する
- ・ 対象者の敏捷の数字分所有者所有者の敏捷に加算

【追跡一途】

ストーリーキング・ラブ

- ・ 早熟する
- ・ 対象の居場所を捕捉する

・ 対象者の敏捷の数字分所有者所有者の敏捷に加算

うそん、なんかスキル変わってるし、ステイタスがベル級に成長しとられる。

「ステイタスは同じぐらいだけど、ザニスは鈍いから簡単だったよ」

スキルの効果で、敏捷はレベル3クラスだからか・・・。

「二ナ、この間まあまあステイタス上がったーって言ってなかった？」

「まあまあだよ、——だって、レイニーにはまだまだ追いつけないもん——」

・・・

「さあ、この情報を元に今後の行動を決めていくぞ」

「逃げましたね、レイニー様……」
シヤラツプ

この情報から推察できるのはイケロスファミリアの連中がモン娘を売り捌いて金を稼ぐクソ野郎共の集団だってことですね、ぶちころ○。逃げ出そうが地獄の果まで追つてや

「鍵ねえ、そんなの何処にあるんだろ」

「ザニスは持つてなかったけど、『ダイダロスの瞳』って言って、目玉みたいな金属の塊の中にDって書かれてるものらしいよ」

そう言えば、鍵が無ければ開くことが出来ないんだった。命拾いしたなカス共。

「れ、レイニー……かおがこわいよ?」

俺は今、心が冷静ではない。叶う事なら今すぐイケロスファミリアの連中の目の前に転移してポッコボコにしてやりたい。モン娘を変態に売り付けるとか絶許……いや、俺は変態じゃないよ。

俺にも転移魔法生えて来ねえかなあ……、模倣はもつと考えなければ。

ウイーネへの感情一覽

メーテイス（面白い）

レイニー（可愛い、助けてあげたい）

リリ（必要な事だとは思うが、ファミリア的に危ない）

ニナ（可愛い）

ダフネ（興味が無い、諦め気味）

カサンドラ（可哀想、仲良くしたい）

春姫（娘のよう）

サミラ（強いのか？）

—————

俺は一人でダンジョンを探索中だ、ウィーネの生まれた階層、つまり19階層付近に何か手がかりがないか探してこいと命じられたのだ。メーティスファミリアの参謀役2人に。正直袋叩きにされたとしてもダメージは無いし1人でじゅーぶん。

何が原因で事件が起こるのか分からないので、魔法で変身済みだ。獣人の人に匂いを辿られない限りバレないだろ。

18階層を素通りし、19階層へと足を踏み入れ

『』

「うひょつ！えっなんこれ！」

紫色のいかにもヤバそうな霧が、突如動き出した壁から吹き出した。何も無いと思っ

ていた19階層に入つてすぐの壁からだ。

その動き出した壁の正式名称は「ダーク・ファンガス」、物に擬態し敵を待つモンスターで、【耐異常】を貫通する毒霧をぶちまける。

一応存在は知っていたが、さっぱり気が付かなかつた。

俺自身に毒が効かないという事もありそういつたトラップはあんまり意識してないのだ。

他のトラップも避けられないけども……。

ともかく、毒や睡眠などは効かない、それだけ分かつてればいいんだ。味方巻き込んだら申し訳ないけど今は1人だし。

それにしても、霧を至近距離でマトモに浴びたせいで水分が体にべっとりついてしまった。気持ち悪いなあ……。

タオルなんかをストレージに入れていないので、我慢だ。今度からは絶対持つてくる。

そんな感じで、普通の冒険者ならば即死級の大惨事を起こしながらもなんの問題もなく進んでいく、そろそろウィーネと初めて出会った場所だな……と、前方からロープをかぶつた人影が歩いてきた。珍しいな、ソロの冒険者か。

と、自分を柵に上げる、向こうは立ち止まったようだが特に挨拶などせずに通り過ぎ

「!?ゲホッ!おえ……ッ!」

「フアッ!」

ローブの人物が奇声を上げながら倒れ込んだ、何事じや。

「大丈夫か!? って……は、羽!!」

駆け寄り、ローブを捲って状況を確かめるとより混乱した、人間に限りなく似ているのに、どうしてもモンスターの片鱗が見えるその容貌、ウィーネと一緒にだ。

「ゼノス……っ!」

「あ……コヒューコヒュー……」

「あ、ヤバい、エクスヒール!」

そのゼノスは、著しく衰弱していた。顔色は非常に悪く、呼吸も安定しない。エクスヒールをかけると、一時的に持ち直すものの、何故か直ぐに元に戻ってしまう。何が原因があるのか? 元を断たないと治らないようだ。

涙や鼻水で顔がぐちゃぐちゃになっていてゼノスであると言うことを抜きにしても人には見せられない顔になっている、女の子のようだしあまり見ないようにしよう。

回復をやめれば死んでしまいそうな状態なので回復しつつ原因を探る、しかしながら原因と言っても……

ポタ・・・ポタ・・・

「アツアア!？」

「毒かすみませんでした!!」

「いや申し訳ない」

ワタシは、地面に額を付けて謝罪の形をとる男を見つめていた。

この男は異常だ。

ワタシは同胞が産まれていないかこの階層を廻っていた、そして同胞の匂いを感じ取り、この場所へと歩いてきたのだが。この男が現れた瞬間気分が悪くなった。直ぐに目眩の症状が表れ、思わず足を止めたのだが、この男が横を通り過ぎたタイミングで身体に痛みが走った。その後は体調の乱高下。男が駆け寄ってきてからは急激に意識が遠のき、しかし男が何かを叫んだ途端に明瞭な視界へと戻される。安心するのもつかの間、また意識が遠のき・・・。

ワタシはいっそ殺してくれと呟いていた。

気を失う寸前に男が離れて行ったのを確認したが、目を覚ませば男はこうして謝罪していた。

「俺毒が効かない体質で、ダークファンガスの毒霧を纏ったまま移動してたんすよね」

頭がおかしいんじゃないのか

「ほんとすんません、まさかそんなにキツイ毒だとは思わなくて」

確かに、ワタシの鼻でも未だにダークファンガスの匂いが嗅ぎ取れる。わざとでは無いのだろう……。ワタシに毒への耐性が無かったからここ迄の事態に陥ったというのもある。

しかし、死ぬ寸前に追いやられた上に恥ずかしい場面を見られたのだ、そう簡単に許してたまるか。

でもまあ、それはそれとしても……

「先程、ワタシの記憶違いでなければ。ゼノスと言っていましたネ？」

逃しはしない

19階層

「先程、ワタシの記憶違いでなければ。ゼノスと言っていましたネ？」

少し発音がたどたどしいが、人間の言葉を話している、やはりゼノスだったか。

「あ、ああ、そうだ。俺は、いや、俺達「メーティス・ファミリア」はゼノスを1人保護している。危害は加えていない」

「メーティスファミリア、フェルズが言っていた・・・アツ」

「フェルズ？」

「なんデモありません」

なんでもあるだろ・・・、まあ、いいたくないなら無理に聞き出すことは出来ない。関係の悪化に繋げたくないからな。

「・・・貴方は、なぜワタシ達に嫌悪感を抱かないのですか？ 罨にはめるわけでもなく、まるで・・・人間と会話しているかのように」

暫く話をしていると、そう質問された。嫌悪感・・・俺はともかく、この世界の大多数にとってはモンスターとは嫌悪の対象であり、そして恐怖の権化でもある。

対話なんて無理だ、例えば知性を持っていたとしても、見た目はモンスター。人間に似

たゼノス達でさえマトモに扱われず地上で売り物にされている。

ああ・・・思い出したらまた腹が立って来たな・・・

「や、やる気ですか!?!」

「あ? ああ、いや、違う。すまん、地上で酷い目に会ってるゼノスの人達のことを考えちゃつて、腹が立ったんだ。俺は・・・見た目がなんであれ対話が出来るとは好みはあつても迫害はしたくない、勿論、人間の全てがそう言う考えな訳じゃ無いけども：」
殺気というかなんというか、そう言う険悪な気配を感じたらしい彼女が戦闘態勢に移った。しかし俺に戦闘の意思はない、正直に、自分の感情を打ち明けた。

俺がこんな事を思えるのは、やっぱりモンスターが常識の存在ではない日本の人間だったからだろう。例えば、Gが擬人化して話しかけて来てみる。多くの人間は忌避感を抱くだろう、完全に人間に見えるのなら別だが、目が違ったり、羽が生えていたりするんだ。

「・・・そう、ですか。貴方は、人類と我々の共存は可能だと思いますか?」

誤魔化しや茶化しの効かない真剣な質問、俺は答えを出す。

「無理だ、と思う」

「!」

無理だ、出来るはずはない。同じ人間でさえ肌の色や出身で迫害されると言うのに、殺し殺されのモンスターと同じ存在に対して人類は寛容になれない。

俺の考えに、驚き、悲哀を含む表情で彼女は動きを止めた。そしてフラフラと立ち上がる。コレは、俺の言葉を否定の一言と勘違いしているのではないだろうか、いや、その一面もあるけども。

「俺は敵対しない、約束する。俺一人じゃ頼りにはならないだろうけど、俺のファミリアは協力的だし、俺たち以外にも協力してくれる人達は居るはずだ。フェルズ、だっけ。その人も味方なんだろ？」

キチンと説明すれば、何人かは・・・

そう続けようとした俺の言葉は、彼女自身の声によつて遮られた。

「皆、そう言つてワタシ達から離れていきました」

「・・・え？」

皆？それは、どういう。

「テイラーも、サーニャモ、ゲルグやナインズだつて、ワタシ達に優しい言葉をかけて、結局は人間の方へト行つてしまつた」

次々と告げられる名前に、聞き覚えはないが。察するにこれまでゼノスと接触してきた人間の冒険者なのだろう。

優しい言葉、つまり俺は味方だ、とか、仲良くしよう、とか。そう言った言葉を信じてきて、そしてその度彼女達は裏切られてきた。

地上で、喋るモンスターの情報は殆ど流出していない、彼ら彼女らも、本当の意味でゼノスを裏切った訳では無いのだろうか……。

「貴方も、キつとそウ」

瞳から感情を読み取る能力なんて持っていないが、彼女はそれを心の底から信じているように思えなかった。

「まあ……、そんな過去があるなら信じるのは難しいと思う。ただ頭の片隅にでも置いてくれ」

—————

「……アイツ、噂の殺戮者スレイヤーじゃねえか。なんだって一人でこんな所にいやがるんだ？」

「ゴライアスを一人で倒した期待のルーキー様だから、中層ぐれー余裕なんだろ？」

街へと帰還したレイニーを無遠慮に眺める男達「イケロス・ファミリア」だ。

彼等は無法者の集まり、金や快楽の為に人を蹴落とすことを厭わない者達である、ましてやモンスターの見た目を持つゼノスに情が湧くはずもなく、犬を売り買いするかのようゼノス達を売り捌いている。

「待て、そういや、スレイヤーもあのクエストに参加してただろ。……怪しいな」

主神様に、探りを入れてもらうかと、彼らは街を後にした。

「おー、ラツキー。おーい、【スレイヤ】ーさんよおー」

地上へと帰還すると、誰かに声をかけられた。

振り返ると、ニヤニヤとイヤらしい笑みを称えた美男子が居た。神か？

「俺に何か用ですか？」

「ひひっ、いやあ、大したようじゃねえんだがよお。俺はイケロス、よろしくなあ」

ほーん、イケロスですか、嫌な予感がしますねえ。無理に自然を装うとするとかえって不自然になる、ここは思い切り怪訝な顔をして、動揺を誤魔化そうか。

「お前さあ、喋る竜女ウイールつて知ってるかあ？」

キタコレ、来て欲しくないけど来ちやうんだなあ、ちくしよめ。

しかし、イケロスファミアと聞いた時からほんのり覚悟はしていた。

「喋るモンスター、・・・正気ですか？」

神に嘘は付けない、どうか、誤魔化す事ができれば・・・

「俺も、んな事あるわけねえとは思うぜえ。・・・で？知らないのか？」

ちっ、引き下がらないのかよ。仕方ない

「生憎、聞いた事ないですね」

見たことのあるし匿ってすらいる。しかし、俺は喋るヴァーヴルの情報を他者から手に入れた事は、ない。

苦しいか……？

「……ふうん、分かったぜえ。変な事聞いちまって悪かったなあー」

イケロスはその言うと、姿を消した。

なんだか、上手くいかなかったような気がする。いや、うん、上手くいった、きつと、多分。

そう思っていよう。

—————

「ふむ、ウィーネ以外にも知性を持つ存在が居たのか」

「はい、多分セイレーンです、他にも何人か居るような口ぶりでしたねー」

ホームに帰還してきたレイニーは、しっかりと成果を持ち帰ったようだ。大きな前進と言える。道中、イケロスから声をかけられたようだ。変な所で悪知恵の回るコイツは言葉遊びのようなやり方で追及を逃れたようだが、怪しまれてはいるのだろう。コイツがそう簡単にやられるとは思えないが……、警戒するようには伝えた。それに、本人が狙われないとしても他の団員が襲われればひとたまりもない。

自室へと戻り、思考を開始する。

まず、ゼノスは複数存在するようだ。

ギルドのクエストに、「下層で歌が聞こえる」とか、「装備を奪うモンスターが居る」とか。ゼノスの存在を示唆する情報がチラホラと載っている様なので、コレは真実と見ていい。

イケロスファミリアの連中はそれを攫い金にしている。具体的な目的は不明だが、ろくなものではないことは確かだ。

人工迷宮クノツソス、コレはとんでもない代物だ。規模にもよるが迷宮数階層分の規模だとしても隠れる場所には困らない。こんな闇派閥イザイルスが喜びそうな場所が、よく残っていた物だな。

ここを拠点とし、ダイダロス通りにある入口から出入りしているのか。

イケロスファミリアの連中は特に指名手配されている訳でもないから、ゼノスをギルドに見られては不味いという事か。当然の事だが。

モンスターをダンジョンから連れ出せるのは、ガネーシャファミリアのみだ。ギルドから直々に依頼され、怪物モンスター・ファイター祭何てもものも開かれている。

・・・待てよ？

「何故、ガネーシャファミリアだけが、特例に？」

モンスターを扱うのは、なるほど。信頼の出来るファミリアにしか任せることは出来

ない。だが、公明正大を謳っているファミリアはひとつでは無い。

たった1つの組織に全てを任せることは危険である。監視の目がない場合、その組織が見当違いの方向へと走り出した時に止めることが出来ない。

私の持論だが、お互いを監視し合う事で組織というのは正常に機能することが出来るのだ。

よもや、ギルドやガネーシヤがイケロス達と手を組んでいるとは思えないが・・・何か、知っているかもしれない。

「探りを入れるか」

勢力・個人好感度図

白（無関心）

赤（非友好的）

青（友好的）

橙（中途半端）

フアミリア

ヘステイア・フアミリア（青）

・フアミリアを救ってくれた恩人

・積極的に仲良くしたい

ヘルメス・フアミリア（青）

・第2の英雄か？

・経過観察中

ミアハ・フアミリア（青）

・ポーシヨン薄めててごめんなさい

フレイヤ・フアミリア（赤）

・警戒

・利用する相手

ロキ・ファミリア（橙）

・未だに悪意ある行動をしていないのは確認している

・しかしベルとは違い、イマイチ人柄が信用しきれない

イケロス・ファミリア（橙）

・なるようになれ

・正義なら敵、悪なら味方

タケミカツチ・ファミリア（橙）

・助けてもらった恩はあるが、得体がしれない

ギルド（橙）

・敵なのか？味方なのか？

ヘファイストス・ファミリア（白）

ガネーシャ・ファミリア（白）

個人（眷属編）

ベル・クラネル（青）

・尊敬できる人

- ・よく分からないけどいつも助けてくれる人
- ・怪物趣味はどうかと思っている
- アイシヤ・なんたら（青）
- ・強い雄
- ・妹分を任せるとは出来る
- リユー・リオン（青）
- ・ベル達へステイアファミリアの恩人
- ・善行に好感を抱いている
- ヤマト・命（青）
- ・命の恩人
- アスフィ・アル・アンドロメダ（青）
- ・仕事を持つてこない善人の気配を感じる
- フレイヤ・ファミリアの面々（赤）
- ・すぐにも殺したい
- オツタル（橙）
- ・個人的にそこまでの嫌悪は感じていないが、フレイヤ様が命じれば、殺す
- アイズ・ヴァレンタイン（橙）

・変な強さを持っていた

・悪い気配は感じなかったけど、怪しいそうなので警戒

フィン・ディムナ（橙）

・親指は疼かない

・しかし警戒を緩めるわけには行かない

リヴェリア（橙）

・明らかにおかしい魔法の技術に不安

・悪い奴ではないと思うが・・・

レフィーヤ（橙）

・一方的なライバル視

ロキ・ファミリアの面々（橙）

・よくわからんけど怪しいらしい

タケミカヅチ・ファミリアの面々（橙）

・助けてもらった恩はあるが、得体がしれない

ヘルメス・ファミリアの面々（橙）

・経過観察中

ヴェルフ・クロツゾ（白）

シル・フローヴァ（白）

神様

ヘステイア（青）

- ・ 敵対する理由がない
- ・ いい関係を築きたい

ミアハ（青）

- ・ 是非ともお詫びがしたい

イケロス（青）

- ・ 面白そうじゃねえかあ・・・

イシユタル（青）

- ・ コイツがきつかけで目が覚めた

ヘルメス（青）

- ・ 面白そうじゃないかあ

フレイヤ（赤）

- ・ ベルに敵対しない限りは生かしておいてやる

タケミカツチ（橙）

- ・ 恩人だ、恩人なんだが・・・手放しに信用は出来ない

ロキ（橙）

・子供達に手え出したら許さへんで？

ヘフアイストス（白）

ガネーシャ（白）

暗躍

メーテイスが朝早くから出かけたすぐ後。メーテイス・ファミリアのホームに珍しい客人が訪れていた。

白髪に深紅の瞳。兎を彷彿とさせるその容貌は、世界きつての最速兎レコードホルダー

ベル・クラネルである。

「あ……すみません。レイニーさん、いますか？」

「レイニー様に用ですか、では、呼んでくるのでお待ち下さい」

物憂げな雰囲気を纏う英雄。それは望む人物が現れても変わらなかった。

—————

「モンスターが倒せない!？」

「はい……」

大問題じゃないか、わざわざウチのファミリアを訪ねてくるから、何かと思えば。

ベルが言うには、知性を持つモンスターの存在を知ってしまったせいで

『喋りだしたらどうしよう』

という考えが頭から離れず、どうにも腕が動かないらしい。

「あの時、レイニーさんに全部を任せた僕が今更こんな事を言うのも変ですけど……あの子のことを教えて貰えませんか？」

このままだと、僕は何も出来なくなる

ベルはそう言った。

「……」

これは……伝えた方がいいのかね。モンスターが倒せなくて、ベルが殺されたらとんでもない事だし。ウィーネの存在は既に知ってるんだから広まらなかつたらベル一人ぐらい変わらない、だろ？

「分かった」

それから、ベルには色んな事を話した。

ゼノスの事、ウィーネの事。クノツソスの存在やゼノスを付け狙う「イケロス・ファミリア」の事も。

ベルは一つ一つに驚き、悩み、そして憤り。出会った事もないゼノス達を思い涙さえ流していた。

どうせ話すなら味方になってもらおうと、ウィーネに会わせて情を湧かせたのも涙の理由だろう。

ウィーネは秒でベルに懐いた。ぶん殴りてえ……

「レイニーさん、その……僕、出来ることは手伝うので、何時でも呼んでください。ファミリアの皆に迷惑はかけられないので、やれることは少ないかもしれませんが……」

「おう、ありがとう。なにかあったら連絡するよ」

ベルは帰って行った。具体的な解決にはならなかったが、ウィーネと触れ合い、モンスターとゼノスは違う、という事に納得したようだった。とりあえず、死にはしないだろう。

「帰りましたか。……あの方が主人公、なんですよね？ 本当に信用できるのでしうか」

リリがそう言葉を零す。なんか……今更だけど人の口から主人公とかいうメタ発言が出るのと違和感あるな……まあ俺が隠しきれなかったせいだけでも。

ベル・クラネルは主人公である。

異常なスキルを発現する程の愚直な恋をし、アイズ・ヴァレンシユタインに追い付く為に幾つもの困難を命をチップに乗り越え、人々を救ってきた英雄だ。

時に挫折を経験し、しかしそれを糧により輝きを増すベル。物語なら当然のストーリーいかも知れない。しかし、今この世界においては正真正銘、自己犠牲の上に最良の結果を掴み取る主人公なのだ。

俺とは違う」

「え？」

「……ん？あ、声に出てたか……いや、忘れてくれ」

俺とは違う？当たり前だろ。所詮未来の知識を棚ぼた的に得ただけの凡人だ、俺は。なんの因果かRPGの能力なんてふざけた能力を持ち、関わる気もなかった原作が目の前に現れた時、結局介入を選択してしまった馬鹿野郎。

もう原作崩壊は恐れずに動く事を決めたが、俺さえ居なければもつと物語はシンプルだったはずだ。それに、既にアドバンテージだった知識もない。これからは、世界さえも知らない新たなストーリーが紡がれるのだろう。

そして、その余波で死ぬ筈のなかった誰かが死んでしまったりなんか……。

俺は、ふとした時にそんな事を考える。もう、どうしようも無いことを後悔するのも凡人の特徴なのだろうか。

「……リリにとっての主人公は、レイニー様ですよ」

「……はい？」

「前も言ったじゃないですか。レイニー様の知るリリと、今この場所にいるリリは別人です」

だから、あまり自分を卑下しないでくださいと。リリは言った。

希望は、常に輝き続けて欲しいと。

なんとも、無茶を言うものだ。

俺は自分自身が凡人な事は知っている。成績は少し悪いくらいだったし、運動は少し得意な程度。この世界に来て、恵まれた体躯を得てからも失敗続きで、リリの言う輝きなど何時見せたのか覚えが無い。

「それでも私を助けてくれたのは、レイニー様です。自信を持って下さい。リリだけではなく、このファミアリアはレイニー様を中心にここまでやってきました。誰がなんと言おうと、レイニー様の功績は陰りません」

・・・

「ちよ、ちよつと恥ずかしい事を言ってしまったね。でも、コレが本心ですから」
リリはそのままどこかへ行った。照れくさかったのだろう。かく言う俺も、顔が熱くなっている自覚がある。リリの方から去ってくれたのは幸いだっただけ・・・。

「主人公・・・」

リリの一言で、もう少し頑張ろうと決意する俺は単純なんだろう。

—————

「私の子供達眷属で実験するのはやめろ」

「・・・驚いたぞ、メーティス。よもやお前が下界の子供を慮るとはな」

ギルドのとある一室、祭壇の置かれた部屋の中で女神と老神は対峙した。突然ギルドを訪れたメーティス、何事かと思えば実験をやめろと言う。

実験、怪物と人間の架け橋として希望を見出し、その本質を見極めているこの現状の事を表しているのだろう。

「ゼノスが複数存在している事は知っている、あの竜の娘も直ぐに引き取れ。お前もずっと見逃すつもりでは無かっただろう？」

「・・・危害を加える気はない、ただ」

「それは問題じゃない！」

それまでの静かな態度が嘘のようにメーティスは猛った。

「モンスターを囲っている等と世間が知れば、子供らの未来は閉ざされる！」

ファミリアの全員が気が付きながらも目を逸らした問題、その場では何も言わなかったメーティスは、誰よりもその可能性を危惧していた。

「子供達はあの娘を見捨てられない、私もそうだ。頼む・・・」

メーティスはウラノスへと頭を下げた。

「・・・嘘の気配は感じない。つまり、本当に子供達の事を思つての行動だと言う事だ。

「随分と丸くなったな、メーティス」

「・・・私も、こんなに変わるなどは想像もしていなかったよ」

本当に丸くなった。

プライドが高く、全てに興味が無いかのように引きこもってばかりだったメーティスが、下界の子供の為にここまで出向き、あまつさえ頭を下げるとは。

・・・メーティスは、闇派閥イヴィルスではない。それは確実だ。そして、そのメーティスがここまで入れ込んでいる眷属が闇派閥だということも無いのだろう。

「・・・分かった、追って指示を出す」

—————

「ああ、嘘じゃあねえよ。【メーティス・ファミリア】はヴィーヴルの奴を匿ってる。团长長から直々に聞いたからなあ」

「ほお、とんだマヌケが居たもんですねえ。まさか、隠しもしないとは」

おい、メーティス・ファミリアを見張ってる。

ゴークルをつけた男、【イケロス・ファミリア】団長のディックスからの指示がハンター達へと飛ぶ。

人ならざるものの嗚咽が響く悪趣味な隠れ家の中で、イケロスは思いを馳せた。

(あの餓鬼、上手いこと俺の質問を交わしやがった。あの返しじゃ嘘かどうかまでは分からねえ。アドリブなら、よくあのタイミングで思いついたもんだ)

しかし、どうにも臭い。確証は無いにせよ、メーティスファミリアは怪しいのだ。

そして、イケロスにとっては間違いだろうがなんだろうが、面白ければそれでいい
「精々、俺を驚かせてくれよお？お前らあ」

ギルドからの指令

「ギルドからの勅令状・・・」

ある朝、我らが「メーテイス・ファミリア」のホームに封筒が届いた。

それにはギルドの紋章付きの・・・封蝋？ かなんかの奴で閉じられていて、ギルドからのものであると分かる。

「宛名は・・・ミイシャ・フロット？ 誰だっけ？」

「お前の担当アドバイザーだろう、確か。そんな事も忘れたのか？」

・・・あー、担当アドバイザー。存在を忘れていたよ。原作でチュールさんが親身になって行動しているのをみて、そういうものなんだと思っていたが全く違う。最初の日はアドバイスを貰っていたがすぐに終わった。その後はランクアップの時に1度会ったぐらいなのだ。

「完全記憶持つてる神様と一緒にしないで下さいよ・・・」

軽く愚痴りながら、封筒を開けた。

「ギルドへの出向、と書いてあるな」

「レイニー様、何かやらかしたんですか？」

なんで俺限定なんだよ

全く心当たりは無いが、呼ばれたからには行かねばならない。俺はギルドへと足を伸ばした。

「ただいま・・・」

ギルドから帰還したレイニーは、やたらと落ち込んでいた。目は此方を見ているようで見えておらず、光も陰っている。

「何かあったの？」

「ああ、・・・全員を集めてくれ」

団長の指示により、ニナ・リリ・ダフネ・カサンドラ・サミラ・春姫にウイーネ。そして主神であるメーティスはリビンググへと集まった。

和気あいあいとした雰囲気は溢れるはずのリビンググ、今回ばかりは鋭い空気が流れていた。

「ギルドに、ウイーネの事がバレていたみたいだ」

「「・・・」」

レイニーがギルドに赴き、渡された書類に書かれていたのは

『【ファミアリア】全団員、及び竜の娘とともに、ダンジョン20階層へとむかえ』

といった文章だ。コレを目にした時、レイニーは叫び出しそうになる自分を抑えることに一苦勞した。なにせ目の前に良くも知らない他人が居るのだ、あまり挙動を不審にすれば要らぬ詮索を招きかねない。

断りを入れ、すぐにギルドを後にし一目散にホームへと帰還した。

「どうしよう、コレ、人目につかないダンジョンで始末しようとかじゃ・・・」

「「・・・!?!」」

「い、いや、それは無いんじゃないか？ほら、ギルドだぞ？中立を保つ為に武力も放棄してるしな？」

事情を知るメーティスは、ネガティブな方向へと進もうとするレイニーを押しとどめようと発言した。

「でも・・・、裏で悪いことしてるとか定番中の定番だし・・・」

現実と物語を混同するな！と、言いたいのには山々だが、この世界は物語らしいのだ。コイツの中での影響は大きいだろう。

「んん・・・あ、ほら、私は呼ばれていないだろう？お前達が死ぬようなことがあれば私に直ぐに伝わる。ギルドもそれは分かっているはずだ。強硬手段には訴えないだろう。それに、お前がなす術もなくやられるような敵はそうそういないだろう？」

そう言われ、レイニーはようやく落ち着いた。

「とにかく、コレは強制依頼だ。ファミリア全員で20階層に向かうのは初めてだろう？ 万全を期して臨め」

言われなくても、全力で挑む構えだが。

「ファイアストーム！」

今回の探索は安全第一。放たれた業火の魔法によつて宙を舞うデッドリーホーネット群れは半分程が魔石へと姿を変えた。

「群れてるのを見つけた時はヤバいと思ったけど、やっぱりレイニーの魔法は凄いな！」
此方に声をかけながらも油断なくモンスターを屠っていくニナ。投げナイフがモンスターへの魔石を的確に穿つ、リリが文句を言うが今回はお金稼ぎが目的ではないので直ぐにやめた。

現在の階層は20、指定された場所に、もう少しのところまで来ていた。

「んー……、ここ、でしようか？」

メインのサポーターとして活躍する春姫が、地図と現在地を照らし合わせながら目的地を示した。

そこは、壁。

水晶が視界を彩る、道など何処にもない。

淡い光に照らされた通路を、列の先頭に立ち進む、後ろはサミラに任せている、

通路は長い坂道になっている。歌はいつの間にか途絶えていた。そして登り切ったその先には……

「泉、ですね」

「行き止まり……?」

開けた空間の大部分を占める泉。中々に綺麗な水質で、そこまでくつきりと見ることが出来た。

「こういうのはお約束で、泉の中に隠れた通路があるもんだよ」

成程、そういうものかと皆が納得する。

「では、レイニー様が先に確かめてきてくれませんか? 罫があるかも知れませんし」

「……」

「レイニー様?」

急に返事が返ってこなくなった。不審に思ったりりが前へと回り込むが、レイニーは顔を背けることで視線の交流を拒否する。

「どうかなされたのですか? レイニー様」

春姫も心配になり、そう声をかける。しかし、レイニーは春姫からも目を逸らした。

「実は……」

「「実は？」」

「俺、泳げないんだよね・・・」

隠れ里 1

「え．．．どうするんですか」

「どうしよう。先に何があるか詳しくわからない今、出来るだけ安全な方法で行きたいのだが．．．」

「サミラ、泳げるか？」

「オレ？無理無理」

「カサンドラは？」

「私も、機会が無かったので．．．」

「まっ、ダフネはどうせ無理だから．．．どうしようか。ゴーグルさえあれば、それさえあれば泳げなくも無いのに。」

「ウチ泳げるし」

「ええ．．．」

「多才な奴め。」

「じゃあ、行ってくるけど」

後ろを見ている間に着替えてもらい、ちやぶんと言う入水の音が聞こえた時点で視線

を戻した。

「ぷいふう」

存外に可愛らしい声と共にダフネが帰還した。

「あつたわ、どこかに繋がってる穴みたいなのが」

「お疲れ様、俺達を先導してそこまで行けるか？」

目を開けて泳げないから誰かに引つ張ってもらうしかないし、ウイーネと俺二人を連れて行くのは少し難しいかもしれない。しかし、それを受け入れたダフネに連れられ、息を止めた俺は水の中を進んで行った。お手下柔らかい。

徐々に浮上し、水の感覚が無くなり、目を開けた。先の見えない暗闇のようだ。

「ダフネ、残りのメンバーも連れて来てくれ」

「分かった」

湖を出てすぐの場所で待機する、今の所何も居ないみたいだが・・・

「ゾーンゾクッ！」

何かを感じた！直ぐに自分の入っている穴の周りを覆うようにゾーンを発動し、防衛体勢に入る

「ウイーネ、この中にいろ！ファイア！」

光源の炎を灯し、辺りの闇が取り払われる。浮かび上がって来たのは……
モンスターだった。

—————

(何匹も居るぞっ!?)

『ガアアアアッ!』

雄叫びを上げ、レイニーへと襲い掛かるリザードマン。

片手剣と盾を構え、鎧も着込んでいるその姿は冒険者のように見えた。

ガシヤアア

ゴライアスの攻撃さえも防ぐ力を持つ『ゾーン』はリザードマンの剣によって割られてしまった。レイニーは慌てて鎧でその凶刃を受ける。

「いっつ!」

「レイニー!」

———サミラよりも重いっ!

少なくともレベル4以上はあるな!相手の攻撃に対して剣を倒す事で逸らし、相手の
追撃はカウンターで対処する。

ギイン

「た、盾!」

シールドバツシュって奴か！カウンターを使つてて良かった、予想外の攻撃だ。盾を持ち上げるように姿勢を下げ、体全体で懐へと潜り込む。剣を使える間合いではないから、自動で動く身体はタツクルを仕掛け、相手を地面に叩き付けた。

『グウウウー！』

(先ず、一っ！)

他のモンスターが加勢する前に、ケリを付けなければつ……！
そう考え、レイニーは突きを放つ姿勢を整える。

その時——

『ヤメてクダサイ！』

「！誰だっ！」

人の声、しかしレイニーに聞き覚えのある声ではない。

ザツ、ザツ

「フアイア！」

足音が聞こえた方向へと火魔法を放つ、牽制の為だ。

『突然攻撃した事をお詫び申上げます！ドウカ話をアチャヤー——！』

しまった、相手があまりにも勢いよく出てくるから火が。

—————

『才前ガレイニーツテ奴カ！ビツクリスルグライニ強イナ！』

「あ、ああ・・・アンタはリド、だったか」

『ソウダ、特ニ盾ヲ流サレタ時ハ死ンダト思ツタゼ』

ギルドからの命令に従い、未踏破領域に踏み出した俺を待っていたのは数えきれない数の異端児^{ゼノス}達だった。アルミラージにセイレーン、ゴブリンに石龍まで。石龍には歓迎されていないようだけでも。

「レイニー、この人達は・・・」

「ああ、・・・ウイーネと同じ、ゼノスみたいだ・・・」

ウイーネとの生活で既に分かっていた事だが、見た目以外は人間と変わりない。食べ物に舌鼓をうち、酒で酔って人に絡む。

「ウイーネ様だけでも大層驚きましたが、まさかこんなにも多くの集まりがあったとは・・・」

「強そうな奴ばつかだな、戦いて〜」

やめろよ

戦闘が終わった後、暫くすると残りのゼノス達も次々と姿を現し、それと同時にファミリアのメンバーも顔を出した為一瞬戦闘態勢に入りかけたがどうにか事情を説明し、事なきを得たのだ。

『ああ、もう集まっていたのか』

『オオ！フェルズ！』

中性的な声、声の元に目をやると深くフードを被った謎の人物が居た。いや、フェルズ、何処かで聞いた事が・・・ああ、19階で、か。

「(人間・・・?)」

『やあ、スレイヤー。初めましてだね。私はフェルズ^者。今後ともよろしく』

フェルズと名乗る人物は、右手を差し出しフードを取った。その右手は細く、顔は骸骨そのものだった。

「うおっ！ス、スケルトンだったのか。・・・スケルトンなんてモンスター居たか・・・？」

『驚かせてしまったね、私はモンスターでは無いよ。そして人間でもない。これは不死を目指して使った秘法の「反動なのさ』』

「不死・・・」

フェルズと名乗る人物は、『これは罰なんだ』と話す。その口調は軽快でありながらも後悔が多分に含まれていた。

『さて、馬鹿の話はもう良いだろう。それよりも、君達をここに呼んだ理由を話そうじゃないか』

閑話・イシュタル

「……(暇だな)」

愛と美の女神、イシュタル。同じ美の女神でありながら、人気で圧倒的にフレイヤに負けていることがコンプレックスでフレイヤを陥れる計画を立て、それを複数の勢力に全力で阻止された過去を持つ。

勢力の筆頭であるフレイヤに殺されかけ、レイニーに助けて貰った。その後フレイヤの追っ手から逃れるためギルドへ悪事を報告し、自首。懲役1240年となった。

「(仕方が無い、オナオーでもするか)」

独房に娯楽など無い、彼女はもっぱらオナオーで時間を潰していた。天界にいた時も大抵そうだった。永遠を生きる神からすれば長年親しんだ行為で、ずるつとなんの躊躇いもなく履物を脱ぎ、下着へと手をかけたオーその瞬間。

「ういー元気にやってますかー?」

「ん?」

「え?」

時が、止まった。

「まあその、久しぶりだなあ、レイニー」

「ア、ハイ」

「今日は、何故ここに来たんだい？」

「ア、ハイ」

「・・・お前は私が好きか？」

「ア、ハイ…いや違えよ!!」

何処か上の空なレイニー、下着がそんなに衝撃的だったのだろうか。

「お前は存外ウブなんだな、まさか、下着如きでそれほどまでに取り乱すとは」

「いや、歓楽街のトツプだった人間が白パンなんて履いてんだなと思つてびっくりしてただけだよ」

「気になるのはそこなのか!?ギルドが支給してくる物だから仕方ないだろう!」

レイニーが凡人凡人と言うからと言って全てが凡人とは限らない、ちよつとおかしな所もあるのがレイニーと言う人間だ。

「ま、まあいい。そこは何でもいいんだ。それより、お前はここに何をしに来たんだ?ゼノス達の事なら、もう何も情報はないぞ」

お前が欲しがっている情報は、全部サミラに渡したさ。そう言つてイシュタルはレイニーに背を向けた。もう話すことなど無いだろう、と背中がそう語つていた。

「そんな事より、トイレの近くでもないのに何で下着になつてたんだよ」

「いや気になるのはそこなのか!？」

常人なら神の背中から発せられる圧に気圧され、『……ツ!』とか言いながら去つていつてもおかしくない状況の筈だった。だがコイツには関係がないようだ。

「いや、俺別にその話しに來た訳じゃないんで……」

「ああ? そんな訳ないだろう、それ以外、お前が私に会いに來る理由があるのか? お前自身『性根が綺麗じゃない』とか言つてた女だぞ」

イシュタルは事件から幾日たった今でも、しつかりと覚えていくくらいに根に持つているらしい。しかし、レイニーは本当にそんな話をしに來た訳ではないらしく、ゴソゴソと持つていた袋を漁り始めた。

「そんなこと言つたつけ……まあそれより、暇なんじゃないかと思つて、これ」
袋から取り出されたのは、将棋と呼ばれるものだった。

—————

「やめてくれえ……私の可愛い眷属を奪わないでくれえ……」

「しまったトラウマだったのか」

簡単なルールを教え、いざ戦闘開始と意気込んだのはいいのだが。彼らはお互いルールを知ってる程度の初心者で、とりあえず歩を進め敵の駒を奪ったのはレイニー。先手を取りコレからどうするかと考えを深めようとした時、彼はイシユタルの様子がおかしい事に気がついた。

どうもフレイヤに眷属達を次々魅力されたのがイシユタルの心に深い傷を残していた様だ。顔を合わせた時に特に落ち込んだ様子が無いのでレイニーも気が付くことがなかった。

「わ、悪かったよ、そうだ、別の事をしよう。独楽とかけん玉とか一人で出来るやつも持って来たんだ」

「・・・いいい」

「えっ？」

珍しく気を利かせ、提案をしたレイニーだったが何故か却下されてしまう。

「・・・そうだ、取り返すのさ」

「取り返すって、駒をか」

「一度取られても関係ない・・・もう一度取り返してやればいい・・・」

「(あコレ眷属に重ねて見てるな)」

涙が引つ込んだかと思えば謎のオーラが溢れてくる、イシユタルは今極限の精神状態

に達した。劣等感でボロボロだった心はこの瞬間下克上を狙うチャレンジャーとして生まれ変わった。

「ええと、まだやるつて事で良いんだよな．．．じゃあ桂馬を動かす」

その後は駒を動かす音だけが響く、流石のレイニーも茶化す事ができなかった。

コト．．．

「王手だ」

「えっ？うわっマジだ。飛車が届く．．．ええと、とりあえず間に金を入れて」

「それを香車で取る」

「oh．．．」

その後も散発的な抵抗を見せるものの、幾らか駒を取り返した所で詰められた盤面をひっくり返す事は出来ない。やがてレイニーの盤面には王以外何も無くなってしまう。

「いや酷過ぎだろ!!一思いに王手かけてくれや!」

「ふふふ．．．どうだフレイヤア。お前のオツタルはもう私のモノだ．．．」

「それ角行だから．．．(ダメだこいつ正気を失ってやがる．．．!)」

う、うわあああああ!

「はっ！私は一体何を・・・レイニー？どうしたんだ」

「やめろお・・・王の右上に態々歩を出すんじゃないやねえ・・・。斜め後ろに桂馬とか、舐めやがってちくしょうめ・・・」

「す、すまないねえ、どうもおかしくなっちゃったらしい」

「ああ・・・まあいいよ。ストレス解消にもなつたらう」

イシユタルがかつてないほどにツヤツヤしているのに対し、レイニーはいささかやつれているようだ。普段煽り散らす側であつたのに、今回は煽り散らされてしまった事が随分と負担になっている様子。

「じゃ、そろそろ帰りますわ。もう半日くらい居た気がするし」

「あ、ああ、そうかい。あ、ありがとう、ね。その、いい暇つぶしになった」

「そりやよかつた」

持ち込んだおやつのカス等を集めながらそんな会話を、お前随分と自由にしてんな。

「・・・そう言えば、結局聞いていない気がするんだが・・・、お前は何故ここに来たんだ？」

「ええ・・・ここで聞いちやう？」

「聞いちやう？じやないだろう。当たり前だ、お前がこんなところに来る理由なんて……」
レイニーは、頭を掻きながら、困った様に話した。

「んー、なんと言うか。気を悪くしないで欲しいんだが、可哀想だと思ったんだよ」
「か、可哀想？」

「話せば長くなるけど……まあ、まず俺はフレイヤが嫌いだね。アイツへの嫌がらせになるんだったらアンタに協力しても良かったんだけど、フレイヤファミリアを潰す為に春姫を犠牲にしようとしてるって聞いたんだよ」

いくら嫌いでも関係の無い奴を殺してまでやってやろうとは思わないし、知ったからには見過ごせなくて、イシュタルファミリアを襲撃した。悪いとは思ってない。

「……」

「んでも、前にやろうとしてたことは間違いなく悪で容認はできなかったけど、嫉妬で手段を選ばなくなるなんて知恵を持つてる生物なら仕方ねえとは思ってて、(小説で)アンタの感じじゃ、更生出来るんじゃないかと思っただ、フレイヤはクソカスだから無理だろうけど」

「お、おお、お前随分と辛辣だな……まあ、お前の見立ては間違っていないかもしれないなあ。不思議と、前よりフレイヤへの執着が薄れたんだ」

先程の凶行をなかつたことにしようとするイシュタル、それはダメです。

まあその話は置いておくにしても、確かにイシユタルは前よりも落ち着いているようだ。醜い感情に振り回され、モノに当たるといふことも無い、牢獄の退屈さに苛立ちはあるが常識の程度だ。そうなった要因は、

「お前のせいだ、レイニー」

「え、俺？」

魅力の効かない存在、そんなものは初めてだった。神ですら完全に回避出来る者など居ないのに。最初は取り乱したが、牢獄で頭を冷やしてみると段々と美しさで争っていた事など馬鹿らしくなってきたのだ。一度冷静になるともう嫉妬に狂うことも無かった。

美しさで負けているからなんだと言うのだ

【私にはそれしかない】

結局の所、自分のアイデンティティが無くなるのが怖かったらしい。心のどこかで負けていると分かっている、認めるわけにはいかなかった、それが自分の武器だったから。

しかしレイニーにその自慢の武器を叩き折られ、あまつさえ『見た目では負けてない』とか何処か上から目線な評価をされて、なんかもういいかなあなんて思うようになってた。

「そういう訳だ、間違いない、お前のせいだな」

冗談めかして笑うイシュタル、それをみたレイニーは何を思うでもなく、自然と「成程、だから可愛く見えるのか」

そう呟いた

「・・・今なんて?」

「あ?・・・ああ、可愛く見えるって?変な意味じゃないぞ、ただ前よりも気が楽になるからか、なんか自然体で神生楽しそうだなあつて」

「・・・そうか。わ、私に可愛いなんて言う奴はお前が初めてだよ」

今まで、美しい、綺麗、エロいとその美貌を讃えられることはあつても可愛いなどと愛でられるのは初めての感覚だった。

レイニーによれば、美しさを際立たせる魅力の力がないイシュタルは顔立ち美しいが嫉妬に狂っちゃったり案外小心者だったりと精神的に弱いイシュタルは可愛い部類に入るようだ。

「可愛い、可愛い、か。なんだ、レイニーにそう言われると悪い気はしないねえ」
フレイヤ
アイツには、死んでも言わない言葉だろうし

「・・・成程、私は今、レイニーの関心と言う点ではフレイヤに圧勝したのか?」

小さな事だが、「ははっ」と、笑い声が漏れる。

「な、なんだよ突然」

「いやあ？なんでもないさあ、それで、次はいつ来るんだい？」

「ええ・・・いやまあ、暇になったら来るけどよ・・・」

「（長い神生だったが・・・初めて、楽しいと思えた気がする。命だけでなく、心も救われてしまったなあ）」

コイツが死ぬ迄、50か、60か。短いせよ、退屈せずに過ごせそうだ。

レイニー

レベル 2

力・A 840

耐久・SSS 1500

器用・D 574

敏捷・D 510+348

魔力 E 455

模倣 G

《スキル》

【フェイクヒーロー
贗物英雄】

- ・ステータスの追加
- ・不老
- ・ストレージ

ダンジョンに温泉を求めるのは間違っているだろうか
〔十レイニー〕

「その、ヘスティア様と一緒にではベルさんの傷に響くと思います・・・！」

「何言ってるんだ！ベル君は三度の飯より僕と居るのが好きなタイプなんだぞー！」

よお色男！会ってすぐになんだが、死んでくれないか！

(ベルめ・・・女に囲まれおって・・・)

場所は17階層、ダンジョンという陰鬱な場所にそぐわない、姦しい女達の声が辺りに響いていた。

死闘の果てにあっさり(矛盾)ゴライアスを倒した一行は、これ以上ダンジョンを刺激せぬ様にと早い帰還を行っていた。

「はっ！来ますっ！」

ベルは何かをみつけたようだ、先頭へと駆け出し、素早く武器を構えた。

暗がりの奥から現れたのは三匹のヘルハウンド、群れで獲物を囲い炎で炙る。対処を誤れば一網打尽にされてしまうだろう。

しかしベル・クラネルの敵ではなかった。

一頭目を左手で、二頭目を右手で流れる様に断ち切る。最後の一匹は回し蹴りだ。

「まだです、あれは・・・ハードアーマード!」

「ひいつ」

「大丈夫です、神様は・・・僕が守ります!」

さすべル、とでも言いたくなる光景だが、我が主人公レイニーは何をしているのだろうか?

「ゾーン」

どうやら戦闘の出来ない神の防御を補強していた様だ、ここらの敵ならば傷も付かないだろう。

守りを固め、憂いの無くなった冒険者達は、強かった。

17階層はLv2が数人で攻略可能な階層だ、そこにLv4が2人とレベル2が複数人、下手を打つても負ける相手では無い。

「凄いです、ベルさん!」

「お見事でした、ベルさん」

「さつすがはリトルルーキーだ」

「いやあ、そんな・・・あはは・・・」

(俺も背中守ってたのに・・・)

悲しいかな、コレが原作主人公との差なのか。

「・・・レイニーさん、どうしようもない主神ですが、守って下さりありがとうございます。ごさいます」

「え？あ、ああ。いや、当たり前のことですよ」

端でいじいじしていたレイニーに声をかけたのはヘルメス・ファミリアの団長《アスファイ・アル・アンドロメダ》だった。何故声をかけたのかと言うと、咄嗟に神を守る魔法を唱えた事を称える意味もあつたがヘルメスからけしかけられたということも大きい。

『アスファイ、彼に探りを入れてくれないか』

「(・・・悪い人間には見えませんが、警戒は必要、ですかね)レイニーさん、貴方はどこからー」

ドドドツ！

「神様！」

「・・・？横穴？」

どうやら、また何かが起こった様だ。

「落ち着けよあんた！毘かもしれねえだろ！」

「たとえ罨だとしても！目の前に温泉があるなら入れねばならないのです！それが温泉に対する礼儀！」

「ちよやめっ、お、おいLv2の何処にこんな力がアアアア！」

横穴の先にあつたのは、何の変哲もない温泉であつた。いや、温泉があること自体が変ではあるが……。それよりも、温泉を目にした瞬間正気を失つたらしいヤマト・命の方が重要だろう。

「レイニーさん、ここにはモンスターの気配もありません。18階層のような、安全地帯なのではないですか？」

「り、リオンさん……。いや、そうかもしれないですが……。くっそ、こんな展開記憶に無いぞ？外伝か？いや、また俺が原因の異常事態イレギュラーか!?」あつ

「温泉じゃーい！」

バシヤアツ！

「バカやろおおお！」

（結局、リオンさんが「水着なら問題ないのでは？」とかなんとか言い出し、温泉に入る事になった。てか言い出しつぺのリオンさんが入らないなんてどうゆう事だよ！畜生！）

「今頃、あの向こうでは美の饗宴が繰り広げられているんだろうねえ」

「「・・・っ！」」

「あんまり人間を馬鹿にしないで下さいよ（言われるまでもなく妄想中だ）」

「命ちゃんは生真面目さに似合わぬ不埒な体のラインを、千草ちゃんは可憐な腰つきをクリスタルの元に晒し」

（知ってる）

「ウチのアスフィだって本来はお姫様・・・おっと。ああ見えてかなりのもんだ。俺が保証するよ」

（知ってる）

「エマちゃんは、少女らしい快活さの中に大人っぽい大きなアレがある」

（知らない）

「極めつけはヘステイアだあ、天界屈指のあの胸、それを生であるあの岩の向こうにあるかと思うと・・・」

「「くうっ！」」

（ウブなヤツらめ。・・・そういや、ここにはネットもないし性的な事なんてあんまり出くわさないのか）

純情な少年達をヘルメスは言葉巧みに煽り立てる、彼らの頭は女の子の事で一杯だろう。

レイニーは、どちらかと言うと二次元スキーなのでそこまでの威力は無かったらしい、まして、イチオシのリューは温泉に入らない。それによって唯一、見張りのリユーから軽蔑の目を向けられずに済んでいた。

「ほえあーりー!!」

「ど、どうしたんですか神様!」

「な、なんでもないんだベル君!少々予期せぬ事態が起きただけさ!ちよつと待っててくれないか!」

焦りを含んだ神の声、どうやら水着が千切れてしまったようだ。展開トツプクラスの胸の暴力に、ひ弱な布は耐え切れなかったらしい。

「こ、このカップで入りませんか・・・」

「ど、どうしますか?予備の水着も無いようですし・・・」

万事休すか、そう思われた瞬間。

「ヘステイアー!まさか、水着がちぎれたのかーい!」

岩の向こうからヘルメス悪神の声が、あの野郎良くもいけしやあしやあと・・・!小さい水着を用意したのはお前だろう!と、ヘステイアは憤激する。

「もしそうなら、レイニー君、創つくってくれないか？」

「創つくる？・・・あ、ああ。アレ商か。その、そう簡単には作れないですよ」

レイニーとて、自分の力が特異な事は理解している、仲間以外にはそう簡単にはばらさない決めていた。

ヘルメスも、無理に聞こうとは思わない、あまり怪しまれて、本気で隠し通されても困る、あくまでおちやらけた駄目神として警戒されない立ち位置にいるのが一番だと信じているからだ。

水着は、ヴェルフによって直された。

—————

「さあ皆さん、準備は良いですね？」

「なにか私だけ、とても恥ずかしい物のような気がするんですが・・・」

「ブフォツ！（スク水!?!）」

なんやかんやと、無事温泉に入る所まで辿り着いた一行、最後に、温泉の作法とやらを命から確認している所だ。

「まず二礼二拍手一礼、そしてお賽銭を入れます」

「いやそれ神社でやる奴だろうがっ！」

思わずツツコミしてしまうレイニー、普段は結構ボケる側なのだが、今回は少し常識

人に見えてしまう。

「……レイニーは随分極東文化に詳しいんだな」

「え？……あ、ああ、本で見たんだよ、ウチのファミリアは知恵を尊ぶからな（適当）それにしてもアンタのこのあいつは大丈夫なのか？ 最初から思ってたが正気じゃないぞ」

「ごめんなさい、命ちゃんは温泉の事となるとどうも……」

彼らが後ろで会話している間にも命による誤った知識の伝承は進んでいき。命が温泉を一杯飲み干し全ての作法は終了した。かけ湯もせずに湯へと飛び込む命、なんと言うことだ。

そして始まった温泉パーティ、スイレンもどきに酒瓶を乗せ、完全にリラックスモードだ。

各々は水遊びをしたり、大人しく温泉に浸かったりと自由に使っていた。

「終わったんだな……」

「ああ、俺達は生きている」

忘れそうになるが、これはタケミカヅチ・ファミリアの面々がベル達にモンスターの^{モンスターパレード}擦り付けをした事から始まった物語だ、しかし彼等は救出劇を通して復縁し、今ではそれなりに仲になっていた。

「あの、レイニーさん、本当にありがとうございました、命を助けて貰って……感謝し
かありません」

「ああ、そうだな。気絶してて覚えちゃいないが、ベルから話は聞いてる、ありがとう」
「おお、まあでも、タイミングが良かっただけだ。死なないように、気を付けろよな」

どんな強者も何時死ぬとも限らない、それがダンジョンという物だ。

「ベルさん、あつちの方に滝のような物を見つけました！」

「桜花、あつちに温泉の吹き出し口があつたの、一緒に行こう？」

男の会話もそこそこに、ベルと桜花にお呼びがかかった。

（……そう言えば桜花も結構ハーレム主人公みたいな奴だったかな、なんで気が付か
ないんだこいつ）

「はは、お互い女には縁がないようだな？」

「ファミリア女の子ばっかなんだゴメンな」

「ふざけろっ！」

レイニーもかなり恵まれている、ただそういう面では距離を取っていると
言うだけだ。自分はそういう方向で意欲を發揮しないのに他の人間が女にちやほやされてい
るとグチグチ言うとか何がしたいのだろうか。

「ま、折角女の子達と温泉に入ってるんだ、話のひとつでもしに行きやいいんじゃないか

「？」

「・・・悪くないな」

思い立ったが吉日、ヴェルフは立ち上がり、湯気の奥へと消えていった。目が据わっていた。それと入れ替わる様に、アスファイがレイニーの元を訪れる。

「お隣よろしいですか？」

「b・・・コホン、は、はい」

彼女が纏っているのはスクール水着、レイニーの前世では学生用の水着で、それを立派な大人に見えるアスファイが着ているとなると、少しばかりの背徳感を感じる。さらに言えば、前世では男女は別々での授業だったので女性のスクール水着姿を見るのも久しいと言う事もある。

「・・・その反応、やはりこの水着の事を知っている様ですね？コレはどんなモノなのですか？」

挙動の怪しいレイニーにズズいと詰め寄るアスファイ、彼女は自分が発育の良い方であると自覚した方がいい、生粋の童貞には刺激が強過ぎる。

近くに居続けられては困ると、レイニーは彼女の望む情報を吐いた。

「じ、自分の居たところでは学生用の水着でした、同じ学生同士の集まる場でしか着ない様な水着で、人の目につく所で着る人は余りいなかったですね・・・」

「成程、アイツを覚えてきます」

(ひえっ)

レイニーはヘルメスの冥福を祈った。今度は誰かが来ることも無く、レイニーは一人ゆつたりと温泉に浸かる。

(・・・暇だな、歌でも歌ってみるか)

レイニーは歌が好きだ、さほど上手いわけでは無いが、歌の中にも物語があり、それがリズムや強弱によってしつかりと話として見る事が出来る歌を好んでいた。

「ご機嫌ですね」

しかし、ここは広いとは言え限られた空間だ。声を聞き付けたリユーが現れた。特大のスイレンに乗り、釣竿のようなものを使っているようだ。何故その程度の植物にそんな浮力があるのか分からないし、釣りをする意味もあまり分からない。

「うおっ・・・もしかして、聞かれました?」

「ええ、まあ。・・・いい曲でしたよ、心に響きました」

「そ、そうですか、初めて言われましたよ」

歌を褒められたのは初めての経験だ、まして想い人のリユーに褒められたのだから、それはそれは嬉しいものだろう。はは、と照れながら小さく笑いを零す。

「貴方は、オーツ！皆さん！温泉から上がってくださいー！」

突然の警告、流石に湯に浸かりリラックスしていた面々は反応出来ず、まんまとダンジョンの仕掛けたトラップにハマる事になる。

「「ギャアアアアア！」」

突如響く女性の悲鳴、何かがこの温泉の中で起きているらしい。水が赤く染まり、どうにも嫌な予感を感じさせる。

「また何かやらかしたんですか！」

「失敬だなあ、これは僕じゃないよ」

岩に上り辺りを見渡したレイニーの視界に映ったのは、溶け落ちた水着を必死に支え、局部を隠そうとしている冒険者達の姿だった。

（服だけ溶けるタイプのアレかっ！・・・ん？つまり俺のも・・・ってうぎやアアアア！）
彼はフルチンだった、彼の水着は見事に全てが溶け落ちた様だ。そして彼は周りを見る為に高い岩の上に居る、周りが見えると言うことは周りからも見えるという事であり・・・

「・・・レイニーさん、ソレは隠した方がいい」

「ギャアアアアアッ！」

幸い自身自身の事で夢中な他の面々には見られなかったようだが、スイレンの上に乗っていて被害を免れたりユーには直視されてしまった。見渡す際クルリと一回転し

たので、それはもう様々な角度でがつつり観察されてしまった事だろう。

(・・・ヒューマンの男性は、みなあの様に大きなものでしょうか、父のものと同様でも大きい・・・)

(オワツタ)

この騒動の元凶である特殊なモンスターは、ボス共々遭難していたベル・クラネルによって討伐された。エマの方向音痴が功を奏した形になる。

日常（ファミリア全員）

「家具を？」

「オレらはまだここにきて日が浅いからよー、部屋もスツカラカンなんだ」

週に何日かあるダンジョンに潜らない休息日。朝食食べる為にファミリアの全員が集まる食堂でサミラがそう話し始めた。

曰く、サミラと春姫の部屋が殺風景なので買い物をしに行きたいとのこと。

そう言えば自分も本棚が欲しいと思っていた所だったっけ。

「俺もついて行つていいか？買いたいものがあるんだ」

「あたしも暇だし行こうかな？」

「ウチも、欲しいものがあるから行くなら一緒に行こうかな」

私も、私もと結局主神含め総勢8名と、そこそこな大所帯での買い物を敢行することになった。まあ言うて我がファミリアは歴史の浅いファミリアだ。リリ達が来たのだから・・・半年経ってないのか？浅いなホントに。

世界がベル・クラネルの成長に合わせているのか、中々濃密な数ヶ月だった。

そんな感じで未だスカスカのホームに自分達は暮らしている。引越し作業だったり

その他で時間を取られ、街を散策するのは久しぶりだったかもしれない。全員が1度部屋に戻り、私服に着替えて戻って来る。皆一様に可愛く、一緒に街を歩けるのは男として嬉しいものがあるが……

「あの一、春姫、服は……着物しかないのか？」

「?はい、それに、1番慣れている格好ですの」

浮いている、圧倒的に。前職の面影か、鮮やかで人目を引くその衣服はとても街中で出歩くのに適しているとは思えない。

「誰か、春姫に服を貸して貰えないか？」

無いのであれば仕方が無い、今日の所は誰かが……と提案をしたものの、何故か殆どの者が目を合わせようともしせずどこか遠くを見始める。

「二ナ?」

スっ

「リリ?」

スっ

「神様……」

「チツ、サイズが合うわけないだろう。当て付けか？」

サイズ?サイズと言うと……ハッ!

俺は即座に土下座した。

結局、カサンドラの服は何かサイズがあつたようで、それに着替えてもらうことになった。サミラも似たような体格ではあるが、まあアマゾネスなので春姫に着させるのは流石にやばい物が多い。

「どう・・・でしょうか？このような衣服は慣れていなくて」

かわいい、恥じらいの表情でホームから出て来た春姫はたまに見掛けるカサンドラの服を着ていた。あまり意識する事は無かつたが、いつも着物を着ていた春姫なので、この格好は新鮮だ。

「あ、えつと・・・似合ってるよ」

「そ、そうですか？・・・嬉しいです」

もじもじもじもじ、ホームの入口で俺達は気不味くなっていた。

「はい！問題もないようですし、さっさと店に行きますよー！」

リリが先導してホームを出ていく、正直助かつた。この後何が続けばいいのかさっぱりわからなかつたからな・・・。それにしても、チラリと周りを見るも見えるのは目が眩む様な美少女ばかり、俺は前世で相当な徳を積んだのか？いや、ゲームしてラノベ読んでただけの筈だけだな。

メーティス様

この世界の人間では無いからか、神特有のオーラと言う物はイマイチ感じられないが、人間離れした美少女だな、と言う感覚は感じる。地面に着いてしまいかと言う程長い髪は光を拾いキラキラと輝いていて、一番目を眩ませに来ている。美少女

二ナ

初めて出会った時は特に意識していなかったが、可愛い。元気系の同級生みたいな感じだ。最近は少し落ち込んでいた時期もあったけど今は笑顔が増えた。リリと2人で落ち込みコンビな印象があったので、元気になってくれて良かったと思う。たまにタマヒユンな表情も垣間見えるが今の所被害が此方に及んだことは無い。美少女

リリ

言わずと知れた小人族の美少女、トレードマークの大きなバックパックは流石に今は背負っておらず、その体格がよりハッキリ小さい事が分かる。見た目だけなら子供に見られてもおかしくないが、それでも一個下だ。美少女

ダフネ

前のアポロンファミリアの影響か、基本的に他人を信用していないような姿勢だったが、同世代の女の子に囲まれて態度が柔らかくなった。今では自然な笑顔を見る事もで

きる、まあ俺と話している時は基本的に仏頂面だが、美少女

カサンドラ

可愛い、いや綺麗な。穏やかな目付きでこちらを見ている事が多く、目が合うと2分の1位で話しかけて来る。ダフネと仲が良く、普段は2人で話をしている事が多いかな、予知夢のこととなると思うようにはならないが・・・、美少女

春姫

可愛い、可愛い。普段見慣れない衣装なので普段より可愛い。あれ？よく見たらズボンの後ろから尻尾が出る。え、穴空いてるの？えっち！美少女

サミラ

歓楽街では無い普通の街に出るにあたって、流石に下はスカート的なものを履いては居るが・・・、え、上は？流石にえっち。仲は・・・俺が1番良いのかな？最近は諦めて猥談にに応じているので、自分の性癖がさらけ出されつつある、前世の知識（実施経験なし）を使って話しているの、この世界的に新しい知見な事が多いらしくよく昂って襲いかかって来る。美少女

うーん・・・前前世の俺ありがとう、色々あるけど幸せです。

「1番の目的は家具ですが、持ち帰る事も考えて最後にしましょう」

一般人であれば有り得ない選択肢ではあるが、自分達は上級冒険者。邪魔だという問

題点を除けば一人でもダンス程度なら運ぶ事は出来る。ストレージに入ればという話ではあるが、流石に街中で家具を消し去るなんて事は出来ない。

家具を後回しにする、そう決め代わりに先に他の行き先をメンバーに確認する事となった。

メーテイス様と俺は本と棚。ニナとリリは新しい服、ダフネとカサンドラは雑貨屋で欲しい物があると言っていた。

「まあ勿論春姫も服を探しに行くとして、そうだな。まずは雑貨屋に行こうか」

この街に一番詳しいのはリリ、昔取った杵柄的なものでスムーズに雑貨屋へと案内してくれる。

「ここがリリのオススメの店です。値段はマチマチですが、概ね相場と考えて大丈夫ですよ」

「リリは良く来るの?」
「まあ、最近は大アリスにも余裕がありますから」

わいわいやりながら、自然と店の中で離れて行き、3つのグループが作られる。

俺・メーテイス様・サミラ

ニナ・リリ・春姫

ダフネ・カサンドラ

俺達は特に欲しいものがあつた訳では無いが、物を見てみると中々面白い物が多い。

「あ、本のコーナーもありますよ」

「見た事の無い本も多いな。なるほど、本は本屋だけにある訳では無いのか・・・全部買おう」

「ちつ、エロい奴はねえのかよ」

「後の本屋に期待しよう」

「あつ、この置物可愛い」

「本当ですね・・・70000ヴァリス!?高過ぎます!」

「値段で見えるものでは・・・」

「そんなんじや何も買えないよ」

「えつ、この人形買うの?」

「うん、ちよつと、似てるから・・・」

「似てるつて、あつ、アイツ・・・まあいいけどさ。可愛いコップもキッチンと探さないと」

「ファミリアの皆、喜んでくれるといいね」

三者三様、いや三グループ三様の買い物を済ませ店の入口に集まる。人目につかない所でサツとストレージに回収し、何食わぬ顔で次の店へと向かう。次の目的地は服屋

だ。

「・・・人が増えて来たな、服屋は中心地にあるのか？」

「そうですね」

「そうか。おいレイニー、私は疲れた。おんぶしろ」

「はいー？」

拒否権を使用したのだが、通用しなかった。抵抗虚しく背中によじ登られた・・・。周りの視線が痛い、髪の色が一緒ならばまだ兄妹とも思つて貰えたかもしれないが、青と金。更に周りには同行者と思しき美少女が沢山・・・俺が周りの人でも視線に殺意が混じる事だろう。更に言うなら同行者も少し視線がキツイいな・・・

「着きましたよ」

「やっとか・・・ほら、神様降りてください」

身体を揺すつて促すも、降りる気配がない。

「次の本屋まで、体力を温存する。このまま行け」

「何言つてんだこの神^{コイツ}」

嘘だろ・・・店の中々繁盛しているみたいだし、入口に固まっている今もチラチラこつちを伺うような気配を感じる。そんな所に行けなんて鬼畜かこの人は。

「メーティス様、レイニー様も困っています。そろそろワガママはやめた方がよろしい

「のでは？」

「私の身は一般人だぞ、普段運動もしていなからもう歩けないのだ」

神様の言い分は最も正しいが、流石にこれまでの道のりで歩けなくなる程か弱い訳では無い、面倒なだけだろう。少しつつかれても意志を変える気もない様子、俺は分かりましたと店の中へ足を進める。

「てここ女性服専門店かい！」

「だって別にレイニー様買わないでしょう？それなら種類の豊富な方がいいと思いませんか」

レイニーは神様を中に落として外に出た。

待つこと2時間、2時間だ。入口でただ時間を待ち続ける事も出来ず、俺は買ったばかりの本を読んでいた。アルゴノウト・・・良い奴じゃないか。あ、これベルが憧れる英雄か。

「・・・レイニー」

「ん？終わったか？・・・あへえ？」

本の内容に浸っている時、いつの間にか近くに居たらしいダフネに声をかけられる。ようやくとか、まあ丁度本も終わったし、とダフネの方に顔を向けると

「え、と。え？な、え？え、なんで？」

「・・・か、感想言いなさいよ」

「えっちです」

「っ！ばか」

ダフネが居た、声を掛けられたのだからダフネが居ることは当たり前なのだが、様子がおかしい、と言うか服がおかしい。

「おま、それ・・・アマゾネスの民族衣装、だよな？」

「・・・罰ゲームよ」

なんの!?何があつたら服を買う時に罰ゲームが発生するんだ!?

女の子は恐ろしい・・・

話を聴くと、店の中でアマゾネスの衣装を見つけたサミラが提案したらしい。神様も率先してのっかり（参加はしないが）眷属の中での厳正な審査の結果、ダフネが選ばれた。それでそのままでは面白くないから俺に感想を求めて来いと。

「悪ノリが過ぎるって、とりあえず戻ろう」

ダフネが周りに見られないように隠しながら、店内へと戻る。

店の中ではあわあわしているカサンドラと春姫、そしてニヤニヤしているその他達が居た。

「感想はどうだ?レイニー」

「えっちでした、流石にコレは・・・えっちでしたけどやり過ぎですよ」

ポコッ

ダフネの味方をしていた筈だが、後ろから1発殴られてしまった。

—————

「よし、本屋に着いたな。レイニー、早く降ろせ」

本屋までの道も背中中の所有権を握られていたが、店にいる間は自由だ。この街で1番大きな本屋に着いた俺達は各々興味のある本を探しに別れた。

神様はとにかく持っていない本、俺と春姫は英雄譚。リリとダフネはダンジョンに関する物を、ニナ・カサンドラは普段本を読まないの、色々見て回ると言っていた。サミラ？春画でも探しているんじゃない？

「英雄譚のコーナーは一際大きいな、やっぱり人気が凄いからか」

「好きだったあの作者様の新刊が出ています、『ダンジョンに潜ったらとんでもマジックアイテムで天下無双!?俺はオラリオを統一する存在らしい』聞いた事の無いタイトルですが、きっと面白いのでしょう」

「他の見る限り、随分方向性変えたみたいだなその人・・・」

「ダフネ様は前のファミリアで18階層以降も定期的に探索されていたのですよね？本

を読む限り、やはりリリ達の存在が足を引つ張ってしまいそうなのですが・・・」

「暫くはダークファンガスとガン・リベルラ以外に不意打ちをしてくる敵は居ないし、その2つも気が付かない程隠密性が高い訳でも無いから、大丈夫だと思う。Lv2にはなってもらいたいけど、春姫はまだね・・・」

「わわっ、ここ大人の本がいっぱいだよ」

「ひゃあっ、朝の予言はこういう事だったの・・・あ、あそこに居るのはサミラさん？」

「うーん、アイツの性癖は何処にも載ってねえな。参考にしようと思ったのによお」

「ふむ・・・持てん」

山と見紛う程の本を買わされ、悟られずにストレージにしまうのは大変だった物の、ようやく全ての寄り道が終わりメインである家具の店に来る事が出来た。勿論、本を選ぶのに体力を使ったらしい主神様は背中に居る。

「あーじゃあ、俺はこのまま2人で本棚探しに行くから。皆もとりあえず好きな所に行つてきてくれ。また入口に集まろう」

家具は一つ一つが相当な場所を取る、生産系でかなり大手のファミリアらしく、5階

建てのフロア全てが家具で埋められているので目当ての物を探すだけで一苦労だ。神様が降りる事を拒否したので、チラチラ見られながらフロアを歩く事になる。

「あ、見つけましたよ、神様．．．神様？」

「zzzz．．．」

「寝てらあ、マジかよ」

どうやら本当に疲れていたらしい、恩恵を受けた生活をしもう1年近く、前世の身体の事は余り覚えていないが、一般人の女性の身体と言うのは存外弱いのか。置いておく場所も無いので、仕方なく神様を背負ったまま本棚を物色した。

「．．．んん．．．もつと稼げレイニー．．．この世の全ての本を買ってこい．．．」

だが無理は．．．」

「．．．なんじゃこの神は。可愛いかよ」

—————

神様を降ろすことが出来ないまま買い物が終わり、大きな家具は後日ホームに届けてもらう事になった。追加料金は掛かってしまったので、リリが少しプリプリしていたのが印象的だ。

皆目的の物は買えたみたいで、ホームに帰る道で今日買った物について楽しく話をしている様子が伺える。

「なあサミラ、俺の記憶違いじゃ無ければ、どデカイキングサイズのベットを買っていたよな?」

「ああ、何しに何人来ても大丈夫なようにな」

ナニを想定しているんだコイツは。全く。

「レイニーは幾つも本棚を買ってたよね? あんなに本あるの?」

「いや、神様用だよ、寝てたからな」

センスに合わなくても知らんぞ・・・一応、部屋に入りそうな物を選んだつもりだ。

「そう言えばダフネにカサンドラは、コップを買ってくれてたよな。帰ったら早速使ってみよう」

「ふん、そう言えばこのファミリアに恩を返してなかったと思っただけ」

「このファミリアに入れて良かったです、本当に・・・楽しいですから」

素直じゃないやつ、服屋ではあんなに全てをさげ出したのに・・・殺気!?

「リリは特に何も買いませんでしたが・・・たまにはこう言うのもいいですね」

「私も、非常に楽しかったです」

リリと春姫も満足してくれたらしい、春姫は今回何着も服を購入したので、ダンスも買つてある。届くまでは俺のストレージがダンス替わりだ。

「・・・私も楽しかったよ」

「起きてたんですか・・・まあ、それは何より。俺も楽しかったですよ」

ホームの門を潜り、各々の荷物を片付けたら丁度お腹のすく時間になる、帰りに仕入れた食材をふんだんに使い豪華な食事会の開催だ。

この景色を絶対に失いたくない。明日目が覚めればまたダンジョンに潜るだろう。世界は止まらない、めまぐるしい変化を持ってその上で生きるもの達を掻き回す。俺に出来る事は大したものでは無いが、目の前の景色を守る事位はそう難しい事では無いはずだ。背中に刻まれた文字が熱を持った気がした。

隠れ里2

異端児^{ゼノス}はここに居る者達だけではない、フェルズはそう話した。今居るゼノス達だけでもオラリオをひっくり返す様な大事の予感がするが、他の安全地帯にいる者達も合わせると40はいるのだとか。

ギルドとゼノスの交流が始まったのは、10年以上前の事。

「フェルズとも、もう長い付き合いになるよなあ」

「ふーん、じゃあアンタは相当な古株なんだよな?」

「サミラ?」

「敵が弱くてよお、力が有り余ってるんだ、オレとも戦ってくれよ」

—————

「ガントレット? 珍しいな」

「冒険者の装備を使うモンスター程では無いけどな、これが一番闘ってる感じがあんだよ」

着々と準備は進む、この空間は存外広いようで2人が戦うスペースを開けてもまだ余裕があった。モンスターの、この催しは見世物としてジャストヒットしたようで周り

に居るゼノス達は各々騒がしくしていた。

「こ、こんな事になるなんて・・・レイニーさん、お二方が怪我をされたらどうすれば良いのでしょうか」

「二応、魔法もポーションも効果が有るけど・・・一発で、なんてことになる・・・」
レイニー達は顔を青くする、フェルズは溜息をつきながらも、リドがLv6に相当する実力者である事を話し、Lv3のサミラとなら滅多な事にはならないだろうと言葉を続けた。

戦いが始まる、確かに、リドには相当力を抜いているように見えた。

「Lv6って・・・最初は手加減されてたのか。本気なら俺じゃ無理だもんな」

「・・・手加減していたとは言え、Lv2の君がリドを圧倒したと聞いたよ。Lv詐称はギルドの規約違反、罰金を貰っても良いかな？」

「Lvは本当なんです信じてください」

剣と拳では、剣が有利である。更にステイタスの差までであるとサミラの勝利は絶望的に思えるが、どうやらサミラはリドよりも技に置いて上の立場に居るようだ。本気の速度を出していないリドは決定打を与える事が出来ていない。

「はははっ！オラオラあ！もつと本気を出していいんだぜえ！」

「おっ!?舐めてて悪かったな！それじゃお言葉に甘えてえ！」

ゴッ！

目にも止まらぬ、そんな速さでリドは隙を見せたサミラの鳩尾に蹴りを放つ、が「読めてんだよつ、素直な奴は嫌いじゃねえ！」

サミラの左の籠手で防がれる、そして1度で決めるつもりだったリドは体勢を崩し、サミラの拳をマトモに喰らうこととなった。

「ハ、ハハハッ！面白え！面白え！初めてだ、力の弱えやつに1発貰うなんてよっ！」

まあ、Lv3の一撃をマトモに喰らっても致命打にはならない、油断の消えたリドは正真正銘の本気でもってサミラと戦い、打ち勝った。吹き飛ばされたサミラはゆっくりと身体を起こし、降参の意思を伝える。

「くー、良いの貰っちゃったなあ！サミラ、お前はスゲエ奴だよ、下層の奴にも勝てんじゃねえか？」

「1回だけならなあ、スキルの効果が切れて、その後はおしまいよ」

ワハハ！と2人は戦いの後の宴で旧来の友のように肩を組み酒を飲む、その姿に違和感は無い。ストレージから高価な酒（物置きにされている）を取り出し、俺は2人を勞いに行った。

「スゲエといや、やっぱリアンタもスゲエよ。言っちゃ悪いが、強い奴の気配は無かったんだけどなあ。攻撃をした途端ゾクツと来た、あれは忘れられねえ」

「はは、まあ、俺のも特殊な技でね。普段はロクな技も無いんだけど。それより、頼は大丈夫か？結構な音してたけど」

サミラがぶん殴った顔面の鱗はヒビが入り、その下から血が流れて来ている。

「ああ、こんなもの大した事ねえ、俺っち達にはポーシヨンなんかも支給されてるしな」
「そうか、良かった」

治療能力が有るとは言え、サミラの方はまだ擦り傷等が残っているので、ヒールを掛けて退散する。置いていった酒を見て2人が一気対決をし始めたので、巻き込まれては堪らないと思ったからな。

それにしても……周りを見て、違和感がない事が違和感だな、なんて事を考える。見た目はモンスターであるのに、殺意が無い。歌って踊って、酒を飲み飯を喰らい、間違っても殺し合う以外にやれる事がないモンスターとの間に確かな友情と言うものを感じるのだ。

「アの男は、コの間の……ソコのお方、アノ男とはどんな関係ナノですか？」

「え？アイツは……恩人よ。馬鹿だけど」

『キュー！キュツキュ！』

「ああつ、アルル様！そこは入っては行けませんっ！」

カサンドラはハーピーと踊り、リリは何故かゼノス達が貯め込んだお宝の近くでレッ

ドキャップと何かを話している。そしてウィーネは、仲間達と出会えた事が嬉しいらしく、多くのゼノスの中心でにこやかに話をしていた。

「なあ」

俺は宴の邪魔にならないようにか、隅で静かに気配を消しているフェルズに声をかける。

「ウィーネをよろしく頼む、今は、やっぱり無理みたいだからさ」

「・・・気が付いていたのか、ここに呼び出した理由に」

仲間がいるよ、良かったね。じゃあまた今度。そんな単純な話ではない、やはり、ゼノスは異端だ。気が付きたくはなかったが、無視もできない。決定的に俺達は違う者なんだと、この景色を見て知ることが出来た。

「人間は中身を見れないからな、あの人たちと暮らす事は出来ないと思う」

「・・・そうか、やはり」

フェルズは嘆息する、やはり、君達では無理だったかと。かつてゼノス達と出会い、去って行った冒険者達の事を思い、それも仕方ないと。

「でも諦めない、見捨てない。俺達は何をすればいい？」

「ッ！」

だが違った、思わず視線を合わせると、その奥に燃えるような力強い輝きが見て取れ

る。今まで水晶越しに見てきたどれとも違う、覚悟を決めた者の目。

「ゼノス達は地上へ憧れている。今は無理かもしれないが、いずれは」

「地上？それはまた、まあでも、知っているなら憧れるのも無理は無いのか」

ゼノス達を狙うファミリアの事、捕らえられている仲間達、地上への道。色んな事を話した。

「人口迷宮について知っているのか、我々も入口を探してはいるが。何分ダイダロス通りは広い、目立つ訳にも行かない」

「イケロスファミリアの主神にゼノスについて聞かれた事がある、多分、ソイツらが鍵を持っているんだと思う」

フェルズとの話が纏まった時、丁度宴の方も終焉を迎えていた。

「ありがとう、君には、また力を借りる事もあるだろう」

「ああ、何時でも大丈夫だ。あの人達を泣かせたくないしな」

「(彼らを人と躊躇いなく呼ぶのは、君くらいなものだろうな)・・・助かる」

ひとしきり騒いだ後は当然後片付けだ。ゴミの処理に俺のストレージが大活躍、ついでにリリが取引に成功した用で幾らかの魔石の代わりにゼノス達には必要の無いドロップアイテムが詰め込まれていく。

下層の物がいっぱいですよ！とリリは一人騒いでいた。

そして、別れの時。

「レイニー、帰ろうっ?・・・レイニー?」

「お前はこつちだ、ウィーネ」

リドがウィーネの腕を掴み、ゼノス達の方へと歩いていく。理由がわからない、と忙しなく辺りを見るウィーネ。心が痛いが・・・

「いやっ!レイニーといっしょがいいっ!」

「残ります」

「レイニー様っ!」

模倣の最後の1枠にニナの魔法を入れ、地上で何かあっても直ぐに戻れる様になったと伝える。何時でも戻れるのであれば地上にいようが迷宮にいようが些細な問題である。

もう魔法は覚えてしまったので有効活用しないといけない、ああでも迷宮から俺が出てこないとなると敵方は警戒するかもしれないからウィーネを追跡衝動の対象にして地上から迷宮に戻らないといけない。

と言うような事を全員に伝えた。

「え、といや、俺たちは構わねえけどよ・・・」

「はあ・・・コイツ本当に馬鹿」

ウィーネが泣いているんだから仕方ないじゃない、涙見たくないんだもの。リドを振り切つてウィーネが抱き着いてくる。頭を撫で、直ぐに戻つてくるよと声を掛ける。

「レイニー、ありがとうっ！」

—————

地上のホームから秒で隠れ里へとトンボ帰りし、俺はゼノス達との交流を深めた。俺とニナはお互いの場所を把握し、何かあればニナが知らせに来てくれる。ファミリアの皆と会いにくくなるのは悲しいが、カサンドラの予知夢の事もある、恐らく此方を優先して間違いはないだろう。決してウィーネの涙に絆されただけではない、他にも考えがあつての事だ。

「不壊属性の武器だつて？とんでもねえ物を・・・本当に良いのか？」

「武器はともかく、防具なら硬さにおいてこれ以上のものはない。皆も、遠慮なく使つてくれ」

まずは装備の支給、よく知らない相手にポンポン渡せる様なものでは無いが、俺はここに居る皆を助きたい。ゼノス達は、信頼出来る相手だとも思う。勿論、人間用の防具であるので体格が違い過ぎる者には合わないが、人型ならば余裕のある皮鎧なんかは問題無く使用出来る。

ドラゴンが踏んでも変形しない盾をみて、どよめきが起きる。タダの木の盾が見かけ

によらないとんでもない防御力を持つてると言う事は、知能のある敵との戦いでは有利になるだろう。

『ウォー?』

「ハンマー? ああ、あるよ。とんでもない重さのを出そうか?」

最初はいきなり生活圏に乗り込んで来た人間に恐る恐ると言つた様子の皆だったが、1部を除いて直ぐに仲良くなる事が出来た、一緒に歌を歌つたり、持ち込んだ本を読み聞かせたり。普段とは違う穏やかな雰囲気で、ダンジョンの中だと言うのに自然と力が抜けていく。

朝早くからダンジョンを抜けてきたが、色々あつたせいかももう既に地上は夜になっていゝらしい。隠れ里にある時を刻むマジックアイテムで時間が分かるとリドから聞かされた。

「なあ、レイニー。地上の夜ってどんな感じなんだ?」

「夜? そうだなあ・・・夜に限つた話じゃないんだが、空が綺麗だよ。星つて聞いた事あるか?」

「星かあ、聞いた事はあるけどな。そうか、綺麗か・・・」

噛み締める様な一言に、俺は言葉に詰まる。俺にとつては当たり前、しかし彼等達にとつては今後見られるかも分からない憧れの景色なんだ。

「ああ、わりいわりい。しみりするつもりじゃ無かつたんだけどな。まあ、ダンジョンにだつて綺麗な所はあるぜ。近くで言うところ……25層の大瀑布だな」

ちとモンスターは多いがな、と付け加えられ俺は苦笑する、気を使わせてしまったな。その後は当たり障りない話題をお互いに振りながら、ゆつくりと時間が過ぎていった。

「おつと悪いな、長くなつちまった。人間と話せるなんて、そうそう無い機会だからよ」
「大丈夫だよ、俺でよければ。……俺に出来ることならさ」

「れいにー」

「ん？」

いつもならないよいよ寝る時間だと言う時に、ウイーネがそばに来ていた。リドにおやすみと声をかけ、ウイーネと話を始める。ファミリアの皆と別れたせい寂しい思いをしている様で、眠そうな目でも俺の服をギュツと握り締めて離さない。寂しがっているウイーネには悪いが、可愛いな……。

「れいにーは……私の事どう思ってる？」

……そりやあ気になるよな、ウイーネは生まれたばかりだが、既に色んな事を知っている。自分が人間とは違う事も、地上では大手を振って歩けない事も。

まあでも、俺がどう思つてると聞かれたら答えることは一つだけだ。

「当然、大切な家族だよ」

ギョツとウィーネを抱きしめる、片手で頭を撫でたり、ピクピクと動く耳を追いかけたり。安心させるように優しく接する、やがて、小さな寝息が聞こえて来た。・・・複雑でゴメンな、もつと簡単に、平和に過ごせたらどれだけ楽か。

「随分ト仲がヨいデスね」

「・・・短い間でも、俺達は確かに家族のように過ごしていたからな」

寝床にウィーネを寝かせた後、まだ起きていたセイレーンのレイが小さな声で話を振ってくる、寝息が増えて来た里の中では話もしにくいので、2人は迷惑にならないように移動する。

—————

「先ず、同胞ヲ助けテ貰ったコトに礼を」

「ああ、いやそんな。当然の事・・・では無いけども。やれる事をしただけだから」

目の前の人間は、慌てたように返答する。

「アノ日出会った時ハ、コノ様な人間だとハ思いませんデした。もう少し理性的かト」

共存は無理だ、そんなことを言い切ったあの日の人間は、突然ワタシ達の隠れ里に住むと言い出した。リドやフィア達は受け入れたが、人間嫌いの仲間も居る。ラーニエなんかは、人間が出した甘味に少し心が揺らいで居たが筆頭のグロスはだんまりだ。

「まあ、脳みそ空っぽで突っ走った感はあるけども。ここの人達は案外受け入れてくれ

て良かったよ。断固拒否されるかと思つてた」

「この、人^{ひと}。この人間、いや、レイニーはワタシ達をまるで人間かのように扱う。前にあつた時も、捕らえられている同胞の事を思い怒りを抱いていた。かつて出会つた冒険者達の誰よりも異端だ、ワタシ達はどう足掻いてもモンスターなのに、そんな風に見えるとうしても、胸の奥が・・・」

「まだ貴方ヲ良く思わない者もいます。ラーニエは既に口と態度がズレかかつて居ましたガ、グロスは手強いデすよ」

「あー、ラーニエさんは甘い物好きさうだから明日また別の奴を出そうと思ふんだよね。グロスさん・・・は、何か好きさうな物あるかな?」

ラーニエの陥落は近いな、他人事の様を考える。ワタシ達に媚びを売っている様な態度だが、媚びを売ること自体が異常な事だ。人間とモンスターの關係は殺戮と搾取。それは相手がゼノスに変わつても同じ事。仲良くなるうとすることは、あまりにもおかしい。

「そうですね、身体を磨いて上げればいいのでハ?」

「あの人の防御を貫こうとしたら相当な業物が必要なんだけど・・・」

だが、悪くない。人間との交流は。この人となら、いつか・・・

2人の話は、夜の遅くまで続く事となつた。

10 卷 + 11 卷

休息日 レイニーと神秘の薬　＋ステイタス

1-1 《とある休日》

休息日、暇を持て余していた俺は目的も無く街を放浪していた。ふとリオンさんの事が頭に浮かぶが、ホームで昼は食べたし、満腹ではリオンさんに会う理由もない。

「情けない、理由も無いとリオンさんに会いにもいけないとは」

「私がどうかしましたか？」

へ？この声は……

「リ、リオンさん？と、ええと、アンドロメダさん、でしたっけ」

「貴方は、レイニーさんですか。奇遇ですね」

振り返ると、そこにいたのは2人の冒険者だった。

《疾風》リユール・リオン

《万能者》アスファイ・アル・アンドロメダ

共にLv4の上級冒険者で、ゴライアスと戦った時にはそれぞれその実力を存分に発揮していた事が印象にある。

「それで、私に何か？」

「あー、いや、最近豊穡の女主人に行けてないなあ、と思つて名前が出ただけですよ……」

顔見知りな事もあり、少し近況報告なんかを挟みながら気になっていた事を質問する。

「お2人は、コレからダンジョンですか？あまりそういうイメージが無いですが」

「ああそれは、私の方からお願ひしているのです。ミア母さんの肩凝りを治す薬を、ダンジョンの素材で作れるそうなので」

「あつ、それは……ッ」

肩凝りのを治す薬を、ダンジョンで？肩凝りなんて肩もみや湿布くらいしか出来ることではないと思うが……ふむ。

「成程、ダンジョンには希少な素材が多く有りますからね、確かに効果のある物が作れるんでしょう」

「(助かった) ええ、そう、そうなんです。という訳で私達は……ハッ」

「アンドロメダ？」

「あの、レイニーさんは今お時間よろしいですか？」

突然の質問、時間と言うと、休息日なので空いてはいるが。

「ええ、暇ですな」

「なら、素材集めを手伝って貰ったりは……（スレイヤーの協力が得られれば、より速く、深くまで探索できる……!）」

「（頼りになる所を見せてお近付きになるチャンスでは?）行けます行けます!」
そうして3人の冒険者達は、即席のパーティを組んで迷宮に入る事となった。

1-2 《ダンジョンにて》

6階層、目当てのニードルラビットを発見し、無事殲滅。高レベルの冒険者が3人もいるのだ、苦戦するはずも無い。

12階層、今度はオークの群れ、秒殺。

「アンドロメダ、この様な物で肩凝りに効く薬品が作れるのですか?」

「えっ?」

確かに、オラリオで生きてきて1度も見た事のないラインナップである。

「自分も神秘のアビリティに憧れていて、その分野の本は相当な数読んで来ましたが、この素材達で薬が出来るとは到底思えませぬ」

「ええっ!」

「「アンドロメダ（さん） 貴方は本当に……」」

「（お、終わったッ!）」

「博識ですね」

「・・・ふう」

やはり常識に囚われていては神秘の力を存分使う事が出来ないだろう。この様子では次のランクアップで神秘のアビリティが出るとは思えないな、残念。

1-3 《澄き通った気持ち》

「そ、そう言えばずっと気になっていたのですが」

15階層、ヘルハウンドを探し歩いている最中、アンドロメダさんがそう切り出した。曰く、レイニーさんが給仕の仕事をまっとうできているのかの、と。

「申し訳ないですが、貴方は無口で愛想笑いもできませんし、お世辞にも向いているとは・・・」

「無口なのに仲良くなった時に少し口数が多くなったり、たまに見せてくれる本当の笑顔が破壊力抜群なので今のままで大丈夫なんですよ?」

レイニーさんが愛想笑いなんてしたらどれだけライバルが増えるか分かったものじゃない、なんて事を言うんだこの人は。

「ツ・・・コホン、そんな事はいいじゃないですか。今は早く素材を集めましょう」

「そ、そうですね（レイニーさんはレイオンの事が・・・?）」

1-4 《裏切り》

「(やった！ファイアーバードの不鎮の羽！)コレで集まりました、地上に戻りましょう」
「燃え尽きる事の無い羽を葉に・・・やはりアンドロメダさんは凄い」

何をどうすればそうなるのかが本当に分からない、神秘のアビリティはなんでもありでは無いはずだが、やはり熟練度によってできることが違うのだろう、是非ともご教授願いたい、流石に企業秘密というものか。

「今日はありがとうございました、レイニーさん、リオン」

「なぜ、私にまで礼を？忙しいところ、付き合わせてしまったのは私で・・・」

「ああ、それなんですけど、ええつと・・・」

？なんだろう、アンドロメダさんが何か重苦しい表情をしている。まるで罪悪感を感じているかのような・・・

「はい、肩凝りにはコレです！『温湿布』！コレを患部に貼ってください。後は血流をよくして、適度に体操を・・・！」

「・・・ドロップアイテムを使っていませんが」

確かに、ダンジョンから抜けてきて、流石に調合をするような時間があったはずはない。もしや神秘のアビリティとは俺みたいに操作画面が出てくるタイプのものなのか？

「あはは・・・！じゃあ、お礼にお2人に特製ポーションも！はい、はい、これも・・・これも！大サービスですよ！」

「アンドロメダ・・・」

むむ？もしや、コレは・・・

「それじゃあ、私も忙しい身ですので、また・・・！」

「やはり裏がありましたか・・・私もまだまだ修行が足りませんね」

騙された！

「はあ、レイニーさんも、ありがとうございました。無駄な探索に付き合わせしまつて申し訳ありません。このお詫びは、またいずれ・・・」

と、嘆いたが。結果的に見れば新しい約束も出来て、一人勝ちかも知れない。とりあえず、アンドロメダさんに感謝の念を飛ばしておいた。

「あ、湿布もいいですけど肩もみするのもいいと思いますよ」
知ってると思うけど、一応ね

—————

レイニー

レベル・2

力・S

耐久・SSS 1500

器用・A 822

敏捷・S 951

魔力 SS 1181

模倣 I

《魔法》

【作戦変更】
モードチェンジ

・ガンガンいこうぜ

・いのちだいじに

・じゅもんをつかうな

《スキル》

【贗物英雄】
フエイクヒーロー

・ステータスの追加

・不老

・ストレージ

【万 物 商 店】
ジャックオアオールトレース

・商店の追加

【強制戦闘】
イベントバトル

・逃亡不可のフィールドを作る。

・戦闘続行不可能な状態か、降参の意思が認められた場合のみ解除

【俗人矜恃】
レイマンブライド

・ステイタスに成長補正

・諦めない限り効果上昇

・見捨てぬ限り効果持続

模倣

《スキル》

【縁下力持】

【追跡一途】

【鉛矢受難】

【月桂輪廻】

【自己再生】

《魔法》

【ラウミュール】 防御、敏捷強化

【ソールライト】 範囲回復

【キュア・エフィアルティス】解毒

【ウチデノコヅチ】リンクアップ

【メリー】転移魔法

レイニー

Lv75

MP1802

物攻3859

耐久3811

魔才1642

器用1598

敏捷1601

《特技》

・死守

・乱れ突き↓五月雨突き

・カウンター

・剛力

・見切り

- ・ 騙し討ち↓バックスタブ

《魔法》

- ・ ファイア↓ファイアストーム↓ファイアプレス↓イグニス
- ・ スパーク↓サンダーストーム↓サンダーボルト↓ライトニング
- ・ アイス↓ブリザード
- ・ ヒール↓リジエネーション↓エクスヒール
- ・ テリトリリー↓ゾーン↓キャツスル

正義執行

「おいディックス、不味いぞ．．．何処から漏れたのか知らねえが、知らねえ冒険者がダイダロス通りを彷徨いてやがる」

「ああ!?!しくじった奴がいるのかッ!．．．ふざけてやがる」

話を聞く限り迷宮で撒いたヘルメスファミアの連中ではねえ、俺達に警戒してるよ
うな奴等つて言うとは、後はギルド位か．．．

「クソが、折角メーティスの奴らが尻尾出したつてのによ．．．!」

明らかに怪しいフード姿の奴を連れて連中が動き出したと聞いて、直ぐに尾行を始めた。モンスターに囲まれていても戦わないフードの奴を守る様に戦う姿に、アイツらがヴィーヴルを匿っている事を確信した。恐らく他のモンスターと合流しようつて魂胆だろう、巢を見つけられるかもしれないねえと、泳がしたかいがあつたとコレから起きる宴機劇を考え思わずにやけちまったりしていた。

だが俺達の情報も、いつの間にか漏れていたらしい、ヘルメスファミアの冒険者による二重尾行、途中、まるで見えない誰かがいるかのようなモンスターの動きに違和感を覚えた俺は即座に撤退した。

巢の位置も分からねえ、どの扉がバレたのかは知らねえが、ダイダロスへの出入口は見張られてる。八方塞がりって奴か？はア、笑えねえ。

「お、おい、どうするんだよ！扉がバレたなんて事になりやアツ！」

「うるせえ、殺すぞツ」

騒がしいグズを黙らせ、考える。敵の戦力は分からねえが、怪物との関係なんてものは公にはしたくねえ筈だ、動かせる駒は少ない。地上は薄いと見ていい。

モンスター共も、捕らえた奴等以外にも何十匹居ることは分かっている、メーティスの奴らだけで戦えないヴィーヴルを守りながらとなると、そうそう地下には潜れねえし、合流するなら20から25層辺りに待ち構えているはず。

合流した後は、どうする？連中は地上のホームに戻ったと報告があった、それ以来ダンジョンには入って居ないらしい。フードの奴は姿が無く、迷宮に置いていったんだろう。

「・・・なら、アイツらは下層に移動するだろう」

俺達の動きが勘づかれていと言うなら、わざわざ手の出しやすい20層の辺りに居る必要は無い。俺ならほとぼりが冷めるまで広い下層へと移動し、姿を隠す。それを見逃すのは余りに惜しいな・・・。

もうこの街で商売をするのは無理だ。俺達イケロスファミリアは恐らくマークされ

てる。長年姿も見せてねえ連中がいきなり正規の道で帰るわけには行かねえし、裏の入口までバれてんなら、ダイダロスの中で俺達が干上がるのも時間の問題。ダイダロスからノココ出てきた俺達を見て、モンスターを拐ってるのが俺達だと言う確信を持って、流石にギルドの連中も力を入れてくるだろう。今の状態で地上にただ飛び出ても、ダイダロス通りからすら出られるかは分からねえ。

「と、なると・・・混乱が必要か」

暴れさせるにはこの連中は壊し過ぎた、檻の中で怯える影に、俺は笑いかける。

多種多様なモンスターが移動するとなると、流石に大所帯だと目立つ。少数に別れて、見つからねえ様に広がっていると見るべきだろう。もしもの時を考え、最低限の実力者がいる事を前提にして、狙うのは・・・

—————

隠れ里で生活して早数日、ゼノス達が俺という存在が里に在ることを許容し始めた頃、より下層にある里へ移動するという話が持ち上がった。

「移動？今から行くの？」

「ああ、里が嗅ぎつけられる前に、より下層にある別の場所へ移るらしい。地上は大丈夫か？」

「うん、春姫ちゃんとカサンドラちゃんは少し寂しそうだけど」

急遽フェルズに制作して貰ったマジックアイテム、遠くにいる同質の水晶同士であれば電話の様に会話が出来るといふそれで、俺は二ナに移動について行くことを伝える、あまりに現在地から離れると、何かあったのかと二ナが転移してくるかもしれないからな。

「俺はこのまま移動が済むまでは一緒にいこうと思ってる。何かあれば連絡してくれ」
『はあ、怪我しないようにね』

万が一にも里が襲撃を受ける前に手の出せない所へと移動すると言う考えの元、準備を整え隊を形成していくゼノス達。

「レイニー、今までありがとう。お前との生活は楽しかったぜ？その実力なら下の方にも来れるだろうし、その時はよろしく頼む」

「俺は付いていく、もし何か仕掛けられるとしたら、この移動中だ」

地上から人工迷宮への入口は検討が付いたが、人工迷宮から迷宮への道は未だ未知数。それは敵が迷宮の中を彷徨っているかもしれないという事を表している。

カサンドラの予知夢では都市を巻き込む混乱が起きると、未だ地上は平穏で、まだ事が起きていないと考えるのが自然だ。

「付いてくつて、これ以上は流石によ」

「頼む、後悔したくないんだ」

出来ることはやりたい、もしここでホームに帰って後で何かが起きれば悔やむ所の話ではない。

「ふん、お前がいなければウィーネが悲しむだろう。・・・私の隊に入れればいい」

「ラーニエ?・・・お前がそう言うなら」

助け舟を出してくれたのは、人間嫌いだったアラクネのラーニエ。ここ数日の交流で、少しは仲良くなれたのだろうか。いくつかの隊にゼノス達が別れて行く中、俺はラーニエに合流した。

「ありがとう、ラーニエさ・・・ラーニエ」

「ふん、礼は言葉でなく態度で示すんだな」

「ええと、ありがとう?」

俺はラーニエに頭を下げる、だがそれは間違いだった様でズイと顔を寄せると、小声でこう叱責された。

「(馬鹿者、甘味を寄越せと言っているのだ!)」

「あ、なるほど・・・じゃあ、チョコレートを」

グワシッ!出した瞬間人外の膂力で奪い取られ、キョロキョロと辺りを伺いながらヘルムの隙間から口へと流し込まれていく。

里に入った日に支給される嗜好品に限りがあると聞いてストレージから持っていた

物を振舞ったのだが、この時膝から崩れ落ちる程の反応を見せたのがラーニエだ。

ダンジョンを進み物資を運んでいるギルドの冒険者達の数はまだあまり多くない、運んぶことの出来る量にも限りがあり、優先は食糧、装備で甘味はほぼ持ち込まれることは無い。腰が抜けている間に残りは他のメンバーに根こそぎ持っていかれ、その時の背中があまりに煤けていたのでこっさりチョコレートを渡したりした。

「~~~~」

余程気に入ったらしい、全身鎧の上からでも感情が窺える。

「あれ？ラーニエ何だかいい匂いがするよ？」

『ウオー』

「気の所為だ、さあ、出発するぞお前達」

鼻の効く仲間からの質問を否定し、着々と準備を進めるラーニエ。ウィーネ達はその姿に追求を諦めた様子。

それぞれいくつもの小隊に別れ、下層へと繋がる道を進む。各隊のリーダーは水晶を持っており、不足の事態には駆け付ける事も可能だ。

自分達の隊はかなり後ろに配置されており、先遣隊が安全を確認した道を進む事になる。

安全な筈だ、ならば、もしかすると先遣隊が？いや、リドやレイ、グロスは相当な実

力者だ、例えば下層のモンスターや、Lv4、5の冒険者が相手でも最悪逃げる程度問題は無いはず……。

「(あんな少量で礼に値すると思うなよ、里に着いたらもつと寄越すのだ)」

「あ？あ、ああ。分かった分かった」

無い頭を振り絞って考えても、危機に陥るビジョンが見えない、自分のいる隊とて、相応な実力者の集まりだ。ラーニエやフォーはLv4と同等、その他もLv3に等しい実力は持っていて、この階層で危険な事なんて、悪意ある実力者に人質でも取られなければ

「?どうしたの、レイニー」

いや、大丈夫だ。ここには俺が居る、流石にウィーネが拐われるのを見過ごすことは無いだろう。だが、それなら何が……

「ねえー、レイニー私になにか……ッ!?」

「どうした、ウィーネ!」

様子がおかしい、顔色が悪く耳を塞いでいる。酷く怯えていて、肩を抱き震えていた。「聞こえる、助けてって、泣いてるよ!」

「『たすけて』って……同胞の声が聞こえるのですか!?!」

近くに別のゼノスが、里の仲間なら水晶で連絡するはずだ。

「ウィーネ！知ってる声なのか？」

「ううん、初めての声……！苦しんでる、たすけてあげないとっ！」

襲われているのか、なら直ぐに向かわないと！いや、まてよ。ゼノスの数は多くない、なのにタイミングがあまりにも……

「どうしますか、ラーニエ？」

「……様子を見に行く。ウィーネ、案内しろ」

「……俺が先行する！別のルートだと、冒険者が居るかもしれないだろ？」

声が聞こえると言う道を出来る限りの速度で駆ける、罨であれば俺が最も死ぬ危険が少ない。やがて恩恵によつて強化された身体が、遠くから聞こえるモンスターの羽音と、悲鳴を捉えた。

「すぐそこだ、間に合つてくれ……！」

「大丈夫か?!……！……！……！……！……！」

傷付き、礫にされていたセイレーンが、デッドリー・ホーネットに襲われている！地面を蹴破る勢いで加速し、モンスターを寄せ付け無いようにしながら直ぐに治療を施す。みるみるうちに傷が……、治らない身体に至る所にあるいくつかの刺傷が治らず、血が止まらない。こんな事は初めてだ、治っている傷もあるから魔法が効いていない訳じゃないのに。デッドリー・ホーネットに回復を阻害する力なんて無い、なら……

「同胞！しつかりしろ！何があった！」

「リジエネーション！血が・・・！増血剤は効くのか！」

体力は回復出来ても流れる血はどうしようもない、傷が治らないのであれば回復した傍から衰弱してしまう。

「ゴホツゴホツ！アア、来てハダメ！逃げて、ココから！」

「泣けるじゃねえか怪物」モンスター

ゾクツ

「俺達冒険者よりよっぽど仲間思いだ」

悪が来る

「囲まれましたっ！」

「これをやったのは・・・！」

ルームの奥に集まっていた俺達を囲むように、唯一の出口を塞ぐように、冒険者達が現れる。その手には血に濡れた武器があった。アイツらが！

「聞くまでもねえだろうが、アラクネさんよお」

危惧していたように、磔磔にされていたセイレーンは。耳のいいウィーネの居る集団

を誘き寄せるために、冒険者達の講じた策。

「……サンダーボルトオ！」

「うおつとお！」

咄嗟に魔法を放ち牽制する、かなりの速度で飛び出した雷鳴は男の持つ槍によって弾かれる。レベルの低い冒険者であれば、一撃で沈むその攻撃を防いだコイツは強いっ、不味い、囲まれるのは……！

「ダメエら気を付けろ！魔法みてえな力を使う奴がいる！深層の出か？冒険者か？速度の割に威力も中々だな」

気負った様子のない冒険者達が散らばり、包囲を縮めようと動く、コイツら慣れてやがる！

「ラーニエ！離脱出来ますか！」

「クツ……！動けない同胞を抱えていては無理だ！応戦する！」

お互いに背を預け、冒険者を迎え撃つ姿勢を取る俺達。

「キャツスル！【モードチェンジ・ガンガンいこうぜ】！」

ウィーネとセイレーンを守る盾を作り、その周りを固める。仲間になりジェネーションを掛け、万全の体制だ。

ガツツ！

何処からか放たれた矢が魔法の盾に弾かれる地面へと落ちる。やはり狙って来たな！

「ちつ、なんだありや、あれも魔法か？ マズったな、相当厄介な奴がいる」

「おいおい、アイツら強えぞ。前衛の奴らが手こずってる」

不安の種は、コチラが優勢にも関わらず後ろで傍観に徹している槍の男達だが・・・、お互いに被害は無く、敵は無理をせず連携して挑んでくる。レベルは3という所か。こ
うも入り乱れていては大きな魔法は使えない！

「ファイアースパーク！」

「ぐああつ！」

剣を構え前進していた男の腕が燃え上がり、雷撃で武器を取り落とす、すぐ様敵の援護が入り戦闘不能には出来なかったがこの調子だ。複数人で連携を取っている内の一人に魔法を掛け、戦闘のタイミングを崩していく。

「おいおい、何個魔法を使えるんだよ。こりや撤退だな。流石に使うしかねえか」
よし、圧倒出来ている、このままいけば！

【迷い込め、果てなき悪夢げんそうフオベートル・ダイダロス】

「ーッ！なんだコレ、何の光だ！

「皆！大丈夫かつ！」

「……」

?なんだ、何かおかしい、この静寂は?

敵も味方も一様に動きを止めている、何が起こった、さっきの光は

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

「ああ!?!」

周りの様子が……!ちよ、皆!?

『ウアアアアア!』

「ちよラーニエ!幾ら人間嫌いでも今は……!」

そんな訳ない、流石にこんな状況で襲われる程恨まれている訳がない、さっきの赤い光が原因の筈だ!方向的に、さっきの槍使いが——

「逃げるなア!ブリザード!」

「おおつ!?!」

もう用はないと言わんばかり、悠々と出口へと歩いて行く人影、冒険者達の幾人かは正気を保ち、出口へと向かっていた。

今の状態でアイツらの相手をするのはシンドイが、この状態がいつまで続くのかも分からない、魔法が原因なら止められるはずだ、逃がす訳には行かない。

「おいデイツクスこりや無いぜ!?!とんでもねえ奴に捕まっちゃまったじゃねえか!」

「チツ、奥の手使つて仕留め損ねた！てめえ、呪詛カースの対策なんてしてんじゃねえよ！」
カースか！まさかコイツがそんなレアな物を持つていたとは、精神攻撃の様なタイプは俺に効かないから助かった。しかしカースはすぐには治療出来ない、止めるにはあの術者をどうにかないと。

仲間達は・・・、怪我は増えているが致命傷は無い、リジエネーションが残っていて、傷は治つていつてる。ウィーネ達は範囲外だったのか？怯えて居るが平常だ。それから、優先順位はあの男！ごめんラーニエ！

「サンダーボルト」

『ウウアー！』

鏑迫り合いをしていたラーニエに対して魔法を放った、痺れで武器を取り落としたラーニエから距離を取り、男達へと向き直る。

「【追従せし空の太陽】」

「また魔法？！サウザンド・エルフテメエは千の妖精か!？」

「【全ては汝から逃れるため。咲け、月桂樹の鎧　ラウミユール】！」

男の正確な実力は不明だが、対人戦の相当な経験が窺える。高速の雷魔法を弾く程の力量の相手、マトモに戦わずに速攻で決めに行く！

「【大きくなれ】」

「お前ら作戦変更だ！アイツを止めろっ！これ以上なにもさせるんじゃない！」

「【其の力に其の器。数多の財に数多の願い。鐘の音が告げるその時まで、どうか栄華と幻想を】」

ちっ！流石に傍観はしてくれないか！槍矢剣ナイフ、遠くから投げられるだけ投げろと言わんばかりの殺意が殺到する、魔法詠唱の妨害には最適な判断だ。集中が乱れれば失敗しかねない。

「【大きくなれ 神を食らいしこの体】」

だが俺だつて力にかまけて寝ていた訳じゃない、並行詠唱だつて出来るんだよ！斬りかかってくる冒険者に応戦し、詠唱を続ける。

「【神に賜いしこの金光。 槌へと至り土へと還り、どうか貴方へ祝福を 大きくなあれ】」

「クソっ！モンスター共を狙え！盾にしろっ！」

俺を即座に止められないと悟るや、仲間を盾にしようと画作する男、クズが、それだけは許さない。

「【ウチデノコツチ】」

—————

失敗した

耳の良い竜ウィトル女の居るパーティを狙い撃ちにする為に、セイレーンに悲鳴を上げさせる作戦は上手くいっていた筈だった。

囿の居るルームに鎧姿の奴を先頭にモンスター共が集まったのも問題ねえ、むしろ出てきた奴らが少なくて拍子抜けしていた位だ。

失敗した

鎧が2匹、馬が1匹に鳥が1匹。厄介そうなのは蜘蛛と獣蠢族位で、ぶつ殺してヴィーヴルを捕まえるくらいわけねえと思っていた。

失敗した

計画が狂ったのは鎧の片割れのせいだ、初めに魔法を使った時点で逃げるべきだった。

いや、あの時はそれでも呪詛があればどうにでもなると思っていたか

失敗した

弱み四も狙えねえ、前衛は鎧野郎の魔法で崩壊寸前、流石にヴィーヴル1匹と割に合わせえと仕切り直すために呪詛を使ったんだ。

その後油断するべきでは無かった。

失敗した失敗した失敗した！

「なんなんだテメエはあ?!?!」

俺以外の奴は全滅！俺ももうツツツツツ！！
「ぐっ……！！」

実績解放・回復術師

バタリと、槍の男が倒れた。

「……ハッ……ハッ」

疲れを知らない身体が、精神の悲鳴を如実に反映する、精神力マインドがギリギリだ、俺の魔力では模倣した魔法はそう何度も使えない。ウチデノコズチは馬鹿げた消費魔力だし。

「シウミユール」で敏捷と耐久を底上げし、「ウチデノコズチ」のランクアップ。現状最も費用対効果のあるバフだ。余裕があればステータスの死守等も発動出来るがいちいち全て発動しては劣化した持続時間の影響もあり戦える時間が無くなってしまう。

身体を覆っていた燐光は既に消え掛けている、一瞬にして引き上げられた身体能力がこれまた一瞬にして元に戻り、重力が突然増加したかのような感覚に襲われるが、これが正常だ。

「……そうだ！みんなは！」

「……大丈夫だ」

振り返ると、そこにはみんなのいつもの姿が。仲間と争うこともなく、怪我こそして
いるものの全員が五体満足で立っていた。

「レイニー！」

「うおっ」

ラーニエの影から飛び出してきたウィーネ、受け止める体勢が出来ておらず地面に押し倒されてしまった、元気でよろしい。

「無事で良かった．．．直ぐに怪我を治そう。エクスヒール！．．．あ、魔力が足りない。ヒールヒール」

ポーションを取りだしMPを回復する、幸い大怪我をしているのは最初にいたセイレーンの子だけでほかは目立った傷は無い。まだ血は流れているが、ストレージから包帯を取り出し止血していく。

「ごめんな、幾つかの傷が治せないみたいで」

「あり、ガトウ．．．」

「気を失った様だな、命に別状はあるまい。本当に．．．ありがとう。私達も命を助けられた」

言葉と共に目を閉じた彼女に少し焦ったが、ラーニエが言うには問題は無いらしい。

「レイニーさん、ありがとうございました。貴方が居なければどうなっていたか．．．」

「助けられて良かったです、他のメンバーに連絡は？この冒険者達を置いていく訳には行かないので、連行したいんですが」

自らが手を下すのは流石に心がしんどいし、置いていった所で確実に死ぬとも言いきれない。そもそも情報を残させないと行けないので、皆にも出来れば殺して欲しくない……襲われたゼノス達の気持ちを考えない、俺のわがままだが。

「先の移動中にもうしてある、その後は連絡がつかん。フェルズも直に来るだろう。ふん……本当なら殺してやりたいが……。他の同胞達の居場所を聞かねばならん」

了承を得た所で、気を失っている冒険者達を縛り上げていく。強化された身体で力加減を間違えていないか心配だったが、冒険者達も死亡している者は居ないようだ。

もちろん、ただの紐では意味が無いので商店で購入した投げ縄を使う。昔リリの武器に使った奴だな、不壊なので結びを解かれない限り絶対にちぎれる事はない。

武器は全て回収、持ち物も根こそぎ奪ってやった。例のダイダロスの扉を開ける為の鍵も問題無く見つかり、一段落。

槍の男から奪った赤く染まった槍もしまっておく。なんの素材が使われているのかは分からないが、恐らくこの槍が治らない傷の原因だ、悪趣味な野郎だな。

「モードチェンジ・じゅもんをつかうな」

冒険者達の魔法を封じる、槍の男以外にも短文の魔法を持つ奴が居るかもしれないかな。口を封じても、集中と口の中での詠唱を挟めば魔法は発動することがある。なので封じるのは必要な事だが、少し回復していた精神力がまたしても危険領域レッドゾーンに、コレだ

からこの身体は、魔法を使い辛いんだよなー」

「おっと、どうした？ 疲れたのか？ 仕方の無いやつだ」

この人数なら問題無いと計算していたが、それは間違いだった。精神の疲弊から身体がふらついてしまう、近くで作業をしていたラーニエにぶつかってしまったようで、怒られる事を覚悟したが何故か頭を撫でられた。

「あ、ご、ごめんラーニエ。ちよつと魔法を使い過ぎて」

「魔法？ 魔法か、私達には縁が無いが、お前と行動するにあたってマナポジションを渡されている。飲むといい」

ラーニエの腰のポーチから青い瓶が取り出され、蓋を取り口元に押し付けられる。

ちよ、自分で飲めるって・・・

「あ、ああ、お氣遣いありがとう。けど俺にはポジションの効果が無くてさ」

「・・・さつき自分で出した物は飲んでいたのに、私のは飲めないか、そうか。そうだな、お前の事を嫌っていた者のポジションなど飲めないよな」

なんかラーニエのキャラクターが変わってしまったている。こんなに可愛かったかな・・・。皆には自分の過去や身体の話していなかったので、俺が疑っていると言うような受け止め方をしてしまったようだ。

「いや、本当にそうなんだよ、さつきのは特殊なポジションで、あれ以外は使えないんだ。

でもありがとう、折角だから頂くよ」

言葉だけでは足りないだろう、ポーシオンを受け取り一息に飲み干す。話を聞く限りマナポーシオンは頭がスっとして疲労が引いていく感覚があるようだが、何も感じない。やはり効果は無いようだ。味も・・・不味い。

「・・・うう・・・」

「！」

その後は倒れた冒険者を運んだりしながら仲間が集まって来るのを待っていると呻き声がした、冒険者達が目を覚ましたようで、狼狽えた声が次々と聞こえてくる。

「！！」 「！な、呪詛がっ・・・！！」

奴等も捕まっていたい訳じゃない、槍の男を筆頭に複数の冒険者が魔法を使おうとしていた。言葉が途切れ詠唱が完成しない様子だがな。俺の魔法の効果時間は一律1時間、この人数なら効果が切れる前には精神力は回復している。

「起きたかクソ野郎、お前の魔法は俺が封印した」

「封印だと・・・！！?・・・へっへへ。クソツタレ、なんなんだよテメエはよオ。化物の仲間は化物だな?」

「スパーク」

ぎっしー!

濃密な悪意、何があれば人間がここまで良心を捨てられるのか分らないな。

「つく、んだよ、化物よわばりは嫌か？なんで化物に加担してやが「スパーク」

縛られ、身動きの取れない男が悶える。弱いとは言え身体の中を電気が走る感覚はい

いものでは無いだろう。その声を聞きつけてか隣にいた大男も目を覚ます。

「おいディックス！お前負けやがったのか！」

「ああ!? テメエらが雑魚過ぎるからだろうが！」

男の名前はディックスと言うらしい、その罵声をきっかけに次々と目を覚ました冒険者達はお互いを罵りあい醜い様を晒す。捕まっているというのに呑気なものだ。人間のこんな部分、ウイーネ達には見て欲しくないな……。多少離れた所で、耳のいい彼女達は聞き取ってしまうんだろうけど。

魔法を使おうとした冒険者に釘と共に魔法を打ち込み、黙らせる。

「チツ、神の言葉でいやあ人生終了ゲームオーバーつてか、死のうにもこの身体はそうそう自殺も出来ねえしなあ」

「お前の将来に興味は無い。どうせ吐く事になるんだ、さっさとアジトの場所を教えろ。嘘をついてもいいが、その後の保証は出来ない」

「へっ！ 餓鬼が、殺す覚悟もねえだろうが。目を見りや分かんだよ、青臭い餓鬼の「スパーク」くってえな！」

こう言う心を見透かしてくるような人間は苦手だ、弱い自分がバレてしまう。

「レイニー……同胞が合流してからでも遅くない、無理はしなくていいぞ」

「……ああ、分かった」

怪物趣味が。

そう呟かれた時男に魔法を放とうとして、やめた。この世界から見て異常なのは俺の方だ。モンスターを過剰に痛め付けるこの冒険者達の所業は常識では無いが、モンスターに対するスタンスとして間違っではない。実際自身も普通のモンスターを倒し、生活しているのだから。

落ち込んだ気分で仲間の到着を待つ、まあいい、恐らく予知夢の危険はこれで去っただろう。油断は禁物だが。

本来はこの場所でラーニエ達が壊滅、報復でゼノス達が次々にダンジョンの冒険者を殺してしまう、そんな筋書きだろうか？俺が読んでいた頃は、もっと明るい物語だったのにな……。これも俺の影響か、原作通りの話なのか。もうそれは誰にも分からない。「無事か！つてこりやあ、全部終わった後か？」

まずリドのグループが到着、それから程なくしてレイ、グロスの隊が集まった。フェルズは今全力で此方に向かっているらしい。

「話八聞いた、レイニー、心からノ感謝を」

「本当ニありガトウござイマス」

「仲間を助けてくれてありがとうな」

「改めて言おう、ありがとう」

集まった皆から口々の感謝の言葉を掛けられる、これには気分も急上昇だ。よせやい、褒めてもお菓子しか出てこないぞ。

菓子を求めてバトルロワイヤルが繰り広げられている時に、丁度フェルズが到着したようだ。ワーワー騒いでいるゼノス達に怪訝な表情（雰囲気）の様子だが、1人離れていた俺に声を掛けてくる。

「無事で良かった。・・・この状況は、まあいいか。捕まえた連中からアジトの場所は確認出来たのか？」

「いや、まだだ。少し荷が重くてな」

まだまだ俺は心が弱い様で、悪意の塊であるディックスと言葉を交わすことが難しい、技と駆け引き、それは口喧嘩でも適用されるみたいだ。冒険者達の方を見ると、ディックスは平然とした様子だが他の人間の憔悴は酷い。40ものモンスターに囲まれ、身動きは取れず、更に相手は知能を持ち自分達に明確な敵意がある事が分かっているからだ。

「ふむ、あの様子なら問題は無さそうだ。私が行ってくる」

フェルズは冒険者達に近付き、その中でも最も怯えている魔法使い風の男に話し掛けた。

「私が何を聴きたいかは分かっているだろう、痛い目を見る前に話すといい」

男はディックスの方を見た、やはりディックスがリーダーなんだろう。情報を漏らした時の報復を恐れているのか？

「心配しなくていい、イケロスファミリアの幹部達は今後外を出歩く事は無い。生涯牢獄か、あるいは、な」

「ああ!? ふざけてんじやねえ、そんな大層な事はしてねえよ!」

大男が憤慨するが、言っている事はある程度正しい。

現在の法律ではゼノス達の存在は認められていない、例え連中が彼等にどんな扱いをしていたとしてもそれだけなら表向きには普通の冒険者だ。そして密輸やその他犯罪行為を足したとしても、知る限り終身刑や死刑になるほどではないような気はするが……

「罪は私が決める納得出来たか?」

イケロスファミリアの連中は存在しない様なモノ、自分達が消してきた痕跡^{過去}が、存在しない事を証明するのだから皮肉だな。フェルズがギルドの所属とはいえその身が綺麗な訳では無い、必要とあらば、と言う事だろう。

「ち、近い扉は18階層だ．．．そこから案内出来る」

「バロイ!? テメエ!」

「ひいつ!」

男はアジトへと繋がる扉の場所を吐いた、再び．．．冒険者達の罵声が響く。

首尾よく情報を得たフェルズは此方へと向かってくる。争奪戦も終わり、準備は出来たようだ。

「フェルズ。同胞の傷が治らないらしいのだ。何かアイテムを持っていたりしないか？」

セイレーンを抱えたラーニエがフェルズにそう話し掛ける。フェルズは息を飲み、初めて見る魔法で呪われた傷を全て回復させた。苦しみの表情が抜け、セイレーンの寝息が穏やかな物になる。

「直ぐにアジトに向かおう、このセイレーンを見る限り．．．酷い事になっているだろう」

「なんて事を．．．」

案内役のバロイ以外は、クノツソスの出口から直接ギルドへと連行する様で見たことの無い冒険者達が連れて行った。ギルドと関わりのある冒険者だろうか。

アジトに急行した俺たちを待っていたのは、数えるのも馬鹿らしい程の大量の檻、そ

してその中で鎖に繋がれているゼノス達だ。

「治癒魔法を使う、皆は檻を開けてくれ」一度は拒みし天の光。浅ましき我が身を救う慈悲の腕」

数が多過ぎる、一人一人に魔法を掛けるのでは時間がかかりすぎてしまう。一先ず、弱りきった人達を回復させる為にカサンドラの魔法を使う事にした。

「届かぬ我が言の葉にの代わりに、哀れな輩を救え。陽光よ、願わくば破滅を退けよソールライト」あつまた・・・」

感情が昂って加減を間違えているのか、再び精神疲弊寸前だ、倒れる訳には行かないのに。今度は支えてくれるラーニエもない為地面に膝を着いてしまう。

「どうした？マインドダウンか？ふむ、仕方が無い、秘蔵の高位魔力回復薬だ、飲むとい

い」
あ、なんかデジヤブ・・・膝を着いた俺にフェルズが気が付き、ポーションを飲ませ
てくれた。

「ありがとう・・・でもごめん、俺回復薬が効かない体質で」
「何？聞いたことの無い話だな」

高位のものでも欠片も感じる物が無いということは、もう望みは無いだろう。

魔法を使う限りこの疲労感と戦わなければならない。気分を落ち着けて立ち上がり、

囚われていた中でも衰弱の酷い者にヒールをかけて行く、だがここでも呪われた傷が邪魔をする。ほとんど全ての人達に治らない刺傷があり、弱っている人はその部分が腐っていたりしている、フェルズの魔法で全てを回復するのは現実的では無いため酷い傷以外は我慢してもらうことになる・・・

「ごめん・・・俺が解呪のアイテムを持ってたら」

「アイテムがあつたとしても、かなり特殊な手順を踏まないといけないぞ。専門職があるくらいだ、体力を回復出来るだけでありがたい」

精神力の不足でも辛い、悲観的というか、思考がネガティブになっているのを感じる。仕事を終えたフェルズが慰めの言葉を掛けてくれた、知識としてその事実は知っていても、やはり何か出来たんじやないかと思ってしまうのは俺の中身が弱いからだろうな。多少心のLvが上がってもレア度が低いのに変わりはない。

「そう落ち込むな、冒険者の襲撃を防ぎ切り、こうして囚われていたゼノス達も解放した。充分だ」

・・・落ち込んでいても結果は変わらない。精神の疲労に目を瞑り無理にでも楽しい事を考えるとしよう。

—————

「レイニー君は上手くやったのか、了解。追って指示は出すよ、今は待機してくれ」

ふう、とホームの一室で男神は溜息をつく。ここまで思い通りにならなかったのは神生で初めての事だった、全てはあの冒険者が原因だ。

その排除するには成り上がり過ぎた小さな光を思い浮かべ、また溜息を付いた。

「君じゃ足りないんだよなあ」

足りない、あの陰のある光では、この世界に巢食う闇に呑み込まれてしまう。その心に見合わない成長を遂げた時は面白く感じたが、見れば見る程先が無いように感じる。どうしてその強さを得られたのか検討もつかない程だ。

ベルの成長の機会が彼に奪われているのも痛い、ゴライアス・イシユタルファミリア。今回のゼノス達。状況的には、彼のいる位置にベル・クラネルが居てもおかしくは無いはずだった。

かの大神^{ゼウス}が素質が無いと断言したベル・クラネル。彼に英雄の素質が無いのであればレイニーはどうだと言うのか。彼の行った所業は凄まじい、話だけを聞けば英雄の卵な事は間違いない。だが神に言わせれば足りない、惹き付けられない、昂らない。酷いよ。うだが、それは事実だ。平凡な魂はどれ程磨き上げたとして眩い輝きを放つ事はない、ヘルメスは彼に賭ける事を躊躇っていた。

「世界の為だ……勝ち目の無い賭けは出来ない、君も試させて貰うとしよう」
さて、フレイヤ様は上手くやってくれるかな？

獣の男

男は殆ど空っぽだった、自分の生きる意味だった玩具を取り上げられ、もう一生涯それに触れる事は許されないだろう。男に出来ることは、状況を考えずに唸る血の呪縛から目を逸らし、頭がおかしくなる迄の時間を延ばすことだけだった。

「闇派閥が助けに・・・来ねえか、リスクが高過ぎる」

ギルドの連中に喧嘩を売って、オラリオの警戒を強化して得られるのがLv5の冒険者とその仲間。悪くはないが少しばかり割に合わないとも言える。男は期待することを辞めた。

冒険者の力を持ってしても逃れられない拘束をされダイダロス通りを抜けていく。周りにはギルドの雇われか、それなりに腕利きの連中が何人か、人生に終了のゴングが鳴り響いた。

「………………ガタツ！」

「暴れても無駄だ、大人しくしろ」

「ちげえよ！今すぐここから逃げねえとっ!？」

「何を言っている？錯乱したのか」

「わっかんねえのかよ！来るだろうが！」

男の要領を得ない回答に周りを囲む人間、共に捕らえられていた仲間、誰もが遂に狂ってしまったかと耳を傾けなかった。

男自身も何が来るのかは分かっている、ただ来る。間違いなく自分達にとって良くない何か。

四度の冒険を乗り越え、高みを目指す事を諦めた男の本能。ダンジョンで失敗し、久しぶりに目が覚めたかつての全盛の生存本能が只管に叫び声をあげる。

ガタガタと、先程諦めた筈の逃亡を文字通り命懸けで行う、身体が幾ら傷つこうともこのまま座して居るより、男は僅かでもこの場を離れられる可能性に全力で縋り着いた。

「いい加減にしろー！」

上級冒険者である者達に殴打されようと決して止まらない、何かに取り憑かれたかのように暴れ始めた男の姿に、周りの人間達は恐怖した。そして、ソレは現れた

「誰だ！ココは立ち入り禁止のおっ!!?.....」

「ヒッ！」

ギルドによって封鎖されている筈のルート、連絡は水晶によって行われる為、この場

所に新たに人が現れることは有り得ない。先頭に居た男は警戒をしながらフードの人物へと声を掛け、瞬時に崩れ落ちた。その男だけではない、周りに居た人間達全てが、目を閉じた瞬間に地に伏している。苦しみのない、何処か幸せそうな呻き声を残してその場に立つ者は2人を残して居なくなつた。

「あら、これに耐えられるなんて」

「ディックス・ペルディクスー恐らく、Lv5かと」

否、3人。Lv5である男に気が付かれず、いつの間にかフードの人物の後ろに現れたその男に、ディックスは見覚えがあつた。

「その顔……！オツタル……!?て事はあ！」

「うるさいわ、口を閉じなさい」

「ツツ!？」

まるで縫い付けられたように男の口が開かなくなる、心は屈しておらずとも、身体は逃れられなかつたようだ。そこにいるフードの神物の美の魔力から。

「……ツツ!ふ、ぎける、なあ!俺に命令、していいのは……!」

「……へえ?」

だが男は奇跡的にその魅了に抵抗した、それはディックスが自分自身に課した制約、産まれた時から血が嘔き、自分の身体を操られ続けていた男だからこそ最後の砦。

「俺だけだあ！」
グチャ

男の腕が潰れた音が響く、ステイタスを低減させ、魔法を使えなくするその魔法道具に抵抗は出来ずとも腕をちぎればそれは外れる。男が男である為ならば、その程度の犠牲は大したものでは無かった。

「迷い込め、果てなき悪夢　フォベートル・ダイダロス！」

「『ウオオオオオオオオオオオオオオ!』」

出したのは切り札、ギルドの冒険者達は対策していたのか動くことは無いが。神の魅了で倒れ伏していた檻の中のかつての仲間が狂ったように暴れ回っている。

Lv7、《都市最強》に届くかは分からないが、あの女神には……!そんな希望を元に全身全霊を込めた特大の呪詛を発動するディックス、

「ふふ、貴方、ちよつと気に入ったわ」

「……クソツタレ！」

だが意味が無かった、フレイヤはディックスの力について既に聞いている。

「本当は適当に済ませる予定だったけれど、気が変わった。オツタル？」

「はっ」

「ホームに連れて行って頂戴。勿論、バレないようによ」

そう告げるとフードを被った女神はその場から離れて行く、冷静になった今、ドイツスは周りに自分達以外の複数の気配がある事に気が付いていた、恐らく他の冒険者が護衛をしていたのだろう。

どうあつても勝ち目が無かったことを知り、そしてどうやら命は助かった事が分かる、と緊張が解け両の手が思い出したかのように痛み始める。

バキッ！

「うおっ！」

「使え」

手錠が無くなった今も壊せる気のしなかった強固な檻、それを容易く壊して見せた男に回復薬を渡され、ドイツクスは使い物にならない両手をどうにか癒す。欠損しかけた肉は瞬く間に修復され、元と変わらぬ手に戻った。

「(助かったはいいが：何がどうなってやがる？何故フレイヤファミリアが、俺を：)」
「探るな」

ゾクッ

「理由を知る必要は無い、今この瞬間から、お前はただ自らを鍛え上げる事だけを考えろ」

最強の冒険者から放たれた圧、それを感じ取った瞬間ドイツクスは思考を止めた、藪

をつついても得が無いと悟ったからだ。

魅了の力で身動きの取れない男達を残し、ディックス・ペルディクスは姿を消した。何時までも現れない護衛隊を搜索に向かった冒険者達が見つけたのは、虚ろな目をした男達の姿。僅かばかりの血痕と、破壊された檻だけが逃走者の存在を示していた。

—————

「ふう・・・」

ようやく終わった。

囚われていた人達を解放し、その全てに回復魔法をかけてまわりようやく、一息がつけた所だ。

「それでも、全員を助けられた訳じゃないか・・・」

俺がこの世界に来る前から、彼らは虐げられていた、既に街の外へ連れ出された者も多いと聞く。時を戻せたなら、なんてな。もし魔法スロットが空いていたら、時間遡行を発現させてたかもしれない。

目の前ではかつての同胞との再会に泣いて笑って騒いでいるモンスターの姿が、それは俺には人と何ら変わらない姿に見えた。だが、彼らは外見上どうしても、モンスターである。

「・・・まだまだ先は長いけど、何時か彼等と街を歩けたら」

きつと楽しいだろう、美味しい物を食べてもらいたい、綺麗な服をプレゼントしたい、壮大な自然を見て世界を知って欲しい。

気分は田舎から上京して来た人を歓迎する感じだな。言葉にすれば簡単なワンシーン、実現するのには途方もない時間が必要なんだろう。

覚悟を決める時だ。

俺は正直ウィーネを助けた時は、ここまでの事になるとは思っていなかった。いや、カサンドラの予知夢は頭の隅にはあつたが・・・、今まで散々原作を掻き乱して居たくせに何となく、まだ無意識にベル・クラネルのことを頼っていた。

そろそろ覚悟を決めようじゃないか、俺凡人

お前にもプライド俗人矜持はあるだろう。

さしあたって、逃げ道を塞いでおこうか。格好つけておいた方が、もしここで諦めたら俺ダサすぎないか？と自分を奮い立たせることが出来るだろう。

「フェルズ・・・」

「ああ、君か。休憩はもういいのか？」

「隠れ里でも言ったけど、いや、言いましたけど、改めて宣言します」

宣言？と、フェルズさんが怪訝な表情を浮かべた気がした

「彼等に二度と悲しい涙を流させたくない。それを成すための覚悟は出来ています」

特に画期的な考えがある訳でもない、言っていることは隠れ里の焼き直しだ。でも、そこにある覚悟の差は歴然としている。

「・・・君の覚悟、受け取ったよ」

また追って連絡する、そう言つて彼は俺に水晶の片割れを渡し撤収を始めた。ひとしきり再会の時を楽しんだ人達の興奮も落ち着き、一人一人からお礼の言葉を貰つた俺の心は、かつてないほどに熱く、温かな気持ちで満たされていたのだつた。

画 レイニーのレイニーによるレイニーの為じゃない強化計

「ウラノス」

「フェルズか・・・」

ギルドの地下、神であるウラノスがダンジョンに祈禱を捧げる為の儀式場にフード姿の人影が現れる。

地下へと繋がる秘密の通路から姿を現した人影は、ただ一言を神へ告げた。迷宮での出来事を、ゼノスと人間による新しい物語の1ページを一言にして。

「彼は、希望になるだろう」

—————

一先ず、『都市を巻き込む混乱』は治まったらしい。ホームに帰還した時、カサンドラがたいそう喜んでいた。ダンジョンで起きた事を伝え、その情報を共有すると共にジワジワと事件を解決した事への達成感が湧いてくる。

ダンジョンにいた頃は自分の許容量の上限を遥かに越える重たい空気に陰鬱とした

気分が拭えなかつたが、やはりホームはいい。身も心も癒される。

「そうですか、ウィーネ様はご同胞と一緒に……」

流石にまた地上でウィーネと暮らす事は難しかった。人の目のある地上で、ホームに隠す様に過ごしていてもバレる可能性は0じゃないからな。どうしても今は、別れるしか無い。冷静になつて考えてみれば、今後もし一緒に過ごそうとするのであればオラリオを飛び出す必要があつただろう。

『いつか、また皆で!』

そんな一言を掛けられて思わず泣いてしまったのは仕方が無いよな?その後 どこか痛い!?なんて心配されたら抱き締めてしまうのも不可抗力という物だ。離れる覚悟を決めるのには時間がかかつたなあ……

「隠れ里の殆どは下層にあるから、会おうと思つて会いに行けるものでも無いしな……」
幾らなんでも、ダンジョンに友達に会いに行くから、と気軽に潜ることは危険だ。例え自分は無事でも仲間を失いたくはない。特に春姫はまだ戦い慣れていない、ギルドの命令で無ければあそこまで深くに行こうとする事は無かつた。

「ウチらは兎も角、中層ですらL.V.Iを抱えてじゃ危険すぎるからね。暫くは普通に鍛えるしか無いでしょ」

「うう……不甲斐ないです。リリにもう少し力があれば……!」

魔法火力が乏しいとは言え、俺たちのパーティの職業バランス自体は悪くない。

前衛で盾となり矛となるサミラ

中程からパーティのフォロワーに回るニナとダフネ、リリ

必要に応じて道具や魔法の援護を放つかサンドラ・春姫

ステイタス過多を理由に追いやられ気味な俺を除いてもバランスの良いパーティだ
と思う。しかし、モンスターの大群に対する決定打が無いし、構成はまだしも戦力での
差は激しい。

大勢に囲まれた時、ステイタスの劣るリリ達を庇いながら戦う事になってしまう。こ
の弱点を解決しない限り此方から会いに行くのは難しいだろうな。簡単な魔法の使え
る『魔導書』とて、万能のアイテムでは無いし。

万が一を思い爆弾系アイテムを渡そうかとも思ったが、誤爆でもしてしまえば最悪の
結果に終わる。ストレージから取り出せる自分とは違い、携帯には常に危険が付きま
とうことに気が付き、辞めた。

「魔法使いが必要だなあ……皆、心当たりあったりしない？」

「ウチ、前から言ってたよね？足りてないって」

そう言われても……俺皆以外知り合い殆ど居ないし……魔法使いなんて希少だし……

びえん

「わ、私も知り合いは少ないので・・・」
「リリも魔法使いの伝手は持っていませんね。自分達が覚えようにもそう望んで得られるものでもありませんし」

ファミリアのほぼ全員が何かしら魔法を使える現状ですら恵まれている。冒険者の中では、何年やっけていても魔法が発現しない人も珍しくは無いのだ。誰もがダンジョン探索に有用な魔法を必要としており、競争率は他の役割の比では無い。

そんな状態を解決してくれるアイテム、魔導書グリモアも選択肢としてはあるが、ウチのファミリアで魔法スロットが空いているのはサミラと春姫位だったか？

上限を越えて魔法を強制的に発現させる質のいい魔導書ともなると一般には流通していない程の品薄。知り合いに腕の良い神秘持ちでも居ない限り・・・いや、待てよ。そうだな・・・

仮に魔導書が手に入ったら、誰が覚えるのが良いだろう。候補になるのは、ステイタスが高いか、後衛に入るものか。

サミラは高レベルで、魔力もそれなりに高い。能力的には問題無いだろうが、前衛で闘っているので魔法を唱える暇があるかは疑問だ。並行詠唱もまあ、やってやれん事は無いかもしれないが、前衛の動きに集中出来ないのは良くない、か。

春姫も候補に上がる、だが消費の激しいウチデノコツチと、新たな魔法を今の状態で

併用出来るかと言うと正直厳しいかもしれない。

そうなると、カサンドラか、リリか。しかしこの2人となると、果たして攻撃魔法が現れるのか？と言う疑問も湧いてくる。はつきりと狙った魔法を手に入れられる訳では無いが、ベルしかりリリしかり、ある程度本人の希望に則った魔法が発現しやすいのは分かっている。

カサンドラはあまりに優しいし、リリも攻撃的な面があるかと言われると・・・まあ多少ツンな所はあるが普通の範疇だ。

「なあダフネ」

「なに？」

悩んだ末に、俺はファミリアの頭脳派であるダフネに声を掛けた。俺一人ではとても結論が出そうにない。ダフネなら、俺の考えにある穴なんかも指摘して改善してくれるだろう。

「無理です無理です！そんな事してる時間ありませんから!!」

「あ、失礼しました」

希少なマジックアイテムである魔導書。それを入手する為に街へと繰り出したが、当てにしていたアスフィさんは、会うやいなや断りの返事をされてしまった。

何やら忙しいようで、けんもほろろな反応だ。忙しい中アポ無しで突撃してしまったお詫びとしてまた何か手伝いに来ると約束し、ファミリアのホームを離れる。しかし参ったな、アスフイさんが無理となると恥を忍んであの人にお願ひするしかない。

気は進まないが……俺は連絡用の水晶オラクルを取り出し、あの人に連絡を取る。そう、フェルズと。

『……どうかしたのかな?』

「レイニーです、でいいのかな。その、本当に突然で申し訳無いんだけども……今から会えないか?」

『ふむ? デートの誘いかな? 申し訳無いが私は骨の身でね。外を歩く訳にも……』
「違うわっ!」

い、意外とユニークな人なんだな、おもしれー女……女? 分からないや、何となく聞き辛い。

出鼻をくじかれた感じはあるが、無事会う約束を取り付け直ぐにギルドに向かう事となった。

そして数十分後。

「成程、魔導書か」

「この間色々カッコつけてこれは恥ずかしい限り。勿論無料という訳ではなく、ヴァ

リスでもクエストでも、必要な分は働くので・・・何卒よろしくお願いします」

本当に恥ずかしい、でも今後の為には魔法が必要になってくるだろう。

「魔導書が、望むままの魔法を発現する物では無い事は知っているのかな？」

「まあ、ある程度の方向性はあっても、100%では無いということとは知ってるけど」

リリの変身が見た目だけしか変化しない魔法だったりするように、魔法はそれなりに所有者の意志を汲む事もあるが完全とは言えない。なんでもありなら、仲間が死んでしまった時に蘇生魔法が使えれば、と思った人間全てに魔法が発現してしまう事になる。

ベルが魔導書を読んだ時は自分にとって魔法とは何か、みたいな描写が描かれていたから、やはり想いは大切なんだろうけど。

「ふむ、それならいい。いやなに、事前に確認したかっただけさ。丁度在庫も持っている。スロットの制限を越えて発現する物の方がいいかな？誰に使うのかは分からないが」

「あ、ありがとう！」

幸運だ、依頼してから何日もかかる事は覚悟していたが、既に作られたものがあるとは。まあ、本なんて直ぐに劣化するものでも無いし、何かの為に常備しておくもの・・・なのかな？

「本当にありがとう、それで、対価は「君の恩恵が知りたいと言ったら？」・・・って、え

「？」

恩恵、……恩恵!^{ファルナ}恩恵って恩恵よな……あかんゲシユタルト崩壊。

ステイタスが知りたいって、相当踏み入った事を聞いてくるな……。

「無理にとは言わないが。ダンジョンでも言っただろう？ レベル不相応の力が気になるのさ」

「うっ」

そこを突かれると弱い、正直俺の能力はチートと言って差し支えないからな。どうしたって不信感も芽生えるだろう、たとえ何があっても、普通冒険者になって数ヶ月の間がレベル5のディックスを封殺する事は出来ないし。

ギルドとしても疑いは完全に晴らしておきたい、ということか……？

「ゼノス達とのこれからについて、我々は協力する立場にある。疑っている訳では無いさ、ただ君の出来ることを知っていた方が、色々とやりようもあるだろう」

……確かに、正確にどれ程の実力者であるかが分かっていたら、何かを成すとき、指しを出す指標になるだろう。この人が無闇矢鱈と情報を広めるとも思わないし。

「ああでも、一応主神様に確認を」

「ふむ、それもそうだな。少し失礼」

一旦持ち帰るつもりで話した所、フェルズは何やら水晶を取り出し誰かに通話を繋げ

た様子。これはもしや。

『突然だな、何かあったのか?』

水晶越しに聞きなれた声が広がる、メーテイス様だ。いつの間にかこのパイプラインが繋がっていたのか。神との会話に慣れた様子でフェルズは事情を説明し、ステイタスを見てもいいかの確認を取った。

『ほう・・・まあ、良いだろう。ステイタスは施錠しているから、解錠薬が無ければ1度持ち帰ってもらわなければならないが』

この世界にはそんな物があるのか? 初耳だが、その解錠薬とやらの在庫もあつたらしい。二人が話もそこそこにして切り上げると、こちらに向き直ったフェルズはフードの下から解錠薬らしき物を取り出す。

「さあ、そこに寝そべりなさい」

「あ、ああ。・・・何だかワクワクしてます?」

「そうだね、私も賢者の端くれ。堕ちた今でも未知には心躍る物があるのさ」

・・・冗談めかした一言にしてはその背景に重い物が潜んでるんだよなあ。本人はもうそこまで気にしてないのかもしれないけど、何処に地雷があるのか分からないのでこういう話は笑いにくい。

大人しくベットに寝そべり、フェルズによる解錠とやらを待つのであった。

無駄な深謀遠慮（見通せてない）

特に痛みなんかを感じる訳でもなく、静かに作業は進められた。

「ふむ、綺麗な身体をしている。傷跡の1つもないとはい。実力なのか、はたまた・・・」

不壊属性の装備が俺に裂傷なんかを残すことはないし、他で傷付いても魔法を使えば何も残らないからな。痒い所で微妙に凄い性能を誇るのが俺の力である。

それはそれとしてよく知らない人に見られるのは男と言えど恥ずかしいな。

ほほう、ふむふむとか言いながら、滑らかな指（骨）が俺の背中を撫でる。神様がする時は意識してなかったけど、なんかコレは・・・

「・・・終わったよ。コレで本当にLv2とは、未恐ろしいばかりだ」

模倣 I

《魔法》

モイドチェンジ

【作戦変更】

・ガンガンいこうぜ

・いのちだいじに

・じゅもんをつかうな

《スキル》

フエイクヒーロー
【賈物英雄】

・ステータスの追加

・不老

・ストレージ

ジヤックオフオールトレイズ
【万物商店】

・商店の追加

イベントバトル
【強制戦闘】

・逃亡不可のフィールドを作る。

・戦闘続行不可能な状態か、降参の意思が認められた場合のみ解除

レイマンブライド
【俗人矜恃】

・ステータスに成長補正

・諦めない限り効果上昇

・見捨てぬ限り効果持続

模倣

《スキル》

【縁下力持】

【追跡一途】

【鉛矢受難】

【月桂輪廻】

【自己再生】

《魔法》

【ラウミュール】 防御、敏捷強化

【ソールライト】 範囲回復

【キュア・エフィアルテイス】 解毒

【ウチデノコヅチ】 ランクアップ

【メリー】 転移魔法

《特技》

・ 死守

・ 五月雨突き

・ カウンター

・ 剛力

・ 見切り

・バックスタブ

《魔法》

- ・ファイア↓ファイアストーム↓ファイアプレス↓イグニス
- ・スパーク↓サンダーストーム↓サンダーボルト↓ライトニング
- ・アイス↓ブリザード
- ・ヒール↓リジエネーション↓エクスヒール
- ・テリトリリー↓ゾーン↓キヤッスル

（異常なまでの能力の数に、スキルに含まれる超常的な、次元が違う程の力。私達とは、起源からして違うような・・・）

「?能力については問題ない、ステイタスの方は、コレはどうなっている?力とか、ぶつこう?でいいのか、それらは普通の冒険者で言う所のどれほどなのか、分かるか?」

ステイタスか・・・正直装備によるところもあるけど、Lv5か6か分からないんだよな・・・。装備が無かったら、4とかだろうけど、Lvがひとつ上がるごとに戦力が違い過ぎて明確にここというものが見つかからない。

Lv差があると勝ち目ない、と言われていてこの世界で、Lv6相手にも惨敗とはならない気がするから6に近いのか?

「Lv5以上Lv6未満見たいな感じだと思う。多分」

この世界で戦った実力者と言えばフリユネとディックスだが、両方能力全開で挑んだ為苦戦はしなかった、素のステータスで言えば差程差はない気がするが・・・。

「耐久には自信があるから、格上でも一撃で倒される事は無いと思うけど、正直力には自信が無い。魔法も術士に比べると弱くて、Lv3位じゃないかな」

「^{速攻魔}ファイアボルト並の速度は素晴らしい利点だが、火力となるとチャージも無い自分ではいちいち魔法よりに装備を変えてもLv4になるかどうか。恩恵の方が成長しても、劣化魔法では大した変化もないだろうな。恩恵の方は攻撃魔法使えないし。」

「ふむ・・・、君は、神かなにかに改造でもされたのかな。得体の知れない能力達をその身に宿しているのははつきり言って恐ろしくも感じる」

「いや、別に誰かしらに力を与えられたとかでは無いんだけどね・・・」

自分のステータスは、この身体に由来する力だ。この身体が果たして誰が生み出したものかは分からないけど記憶にある限り、誰かに干渉されたということも無い。この力のお陰で救えたものも多いから、悪い意図での事じやないと信じたいけども。

「・・・まあ、君の人柄は信じている。いずれまた聞かせてもらおうとしよう。さて、鑑賞はこれくらいにしようか」

背中から降り、作業の終了を伝えられる。終わってからなんだが、こんな事で何千万ヴァリスもする魔導書を受け取ってもいいものだろうか。

「えーと、流石にこれだけだと釣り合っていない気がするんで、何かしたいんだけど……」
「なに、コレから君達には何かと頼る事もあるだろう。君達が強くなってくれるのは此方としても有難い。気にするな」

と言われると俺としてもこれ以上は言いづらい。有難く頂戴するでしょう。座って待つこと数分、フェルズが持ってきた魔導書を見た俺は驚いた。

二冊持つてる。

ははは、フェルズおじいちゃん（仮定）ももうボケちゃって訳わかんなくなっちゃってるみたいだね。一冊でも凄まじい値段の魔導書を恩恵見せたくらいで二冊持つてきちゃうなんて。

「こちらの金の装飾の魔導書が、スロットの限界を超えて魔法を発現させる代物だ。銀の方はそれ程上等なものでは無いが、必要があれば誰かに使うといい」

どうやらうっかりとかではなく、普通に二つとも渡すつもりらしい。流石に二冊は、と話はしたのだが押し切られてしまう。別に目的があつて作つたものではなく、趣味の物だからだのなんだと言われたが、こんな者を趣味程度で作るとは、やはりこの人は賢者と呼べられたトップクラスの神秘使いなんだと再確認した。

「それでは、ここらで終わりにしようか。また何かあれば言うといい。表立っては言えないが私達は協力関係だ。困った時はお互い様だな」

「……俺は兎も角、仲間は無茶を言わないでくれると助かります」

早まったかもしれない、人に借りを作る事の恐ろしさを、異世界で俺は学んだ。

パタリ、レイニーを見送った、直ぐに私は思案に入る。彼の出自についてだ。

能力の出鱈目さそのものについて、これはまあ、ひとまず置いておくとしても。幾つか見過ごせない点がある。

先ず贗物英雄の、不老。英雄に不老と付くと、あの存在が頭に浮かんでくる。かつては神よりも人々の身近に居た存在

精霊

英雄達と共にあり、その寿命は常識では考えられぬ程の長命。

レイニーは精霊と人の血を継いだ者なのでは無いだろうか？そう考えると、人を越えた力の数々も、一応の説明はつく。

通常精霊は子を成せぬ筈だが、前例が無いでもない、可能性として片隅に置いておくべきであろう。何故贗物とついているのかは分からないが、或いはかつての英雄のように、という期待に比べられなかった過去でもあるのか。

次は万物商店。正直意味が分からない。精霊の力を持つとしても説明が付かない気がするが。商店を追加するって……何だ？存在しないものを追加するのであれば、次

元に干渉する力ではありそうだな。まあ、分からないが。

強制戦闘も理屈は分からないが、報告は聞いた事がある。ダンジョン18階層のイレギュラー、それを討伐した何者かは誰も侵入する事の出来ない透明な領域を作り出し、ただ一人でゴライアスを打倒せしめた。後にその何者かはレイニーであることが分かり、付いた二つ名は殺戮者^{スレイヤ}……。まあ、なにせよ単なるスキルでは到底なし得ない技だ。

俗人矜持……。アイツ自分が俗な人間のつもりでいるのか？何処を切り取ったら俗になるのか分からないが……。

見目麗しく、並を凌駕する武力を持ち、女に囲まれている。

コレで凡人ですと言おうものなら世の一般人にタコ殴りにされても仕方あるまい。

ステイタスに成長補正、今まで聞いた事のない効果だがこれも躍進の一因か。待てよ、経歴に見合わない成長……。もしかや、ベル・クラネルも似たスキルを持っているのだろうか？そうであるなら説明が付く。レイニーとも関わりはある様だし、二人は秘密を共有している……。？

分からない、まだ情報が少なすぎる。どちらにせよ、当面敵に回るような事は無いだろう。今はそれでいい。

—————

「それで、まんまと恩を押し付けられてきたと」

「・・・すみません」

帰宅後ダフネに魔導書を見せると、二冊あるそれに驚きもせず直ぐに溜息をついた。見ただけでその背景まで読み取ったと言うのか！なんという頭脳の持ち主だ・・・。

「馬鹿に一人で行かせるんじゃないやなかつた、主神様も簡単に情報渡しちゃうし・・・」

酷い言われようだ、俺はそこまで馬鹿では無いよ。ダフネに比べると足りてないだけだよ。

まあ、仕方ないか、と自分を納得させた様子のダフネは此方に向き直ると、今後の行動を話し始める。

「コレから暫くは、クエストを頼まれたりすると思う。最低でも中層には挑む事になるでしょ。さっさと魔法を覚えて、確認にはいるから、早く二人呼んできて」

「二人と言うと、もう一人は春姫か？」

そ、とだけ返事を貰い、二人を呼びに行く。

魔法を覚えてもらう相手は、出掛ける前にアドバイスをもらって決めた。当初は枠を越えて覚えられるという前提で一人だけの予定だったが、通常の魔導書も手に入ったのなら春姫も、という事だろう。

皆が待つてると言う食堂に向かう道のりで、彼女の事を思う。出来れば、この魔導書

が助けになってくれるといいんだけど。

ドアを開け、集まっていた面々を見渡す。見る限り、サミラ以外は緊張しているか？まあ、突然家に超高級品が届きますよと言われたら自分もこんな感じになるかもしれない。

春姫とカサンドラは見るからにソワソワしており、反面リリは平静を装いつつ魔導書に注ぐ視線を止められていない。ニナは初めて見る魔導書に興味津々といった所か。まあ、ダフネにも早くと言われているし、変に引き伸ばさずに呼んで連れて行くか。

「ただいま、帰ってすぐで悪いんだけど。リリ、春姫。ちよつと来てくれないか」「リリですか!？」

魔法コンプレックス

リリルカアーデにとって魔法とは、嫌いな自分を消してくれる救いだった。いや、救いのはずだった。望みもしない競争に巻き込まれ、力のない自分を嘆き、才のない自分が救われる為に自分を変える魔法を望んだ。

しかし想いは届かず、発現した魔法は見てくれを変えるのみ。それだけの力では神酒ソーマの呪縛も振り払えず、仲間であるはずの者たちの影に怯える日々を送った。

何時しかあれほど渴望していた魔法は、盗みを助ける薄汚れた道具魔法になった、なんの事はない、その程度の器だっただけだ――

「リリ様？ どうされたのですか？」

「！」

レイニー様が魔導書を探しに行ったと聞いた時、リリはとても驚きました。魔導書ですや？ 魔導書グリモア。とてもそこらの中小ファミリアが欲しいからと言って手に入れられる物じゃありません。

このファミリアは、まあ・・・Lv不詳のレイニー様とLv3のサミラ様がいるので、そんじよそこらのファミリアよりは位が高いですがそれでも簡単なものでは無いはず。

手に入れられるのはおそろく一冊。

「な、なんでもありません。少し考え事があったので」

一冊、だからなんだと言うのでしょうか。戦力を強化するとなれば春姫様かサミラ様。二人にある問題を重視するのであればデメリットの少ない中衛の御二方に使つてもらうのが最善策です。

盗人
リリなんて

ああ、ダメだ。あの人弱い自分を救つてもらつたのに、魔法となるとまだ沈んでいた醜い自分が出てきてしまう。希望の残骸で、絶望の証人だった刻印の魔法。自分の過去の黒歴史。

「しかし、魔導書グリモアか。私もまだ見たことは無いな。恩恵の無いものが見ても、効果を奪うことは無いと聞くが……。神がみてもいいものだろうか？」

「メーティス様が知らない事を、あたしらが知るわけじゃないじゃん……」

奥の席で、魔導書を見てみたいと我儘を言うメーティス様、それをまあまあと団員達で宥め、ダフネ様ダフネが話を変える。

「まあ、団長が誰に魔導書を渡すかは、来てからのお楽しみつて事で。ウチでは無いよ」「んー、Lvだけ見るならオレか？でも、別に魔力は高くねえしな」

前衛で傷を癒しながらその拳を持つて怪物に立ち向かうサミラ様、魔力は常用こそし

ない物の謙遜する程低くはありません、Lv3であると言うだけで、並の魔法使いを凌駕します。

欠点としては、前衛である事。並行詠唱はありふれた技術ですが、万人が扱い切れるものではないですからね、詠唱に集中して前衛の動きが疎かになれば戦線の崩壊に繋がる危険があります。

「あたしも魔法があればもつと強くなれるかなあ?」

中程から臨機応変にチームの穴を埋める軽戦士、二ナさん。鼻肩目なしに見てもLv2に恥じない技巧を身に付けており、飛び抜けた敏捷のステータスは同格の敵では太刀打ちできない程の神速と言ってもいいでしょう。魔法は最近まで発現していなかった。魔法のステータスは劣りますが、中衛であれば詠唱のリスクも少ないです。

「私は、もしもの為を思うと精神力が・・・」

カサンドラ様は、既にパーティの回復役として十分な活躍をされています。回復魔法は込めた精神力によって規模も変更が可能で、無理な魔法の追加は精神力の管理に影響を及ぼすでしょう。

「私も新たに魔法をととなると、少し不安が残ります」

春姫様は、他に類を見ない強力な魔法の持ち主、魔法を多用してきたからか、Lv1にして既に十分な魔力を持っています。そしてウチデノコツチを覚えている前例があ

り、次に魔法を覚えるとすればまた有用な魔法を発現する可能性も高いでしょう。

自衛能力に劣る部分はありませんが、いつそ新しい魔法を覚えて専属の魔法使いになつてもらえば中程に移行して守りつつという選択肢もあるかもしれませぬ。

そして、リリは……

私がサポートターとして後ろに居る前提の戦術を確立している為、変更するリスクとリターンが見合っていない。Lv1で魔力のステータスが低い。前に発現した魔法が弱い。魔法スロットが空いていない。

……そうだ、何もレイニー様が高価な、上位の魔導書を持つてくるかは分かりませぬ。上限を越えるような物で無いのであれば、候補はサミラ様、春姫様、ニナさんになりますね。

「リリ様？やはり、何処か上の空と言ったご様子ですが」

「つ、あ、ええ。魔法が、魔法を皆さんが覚えるのならどのような物になるのかと思いまして」

春姫様に心配をかけてしまった。もう考えるのは、よしましよう。

「んー、あたしはレイニーの助けになる魔法かなあ。仲間が強くなるのもいいし、攻撃魔法が必要ならそれでもいい」

「ナさんはいつもの通り脳天気なようで何より。昔は全方位に満遍なくそののほほんさは発揮されていました。今は局所的にかなり鋭いです。あの方は気が付いているのでしょうか？」

「オレはあんまり魔法に頼りたくはねえな。殴れば良いし、前衛に集中出来ずに仲間を怪我させたくねえ」

アマゾネスらしい脳筋発想で何より。拳で闘うとは何事だと、初めに戦闘を見た時は思いましたが、サミラ様の演武とでも言うのでしょうか。踊るように敵を蹴散らす姿を見てしまえば、戦士とはこういう物だと言う気持ちを感じずにはいられません。

「ウチ？ウチはそうね・・・、今必要なのは長文詠唱の高火力な魔法だけど、自分がどんな魔法が欲しいかって言われれば、仲間を守る魔法・・・かな」

・・・レイニー様が聞いたら恥ずかしくてからかうような事を言いそうな台詞ですね。良くもまあそんな臭い台詞を・・・。

ダフネ様が前のファミリアに良い思い出が無かったことは知っています。そんな彼女から、守りたい、大切にしたいと思われているのはいい事なんです。あなたが、照れますね。

「私は、そうですね。皆さんが闘っている間何も出来ないのが心苦しいので、普段使いできそうな、汎用性のある物でしょうか」

春姫様は、らしい願望を口にしましたね。ウチデノコツチは多用出来るものではなく、待機する時間の多い彼女はサポーターとしての仕事を熟す一方で、何か出来ることは無いかと時折前線に出て来てはダフネ様か私に叩き返されると言う事をたまにします。

正直危ないのでやめて欲しいのですが・・・、レイニー様にいただいた

シールドの魔導書が偶に活躍するくらいには、危ないです。

「私も回復する事しか出来ないから、もし新しい魔法が使えるなら、普段から役に立つ魔法が欲しいです」

確かに、カサンドラ様の回復魔法と解毒魔法は傷を負ってから輝く魔法。何も起きないならそれに越したことはないので、事前に盤面を制御できる魔法があつて損はしないでしょう。カサンドラ様はお優しいので、後ろで何も出来ない状況が続くと不安そうな表情をされる事があります。

・・・皆様、誰かの事ばかりですね。誰かの為に、仲間のために。リリは？

凄く魔法が欲しい。

自分が強くなりたい。

置いていかれたくない。

未だに自分の事ばかり？

変わったと思ったのに。

「リリも、・・・皆さんの負担を軽減できる魔法が欲しいです」

1人だけ意識して、妙な嘘をついてしまった。仲間はその事を気にする人達ではないのに。

その後は皆さん魔法の話で持ち切りでした、魔導書なんて滅多に目にするものでも無いので、当然と言えるでしょう。途中、メーティス様が席を外しましたが、残りのメンバーであーだのこうだの言いながら時間はたち、その時がやってきました。

「ん、帰って来たみたい。ちよつと出てくるね」

呼び出しの鈴がなり、ダフネ様が玄関へと向かいます。おそらくレイニー様でしょう、時間にして2時間程は待ったでしょうか。トップクラスのファミリアでさえおいそれと手に入れる事ない魔導書を数時間で・・・やはりレイニー様は規格外です。

ダフネ様が食堂を離れ、レイニー様が来るまでの時間、皆さんは不思議な緊張感に包まれ無言になりました。もちろんリリもです。

リリが選ばれるとは思いませんが、少し位は希望を持って、良いのでしょうか。

「ただいま、帰ってすぐで悪いんだけど。リリ、春姫。ちよつと来てくれないか」

「(リリですか!?)」

つよいまほう よわいまほう そんなの ひとつの
かつて

「あわ、あわわわ」

リリの様子がおかしい。説明をする為に部屋を移動している間、ずっとあわあわと何やら慌てているようだ。なんだこいつ、かわいいかよ。

可愛いのは良いのだが、説明中もあわつてる感じがしたので声を掛ける。

「リリ？聞いてるか？」

「・・・聞いてないですよ!?!なんで私がっ！」

めちやくちや逆ギレ！いやだから・・・、と説明をしようとした所でダフネに待ったを掛けられる。何か伝えたい事でもあるのか？

「リリ、君は正直まだまだ弱いよ」

めちやくちやどストレート！流石にそれは正直過ぎますよ・・・。

ダフネの一言に、リリは俯いてしまった。分かつてはいるけど、と言った所だろうか。それに構わずダフネは言葉を続ける。

「スキルは使い方も見つけて、役にはたつてるけどまだLvは1。ステイタスも低いし、

冒険者としての経験も、中層に入ってからは大したアドバンテージにはならないのは分かっているよね」

「……まあ、それはそうだ。リリの的確なサポート能力は上層を何度も探索して来た経験からくるもの大きい。コレから階層を変えて行くにつれ未知の経験をする事は増えるだろう。そうなるまでこれまでの様には行かない。」

「魔法も探索だと使いにくい。弓だつて中層からは殆ど効いちゃくれない」
「だ、ダフネ様、それは……」

堪らず、春姫も止めに入るが言葉が出てこない様子だ、間違つた事を言っているわけではないから、とはいえ。

「だから、君が魔法を覚えるんだよ」

「……なんで、そんなダメなリリに……」

「ダメだから」

「このままだと、君だけが着いてこられなくなる。今すぐとは言わないけど、いずれ。確実に……そんなの嫌でしょ？」

「……俺は軽い気持ちで魔導書貰つて魔法覚えればいいや。つて考えてただけなのになんだこの重さは。リリもなんでこんなに思い詰めた感じになつているんだろう。」

キツと顔を上げたりリリが俺から魔導書を奪い取り、部屋を出ていく。キチンと金の魔

導書を持っていった辺り、話は聞いていたらしい。

「あ、リリ！．．．ええと、じゃあ、春姫にもこつちの方渡しておくな．．．。また、終わったら食堂に戻ってきてくれ」

「わ、分かりました．．．」

—————

なんでなんでなんで！

リリの筈なのに！

こんなの、おかしいです！

ダメだから魔法を覚えろ！？そんな事ってありますか！？

リリだって、補給に回収に、

サポートだって．．．。

ほんとは分かってます。足りないのは。皆にある特別はリリにはありません。特別が欲しい、同じLⅴでも、特別必要とされている春姫様が羨ましいです。リリは今のままでは中層、下層に挑むにつれ置いていかれてしまうはずですよ。

このファミリアは、それだけの力は持っていますから。卑下する訳ではありませんが事実として彼等に並ぶには平凡が過ぎる自覚があります。

でも魔法があれば

かつて裏切られた魔法があれば、或いはそうはならないかもしれません。特別であれば、並び立つことも許されず。

「・・・それでも、怖いですよ・・・」

途中、逃げるように入った部屋の中で一人つぶやく。私はもう一度裏切られるのが怖い。これだけ期待の籠ったプレゼントを受け取っておきながら、応えられなかったら？魔法なんてものは望むままに出てくるものじゃない、それは自分の身をもって知っている。

コレで目も当てられない、何の役にも立たない魔法が出てしまったらどうすればいいのか、リリでは一生掛けても返せない程の価値のある物なのに。

期待された事の無い人生で、初めて期待に潰されそうになっています。

—————

「リリー？ドア開けてくれないか？」

追跡衝動にリリを設定し、リリが居るはずの部屋の前に来た俺は声を掛ける。どう考へても普通の状態じゃ無かったし、心配になって確認をしに来たのだ。ダフネの心無い言葉で泣いていやしないだろうか。

ガチャリ

ドアが開けられ、リリが顔を覗かせる。顔は・・・あつ、死んでは居るが泣いては居

ない。ツーアウトつて所か。

「大丈夫か？ごめんな、なんか余計な事しちゃったかもしれない」

「・・・レイニー様が謝る事ではありません」

「あー、えつとダフネにも後で謝るように言っておこうか・・・？」

・・・会話が途切れてしまった。ひとまず部屋に入り、独特の緊張感を覚えながらも2人で椅子に座った。

沈黙を破つたのは、リリだった。

「レイニー様は、魔法つてどんな物だと思えますか？」

めちやくちや抽象的！

「ど、どんな物？」

「私は弱い自分を変ええるための、魔法だと思っていました」

・・・それは、知っている。見た事がある。かつて自分の魔法を手に入れた時、その効果に落胆したんだったか。けど今は魔法が無くてもスキルの使い方も学んで、中層でも普通にやって行けるようになって、良い感じになってきてたんじゃ・・・。

「レイニー様に会ってから、色んな事が上手くいつて本当に感謝しています。ファミリアだつて前と比べ物にならないくらいに良いところですし」

でも、

「私はまだ弱いままだったみたいです、リリには、魔導書は使えません」

怖いんですと、震えながらリリは言った。自分が期待に応えられなかったら、弱い自分のままで置いて行かれたらと思うと魔導書を読むことが出来ないよ。

言われて見れば、何千万のアイテムが自分次第でゴミになるかもって言われたらとてもない負担になる。

リリは特に、魔法で失敗した過去もあるしトラウマになりかけていたんだな……。リリのこと、全然分かっていなかったらしい。

そうか……。そうなるよ……。

「そう、だな。まあなんとやっていいのか正直分からないんだけど……。気にするな！」
「……?」

「もし出てきた魔法が大したこと無かったら、もう一冊土下座でもして貰ってくるよ」

在庫あるか分からないし、貰えても恩が凄いことになるし、ダフネにはまた怒られるけども。

「え、で、でもそんな簡単に……」

「それに、例えリリが弱くても置いて行ったりしないよ。まあ俺に比べたらダフネ達も弱いつて言うか五十歩百歩だし（適当）」

「!?」

ダフネ聞いたら怒りそー……。でも弱いなんて気にするななんて、なんの意味も無い事言っても無理だろうし、どうにかこの方向性で話を進めて行きたい。

「でも、私皆さんと違って、中身まで弱くって……！」

中身？話を聞くと、俺を待っている間の会話で、魔法と自分の過去のコンプレックスが刺激されまくってナイーブな感じになっていたらしい。

俺にそんな内情までぶちまけて大丈夫かなとも思うが、聞いたからには応えねばなるまい。

「よわくたつていいじゃないか、にんげんだもの（相田みつ〇）」

人間誰しもそういう部分はある、仮に無い人間が居るとしてもそれは俺達じゃない。

「俺だっと思う事はあるよ？サミラやニナの明るい性格羨ましいなあ、とか。リリとダフネは頭良くてカッコイイなあとか。春姫の耳もふもふしてるなあとか。カサンドラ可愛いなあとか」

「ん？」

「まあそういうのはどうしてもあるもんだとして、その点で言えば、リリは全然特別じゃないし、変じゃない」

だから良いよと、リリのままで。魔法がどうであれ、何を思っていたとしても、それで俺達が失望する事は無いって。リリも分かっていたんだろう。けどこんなの中々

言いづらい事だからな。自分に言ってくれて、これ以上抱え込まずに済むかな？

「・・・分かりました、リリ、試して見ます」

「おつ、良かった良かった。じゃあ、部屋出て食堂で待ってるから」

ふいー、一件落着と。さて食堂に戻り

「弱くて悪かったね？」

「誠に申し訳ございません」

ひえええ悪気は無いんです！口が、口が勝手に！

「・・・まあ、ウチが一番悩んでた事は解決したみたいだし、許して上げるけど。今度、何か奢ってよね」

「・・・？よく分からんけど分かりました」

魔道に触れる

レイニー様が部屋を出ていった後、リリは部屋を中心に魔導書と向き合っていました。

『ダンジョンでの実戦的な魔法戦解説』

そう書かれた本を手に取り、意を決して読み始めます。

『魔導師は攻撃、回復、支援問わず基本的には専門の役割として後方に位置する事が多い。』

魔導書は初めて見ますが、意外に普通の本のようなのですね・・・？

『長文になるほど効力も上がる傾向があり、詠唱に集中する事が必要な魔法は後方で完全に発動される事が望ましい。技術として戦闘行動をしながらの詠唱、『並行詠唱』は存在するが、失敗時の危険性が重視され殆ど使用されていないのが現実だ。』

並行詠唱、レイニー様は使われていましたね。まあ、あれは暴発しても死にはしないという自分の耐久に自信があるからの行動ですが・・・。

あれ？文の間に小さな文字がありますね。これは・・・共通語では無いようです。リリでは読めませんね。

『しかし後方にモンスター襲撃があった際、詠唱を中断する事が出来ずに攻撃を受けてしまい、更に魔法の暴発に巻き込まれると言った最悪の事態も想定できる。そのため徒歩程度に併せて並行詠唱をする事はダンジョンに向かう魔導師にとって必要不可欠な技術だ。』

見た事も無い紋様のような、コレが魔導書たる所以なのでしようか。ページをめくる度に、目を離せなくなる。

『この章では、五分で出来る患者式並行詠唱マッサージについて解説する』
【絵】が現れた。

多彩な色合いの文章で表現された人の絵、いや、私の顔？ページをめくる。

『さあ、始めましょう』

絵の眼が開いた、あれ、私の声……。文字で綴られた栗マロンブラウン毛の瞳が私を射抜く。短文で形成された小さな唇が言葉を紡ぐ。

ページをめくる。

『私にとって魔法って何？』

弱い自分を変えるもの

だった。少なくともほんの数分前まで

比類なき攻撃でも、完全なる回復でも、超常の支援でも

特別で、自分をかき消せるなら何でも良かった、歪んだ想い。
ページをめくる。

『私にとって魔法って?』

希望だ。

強い光。

嫌な自分ごと消し去る太陽。だった
でも今は、もう照らされているから
憧れに目を焼かれない為の、魔法
ページをめくる。

『私にとって魔法はどんなもの?』

なんでも出来る、不可能は無い。そんなんじゃない。
嘘だらけの希望、酷すぎるハリボテ
どうせ欲張っても、与えられないから。

弱い私なんて簡単には変わらない、私なら、狡猾に。

『魔法には何が欲しい?』

正直妬ましい、あの人たちが
でも仕方ない、人間だもの

欺きたい、騙したい、隠したい
徹底的に、徹底的に、徹底的に……

『まだあるでしょう?』

……叶うなら、あの人に。

お人好しで、お調子者で、気が付くと笑わされているような、私の英雄の
私なんかには不相応だけど、叶うなら。

あの人の方に

『欲張りすぎ』

リリはそうだから

『そう、私らしいね』

—————

「(リリ様、大丈夫でしょうか……)」

部屋を飛び出して行ってしまわれた後、レイニー様が追い掛けていたようですが、どうしても心配になってしまいます。私がこのファミリアに加入してから、色々と良くして下さって、本当に多くの事をリリ様からは学びました。それなのに弱いだのあどばんでえじがないだの、ダフネ様は少し言い過ぎだと思えます。

でも、他人事では無いのですよね……。

私は特殊な魔法、その一点のみを買われてこのファミリアに所属させて頂いておりません。魔法以外はてんでダメで、まだまだお役に立てているとはとうてい言う事は出来ません。

魔導書、私も初めての挑戦ではありませんが、これからも皆様と一緒に過ごして行くためには、個々で億さず魔法を勝ち取る他ないのです。

「ではいざ……行きます！」

「ただいま戻りましたあ」

「おかえり、身体は大丈夫か？」

1時間ほどは待っただろうか。もう待ちくたびれたという雰囲気のリリと二ナを宥めながら雑談していると、リリが先に帰って来た。その表情は清々しいと言った様子で、なにか吹っ切れたらしい。

「お持たせしました！」

バタバタと急いで帰ってきたのは春姫、そんなに急がなくても良いのに、待たせすぎたと慌てて帰ってきたようだ。流石耳がもふもふなだけあるな。

「ホントによお、何時間まちやあいいのかと」

「申し訳ございません！」

「メーテイス様、だよな」

「だね」

あれは、良い方の叫びか？ そうだよな？ とんでもレア優良魔法キター！ だよな？

さらに数分

「うひよおおお！」

「「「「!?」」」」

・ ・ ・ 期待しよう。 とんでもレア優良魔法×2だ。 そうだと信じよう。

—————

リリルカ・アーデ

レベル

1

《魔法》

【404^エ4^{ラー}】

- ・ 第1節ステイタス改竄
- ・ 第2節ステイタス奪取
- ・ 特定対象のみ奪取可能
- ・ 発動時精神力消費増加
- ・ 詠唱式【私の刻印は私のもの】【貴方の刻印は私のもの】

・ 解呪式【嘘の終わりを告げる声】

《スキル》

【偽装工作】

- ・ 偽装効果上昇
- ・ 計画能力上昇

サンジヨウノ・春姫

レベル・1

《魔法》

【キツネビ】

- ・ 幻覚魔法
- ・ 多重発動可能
- ・ 精神力吸収

・ 詠唱式【人為ならざる夢幻の火炎、不明瞭な狐の炎、絡み纏わり喰らい尽くせ】
よくわからんけど凄そうではある、だが攻撃魔法を手に入れた訳では無さそう。リ
リなんてスキルまで手に入れて・・・まあちよつとばかしアレなスキルではあるが。そ
れにしても詠唱式が以前とほぼ同じ、つてか前後逆になつてゐるんだな。なんだろうこの
魔法。

「なんだあ？二人とも見た事ない位のレアな魔法じゃねえか。効果も訳わつかんねえ」
「そうだね、これはまた、特殊な・・・」

春姫の方はまだ察する事も出来るが、リリは説明を見るだけではイマイチ理解する事が出来ない、ただの魔法って言うより、どっちかと言えば俺に近いような？エラーって言われたら何処と無くゲームが浮かんでくる。

404は、存在しないページを開いた時に出てくるエラーだから、リリのページがなくなる・・・とか？

「ひとまず庭に出て確認すると良い。私見だが、爆発したりはせんさ」

魔法を見てあーでもないこーでもないと話す俺達を見て、ニヤニヤとしながらメーテイス様が諭す。・・・なんか嫌な予感するな。

一応フル装備で行くか。

「团长？何してるの？」

「分からなければレイニーに試してみろ。何、死にはしないさと言われそうな気がしてな」

「分からなければレイニーに試してみろ。何、死にはしないさ」

・・・ほらね。

ゾロゾロと食堂を離れ、言われた通りに庭へ向かう。抵抗は無意味である。

先にリリが魔法を試す事になり、まずは第1節の検証にはいる。

ステイタス改竄

書いてあることはとんでもない、ステイタス強化とかでは無く、改竄。それは文字だけ見ればレベル100にだって変えてしまえるという事では？

リリが庭に出る、緊張している様子がここからでも分かってしまうな。リリはさつきかなり魔法を覚える事に怯えていた、今でも完全には忘れられていないんだろう。

「それでは・・・【私の刻印は私のもの、エラー】っ！」

「大丈夫かー」

詠唱を終えた瞬間にリリは何かに驚くように跳ね上がり、動きを止める。ここからは見えない何かが起こったのかと全力で駆けつけるが、問題は無いみたいだ。

「だ、大丈夫です。いきなり、頭の中にステイタスが浮かんで来て・・・。これ、発動だけでかなり精神力を使いますね」

リリが言うには、自分の頭の中に共通語で記された自身のステイタスが浮かび上がってきたらしい。感覚ではそのステイタスに触れる事が出来、その数字や説明を操作する事も出来そうだとのこと。

「ですが、力を上げるとかならともかく、レベルを書き換えたり説明を変更したりするには精神力が足りませんね。変えたとしても、維持出来ずに精神疲弊で倒れそうです」
マインドダウン

ひとまず能力値を全部SSSにしました。

とんでもない魔法だな、簡単そうに言っては居るがその顔には汗が浮かんでいる。一度に大量の精神力を消費したのだろう、マナポーションを取り出し、回復を促す。改竄中は精神力を消費し続けるらしく、二瓶ほど飲み干して完全回復したそばから減ってしまっているようだ。

早い所試そうとまだステイタスの上がりきっていない二ナを呼び、力試しに模擬戦をする事になった。

「時間が無いので、口上は言いませんよ。二ナさん、覚悟です！」

「妹分にLv2のあたしが負けられないよっ！」

二ナは追跡衝動を解除し、素のステイタスで挑む。

ランクアップと言うのは非常に強力なようで、そこそこのステイタスでランクアップした二ナと全ステイタスMAXとか言うリリを比べても、二ナに軍杯が上がっている。しかしやや二ナ優勢ではあるものの、本来のステイタスを考えるとこれ程までに打ち合える筈もない。その魔法の効果は疑うまでも無いだろう。

「流石に、Lv1では勝てませんかっ！なら、【貴方の刻印は私のもの】っ！」

劣勢に陥ったりリリが、打ち合いながら第2節を唱える、短文で、以前から使っていた詠唱な事もあり慣れた様子だあっ!?

「んおっ!？」

「!?ど、どうしました、レイニーさん？」

「いや、何か、ダルくて力が抜けるような・・・まさかっ!」

上半身の装備を解除し、上裸の状態で神様に詰め寄る。余波で春姫は気絶したが今は気にしてられない。

「神様?俺のステイタスどうなってます?」

「ステイタス?どれどれ・・・ほお、こうなるのか」

レイニー

レベル

1

力 SSS 1500

耐久 SSS 1500

器用 SSS 1500

敏捷 SSS 1500

魔力 SSS 1500

「これは、リリルカのステイタスだな。となると、お前のステイタスはその子の所にある訳だ」

・・・す、ステイタス泥棒なんてありかよ。

新魔法と試し打ち

凄い……！さつきまでも自分の力を遥かに超える感覚が会ったけど、コレは格が違う！

ニナさんの動きが遅く感じる、自分の身体が自分じゃないみたいに軽い。これはそう、春姫様の魔法を受けた時のような感覚！

「はあああああ！」

カンッ！

冒険者としての先達、ニナさんには技量では負けますが、ステイタスは此方が有利！精神力にも余裕はありませんし、ここは攻めさせて頂きます。慣れない力に振り回されている感覚は有つつも、その高いステイタスを活かして速攻を決めに行きます。

しかし、やはり相手は生粋の冒険者、戦法を変えられ、凌ぐような動きをされてしまうと決定打が見当たりませんでした。

「嘘の終わりを告げる声」つ、はあく……、さ、流石に経験が違いますか」

「あ、あつぶな……リリ、本気で刺しに来てなかつた!?」

そりゃあ、サポーターのリリが勝とうとするなら本気にもなります。普段と違って軽

い木剣で、スキルも使えない訳ですし。

それにしても、使ってみたはいいものの思っていたのと違いますね？ステイタスを奪取すると書いていたので、相手のステイタスを奪える物かと思っていました。それにしては能力が拮抗していました。

「リリ、とんでもない魔法を手に入れたな・・・」

そう悩んでいた所に、レイニー様が現れました。手に持っていたマナポーションを受けとり、飲みます。とんでもない魔法、ですか。いや、我ながら良くも悪くも裏技的と言うか、自分らしいとは思いますが。

「俺のステイタスを奪って交換する魔法みたいだぞ」

・・・ええ？

メーティス様いわく、特定の相手＝レイニー様のようで、改竄されたステイタスはそっくりそのままにリリとレイニー様のステイタスが入れ替わっていたようです。確かに、奪取する相手を選択するような事はありませんでしたから、そのようですが・・・何か恥ずかしいです。

それってリリがレイニー様をめちやくちや意識してるみたいな感じになりませんか！?

フアミリアの中だけとかならともかく、特定の相手でレイニー様だけが対象って、

ちよつと思ふ所がありますよそれは。

しかも恩人からステイタス奪い取るってあんまりな仕打ちな気が……。幸い、レイニー様はステータスの力もあり、何も出来なくなるといふ訳ではありませんがLv2のステイタスが無くなるのは、相当違います。

仲間を弱くして自分を強くする魔法って、やっぱり使い所無いじゃ無いですかあ……。

—————

「まあ良いんじゃない？君のステイタスが上がる分には、危険も減るし」

発現した魔法が結局思ってたんと違う、と落ち込むリリをダフネが宥める。現状Lv1の程度のステイタスであるリリが、精神力は消費するもののLv1の最高値ないし、Lv2のステイタスになれる魔法と言うのは中々とんでもない事だ。まあ、春姫の階位上昇とは違い、俺のステイタスが下がるんだけども……。

俺はステータスの方もあつし、正直少しくらい下がつても気にはならない。それより気になるのは

「ステイタスって、逆に下げたらどうなるんだ？」

「えつとそれは、『私の刻印は私のもの』……！負担が減りました。変える時は消費しますが、維持する精神力が減っています。そうなると、全てのステイタスを上昇させるのは負担が大きいですか」

となると、魔力だけ割り振ってしまえばLvすらも書き換えたり出来そうだな。そこにウチデノコツチも追加して、なんて事をすれば最大で即席Lv4冒険者ができ上がるのでは？

魔力割り振り、マナポジション、ステイタス奪取、マナポジション、魔力割り振り、マナポジション、Lv書き換え、マナポジション・・・あんまり薬品に頼るのは良くないがもしもの時は選択肢に入るな。

「レイニーさんって、使い方の発想が柔軟ですよね」

「ねー。直ぐに慣れてるみたいの色んな事考えてるよね」

まあ、それはゲームやら何やらの経験で、こんな事出来そうだな、みたいな知識があるからな。何百と異世界系の作品はやって来たんだ、慣れもする。

あ、そうだ、Lv書き換えた状態で、もう一度ステイタスを奪取して戻してもらえば・・・！

「次は、私ですね。レイニー様、お相手をお願いします」

おっと、考えるのは後にするか。春姫の魔法も気になるしな。幻覚魔法、多重発動可能、精神力吸収、か。幻覚の程は分からないけど精神力ドレインで、相手を削りつつ自分を回復する奴だとは思うが。

と言うか俺に幻覚効くんだろうか？

一抹の不安はありつつも、大人しく庭に出て魔法を喰らう事にする。泣いてお願いしない限り決定事項だろうからね。

春姫は特に貯める事も無く、直ぐに詠唱を開始した。

「人為ならざる夢幻の火炎、不明瞭な狐の炎、絡み纏わり喰らい尽くせ、キツネビ！」
問題無く詠唱を終え、その魔法が全貌を見せる。春姫の前方に現れた青白い炎、それは差程大きくは無かったが、キチンとその存在を示していた。なるほど、狐火っぽいな。
第1段階は問題無い、俺でも幻覚は見えるみたいだな。後は効果の方が・・・っと。
それなりの速度で発射された狐火を、ひとまず避けてみる。すると身体を通り過ぎる寸前で減速し曲がりながら俺の方へと向かってくるではないか。絡み纏わり、とあるように追尾式らしい。

「カウンター！」

便利スキルカウンターを発動するも、不発。抵抗虚しく炎は俺の身体に吸い込まれて行った・・・。ふむ。

「即効性は無いみたいだな」

「そう、ですね。お身体に変わりはありませんか？」

今の所特に問題は無いが・・・あ、ゴリゴリ精神力が削れていつてるな。体感で10分もしない内に削り切られるんじゃないか？幻覚魔法と言っても、こっちの精神力吸収

の方がメインの効果らしい、Lv2である俺の精神力をコレだけ削れるのであれば、上層のモンスターなら1分もせずには精神力を枯渇させられるだろう。

「多重発動もやってみてくれるか？」

「はい、〔人為ならざる夢幻の火炎、不明瞭な狐の炎、絡み纏わり喰らい尽くせ、キツネビ〕」

今度は3つか。先程同様向かってくる狐火達を喰らい、その効果を確かめる。

「あゝ、すっごい削れてる」

どれ位かは分からないが間違いなく速度が上がった。感覚ではもう精神力が半分を切っている。同時発動の限界は分からないが、春姫の様子を見る限り消費精神力も少なそうだし幻覚とは言え使い勝手も良さそうな魔法だな。

「分かった。春姫、とりあえず止めてくれ」

「はい」

「……？止まる様子がない。もう結構やばくて2割位な感覚なんだけど。精神疲弊はシンドいのでなりたくないんだけど。」

「あの……、止め方が分からないのですが……」

「……あつ、そういうえば解呪式とか載ってなかったね。グッバイ俺の精神。」

バタンキュー

ギルドが管理する地下収容所。その管理を任されている男は今日も一日の終わりに囚人達の牢を見回る。

「17、問題無し」

「22、問題無し」

「25、問題無し」

囚人に割り振られた番号、部屋の中を確認しながら移動し、囚人の様子を確認する。ここに入っているのは閹派閥に関与していた荒くれ者達が多く、看守の彼が通ると威嚇する様に喚き散らす者たちばかりだ。まあ、口には舌を嚙めないよう器具を入れているから、マトモに話せる者はいないようだが。

「77、問題無し。アンタは何時も静かだな。俺としては有難いが。俺はL V Iだから、呻き声の圧が怖いんだよ。．．．なんだよ、コッチは悩んでるんだぜ？」

最後の部屋、1番新しく収容された部屋を確認し、特別大人しい囚人に向けて軽口を叩く。話せはしないが、彼も肩を竦めて反応を返す。

「まあ、アンタの境遇には同情するぜ」

血に呪われ、自我を保つため悪事に手を染めた男、まあ、悪は悪だ。返事は帰って来

ないし、男も期待はしていない。部屋を離れ、手元の資料を確認し漏れがない事を確認する。

そして全ての見回りを終え、仕事も終わりだと男は軽い足取りで囚人達のエリアを後にした。

最後の部屋、ディックス・ペルディクスが収容されている筈の部屋には、誰も居ない。

マインドダウン

目が覚める、すごい眠たい。まだ寝ていたいけど、起きなければならないような……。

「目が覚めましたか？レイニー様」

「……春姫？眠い、まだ」

姿勢が悪い、寝返りを打ち柔らかな枕の丁度いい窪みに嵌った。何やら頭上と周りがあるさような気がするが、俺は眠たいんだ、もう少し静かにしてくれ。

それにしても良い枕だなあ、優しい匂いもするし、何時までも眠れそうだ。うつ伏せで寝ると姿勢も良い感じだな。

「……！！貴方の刻印は私のもの！エラーー！」早く起きろおおお！」

「ガアアアっ!?!」

「いつ、たあ……」

「ご自身の欲望が原因です。反省して下さいね」

俺は魔法の試し打ちで、精神疲弊で倒れてしまっていたらしい。それに責任を感じた

春姫が周りの制止を振り切って俺に膝枕をしてくれていた所、俺が寝惚けて良くない事をしてしまったらしく、全力全開リルカアーデにぶん殴られた次第です。

うーん、寝惚けていて余り覚えてないが、俺は何をしてしまったんだ？

「ま、団長も起きた事だし、今日はもう終わろうぜ。もう十分試せたら？」

俺が寝てる間にリリの魔法の検証をしていたらしく、気になる所はとりあえず終わったとの事。

魔力のステイタスのみ上昇させ、ステイタス奪取の後に再度魔力上昇、Lv3になる事は出来たが、消費精神力が急増し長くは持たせられないという結果に。

スキルや魔法の効果については、半分程精神力が回復したタイミンで縁下力持の効果を補正から中補正に変更した所、一発で殆どの魔力を持って行かれてしまいその後すぐに精神疲弊でぶっ倒れたらしい。

幸い俺と違いポーションで精神力を回復できるので、口に含ませてやれば自然回復を待たなくても復活出来る。しかしそれ程までに消費が激しいと常用は不可能だな。どれほどステイタスを鍛えてもマシになるだけで今後も精神力の問題はついてまわるだろう。

「よし分かった、二人とも、良い魔法を持てたようで良かったな。今後は頼る事も増えるかもしれないが、俺のように精神疲弊になることの無いよう、しっかりと管理を頼むぞ」

「またさつきみたいなきことをされては困りますからね、レイニー様も充分に注意なさって下さい」

「はうう……」

「……俺は本当に何をしたんだ？春姫が顔を真っ赤にして座り込んでしまったじゃないか。とりあえず謝りはしたが……」

その後はファミリア全員でご飯を食べて、雑談をした後解散、自慢のようになってしまふがこのファミリアの仲の良さは他と比べても相当いいんじゃないのか？小規模ファミリアの売りはチームワークだからな。団長らしい事はしていないが団長として鼻が高いよ。

ファミリアの仲とえば、ベル・クラネル達は元気にしているだろうか。原作はもう見た事のないところまで進んでしまっているが、本来ならウィーネ達の事で一波乱はあったようだし。それを丸々解決出来たんだとしたら、それはそれは平和な日々を過ごしているのかもしれないなあ。

—————
ジャム付き白パンうめー。

「今日はレイニー様が戻って来てから初めての探索ですが、どうなさるんですか？」
「ウチらのファミリアも等級がDになってるから、何時ギルドから探索の催促がくるか

は分からないけれど。それが来てから下に進みたいね」

今日は通常通りの探索日だ。このファミリアは週の2、3日を休息日としそれ以外は各々が自由に過ごしている。攻略のメインとなる中層迄なら日帰りないし2日で行軍が可能だし、余り長くダンジョンに籠もるといふことは無い。

しかし、下層ともなるとそうはいかないだろうなあ・・・。

ん？

「あれ？いつの間になつたんだ？俺聞いてないぞ」

ファミリアの等級がDになる、それは結構面倒なことだつた記憶があるのだが。

主にギルドからの強制依頼が。

「アンタがダンジョンに潜つてる間にね、丁度最後の日だつたかな」

ファミリアの戦力が充分であると見なされた時、ギルドはそのファミリアを相応しい等級へと格上げする。そしてこう言うのだ。

『それだけ強いなら、もつと頑張れるよね？』

新たな階層への到達、未知の物質、未知の帯域の発見。それらを、成果をギルドはファミリアに求める。

なんでだ、俺達のファミリアなんてレベル3が一人とレベル2が四人でレベル1が二人居るだけのファミリアだぞ。

わー、中堅。

人数少ない以外は中堅が過ぎるな．．．そりや等級も上がるか。サミラもレベル3では上澄みだし、もしかするとこのファミリアいつの間にかオラリオでも上位にくい込んでるんじゃないか？

「まあ、リリ達の到達階層は20層ですし、仮に指令が来ても更新は容易でしょう」
「中層じゃ身体が鈍っちゃうんだって、早い所下層まで行こうぜ」

「サミラ様はレイニー様とお手合わせ致しましょう。また私が魔法を掛けますので」
昨日から春姫の当たりがちよつと強い。前より強くなった自信はあるから、手合わせはお願いたいけど魔法使われるといたいたいじゃないですか．．．。

「その時は、リリの魔法でレイニー様のステイタスを限界まで下げましょうか」

リリまで？本当に何をしたんだってばよ。聞き出そうにも教えてくれないから、わけも分からず謝るしか出来ない。何があつたかは分からないけどワザとではないからさ。許してとは言えないけど。

「まあまあ、レイニーイジるのもそれくらいにしよう？もうご飯食べたから、片付けちゃうね」

「あ、俺もやりまっす」

逃げた、逃げたねなんて背後からちくちく言葉が飛んできたが、気にしない。助け舟

を出してくれた二ナと共に食器を片付け、丁寧に洗って行く。

「ありがとう二ナ、助かったよ」

「懲りたならもうあんな事しないでね」

・
・
・

—————

ゴロツ

おつ、デミ・アダマンタイトだ。ラッキー。

『ガアアッ!』

彼処にはミノタウロスの角が落ちてらっしやる。魔石も含めてしっかり回収せねばな。

「ふはははは!脆い、脆いぞっ!」

おつと、彼処にはレベル4の力を振りかざして中層のモンスターを粉微塵にしている荒ぶる神リリが居る。触らぬ神に祟りなし、くわばらくわばら。

「うわ、ホントにレベル1がレベル4になっちゃってるじゃん、アレもうウチの目じや追えないよ」

「す、凄いな。強化の度合いが度を越してる・・・」

消費も度を越してるけどね。最大値の状態から、数分暴れたらガス欠か。あと余りに

も高いステイタスで暴れたせいで筋肉痛にでもなったのか、産まれたての子鹿の様な震え方でリリが帰ってくる。

「つんつーん」

「あきゆっ!? ニ、ニナさやめっ!」

周りのモンスター^死の灰から目を逸らせば、ダンジョンの中と思えない程の微笑ましきだな。取りこぼしのないように、辺りのドロップアイテムをかき集めてさっきの光景を振り返る。

レベル3に書き換え、力を最大値にした後はウチデノコツチでレベル4になる。するとレベル4で力が最大値の冒険者の爆誕だ、とんでもねえな。他のステイタスも擬似的なランクアップで最低限は備えられているし、まかり間違っても簡単に手に入れられるステイタスではない。

カサンドラに丁寧に治療されているリリを見ると痛みで引きつっては居るものの、俺の目が節穴でなければ今度こそ憑き物が取れたみたいなお笑い顔になっている。

前スキルの話した後もそんな顔してたと思っただけど、今度こそ確実であろう。

「まあ、リリルカの魔法の実戦確認も出来たし、後は普通に探索しようか」

「(・・・あの力なら、オレともいい勝負出来そうだな・・・ジュール)」

サミラがよからぬ事を企んでいるような気がする、気の所為だといいいんだが・・・。

こ、これが、私・・・？

ホームのリビングでゆっくりしている時、雑談相手のサミラが俺にとっての爆弾を投下してきた。

「そういえば、フリユネの奴はどうしてんだらうなあ」

・・・フリユネ？ああ、あのヒキガエルとか言われてたレベル5の人か。

「どうしたんだ？突然」

「いやあ、最近前の仲間から、アイツがフレイヤファミアにボコボコにされて引きこもってるって聞いたんだよな。外にも出歩けねえらしいし、戦闘出来ないアイツ雇うとこなんて無いだろ？」

だから少しばかり気になったのだと、サミラが話すが俺にとっては少し気になったでは済まない。

レイマンブライド
【俗人矜恃】

- ・ステイタスに成長補正
- ・諦めない限り効果上昇
- ・見捨てぬ限り効果持続

このスキルを維持したければ、相手が誰であろうと認識してしまったのなら助けに行かなければならぬのだ。

フリユネねえ。嫌な思い出しかないけどもまあ生活出来てるか位は確認するかあ。

「居場所は知ってるのか？」

「ああ、住んでるらしい宿屋の名前だけなら。ん？見に行くつもりなのかよ？」

スキルの問題でな、と返すと面白そうだからオレもついて行くぜ！と二人で出かけることとなった。

サミラと二人だけで出かけるのは初めての事かも知れない。しかし、普段着から外用、寝間着まで全てアマゾネスらしい衣装なサミラと並ぶと、周りの視線が痛いんだよな・・・。

「レイニーも難儀なモンだよなあ、あんなの助けなきやならねえなんて」

「仮にも元仲間をあんなので・・・よく思ってたのは知ってるけどさ」

派閥最強を笠に着て仲間にも横暴に振舞っていたフリユネ・ジャミール。信頼の厚いアイシヤなんかと比べられ、余計に人望は無かったらしい。まあ自業自得ではあるよな。俺も好きじゃないもん。

道中もフリユネのあれがどうだのそれがもうだの35歳のババアの癖にだの・・・35なんだ、死ぬ程要らないなその情報。

色々と愚痴を聞きながら進んでいくと、寂れた宿屋へと到着した。

「ここ、ここか？」

「ああ、あのフリユネの奴の事だから、もつと豪華な所に住んでるもんだと思つてたが……」

そうサミラは言うが、町外れであまり人気の無さそうな宿だ、中もそう外観と変わりは無いだろう。

「ま、待つとくれよお！此処を追い出されたら、アタイどうやって生きていけばいいのさあ!？」

突然、辺りに女性の嘆く声が響き渡った。その方向を確認すると、宿屋の入口に初老のお婆さんと、2・30代くらいの包帯に塗れた褐色の女性がいる。その人はお婆あさんの服を掴み何かを訴え掛けているようだ。

「そうは言つてもねえ。私らも商売だから、何日も料金払つて貰えないなら出ていつてもらうしか無いだろうさ」

「す、直ぐに仕事探すから！あと何日かだけでも……！」

「あんたそのなりじゃ働きどころも無いだろう？ダメダメ、滞納した分請求しないだけ、優しい方なんだから」

どうやらお婆あさんはこのフリユネのいる宿屋の経営者らしく、女性はその宿代を支

払えずに追い出される寸前になっているみたいだ。見る限り・・・かなり酷い怪我をしているらしく至る所に包帯が巻かれている。

認識してしまったのならどうにかするしかあるまい。サミラに断りを入れ先に二人の方へと向かう事にする。

「すみませーん、お困りみたいですけど、もしよか「ヒイヒイヒイ！男オオオオオ!!」うっさっ!」

—————

「すまないね、あの子男性恐怖症?と言うやつらしくて、男が怖いみたいなんだよ」

「な、なるほど・・・」

近付いて声をかけた瞬間、女性が脱兎のごとく逃げだし宿の奥へと消えて行つた。呆気にとられていると、おばあさんはため息をつきながら軽く事情を説明してくれる。男性恐怖症か、そりゃ悪い事をしたな。それに男性恐怖症なら中々仕事も難しいよなあ。見る限り、結構重度のようだし・・・。

「此処に来た時は、見上げるほどの大女だったのに、食も細くてあんなに痩せてねえ・・・」
「なるほど・・・ん?」

見上げるほどの大女?

「前職は娼婦だったって言うし、戻れりゃあいんだけど、あんななりで男も怖いじゃ務

まらないね」

「前職が、娼婦……」

「あ？なんか聞いたことあんな」

見上げるほどの大女、前職は娼婦、怪我してる、男性恐怖症……。え？あの人が、フリユネ？あの通称ヒキガエルの？

別人じゃん！

面影無いじゃん！髪も長いし身体も細いしスラッとしてて服もそれなりにキチンとした服で、褐色である以外にアマゾネス要素すらないじゃん！

「ああ!?アイツフリユネなのか!」

「あら、フリユネのこと知っているのかい？知り合いなら丁度いいね、私も正直ほつぽり出すのは心が痛むと思つてた所なんだ。引き取つて貰えんかね？」

い、いや知り合いつて言うかも知らないつて言うか……。いや誰だよ？本当に。もう骨格から別人じゃねえか、痩せたつてレベルじゃねえぞおい。

「ま、まあ、暫くの宿代位なら払いますが、引き取るつてのはちよつと……」

「面白そうじゃねえかレイニー！あの感じじゃ恩恵も無いんだろ！」

サミラが乗り気過ぎる！面白そうつてそんな簡単な話じゃ無いでしょうよ、男性恐怖症つてんなら俺が居るだけで負担になるだろうしき。

「良いじゃんかよ、どうせ追い出されんだ、あいつ上手いこと手懐けたら面白い事になりそうだろう？」

「あら、本当に引き取ってくれるの？良かったわあ」

「良くないですよおばあさん！この人面白そうとしか言っていないですよ！本当にそんな得体の知れない奴に預けて良いんですか!？」

「私らも商売だから・・・金にならんのもう客でもなんでもないさね」

「・・・悪びれもなくそう口にするおばあさん。人の闇を、垣間見た気がする。」

—————

「く、来るなあっ！アタイに何するつもりだいっ！おばあさん！おばあさんコイツらを外に出しとくれえっ!？」

あれから数分、サミラに上手いように乗せられた俺は仕方無しにフリユネの居る部屋に入っていた。まあ、何言っても結局見捨てられないんだから似た様な事はするんだらうけど、これだけ怯えている人になあ・・・。

イシユタルファミリアが解散にまで追い込まれたあの日、フレイヤの所の奴にボコボコにされたという彼女に何があったのかは知らないが、どんな事をすればレベル5の冒険者で数々の死線を駆け抜けてきた彼女がこんな事になるんだらうか。

暗い部屋の奥の布団にくるまって、怯えたように縮こまっている彼女を見ると、なん

だかこつちが悪い事をしているような気持ちになつてくる。

部屋が暗いのでランタンを取り出し、火をつける。火をつけた瞬間布団が飛び跳ね、彼女が布団の隙間から此方を伺っているのが分かる。

こうしてマジマジと見ると本当に別人だな、スゴいね人体。

なんの情報も無く見るとただの黒髪美人にしか見えない、包帯が痛々しいが。名前を聞いてからは前の姿がチラつくが、なんであの姿からこうなつたのかわからんし、この姿のポテンシャルある奴がどうなつたらああなるのかも分からん。

「お、お前ら、サミラに……レイニーじゃないかあ？」

お、俺達の顔を見て、思い出したらしい。

「丁度良かった、アンタら、アタイを助けなあ!？」

コイツ中身なんも変わってねえな。

「おいフリユネ、お前恩恵は？」

「おまつ……い、今は、無いけどねえ。アタイの美貌にかかればスグさあ」

サミラが前に出てそう問いかける、予想していた通り、今フリユネに恩恵を与えている神は居ないらしい。まあ男を見るだけでブルつてる様な状態でファミリアに入るなんてのは難しいだろう。

しかし、アタイの美貌？確かに俺達基準なら美人になつている気はするが、前のフ

リュネの美醜感覚ならブサイク側の筈なんだが？

「あんた、もしかして鏡見てないのか？」

「ヒツ、か、鏡？怪我しちまってから見てねえよ！そんなに酷い顔になっちまってるのかよお！くそっ！なんでアタイがこんな目にい！・・・そうだ、エリクサー！エリクサーを持ってこい！」

う、うるせえ。フリユネが言うには、怪我した自分の顔を見るのが怖くて見ないようにしてきたと？まあ気持ちは分からんでもないが・・・。

「あれ以来ご飯もろくに喰えなくて、こんなにガリガリになっちまってるんだよお！くそっ！オツタルのせいであつ！」

ガリガリで、そりや前のフリユネからすると3分の1位にはなってるかもしれないけど充分肉感的な身体だろ。色々感覚が狂ってるな？コイツ。

もう狂乱している相手に色々説明するのも面倒なので、ストレージから鏡を取り出して突き付けてやった。

そしたら信じられないものを見た様な顔をして、気絶してしまった。

—————

「嘘だ嘘だ嘘だ・・・」

「なあアイツぶつ壊れちまったのか？」

「瀬戸際ではあるかもしれないな……」

早計過ぎたか？フリユネは起き上がってから此方に背を向け、ブツブツと何かを呟き続けている。布団をよく見ると怪我から流れた体液で汚れてしまっており、包帯もあまり綺麗な状態ではなさそうだ。

恩恵が無いのなら、身体はもう一般人のようになってるんだよな？あんまり怪我を放置するのも良くないか。

「エクスヒール」

「っー」

使い慣れた回復魔法をフリユネにかける、一般人の体力であればヒールで充分かもしれないが、念の為だ。身体に走っていただろう痛みが無くなった事に気が付いたのか、恐る恐る包帯を外しているみたいだ。

「んだよ、治しちまったのか？」

「まあ、流石に一般人の身体であるの傷は堪えるだろ」

フリユネが顔を覆い隠していた包帯を外すと、やはり面影の消えまくった美人さんが現れた。サミラもその変貌に驚いているみたいだ。

「へ、へへ……こんなブサイクを助けるなんて、アンタも物好きだねえ……。まあいい、アタイがかつての美貌を取り戻すために、協力しなあ！」

コイツのこのとんでもない勘違いをどうにかしない限り世間とのギャップでいつか事件が起きそうな気がするな。

褒めるみたいで気は進まないけど、現実を見てもらうか。

「いいかフリユネ、気絶しないように鏡をみろ。今のアンタは世間一般的に見て、美人だ」

「まあ・・・、確かにな。ほら」

サミラに鏡を渡し、持つて行つてもらおう。フリユネの顔は引きつっているが、それでも鏡を見る事はできている様子。

「それで、アンタの美醜感覚が何処で培われた物かは知らないが、前のアンタは正直美人じゃ無かつたんだよ。自分じゃ信じられないかもしれないけどとりあえずそうと納得してくれ。今のアンタが美人側なんだから別に損は無いだろ」

「コレが・・・美人・・・!?!」

おいそんな世界がひっくり返つたみたいなの顔するなよ、本当に謎だなこの人。え、普通に人に囲まれて育つてきてそんなことになるか？

「アイツ現実逃避の為に自分に言い聞かせてるんだと思つてたけど、今の感じガチでそう思つてたんだな。こえー」

俺も怖い、そういう人間に出会つた事がないから、対処法も正直分からない。自尊心

回復させたら今度こそ無敵の人になりそうで怖いや。しかし、諦めも見捨てても出来ないのだから・・・致し方ない。

「まあとりあえず理解は出来たか？怪我也治つたし、今のアンタは美人側だ。コレでアンタが社会復帰するのに問題になるのは男性恐怖症だけだな」

それが1番の問題なんだけどな。カウンセラーでも無いし、精神の治し方など知っているはずも無い、プロでも確実とは言えない心の治療は、下手に手を出す事は出来ないな。

「お、男なんて怖かねえさ」

まだプライドは残ってたか。男殺しとまで呼ばれたアマゾネスの血が心を奮い立たせている様子。近付いたら逃げる癖に・・・てあれ？

近付いてもそこまで怯える様子を見せないな。

スつと手を伸ばしてみる、しかし一瞬ビクツとはなるが、先程までの様な狂乱を見せることは無かった。そのまま手を伸ばし、肩に触れる。

「・・・治つたのか？」

「分らん、こんな早く治ることあるか？」

「こ、怖くねえって言ってるだろう!？」

怖くない怖くないと煩いので、1度部屋を出て装備を変更し、見た目も「シンダー・エ

ラ」で変えてみた。

「ヒイイイイ！」

「駄目じゃねえか」

んー、俺だけに耐性が出来た、という事なのか？理由は詳しくは分からないけど、もし回復してくれたからとかなら、流石にちよろすぎるぞ男殺し。

まあ、俺だけ慣れた所で余り意味は無い、社会復帰する上で俺と関わること等ほぼ無いし、ずっと面倒を見てやるつもりも流石にないからな。

「んー、男と関わらないなんてほぼ不可能だからなあ」

「ん？レイニーなら問題ないんだろ？オレらのファミリアに入れてやりや良いじゃねえか。腐ってもレベル5だぞ？あ、もちろん下っ端からな！」

はあ？メーティスファミリアに？いや、過去の悪行含めウチで預かるには荷が重いでしょうよ。グレーな人がファミリアに入るなら、んー・・・ヘルメスファミリアとか。

「男神じゃねえか、ちなみにマトモな所でフリユネを受け入れる様なファミリアねえかな。どうせコイツ戦闘しか出来ないんだし、それでいて女神の所つて言ったらそれこそフレイヤファミリア位だろ」

・・・まあ、トラウマの対象がいるファミリアには入れないだろうし、仮に入れてもあそこが強くなって嬉しいことは無い。まあでもそうか、ウチでちよつと、と思つてた

らマトモなところは全滅か。それで普通の仕事も出来ない。詰んだか？

「ふ、ふんっ！アタイは天下のイシユタルファミリアで団長張つてたレベル5だよ、下っ端で入るなんて真つ平御免だねえ！」

コイツはコイツでプライドが邪魔をして下手には出れそうにもないし、まあフリユネ自身、前のファミリアでは明らか悪側の人間だったし、別に正道に戻ろうとも思つてはいないんだろう。でもなあ……。

どうにかならんもんかね。ほつといつて悪い方に流れられても困るしな。

「どうしてもつてんなら、アタイを団長にしなあ。……び、美人つてんなら良いだろう!?アタイの下で働けて幸せだろうからねえっ」

どんな理屈だ、そんなので団長の地位を得ても誰も支持しないし意味無いぞ。美人でさえあれば周りの人間は傳くと思つていいのか？確かに今の姿であれば平均以上の見目はしてるけど、美の神レベルでは無いし、俺に対しては美の神でも意味は無いんだぞ。「考え方が悪に寄りすぎてる。教育に悪いからウチのファミリアには入れたくありません」

「えっ……」

俺は人間全てが更生出来るとは思つていない、が、もしこんな風になる前に助ける事が出来たのなら、どうにか出来たんじゃ無いのかな、と思つてしまう人間だ。

彼等彼女等としてこれまでの経験が、環境がそういつた考え方や生き方を構築してきたのであって、産まれながらの悪が居るとは考えたくない。

フリユネの場合何があったのかは知らないが美醜感覚を正常にすればまともになっていたかもしれないし、あまり一般的ではないが整形でもすれば今こういう事にはなっていないかもしれない。

今からの更生は・・・行けるのか？無理めな気はするが、諦めずにチャレンジしてみるか・・・。

「入れたくありませんが・・・、入れます。下っ端からです。嫌でも連れて行きます」
「おつ、覚悟決めたか？」

ニヤニヤしおつてからに、決めましたよ覚悟。今までで一番見捨てそうだったけど、とりあえずはね。やってみる姿勢で進んでいこうかなと。

「ま、待ちなあ！アタイの意思」

「今すぐギルドの地下牢にぶち込まれたいかなけりや着いてこい」

言つてから、あれ、これいい案じゃないか？とも思ったが。成功すればレベル5の人員が仲間になるというメリットに惹かれて黙認した。

更生へと向けて

フリユネ・ジャミール

レベル 5

力 A 8 2 9

耐久 A 8 8 7

器用 D 5 3 5

敏捷 D 5 3 0

魔力 I 0

拳打 C

耐異常 D

治力 D

魔防 H

《スキル》

【慷慨憤撃】

・激情時力・耐久ステイタスに高補正

・無手の状態にある時、更に力に補正

【傲岸不遜】

・敵対しているものよりもステイタスが下の場合、ステイタス上昇
 ・敵対しているものよりもステイタスが上の場合、ステイタス下降

【毛骨竦然】

・男性が周囲に居る場合、レベルダウン
 ・男性が周囲に居る場合、ステイタスダウン
 ・男性が周囲に居る場合、発展アビリティ虚弱の一時発現
 ・男性が周囲に居る場合、発展アビリティ脆弱の一時発現
 ・男性が周囲に居る場合、発展アビリティ鈍足の一時発現

《魔法》

□

「「「」」」」

ファミアリアにフリユネを連れて帰り、また女かという風な冷たい視線をかき分けながら神様に事情を説明し、ステイタスを得た途端暴れられたり逃げられたりしても困るので嚴重に拘束をした後恩恵を刻んでもらった。不壊属性のロープでサミラに教えて貰った絶対に解けないやり方で拘束する。収納はストレージで出来るので問題はない。

「な、なにさ。アタイの強さに驚いたのかい？」

「いや、もしかしたら結構弱いかもなあと。」

なんだこの本来の強さ全てを台無しにする大デメリットスキルは。冒険者に不利にしか働かないスキルや魔法は、そうそう無いというふう聞いてただけども。周りに男がいるだけで五重もの枷を付けられている。レベルダウンしてレベル4、ステイタスダウンがどれ程かは知らないが、その後の発展アビリティ三つを見る限りレベル4の下位くらいにはなるんじゃないだろうか。充分強いんだが、かなり下げられるな。

フリユネにその旨を伝えると、初めて自分の顔を見た時位に落ち込んでいた。まあ、強さと美貌に相当な自信を持っていたからな、前のフリユネは。そらシヨックですわ。

「まあ成長しないみたいなどんでもないスキルが出た訳じゃないんだから。幸いウチのファミリアにいつの間にかスキルの効果が書き変わった実績のある人が居るから、希望はないでも無いし」

「スキルの効果が変わる・・・？」

二ナのように、何かしらの要因でスキルが改善される事もあるかもしれない。一度しか経験は無いが、一度があるなら二度もあるさ。

フリユネは半信半疑だが、俺と神様が二人してそう言うので一応は納得した様子。素直でよろしい。

さ、手と足の拘束は残したままで着いてきてもらうぞ。

不壊属性のロープで縛られたフリユネは憎々しげな表情を浮かべながらも大人しく後ろを歩く、少し申し訳ないが、手放しに信用するのは流石に仲間達にも何があるか分からないのである。フリユネの手首から俺の手首に繋がるロープを引っ張り、皆の集まっている食堂へと案内をした。

「「「「「」」」」」

「ハハハッ！ぎまあねえな！」

なんだろう、視線が質量を伴っている気がするのだが。

扉を開けた瞬間、帰ってきた時の数倍に及ぶ圧力の視線の雨が飛び込んできた。二ナやリリはハイライトが消えているし、ダフネなんかは目を見開いている。サミラは爆笑している。

「黙りなあー！」

「！その声・・・フリユネ様ですか？」

フリユネ？フリユネってイシユタルファミリアの？

流石にレベル5ともなるとその風貌等も世間に知れ渡っている。曰く、醜女である、巨体であると。

しかし彼女らの目の前に現れた女は、長身ではあるものの巨体だと醜女でも無い、ど

ういうことかと俺にダフネが聞いてくる。

「まあ俺も理由は分からないけど、暫く宿でゆっくりしていたらこんな感じになつたらしつゝ」

「宿でゆっくりしてたつて……有り得ないでしょ」

気持ちにはわかるけど……実際の所そうなんだし、レベル5のフリユネ・ジャミールなんて一人しかいないんだから間違えでも無い。

「レイニー？話は分かつたけど、なんでその人とロープで繋がつてるの？」

なんでつて……まだ信頼関係も築けてないし、逃げられたりしたら困るからな。仮にもレベル5の冒険者に抵抗されでもしたら仲間達も危ない。しかし恩恵を封印したままにして置いていると、フリユネの存在を聞き付けた悪人や恨みを持つ人に狙われてしまうかもしれないしな。

「ふーん……」

「まあ、団長が責任持つて躓けるなら良いんじゃない」

「アタイはペットじゃないよお!？」

躓か、言い得て妙だな。確かにフリユネが今後お日様に顔向け出来る様な生活をするには、常識を躓けて覚え込ませる必要がある。悪を是としているままでは何をやからすかは分からないからな。問題は俺にそんな教育が出来ないって言う所だが……。

「あ、そう言えば躰に厳しくて、女性ばかりの職場で、訳ありでも雇ってくれる所に心当たりがあるな」

「という訳なんです、この人を雇ってあげて頂けないでしょうか？」

「・・・坊主、ウチは厄介者の駆け込み寺じゃないんだよ」

心当たりの場所は勿論、豊穰の女主人である。時刻はお昼頃、フリユネがファミリアに加入したその日に思い立ったが吉日と俺はその酒場に乗り込んでいた。この店が開くのは夕方以降なので、今は準備中だ。無理を言うのは申し訳ないが、少し時間を作ってもらい俺は初めてミアさんと会話をしていた。

「大体その子、男が怖いんだって？ならホールは任せられないね。厨房だって、直ぐに出来るような物じゃあないんだよ」

「いや仰る通り何ですけども、ここ以外に働けそうな所を知りませんで・・・」

フリユネの男性恐怖症はかなりのもので、ロープを繋いでいなければ何度悲鳴と共に逃げ出してしまっていたか定かではない。

筋骨隆々な男ほど怖がる傾向にある様で、例えば信頼を築けたとしてもこのままでは命に関わるダンジョン探索などでは致命的になりかねない。冒険者とすれ違ったらビビって逃亡しましたなんて事になれば大変だ。

「フリユネは料理とか出来るのか？」

「・・・肉焼く位ならねえ」

ここに来るまでも相当疲弊してしまつたようで、弱々しい声が帰ってくる。少し申し訳なく思うがしかし、行動しなければ改善する事もあるまい。

「はあ、分かつたよ。だが条件がある」

「本当ですか？なんなりとお申し付けください」

フリユネをこの酒場で雇う為の条件、それは・・・？

「アンタも一緒に働きな」

・・・ええ？耳を疑うが、ミアさんの顔を見る限り真剣な様で冗談を言っているようには見えない。え、でもここ女性しか働けないんじや・・・。

「小娘共、どうせ居るんだろう、出番だよっ！」

「「げっ」」

ミアさんが突然そう叫ぶと、背後の扉の奥から複数人の声が聞こえた、あら、ずっと聞いていたのね・・・。

ぞろぞろと、準備中だったハズの店員達が部屋の中へと入ってくる。1. 2. 3. 4
と、勢揃いなのか？あまり広くない部屋にぎゅうぎゅうと人が詰められていき、気のせいかな、逃げ場が無くなった様な気が・・・。

「仕方ないにや、ミヤー達がおみヤーを女にしてやるにや」

ガシツと、アーニヤさん……だったか？キャットピール猫人の少女に右腕を掴まれ、確カルノアさんに左腕も掴まれる。うわいい匂いじやなくて！

「なんなりと、つて言つただろう、男に二言はない。さつさと女になつて来な」

「な、なんだいお前ら!？」

ズルズルと、抵抗する間もなく引き摺り出される、酒場に入った段階でロープは外していたが、フリユネもリオンさんと黒髪の猫人の少女に捕らえられ、纏めてドナドナさ
れている。

「アンタはかなり肌が綺麗だから、どうにでもなりそうね」

「ミヤーの腕がなるにや」

人権は……ありますか？

この中に1人、男の娘が居る！

「おお・・・」

「まさかにやあ・・・」

「なんだこれ」

ドナドナられた後、暫く店員達にもみくちやにされていたのだが、急に渡された鏡に映る顔を見て、俺は驚愕していた。

美少女が居る。こ、これが私・・・？

というレベルの大変身だ。メイクって凄いな、顔だけ見たら完全に女の子になっちゃったよ。こんなのファミリアの皆に見られたらとんでもないことになるぞ。

「あの、メイクが上手なのは分かったんですけど、俺声までは変えれないですよ？」

「まあリユーもほとんど喋らないし声無くても問題ないにや」

それでいいのか接客業、いやリオンさんは可愛いから良かったわ。なら俺も可愛いから良いのかも・・・知れない。まあ裏声でどうにかするか。

ふとフリユネの事が気になり視線を移すと、うわつ。何でか潤んだ瞳でコッチを見て来てる。サミラがよくあんな感じの目になってる事あるけど、アレアマゾネスが獲物を

見つけた時の目だよな？

・・・ん？もしかして男性恐怖症で女に目覚めたのか？ま、まさかな。

「レイニーさん、とても良くお似合いです」

「あ、ありがとうございますリオンさん・・・いや、複雑な気持ちですけどね」

メイクが似合うのは男として良い方向の評価なのか？褒められると反応に困るな。それも気になっている相手からの評価なら尚更だ。

「・・・そう言えば、前から言おうと思っていたのですが、私のことを呼ぶ際はリユーでいい。親しい人は皆そう呼びます」

「えー！良いんですか!?!」

突然名前呼びの許可が下ろされ、俺は狂喜乱舞した。やった！コレだけでも全ての苦労が報われる様だ！俺は後半年は戦える・・・!!

「本当に、・・・お似合いですね」

「うおつ、あ、ありがとうございます。ええと、フローヴァ、さん?」

ヌルツと、リユーさんと俺の間を遮るように入ってきたのはベルに情熱的なアタックを仕掛けている事で有名なシル・フローヴァさん。個人的にはあの女神を彷彿とさせる鈍色の髪と、掴みどころのない人となりが少し苦手な部類に入る人だ。

「私もシルで構いませんよ?レイニーさんは常連ですし」

「あー、そうですか？それなら、シルさんと」

まあ、苦手意識があるだけで悪人という訳では無いし、とりあえず当たり障りのない様に話そう。俺の返事を聞いたシルさんはニコリと微笑み、続けてこう話した。

「ミア母さんは恐らく、レイニーさんにホールを任せると思います。なので、やり方を今の内に説明してしまいますね？」

着いてきてください、とシルさんが部屋のドアを開ける。やや性急にも思えるが、化粧までさせるとなれば接客に回るのは間違いないだろう。他の店員達に断りを入れ、部屋を出てしまったシルさんを追いかける。いつも荒くれ者で大賑わいとなるホール部分は、窓から差し込む光以外光源もなく、普段とは違った様子を見せていた。

「すみません、遅れました」

「いえいえ、ではオーダーの取り方から説明しますね」

料理が壊滅的なイメージから、勝手にポンコツだと思っていたのだが。存外シルさんは仕事が出来る側の人間らしくその説明は大変分かりやすかった。質問にも丁寧に答えて貰えるし、なんだあのクソ女神とは全然違うな。あのクソ女神と勝手に重ねてしまつて申し訳ない気持ちだ。

「これで、一通り終わりましたね。分からないところはありますか？」

「いえ、ひとまずは大丈夫そうです。すみません、いきなり自分が来たばかりに」

明らかに普段なら必要ないであろう業務を増やしてしまっているのは自分である。フリユネも厨房で何ができるかも分からないし、申し訳なくは思っていた。

「ふふ、レイニーさんが来て以来私達も退屈せずに済んでますし、構いませんよ」

「・・・俺が来て以来?なんかおかしな言い回しだな。もつと長い間働いている時の言
い方の気がするけども、よくこの店に来ているからか?あまりシルさんと話した記憶は
ないが、嫌われていないのならいいか。」

「じゃあもう服、着替えちゃいませうか」

「・・・あつ」

—————

「くつ、殺せ・・・」

「ぶくく・・・似合ってるにやよ、少年」

「すごい、本当に女の子にしか見えないね」

抵抗虚しく、俺は豊穣の女主人の店員に支給される給仕服を着ている。スカートが
スースーするのですが。女の人って、なんでこんなヒラヒラした服が着れるんだらう
ね。

「うわ、足もムダ毛一つないにや。剃ってるのにや?」

「いや、生えない体質で」

にやー!?!と黒髪の猫人の店員が驚きの声を上げるのも無理は無い。元々ゲームのキャラクターであつたこと身体にムダ毛は存在しておらず、髪の毛とまつげ眉毛、そして下の毛を除けば処理不要の完璧な身体に仕上がっているのだ。女性からすれば面倒がなくて羨ましい身体なのだろう。抜けたり切ったりしても回復魔法掛ければ生えてくる。

「ハアツ、ハアツ！」

「・・・? 貴方は何故レイニーさんを血走つた目で見ているのですか？」

フリユネに犯されるっ!?!何処ぞの薬を盛られた発情兔を思い出させる息遣いで、フリユネがコチラを見つめているのだが。いやいやまさか、男性恐怖症だからって女に目覚めるなんてそんな物語みてえな事……。物語でしたわ。

ゴンツ!

「あいたあつ!?!」

「店中で盛ってんじゃないよ。もうそろそろ開ける時間なんだ、お前達も早くしな」
スつと、厨房の奥から現れたのは我らがミア母さん、助かりました。急かされた店員たちはそそくさと散っていき、店を開くまでの最後の調整に入る。俺は適当に掃除を任されたので大人しく箒を取り出した。

静かに店内の清掃を進めていく。無心でやれる作業は結構好きなんだよな、落ち着く

し。

一人で掃除をされていて問題が起こるはずも無く、直ぐに掃き掃除は終わった。それぞれの店員達も準備を終えたようで次々とホールへと帰還してくる。

「今日は二人も新人が来てる、新人だからって気い抜いてたらケツを蹴り飛ばすからね！」

怖すぎる、果たしてフリユネをここに連れて来たのは正しい判断だったのだろうか？
俺には分からない。

—————

「「ようこそ、豊穣の女主人へ！」」

「一番卓生ビール五つにや〜！」

「五番のお客様、日替わりパスタ二つです」

「黄金鶏の丸焼き入りました〜！」

いっそがしい?!ただでさえ狭い店内を酔っ払い達がぐでんぐでんになりながら占拠するせいで、店の奥に辿り着くのも一苦勞になる。

だがこの程度の人混み、前世の交差点で経験済みだ！

人々が移動するその速度を視認し、ここぞというタイミングで身体を間に滑り込ませる、肩が触れ合うような距離でも、当たらなければどうということはない。

「姉ちゃん新入りか？胸は無いけどいい足してるなあー！」

時折現れるド腐れ冒険者は、暴力に訴えても良いとミアさんから許可は出ている。片手に持ったビールを零さぬように伸びてきた手を軽く叩き、その男の机にジョッキを置いてすぐに立ち去る。

オーダーも、オーダーですと一言だけ裏声で伝え確認する事によってどうにかバレーズに仕事をこなせている。高い音域に対応している声帯に感謝だな。

「レイー三番の炒飯出来たよっ！」

レイイと言うのは勿論俺の偽名、呼ばれて直ぐに熱々の炒飯を受けとり、三番卓へと足を進める。中々良い調子だな？接客業はしたこと無かったけど、クソ客が居なければ案外楽しいかもしれない。あと女装していなければ。

さー、お次はあそこの・・・ベル・クラネル!?

不味い、メイクをしているから同じファミリアの相手でも無ければ見破られないとは思いますが、アイツはやたらと勘のいい所がある。ここは一つシルさんにでもお願いして・・・。居ないな。他の店員は奥側で忙しくしているし、客を案内出来る位置にいる

のは俺しかいない。

「あのお・・・」

ビクッ!

く、クソ、最悪のタイミングで来店しおつてからに・・・!こうなつてしまつては仕方あるまい、リユーさん仕込みの営業スマイルを貼り付け、裏声で席だけを案内する。余計な事はしない、常連のこいつには説明も必要は無いだらう。

「何処かで見たとような・・・?」

!

やはりコイツは危険だ!訝しげな声を背にそそくさと別の卓の不要な皿を回収し厨房へと持ち込む。ついでにフリユネの様子も確認したが必死に皿洗いをしているな、真面目に働いているようで何より。

「姉ちゃん!生ビールと生おっぱぶぶおつ!」

セクハラをいなしながら、ホールを駆け回り良い感じにノつてきた時、それは起きた。

「・・・レイニー?」

「えっ・・・あ、え」

「七名様ご来店にや〜!レイ、空いてるところに案内するにや!」

あつはーい、メーテイス・ファミリアの七名様入りまーす。